

改訂版

平成 26 年度食品安全モニター課題報告  
「食品の安全性に関する意識等について」の結果  
報告書

平成 27 年 3 月

内閣府食品安全委員会事務局

## ○ 調査目的等

### (1) 調査目的

内閣府食品安全委員会事務局が実施している食品安全モニター（以下「モニター」という。）の方を対象とした調査から、食品の安全性に関する意識等について明らかにする。また、平成 16 年度からの継続調査であり、経年での意識の変化についても分析する。

### (2) 調査項目

調査項目は、次の 3 項目である。

- 1) 食品の安全性に係る危害要因等について  
（食品の安全性に係る不安の程度、不安を感じる理由等）
- 2) 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について  
（放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報源等）
- 3) 食品の安全性に係るモニターの意識・行動について  
（食品の安全性に係るハザード等のリスクの理解度、肉の生食に関するリスクの認知度等）

### (3) 実施期間

平成 26 年 8 月 8 日～8 月 25 日

### (4) 対象

食品安全モニター 470 名  
有効回答数 437 名（有効回答率：93.0%）

### (5) 食品安全モニターの回答者人数の内訳

#### 1) 性別・年代

	男 性	女 性	回答者人数 計	割 合
20～29 歳	6 人	12 人	18 人	4.1%
30～39 歳	23 人	54 人	77 人	17.6%
40～49 歳	42 人	60 人	102 人	23.3%
50～59 歳	72 人	50 人	122 人	27.9%
60～69 歳	76 人	15 人	91 人	20.8%
70 歳以上	19 人	8 人	27 人	6.2%
合 計	238 人	199 人	437 人	-
割 合	54.5%	45.5%	-	100%

2) 職務経験区分

職務経験区分	区分の説明	回答者人数 (割合)
食品生産・加工経験者	現在又は過去において、食品の生産、加工に関する職業（調理従事者を含む）に5年以上従事している方	134人 (30.7%)
食品流通・販売経験者	現在又は過去において、食品の流通、販売等（会社、団体の役員を含む）に関する職業に5年以上従事している方	70人 (16.0%)
研究職経験者	現在又は過去において、試験研究機関（民間を含む）、大学等で食品や、食品の安全に関する研究の経験を5年以上有している方	40人 (9.2%)
医療職経験者	現在又は過去において、医療等に関する職業（医師、獣医師、薬剤師等）に就いた経験を5年以上有している方	41人 (9.4%)
教育職経験者	現在又は過去において、教育に従事した経験を5年以上有している方	35人 (8.0%)
食品関係行政職経験者	過去に食品の安全に関する行政に従事した経験を有している方	17人 (3.9%)
その他食品安全モニター (文中「その他消費者」) <sup>*</sup>	上記の項目に該当しない方	100人 (22.9%)

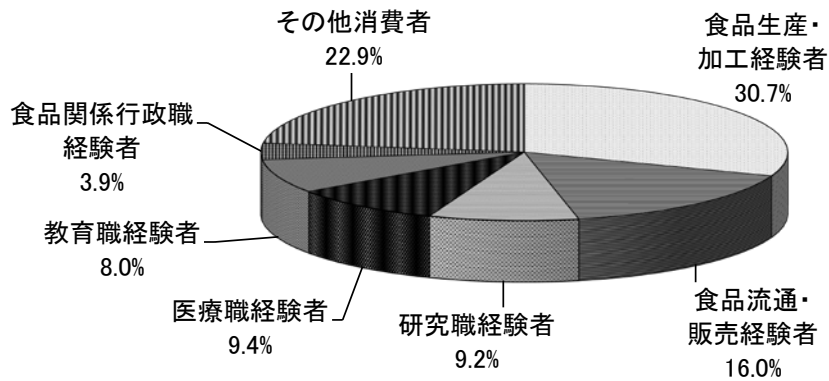
<sup>\*</sup>食品安全モニターは、モニター活動を行う上で、食品安全委員会が行うリスク評価や食品安全行政について一定の理解ができる必要があることから、次の条件のいずれかを満たしていることを応募資格としている。

[1] 大学等で食品に関係の深い学問（医学、歯学、薬学、獣医学、畜産学、水産学、農芸化学、家政学、食品工学等）を専攻し修了した方

[2] 食品に関係の深い資格（栄養士、管理栄養士、調理師、専門調理師、製菓衛生師又は食品衛生管理者その他の事務局長が適当と認めるもの）を保有の方

[3] 食品安全に関する業務を業としている方若しくはしていた方又は常勤公務員として食品の安全に関する行政に従事していた方（平成2年4月1日現在常勤の公務員でないこと）

図表 職務経験区分

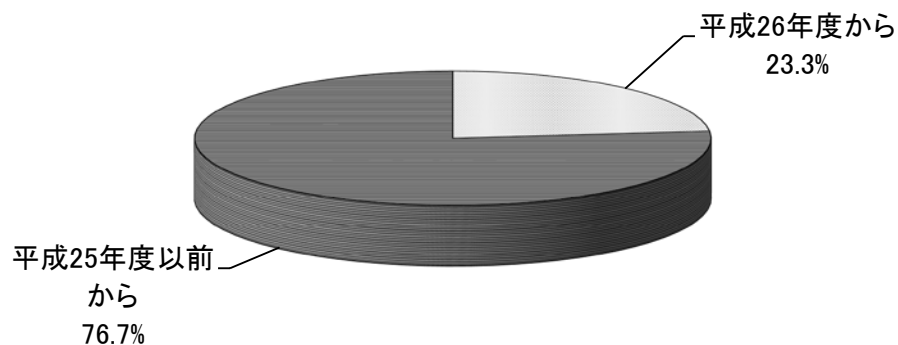


3) 性別、年代区分、職務経験の内訳

	性別		年代区分			合計
	男性	女性	20-39 歳	40-59 歳	60 歳以上	
食品生産・加工経験者	90 人 67.2%	44 人 32.8%	25 人 18.7%	76 人 56.7%	33 人 24.6%	134 人 100%
食品流通・販売経験者	52 人 74.3%	18 人 25.7%	12 人 17.1%	35 人 50.0%	23 人 32.9%	70 人 100%
研究職経験者	31 人 77.5%	9 人 22.5%	9 人 22.5%	19 人 47.5%	12 人 30.0%	40 人 100%
医療職経験者	12 人 29.3%	29 人 70.7%	11 人 26.8%	20 人 48.8%	10 人 24.4%	41 人 100%
教育職経験者	13 人 37.1%	22 人 62.9%	6 人 17.1%	17 人 48.6%	12 人 34.3%	35 人 100%
食品関係行政職経験者	11 人 64.7%	6 人 35.3%	2 人 11.8%	2 人 11.8%	13 人 76.5%	17 人 100%
その他消費者	29 人 29.0%	71 人 71.0%	30 人 30.0%	55 人 55.0%	15 人 15.0%	100 人 100%

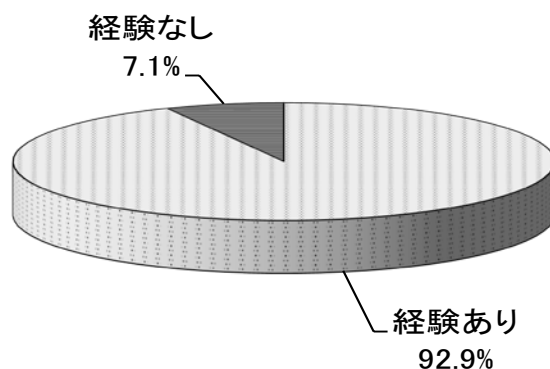
4) モニター継続区分別

図表 モニター継続区分



5) 食品安全モニター会議出欠区分

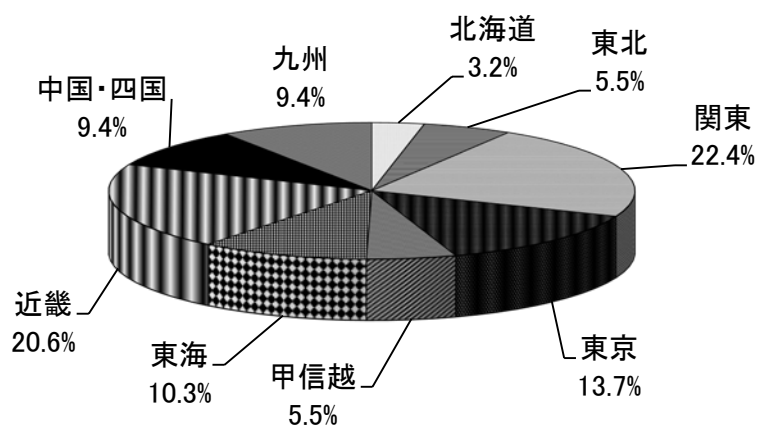
図表 食品安全モニター会議出欠区分



図表 居住地区区分

6) 居住地区区分

北海道	14人 (3.2%)
東北	24人 (5.5%)
関東	98人 (22.4%)
東京	60人 (13.7%)
甲信越	24人 (5.5%)
東海	45人 (10.3%)
近畿	90人 (20.6%)
中国・四国	41人 (9.4%)
九州	41人 (9.4%)



## ○ 調査結果

### I. 食品の安全性に係る危害要因等について

#### 1. 日常生活を取り巻く分野別不安の程度（問1）

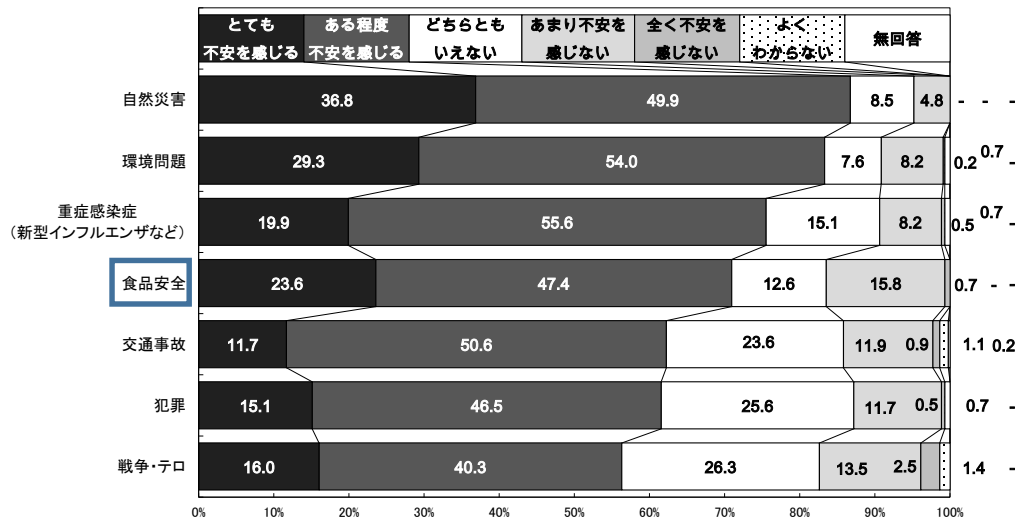
##### 1-1 日常生活を取り巻く分野別不安の程度の回答割合

- 食品安全について「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は約7割。
- 自然災害、環境問題、重症感染症に比べると低いものの、交通事故、犯罪、戦争・テロよりは高い。

環境問題、自然災害、食品安全、重症感染症（新型インフルエンザなど）、犯罪、戦争・テロ、交通事故の7のリスク分野について、それぞれ不安の程度を尋ねたところ、食品安全については、「とても不安を感じる」が23.6%、「ある程度不安を感じる」が47.4%で、合わせて71.0%が不安を感じているとしている。

- 食品安全に不安を感じる割合は、自然災害（86.7%）、環境問題（83.3%）、重症感染症（75.5%）に比べると低いものの、交通事故（62.3%）、犯罪（61.6%）、戦争・テロ（56.3%）よりは高い。

図表 1-1 日常生活を取り巻く分野別不安の程度



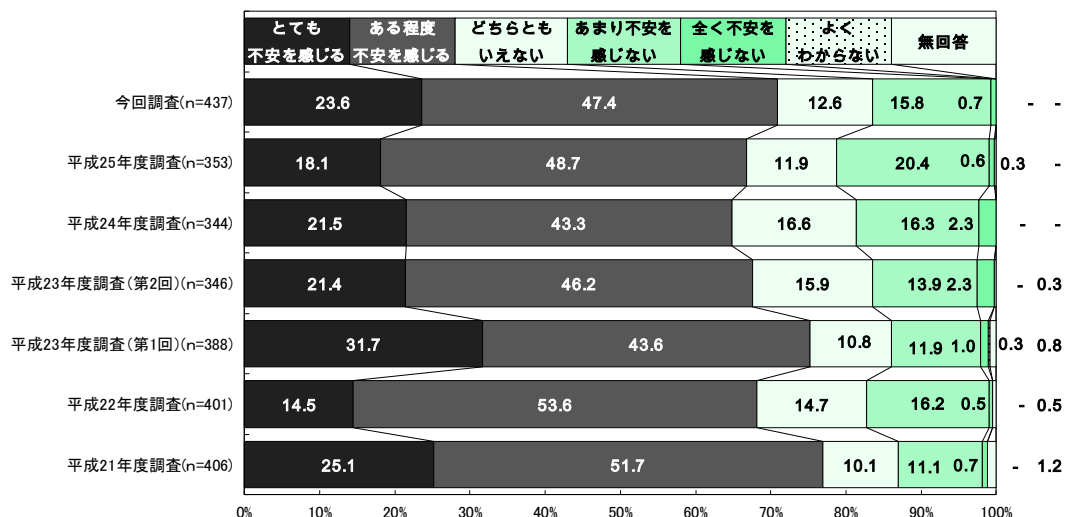
※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高いもの順に並び替え。

## 1-2「食品安全」についての不安の程度の年度別回答割合

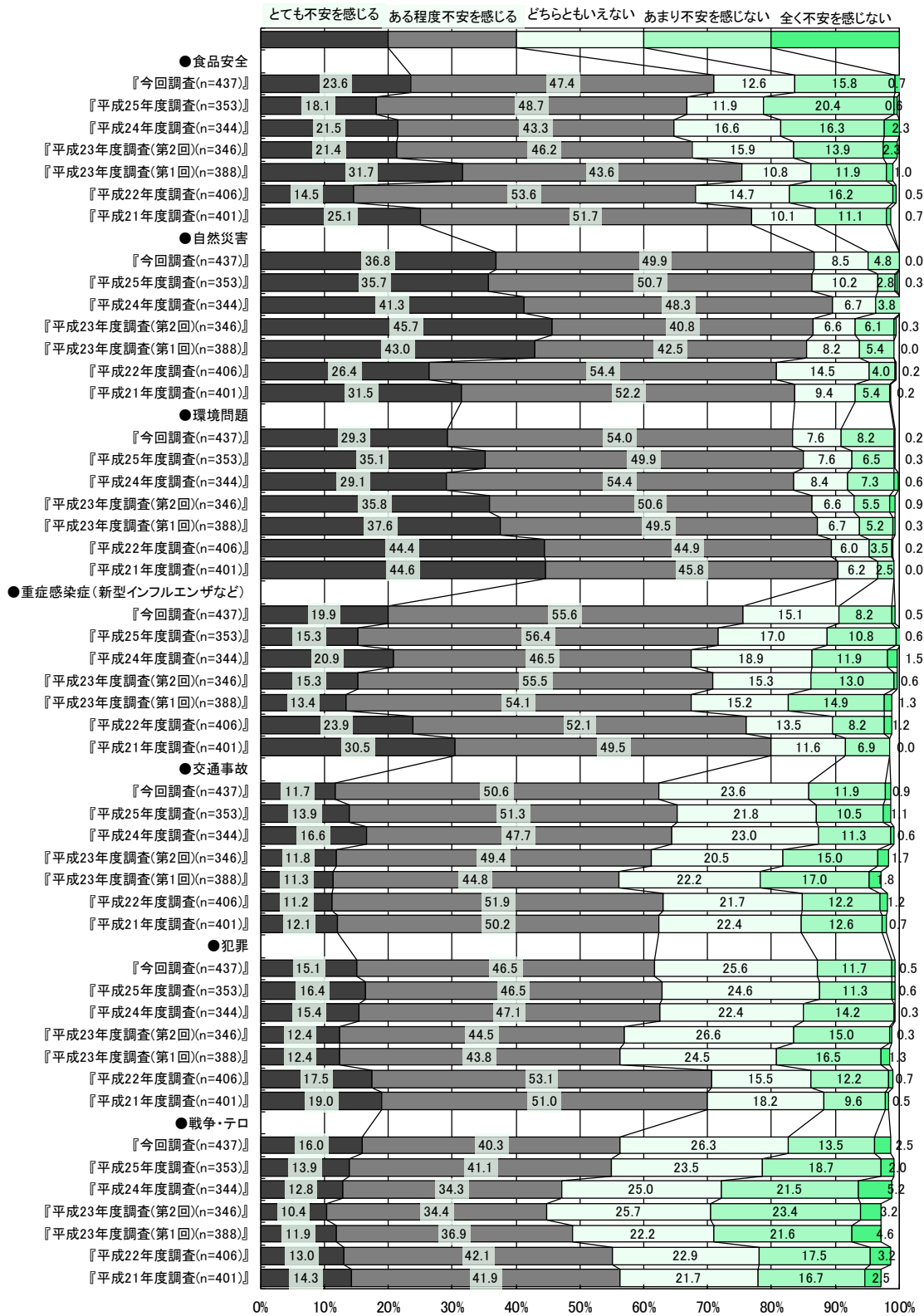
■ 食品安全について「とても不安を感じる」が前年より若干増加している。

- 食品安全についての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」の割合は東日本大震災直後の平成23年度（第1回）の31.7%をピークに低下傾向を示していたが、25年度以降は増加に転じ、26年度調査では前年の18.1%に比べ23.6%と若干増加している。
- 属性別に見ると、性別では女性、職務経験では医療職経験者、教育職経験者、その他消費者で食品安全についての不安の程度が高い。
- 「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計を比較したところ、食品安全、重症感染症（新型インフルエンザなど）、戦争・テロは平成24年度以降増加している。

図表 1-2①「食品安全」に対する不安の程度（年度別）



図表 1-2②日常生活を取り巻く分野別不安の程度  
(年度別)



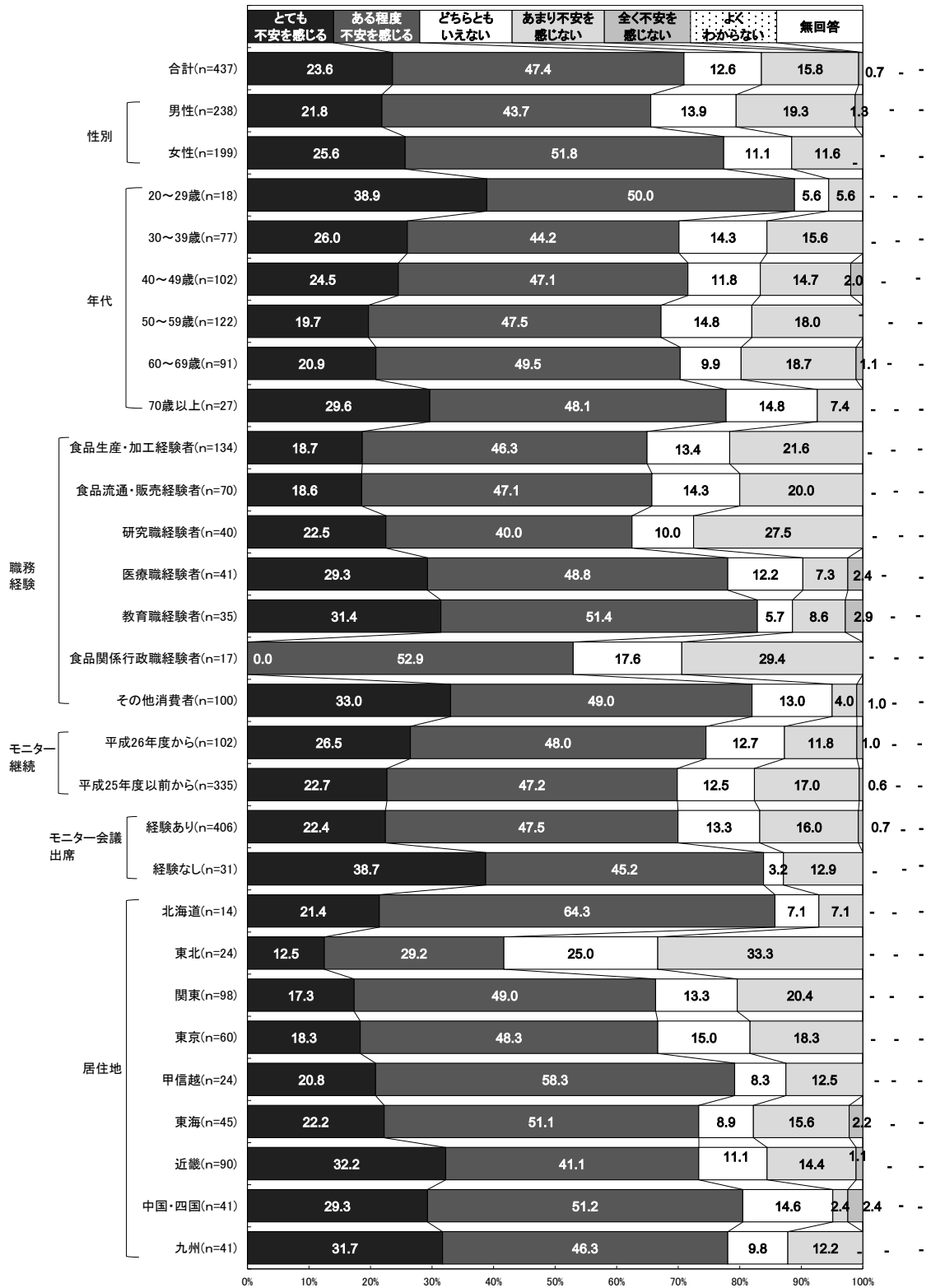


### 1-3「食品安全」についての不安の程度の属性別回答割合

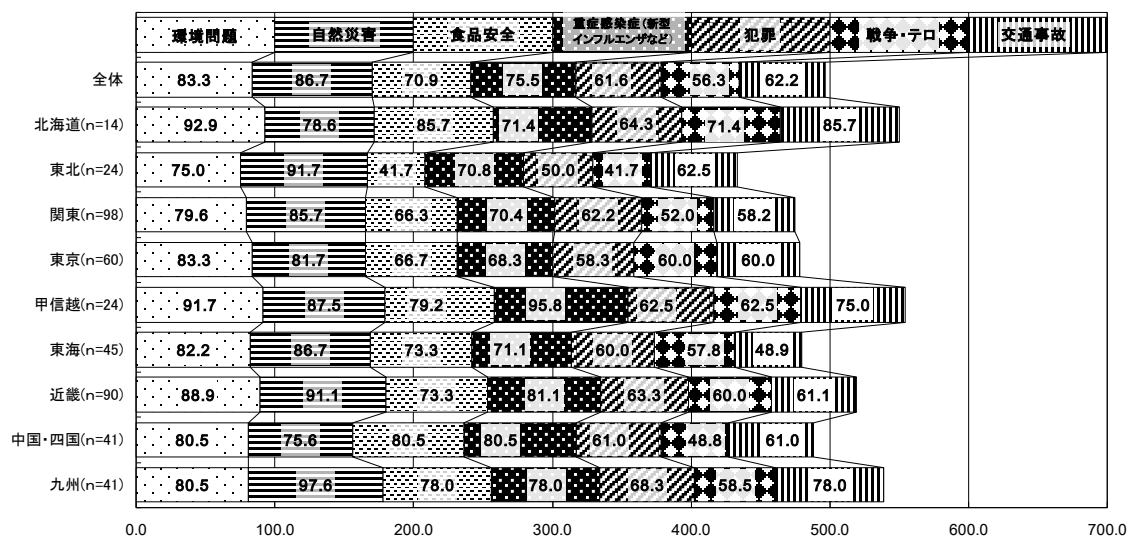
■ 性別では女性、職務経験では教育職経験者、その他消費者及び医療職経験者で食品安全についての不安の程度が高い。

- 食品安全についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、性別では男性（65.5%）よりも女性（77.4%）のほうが若干高い。
- 年齢別では、「とても不安を感じる」の割合は若い層ほど高い傾向が見られ、20代ではサンプル数が18と少ないが、特に高い（88.9%）。
- 職務経験別では、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、教育職経験者（82.4%）、その他消費者（82.0%）、医療職経験者（78.1%）で高く、食品流通・販売経験者（65.7%）、食品生産・加工経験者（65.0%）、食品関係行政経験者（52.9%）は低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニター（74.5%）より25年度以前から継続しているモニター（69.9%）のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験別では、出席経験のない人（83.9%）より出席経験のある人（69.9%）のほうが不安の程度が低い。
- 居住地別では、北海道（85.7%）が特に高く、東北（41.7%）が特に低い。「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計を居住地別で比較したところ、「環境問題」は北海道（92.9%）が、「自然災害」は九州（97.6%）、近畿（91.9%）及び東北（91.7%）で90%以上と高い。「食品安全」は北海道（85.7%）が最も高く、東北（41.7%）が最も低い。

図表 1-3①「食品安全」に対する不安の程度（属性別）



図表 1-3②日常生活を取り巻く分野別に感じている不安の程度  
 (「とても不安である」「ある程度不安である」の合計 (居住地別))



※本グラフは、1つの分野の回答割合を100%とし、7つの分野の回答割合を積み上げたもの。なお、居住地ごとの回答者数の差は考慮していない。

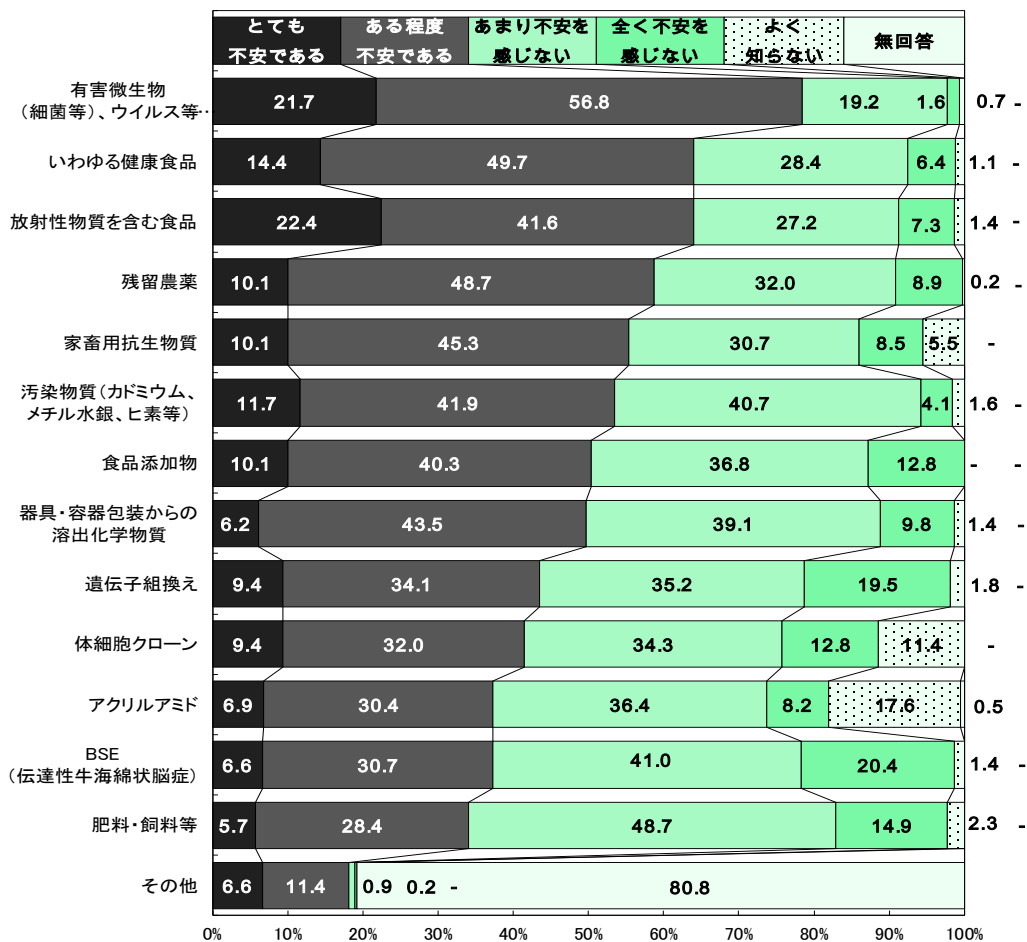
## 2. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度（問2）

### 2-1 食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度

■ 食品の安全性の観点から感じている不安の程度（「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計）の上位3位は、「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」「放射性物質を含む食品」「いわゆる健康食品」。

- 食品安全に関するハザードについて、それぞれ不安の程度を尋ねたところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計が最も高いのは「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」(78.5%)、次いで「いわゆる健康食品」(64.1%)、「放射性物質を含む食品」(64.0%)と続いている。
- 前回調査では、「いわゆる健康食品」は「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」に次いで4位だったが、今回調査では3位となった。
- 逆に「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」(53.6%)は、「残留農薬」(58.8%)や「家畜用抗生物質」(55.4%)に抜かれ、6位に順位が低下した。
- 「アクリルアミド」は今回調査から加えられており、「よく知らない」との回答(17.6%)が多い。

図表 2-1①食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度



※「とても不安である」「ある程度不安である」の合計が高いもの順に並び替え。

図表 2-1②食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度(年度別の上位7位)

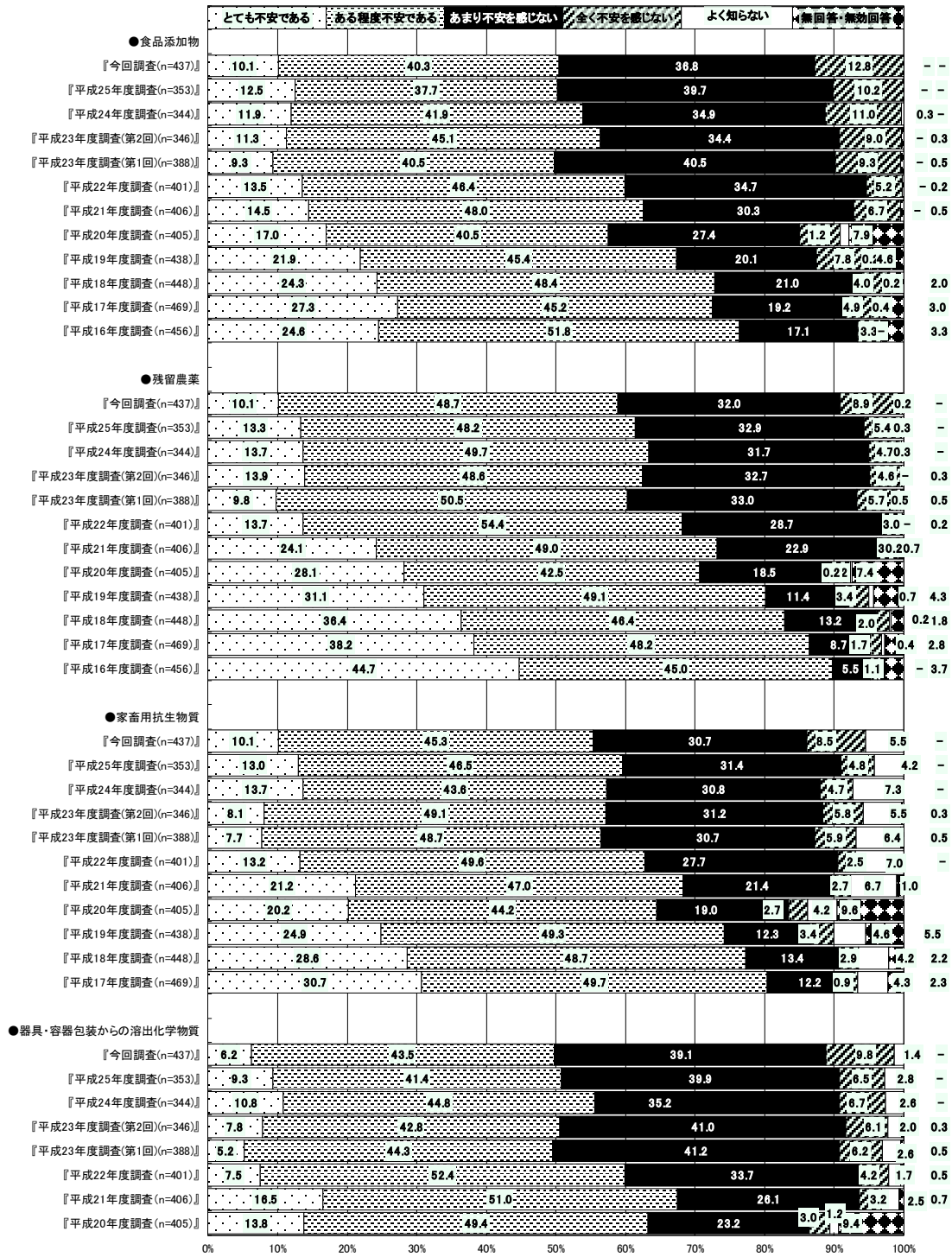
※「とても不安である」「ある程度不安である」の合計

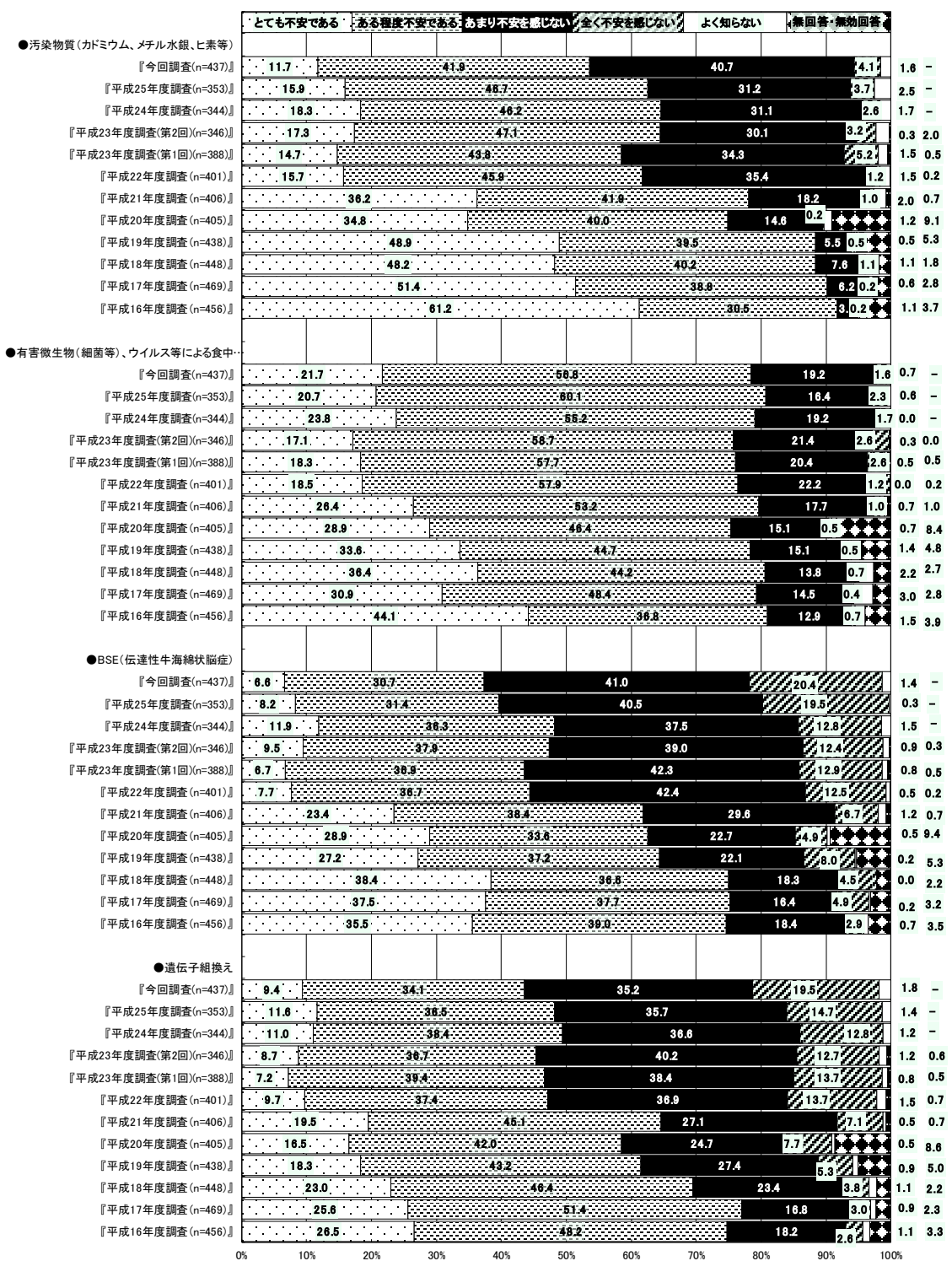
年度	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
今回調査	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(78.5%)	放射性物質を含む食品(64.1%)	いわゆる健康食品(64.1%)	残留農薬(58.8%)	家畜用抗生物質(55.4%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(53.5%)	食品添加物(50.3%)
平成25年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(80.8%)	放射性物質を含む食品(67.5%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(62.6%)	いわゆる健康食品(62.6%)	残留農薬(61.5%)	家畜用抗生物質(59.5%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(50.7%)
平成24年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(79.0%)	放射性物質を含む食品(74.2%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(64.5%)	残留農薬(63.4%)	家畜用抗生物質(57.3%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(55.6%)	いわゆる健康食品(55.5%)
平成23年度(第2回)	放射性物質を含む食品(80.3%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(75.8%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(64.4%)	残留農薬(62.5%)	いわゆる健康食品(57.5%)	家畜用抗生物質(57.2%)	食品添加物(56.4%)
平成23年度(第1回)	放射性物質を含む食品(85.5%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(76.0%)	残留農薬(60.3%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(58.5%)	家畜用抗生物質(56.4%)	肥料・飼料等(55.4%)	いわゆる健康食品(54.9%)
平成22年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(76.4%)	残留農薬(68.1%)	家畜用抗生物質(62.8%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(61.6%)	食品添加物(59.9%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(59.9%)	いわゆる健康食品(56.4%)
平成21年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(79.6%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(78.1%)	残留農薬(73.1%)	家畜用抗生物質(68.2%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(67.5%)	遺伝子組換え(64.6%)	食品添加物(62.5%)
平成20年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(75.3%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(74.8%)	残留農薬(70.6%)	家畜用抗生物質(64.4%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(63.2%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(62.5%)	体細胞クローン(59.2%)
平成19年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(88.4%)	残留農薬(80.1%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(78.3%)	家畜用抗生物質(74.2%)	食品添加物(67.4%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(64.4%)	いわゆる健康食品(62.8%)
平成18年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(88.4%)	残留農薬(82.8%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(80.6%)	家畜用抗生物質(77.2%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(75.0%)	食品添加物(72.8%)	遺伝子組換え(69.4%)
平成17年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(90.2%)	残留農薬(86.4%)	家畜用抗生物質(80.4%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒(79.3%)	遺伝子組換え(77.0%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(75.3%)	食品添加物(72.5%)
平成16年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)	残留農薬(89.7%)	家畜用抗生物質(83.6%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒	食品添加物(76.3%)	遺伝子組換え(74.8%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(74.6%)

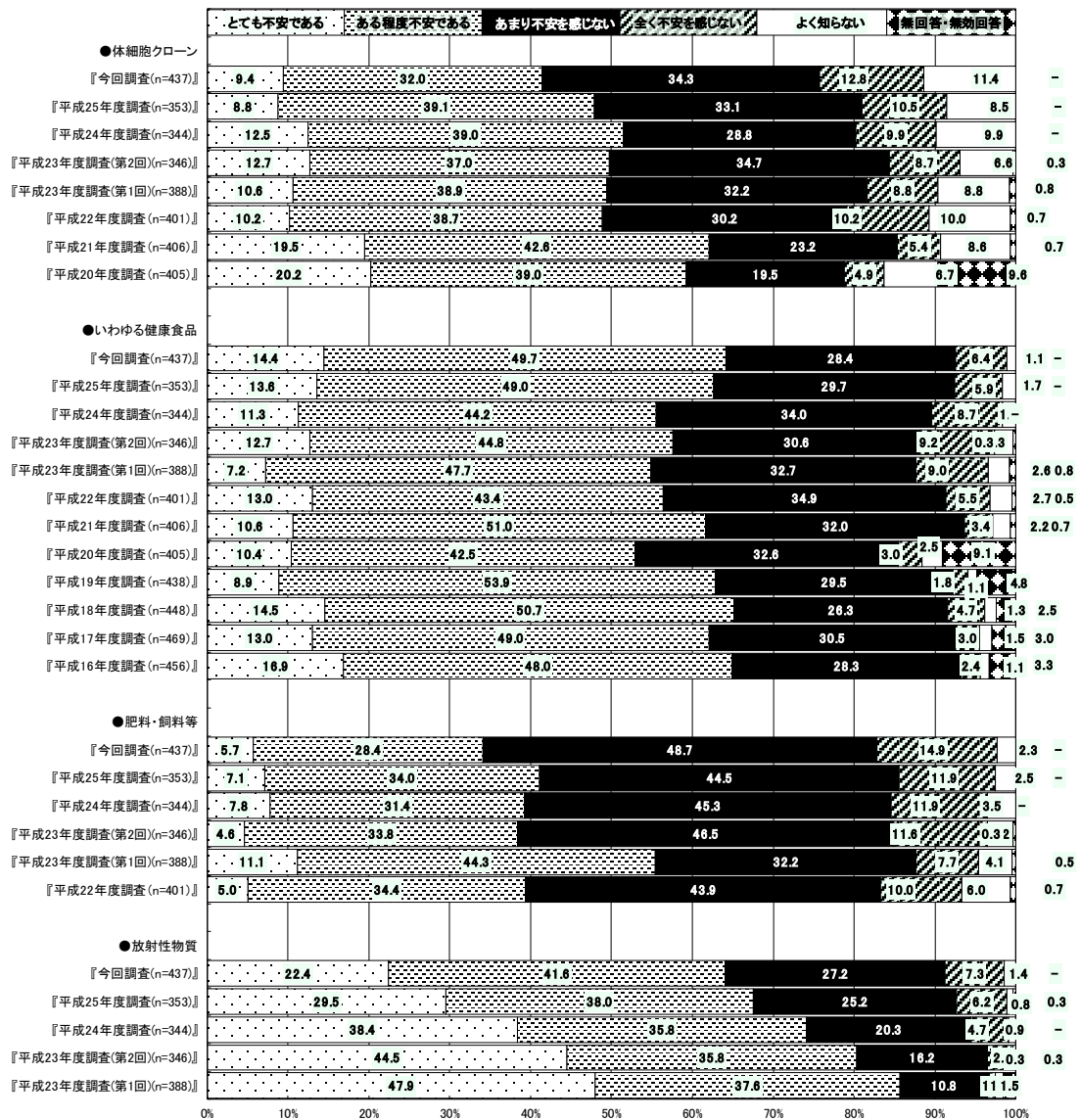
	(91.7%)			(80.9%)		
--	---------	--	--	---------	--	--

※放射性物質は平成 23 年度調査から追加。

図表 2-1③食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度（年度別）



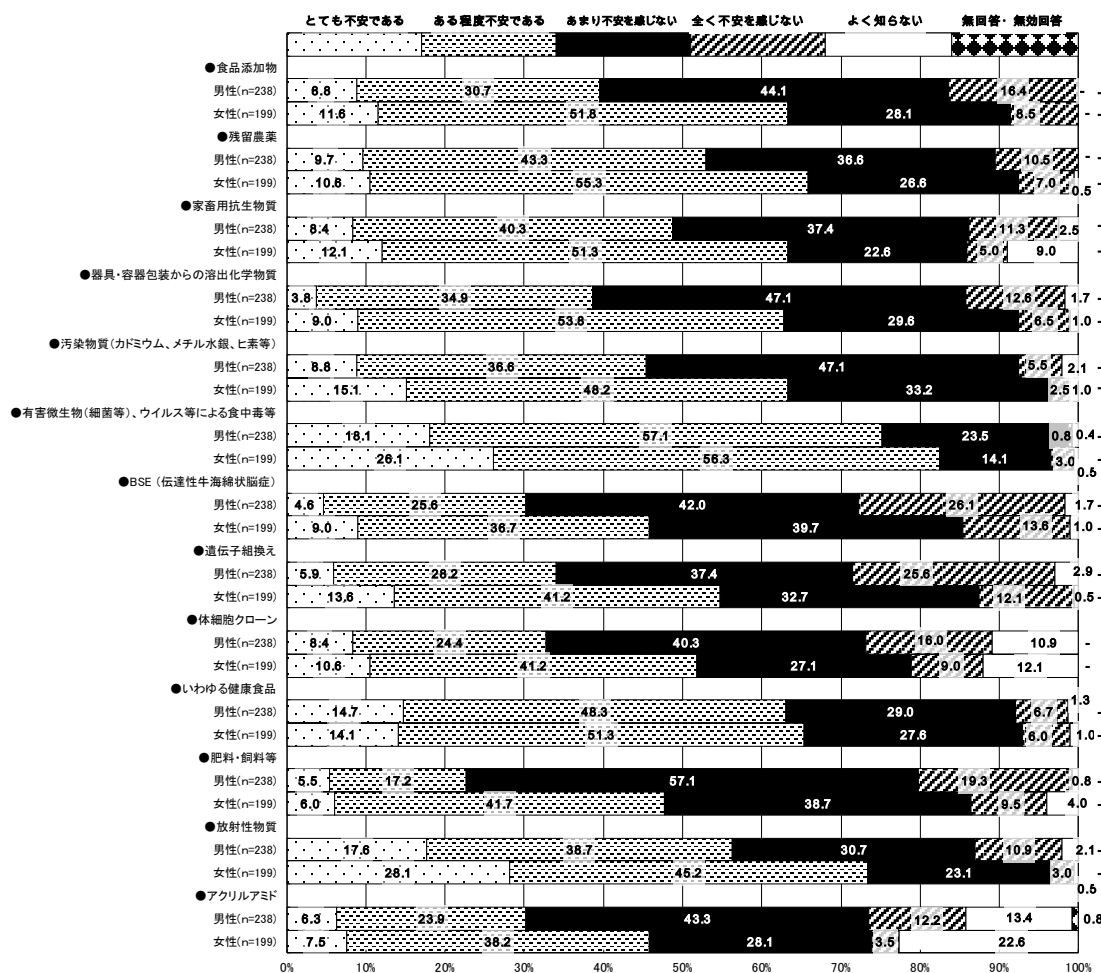






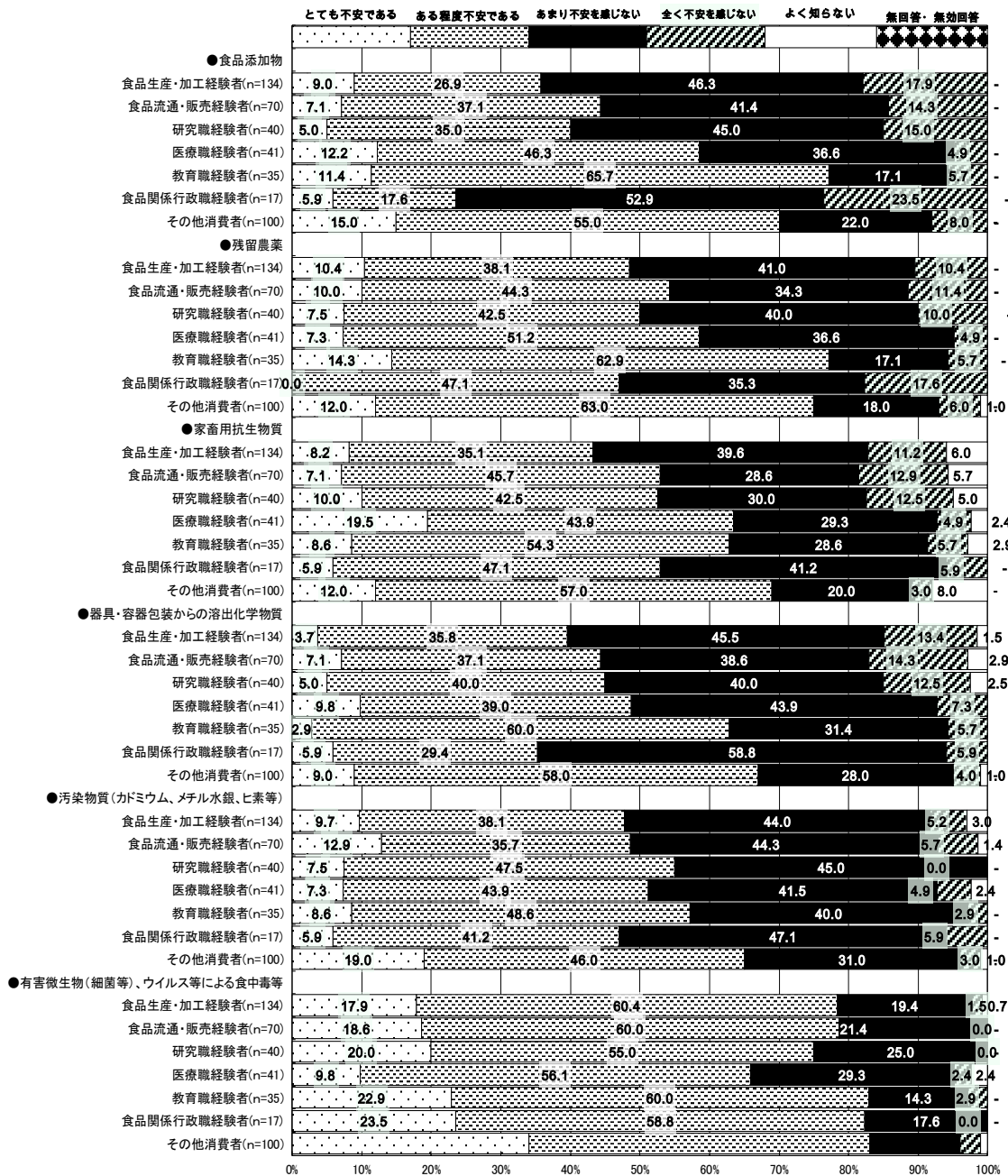
- 食品安全に関するハザードの「その他」の回答として最も多くあげられたのは、「輸入食品」で18件（そのうち「中国からの輸入食品」が9件）。次いで多いのは「異物混入」（10件）となっている。
- 性別で見ると、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、すべてのハザードで女性の方が高い。
- 「とても不安である」は、「いわゆる健康食品」のみ、男性（14.7%）が女性（14.1%）をわずかに上回った。それ以外のハザードは、男性に比べ女性の方が高い。

図表 2-1④食品の安全性の観点から感じている不安の程度（性別）

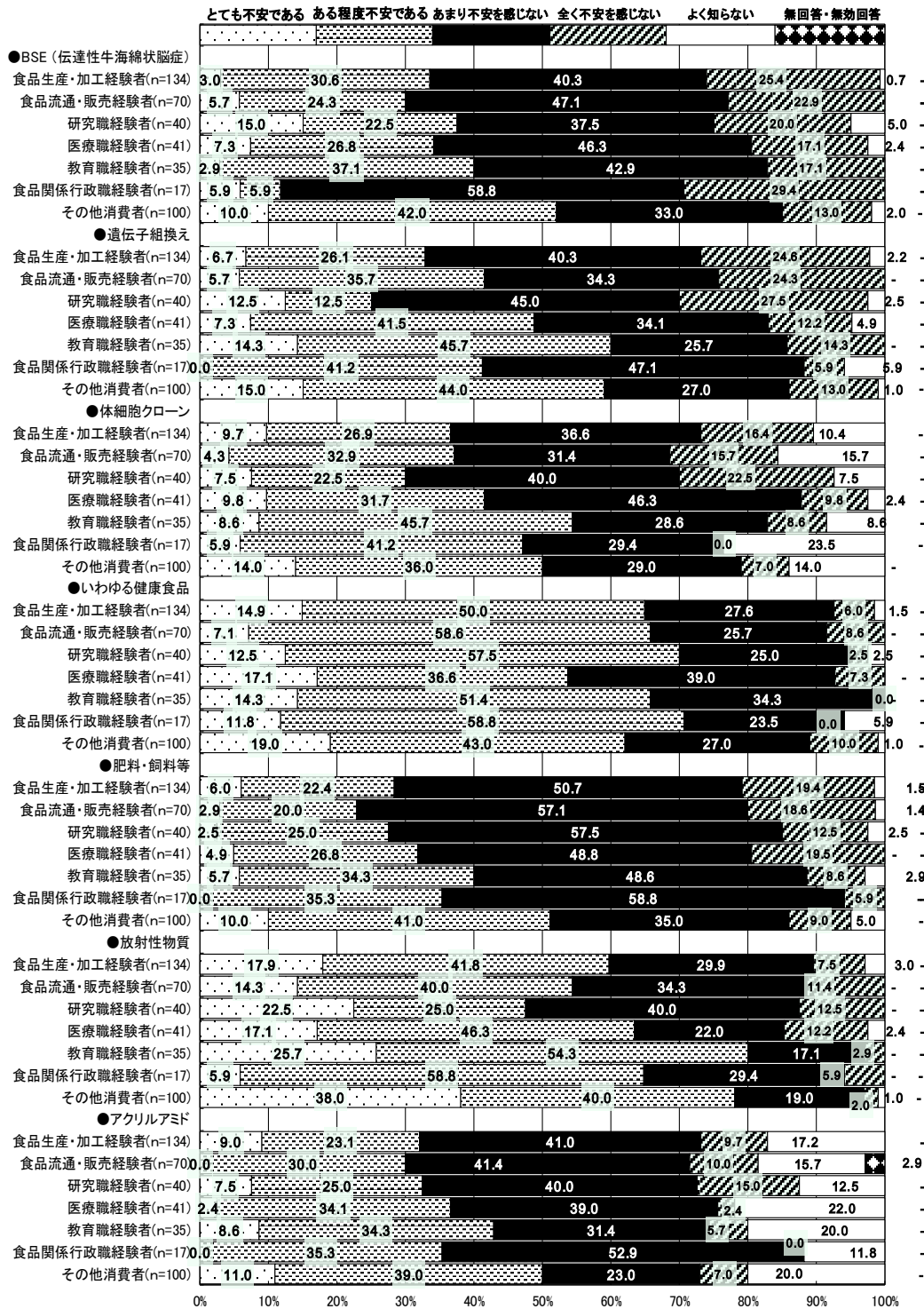


- 職務経験別でみると、その他消費者は「食品添加物」、「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」、「遺伝子組換え」、「体細胞クローン」、「いわゆる健康食品」、「肥料・飼料等」、「放射性物質」、「アクリルアミド」のハザードで「とても不安である」が他の職務経験区分に比べ不安の程度が高い。
- 「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計で比較したところ、教育職経験者は、「食品添加物」、「残留農薬」、「遺伝子組換え」、「体細胞クローン」、「放射性物質」で他の職務経験区分に比べ不安の程度が高い。

図表 2-1⑤食品の安全性の観点から感じている不安の程度（職務経験別）

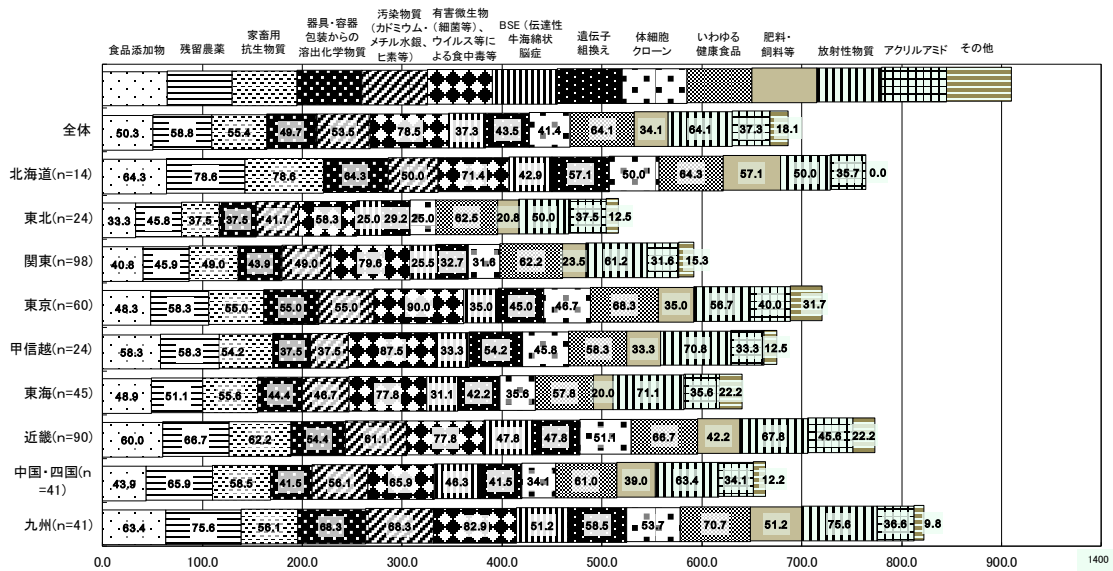


図表 2-1⑤食品の安全性の観点から感じている不安の程度（職務経験別・つづき）



- 「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計を居住地別にみると、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」は北海道を除くすべての居住地で最も高い。
- 「残留農薬」は、北海道(78.6%)、九州(75.6%)で不安を感じる割合が高く、東北(45.8%)で低い。
- 「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」、「遺伝子組換え」は、九州(51.2%、58.5%)で不安を感じる割合が高く、東北(25.0%、29.2%)で低い。

図表 2-1⑥食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 (「とても不安である」「ある程度不安である」の合計(居住地別))



※本グラフは、1つのハザードの回答割合を100%とし、14のハザードの回答割合を積み上げたもの。なお、居住地ごとの回答者数の差は考慮していない。

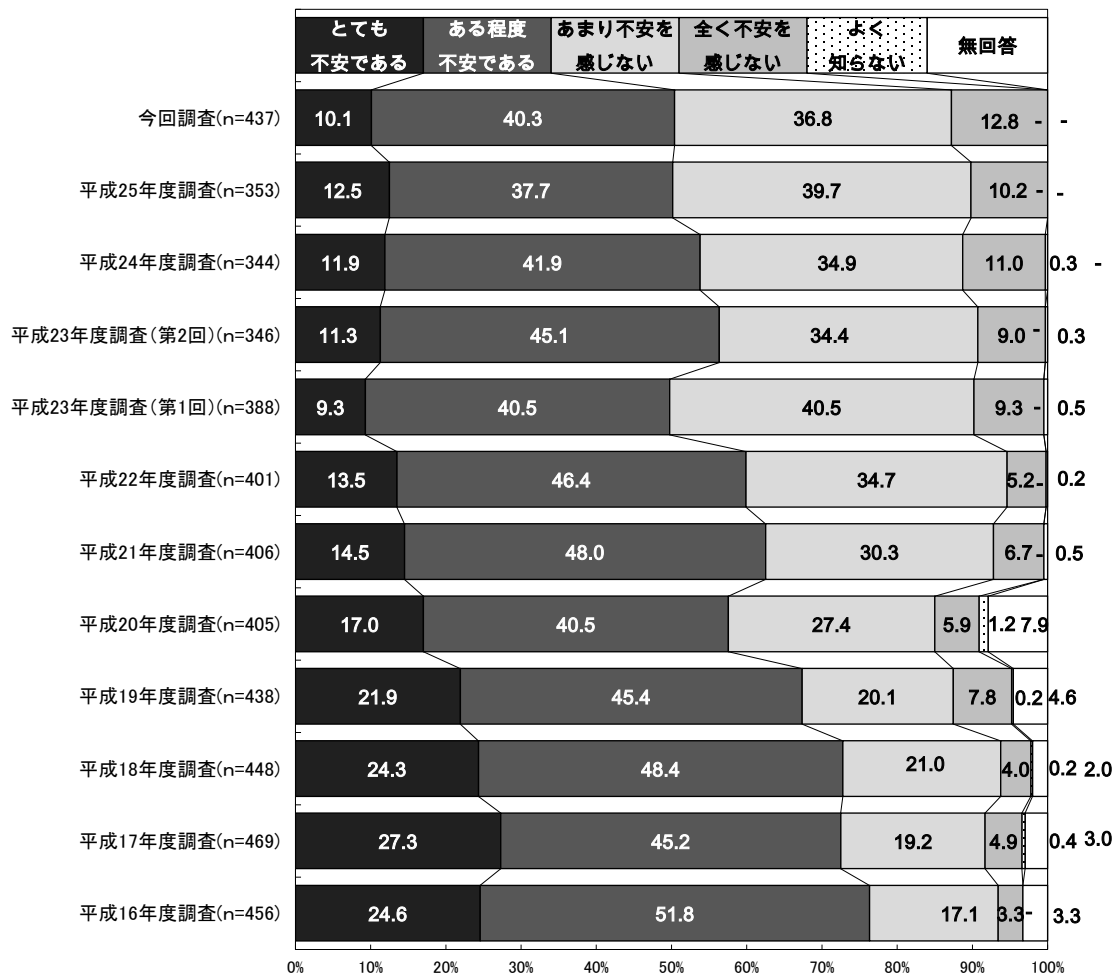
## 2-2 食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度の年度別回答割合

### A. 食品添加物

■ 食品添加物についての不安の程度は、長期的には低下傾向が見られる。

- 食品添加物についての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、平成16年度調査の76.4%から今回調査では50.4%と、長期的には低下傾向が見られる。

図表 2-2 A. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜食品添加物・年度別＞

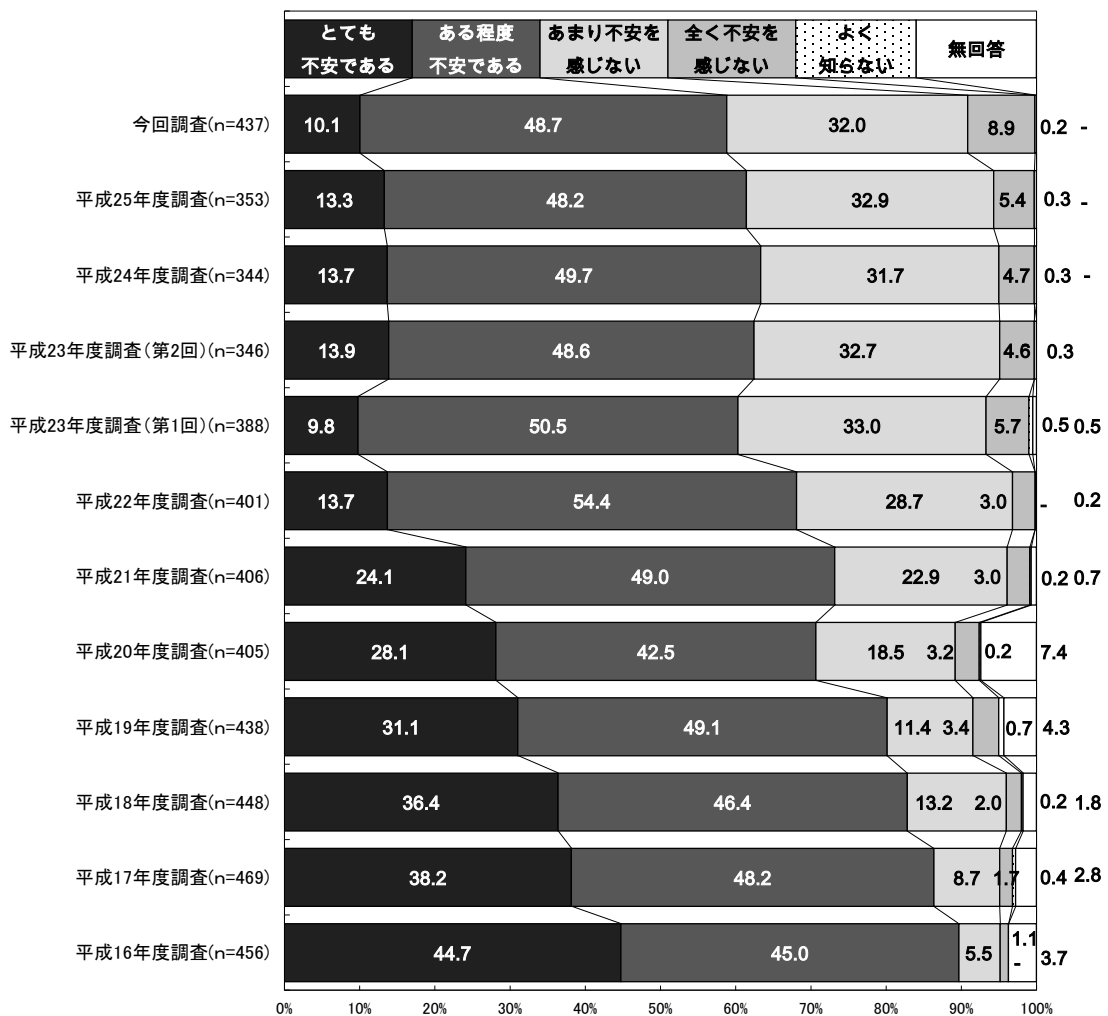


## B. 残留農薬

■ 残留農薬についての不安の程度は、平成 23 年度以降は横ばい傾向。

- 残留農薬についての不安の程度を年度別に比較したところ、平成 16 年度から 23 年度（第 1 回）にかけて「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は 89.7%から 60.3%へ低下したが、23 年度以降は 60%前後で横ばい傾向となっている。
- 今回調査では「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は 58.8%と、初めて 60%を切り最低となった。

図表 2-2B. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜残留農薬・年度別＞

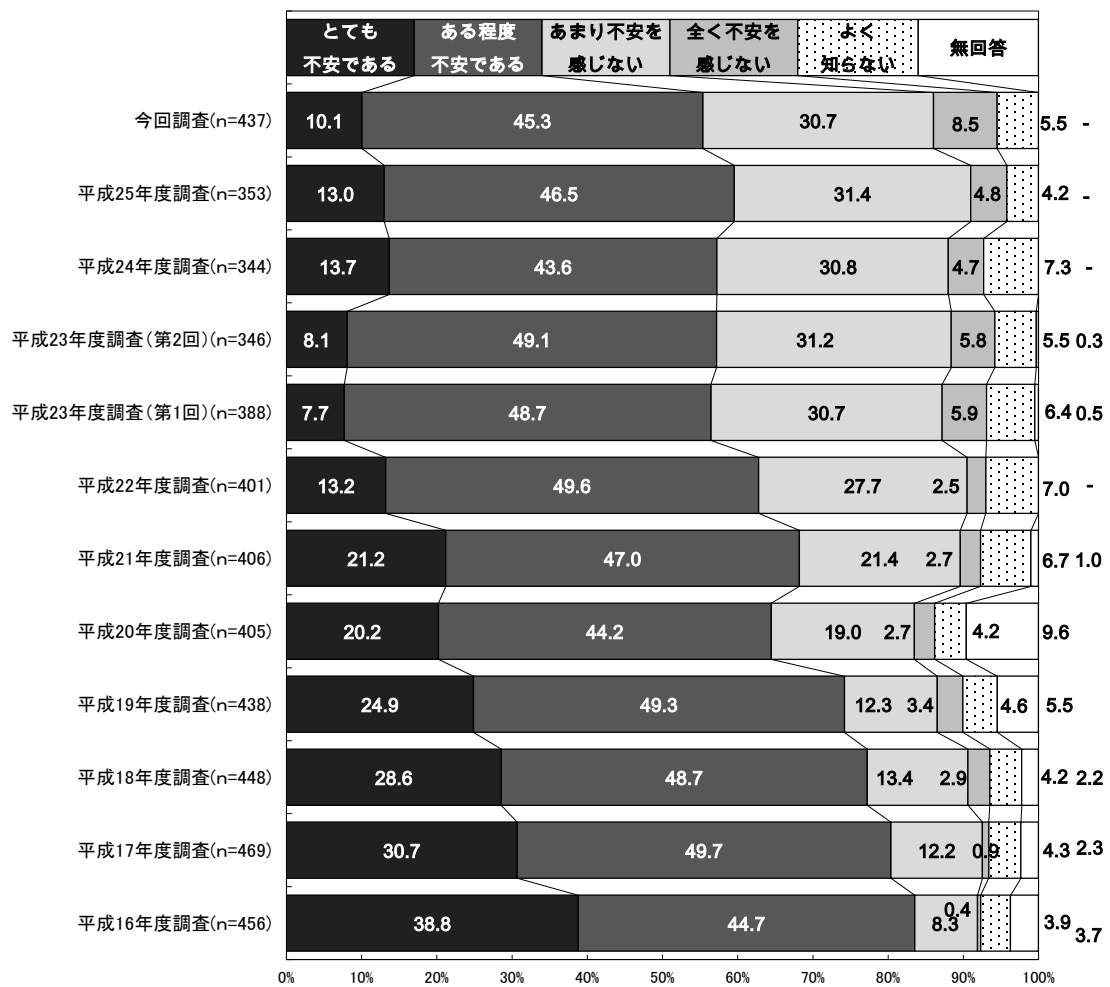


### C. 家畜用抗生物質

■ 家畜用抗生物質についての不安の程度は、平成 23 年度以降は横ばい傾向。

- 家畜用抗生物質についての不安の程度を年度別に比較したところ、平成 16 年度から 23 年度（第 1 回）にかけて「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は 83.5%から 58.4%へ低下したが、23 年度以降は 55~60%程度で横ばい傾向となっている。また、26 年度調査では、前回調査よりやや減少している。（59.5%→55.4%）

図表 2-2C. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜家畜用抗生物質・年度別＞

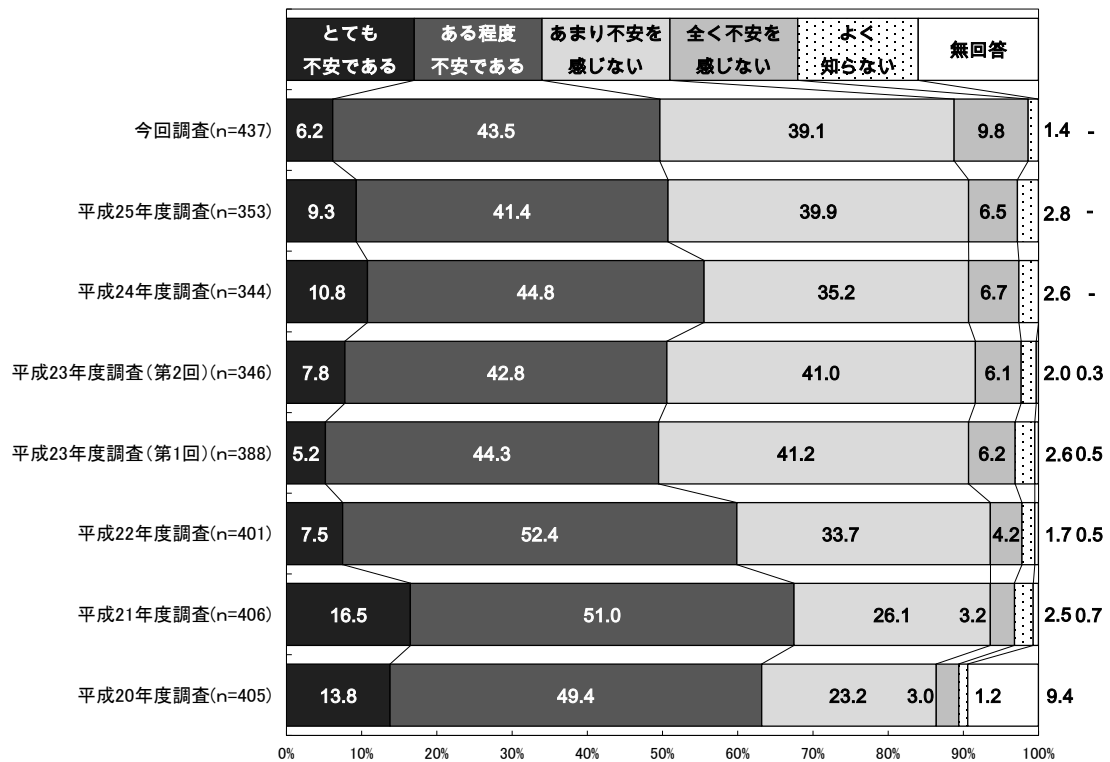


#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

■ 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安の程度は、平成 21 年度をピークに低下傾向。

- 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、平成 21 年度調査 (67.5%) をピークに長期的には低下傾向が見られる。
- 平成 24 年度調査 (55.6%) で一時上昇したが、その後は今回調査 (49.7%) を含めて低下している。

図表 2-2D. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質・年度別>



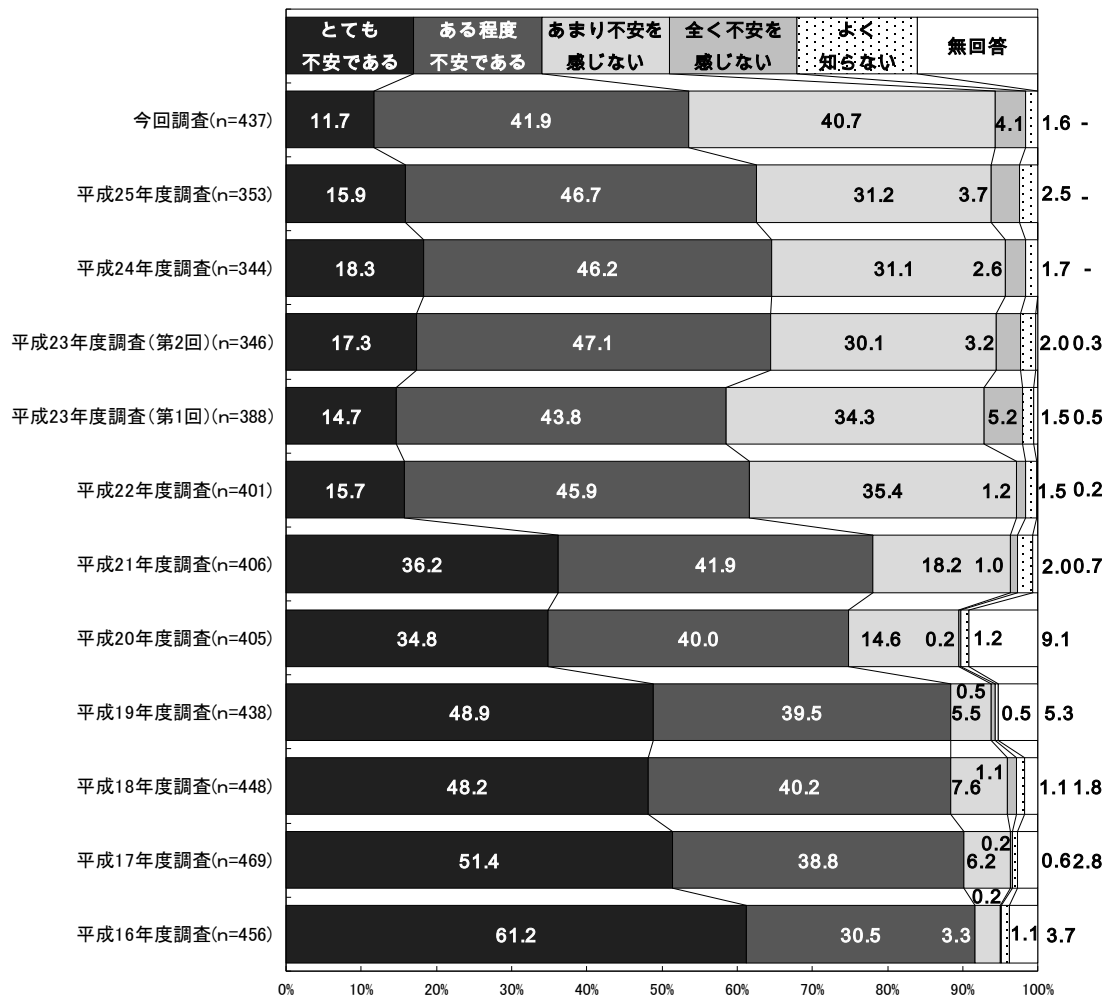


### E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

■ 汚染物質についての不安の程度は、長期的に低下傾向。

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）についての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、長期的に低下傾向が見られる。
- 平成16年度から17年度まで90%、20年度、21年度70%台、22年度以降は60%前後にまで低下）で、また、今回調査ではさらに低下し、53.6%と最低となった。

図表 2-2E. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）・年度別>

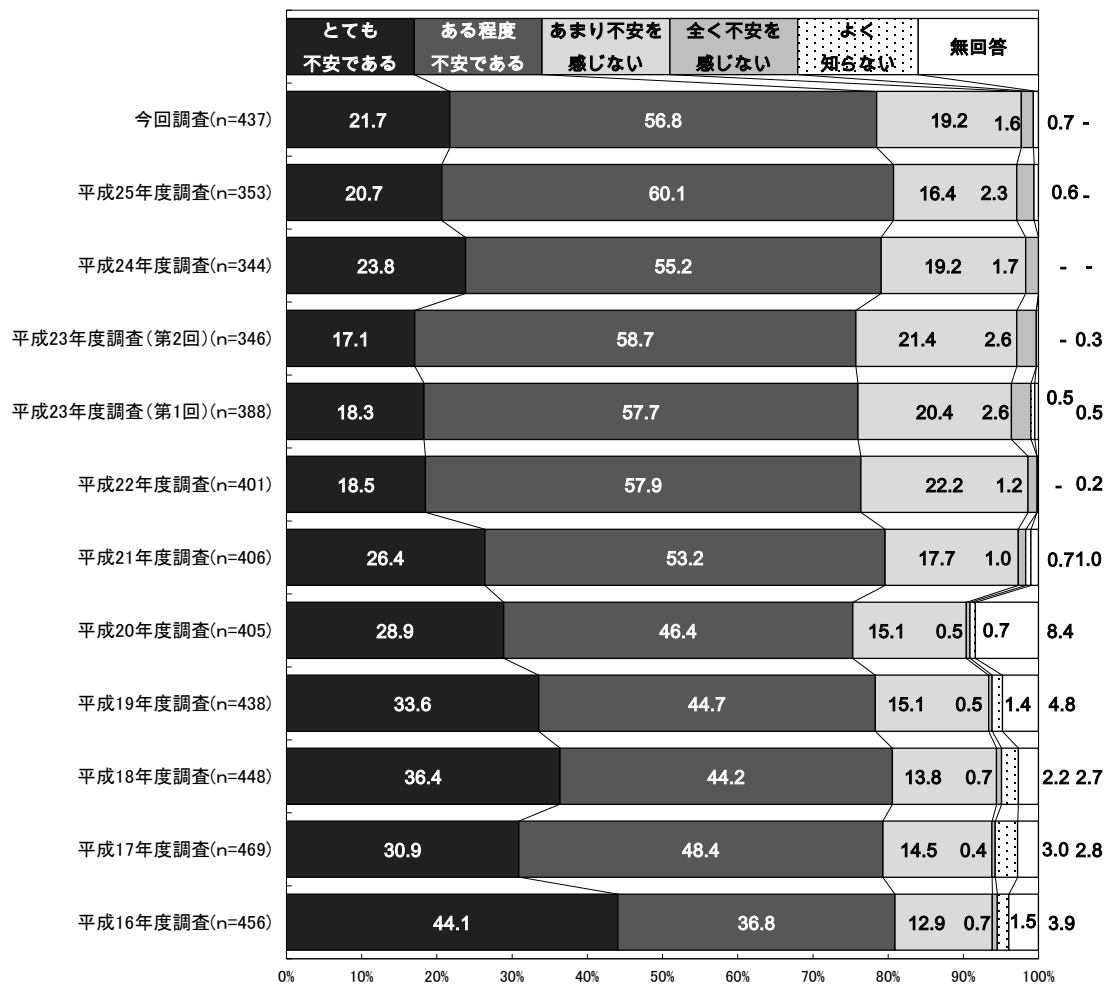


## F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

■ 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等についての不安の程度は、平成 22 年度以降は横ばい傾向。

- 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等についての不安の程度を年度別に比較したところ、平成 16 年度から 22 年度にかけて「とても不安を感じる」割合が 44.1%から 18.3%へ低下したが、23 年度以降は 20%前後で横ばい傾向となっている。
- 「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、長期的に見ても 80%前後で横ばいとなっている。

図表 2-2F. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等・年度別>



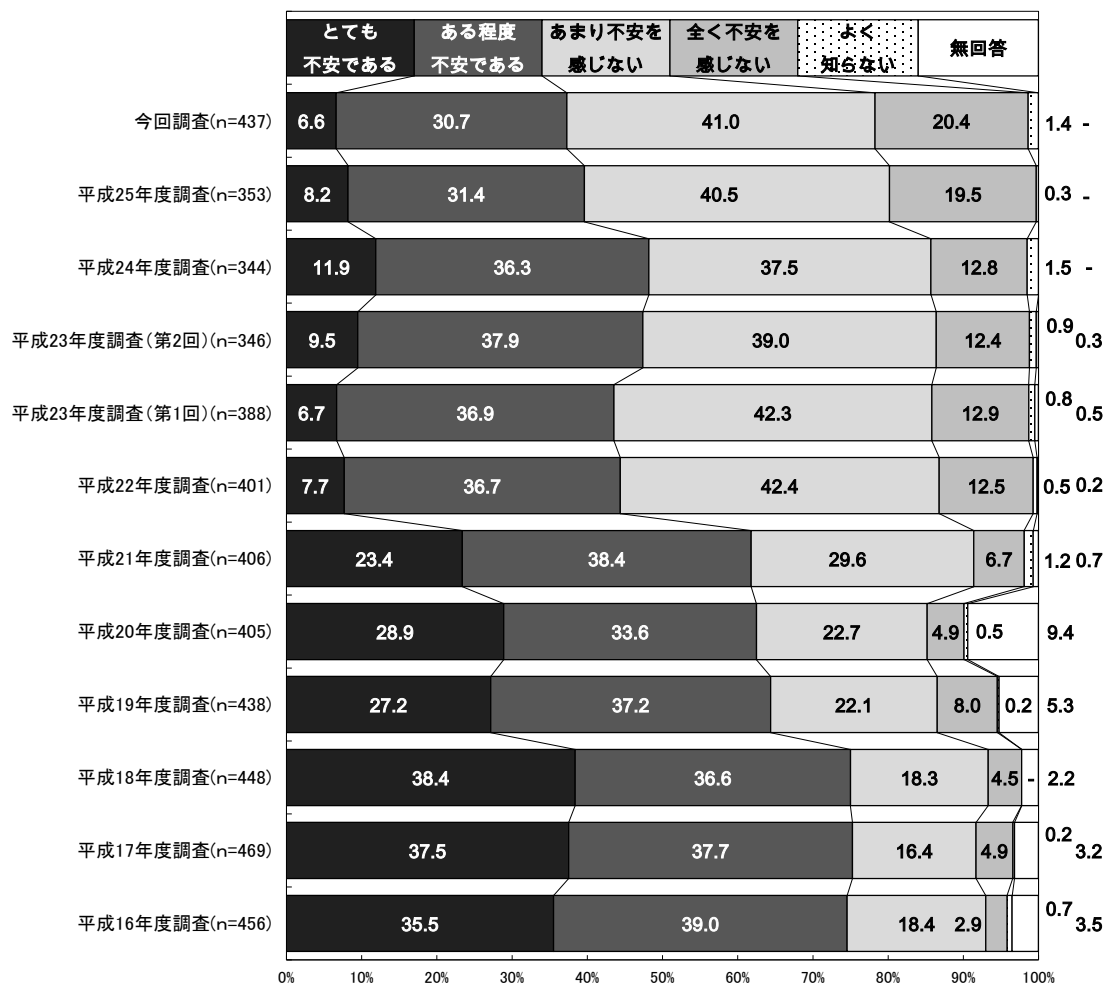
G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

■ BSE（伝達性牛海綿状脳症）についての不安の程度は、長期的に低下傾向で、今回調査では最低に。

BSE（伝達性牛海綿状脳症）についての不安の程度を年度別に比較したところ、長期的に低下傾向が見られる。

- 「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は平成16年度から18年度まで75%前後だったが、19年度～21年度は60%台、22年度～24年度は40%台、25年度には30%台にまで低下した。また、今回調査では37.3%と最低の値となった。

図表 2-2G. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）・年度別>

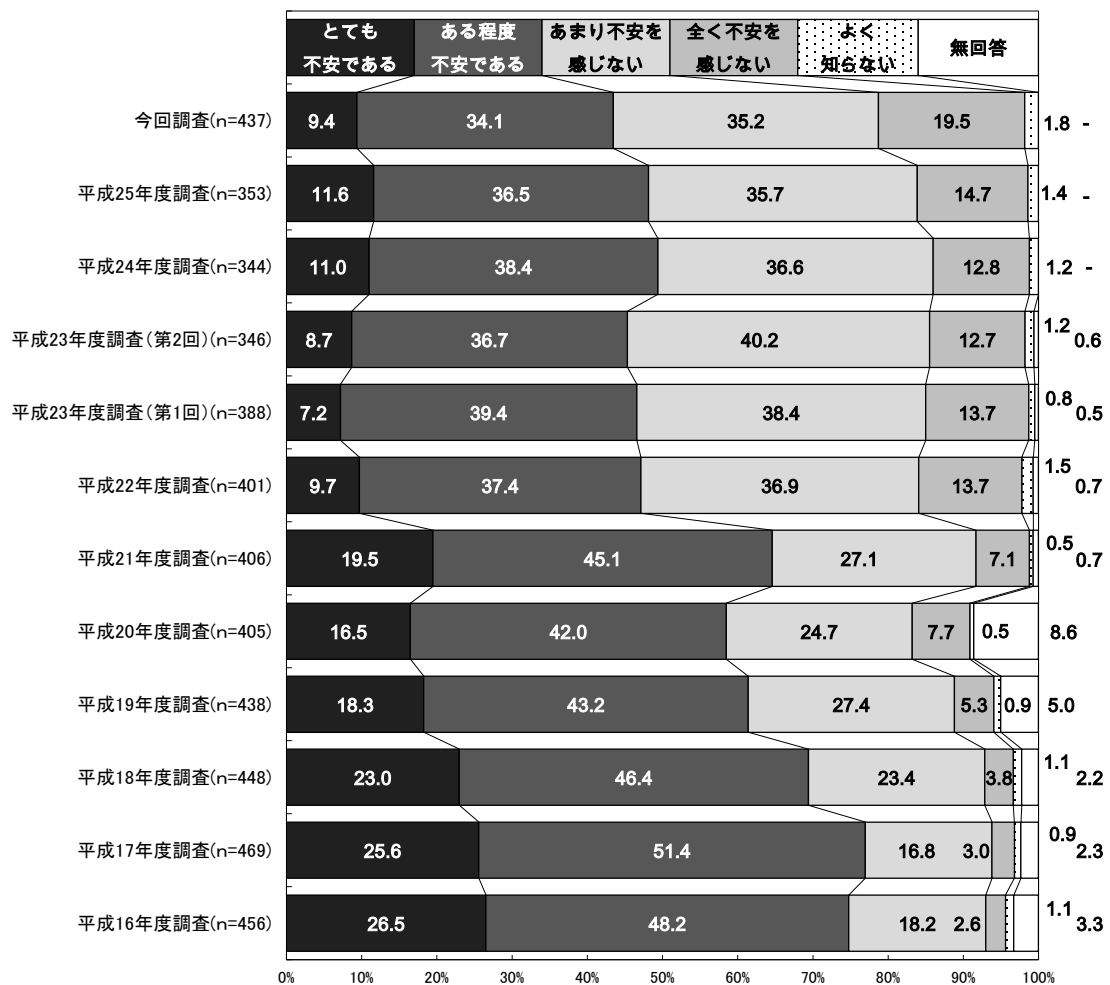


## H. 遺伝子組換え

■ 遺伝子組み換えについての不安の程度は、長期的に低下傾向で、今回調査では最低に。

- 遺伝子組み換えについての不安の程度を年度別に比較したところ、長期的には低下傾向が見られる。平成16年度、17年度には「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は7割を超えていたが、平成22年度以降は5割を切り、今回調査では43.5%にまで低下している。

図表 2-2H. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜遺伝子組換え・年度別＞

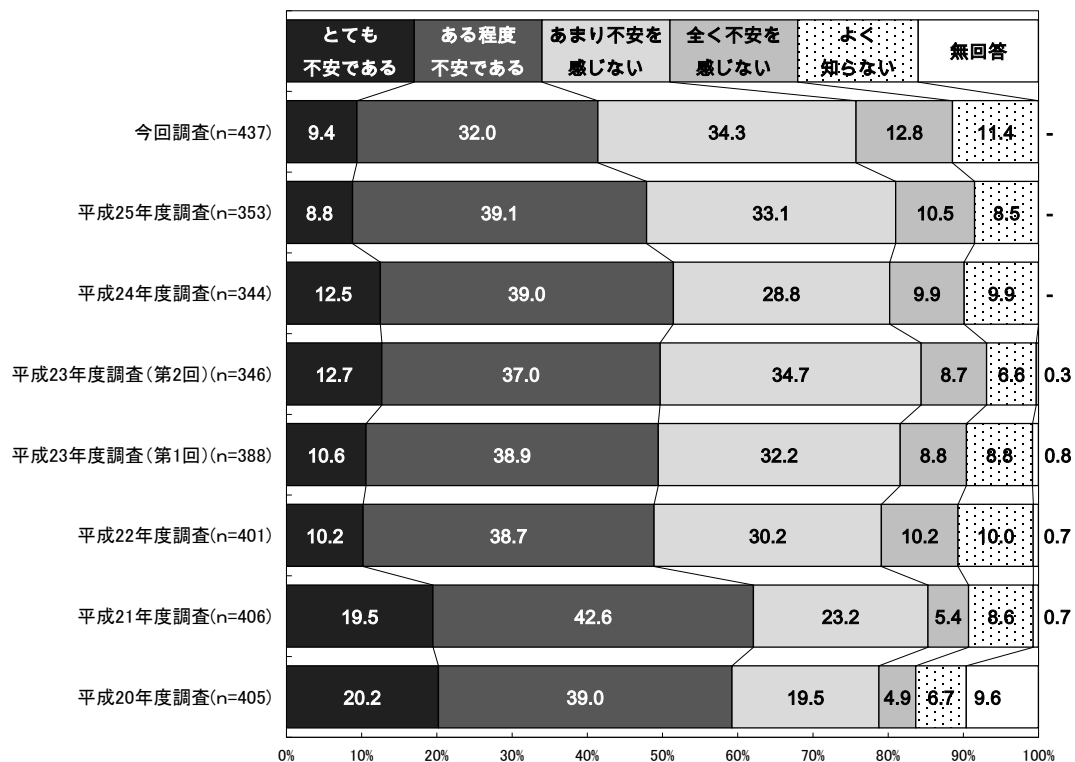


## I. 体細胞クローン

■ 体細胞クローンについての不安の程度は、最近 3 年間で低下傾向。

- 体細胞クローンについての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、平成 22 年度以降は 21 年度の 60% 台から低下し、その後 50% 前後で横ばいであったが、24 年度以降 3 年間は低下を続け、今回調査では 41.4% と最も低くなっている。

図表 2-2I. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜体細胞クローン・年度別＞

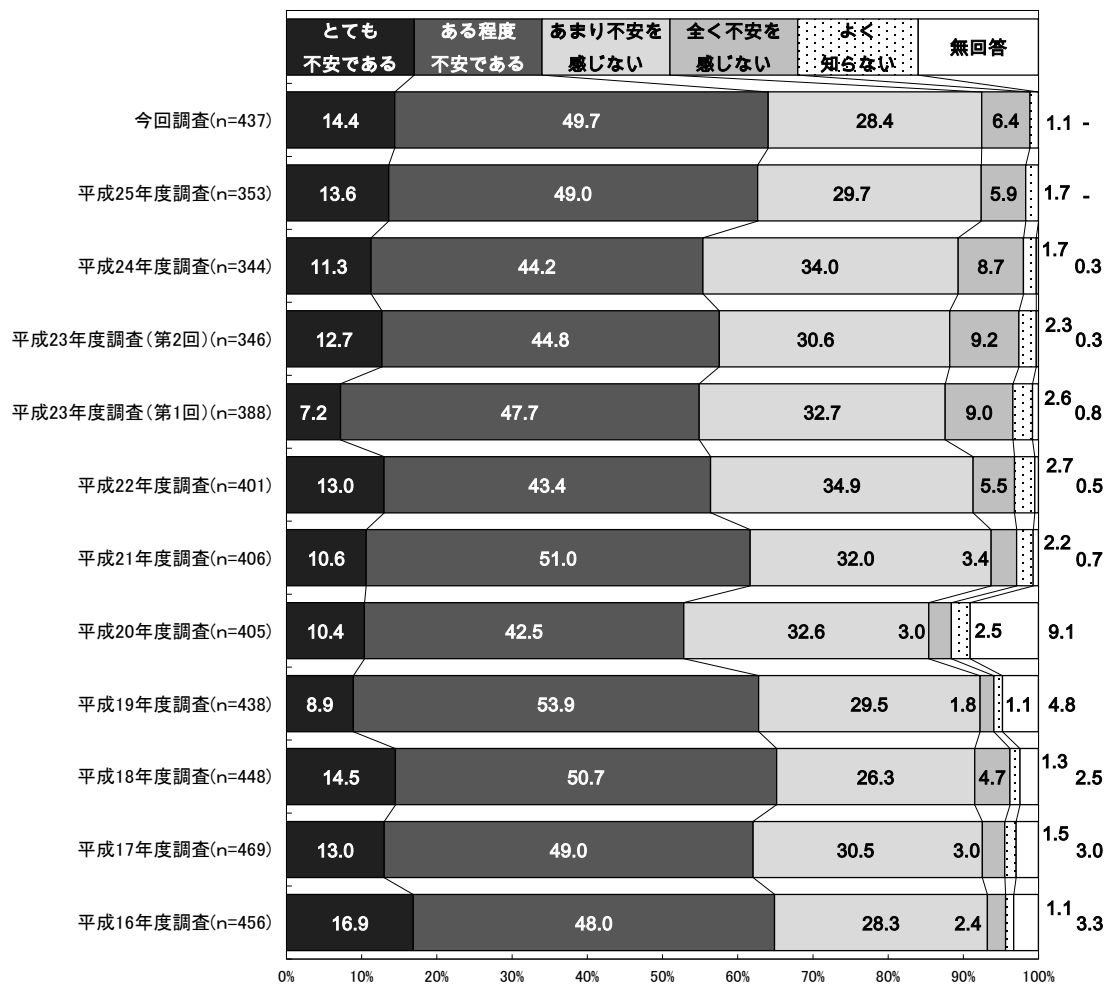


## J. いわゆる健康食品

■ いわゆる健康食品についての不安の程度は、最近3年間で上昇傾向。

- いわゆる健康食品についての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、長期的には6割前後で横ばい傾向だが、24年度以降3年間は上昇傾向が見られる。

図表 2-2J. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度<いわゆる健康食品・年度別>

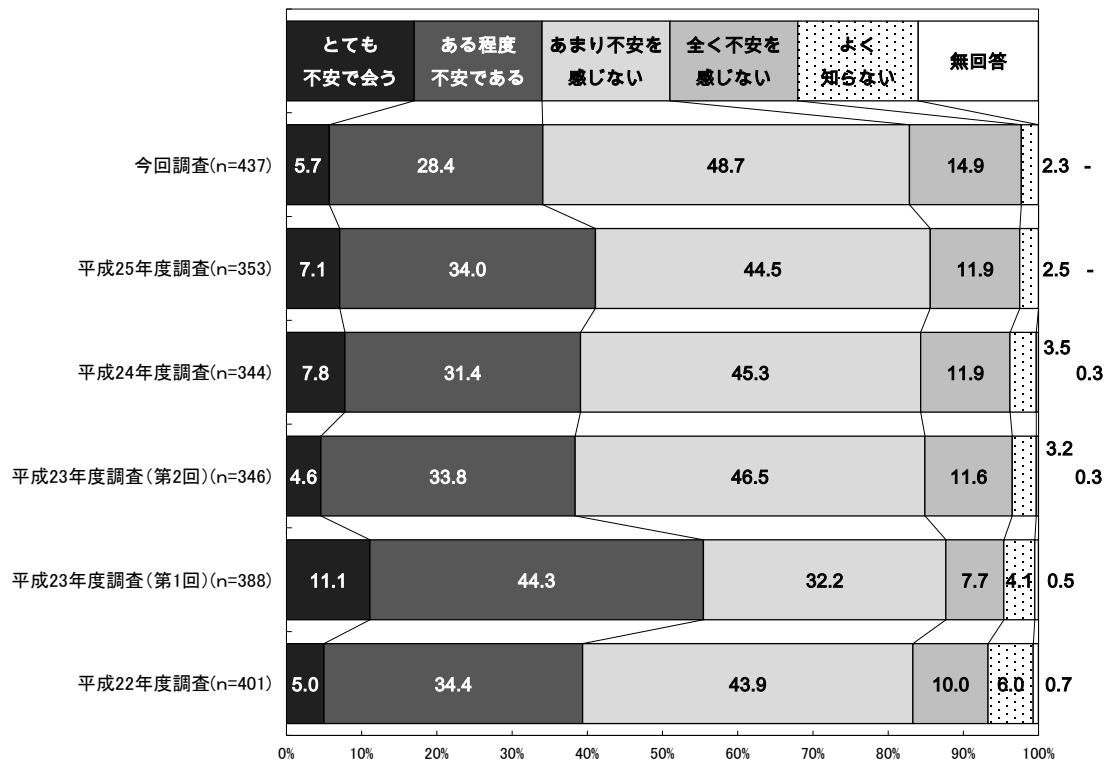


## K. 肥料・飼料等

■ 肥料・飼料等についての不安の程度は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故直後の平成23年度第1回調査で高くなったが、その後は低下して安定し、今回は最低に。

- 肥料・飼料についての不安の程度を年度別に比較したところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故直後の平成23年度第1回調査で55.4%と高くなったが、同年の第2回調査以降では前年並みの40%前後に低下した。
- 今回調査では不安を感じる割合が30%台前半（34.1%）にまで低下している。

図表 2-2K. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜肥料・飼料等・年度別＞

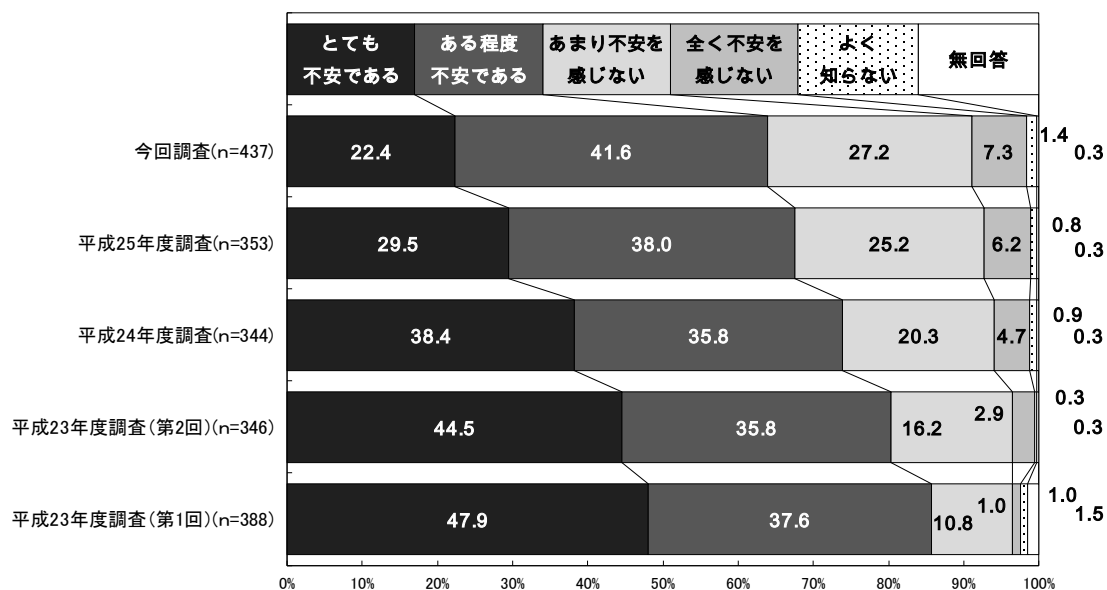


## L. 放射性物質

■ 放射性物質についての不安の程度は、平成 23 年度以降年々低下している。

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故以来調査している放射性物質についての不安の程度は、年々低下し、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計は、事故直後の 85.5%だったものが、今回調査では 64.0%にまで低下している。

図表 2-2L.① 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜放射性物質・年度別＞





放射性物質についての不安の程度について、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計を属性、年度別に比較したところ、

- 性別では男女ともに平成 23 年度以降年々低下している。
- 年代別では、前年度と比較したところ、20 代、30 代、70 代で増加している。(20 代：25 年度 63.7%→26 年度 66.6%、30 代：25 年度 61.1%→26 年度 71.5%、70 代：25 年度 69.5%→26 年度 70.4%、)
- 職務経験別※では、前年度と比較したところ、その他消費者でやや増加している(25 年度 77.8%→26 年度 78.0%)。一方で、食品関係業務経験者、研究職経験者、医療・教育職経験者は減少している(25 年度 62.0%→26 年度 58.3%、25 年度 47.5%→26 年度 60.6%、25 年度 77.8%→26 年度 71.1%)。
- モニター継続別では、平成 26 年度から新たに食品安全モニターとなった者が、今回調査で増加している(25 年度 63.9%→26 年度 68.7%)。
- モニター会議出席経験別では、出席経験のある人は平成 23 年度以降年々低下しているが、出席経験のない人については前年度から増加している(25 年度 67.7%→26 年度 74.2%)。
- 居住地別では、「東北・関東」、「東北・関東以外」とともに、平成 23 年度以降年々低下している。

※「職務経験別」の区分は、平成 24 年度調査までは下記の 4 区分であったため、以下のグラフはこの区分に合わせて集計したものである。

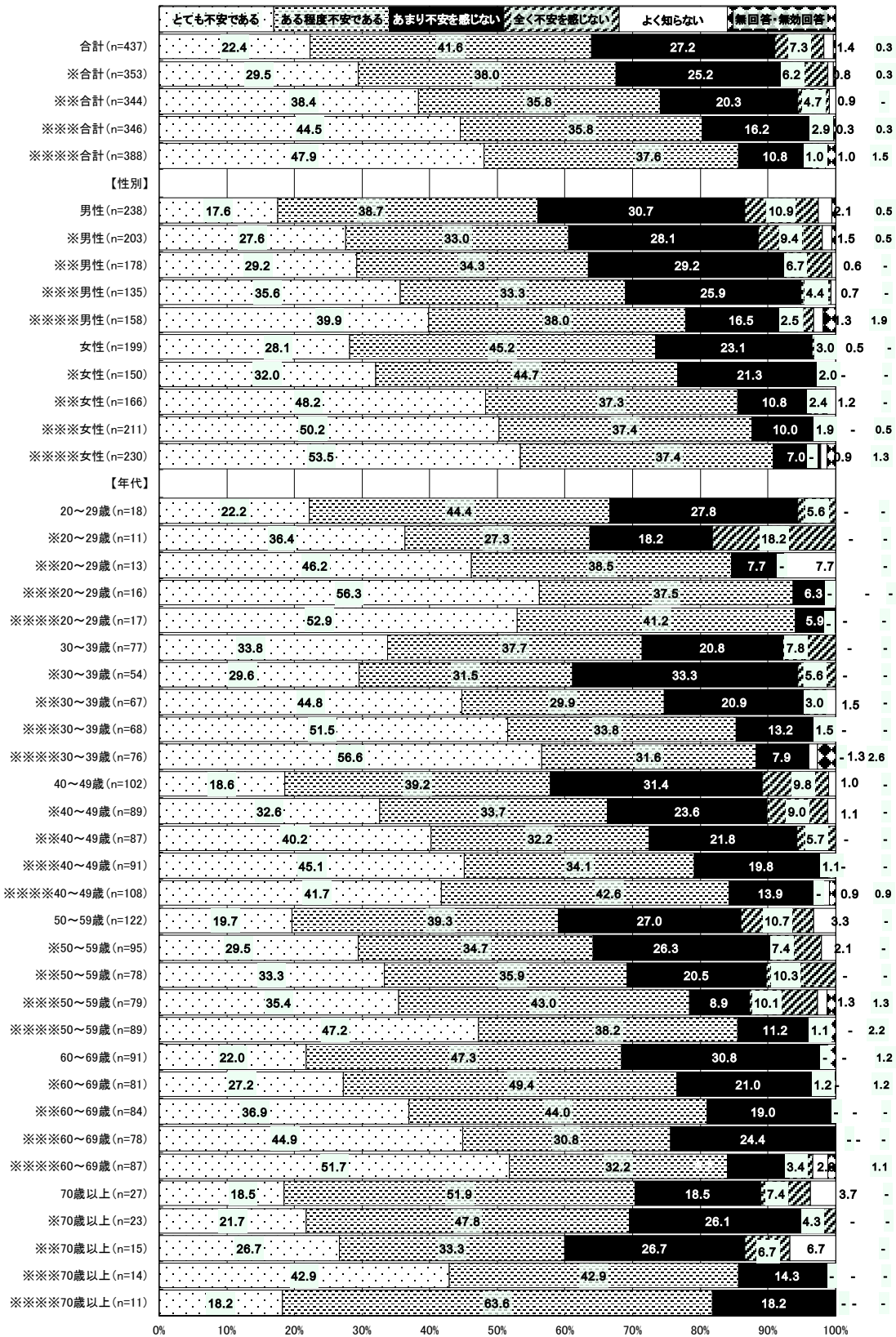
食品関係業務経験者：今回調査の「食品生産・加工経験者」、「食品流通・加工経験者」、「食品関係行政経験者」

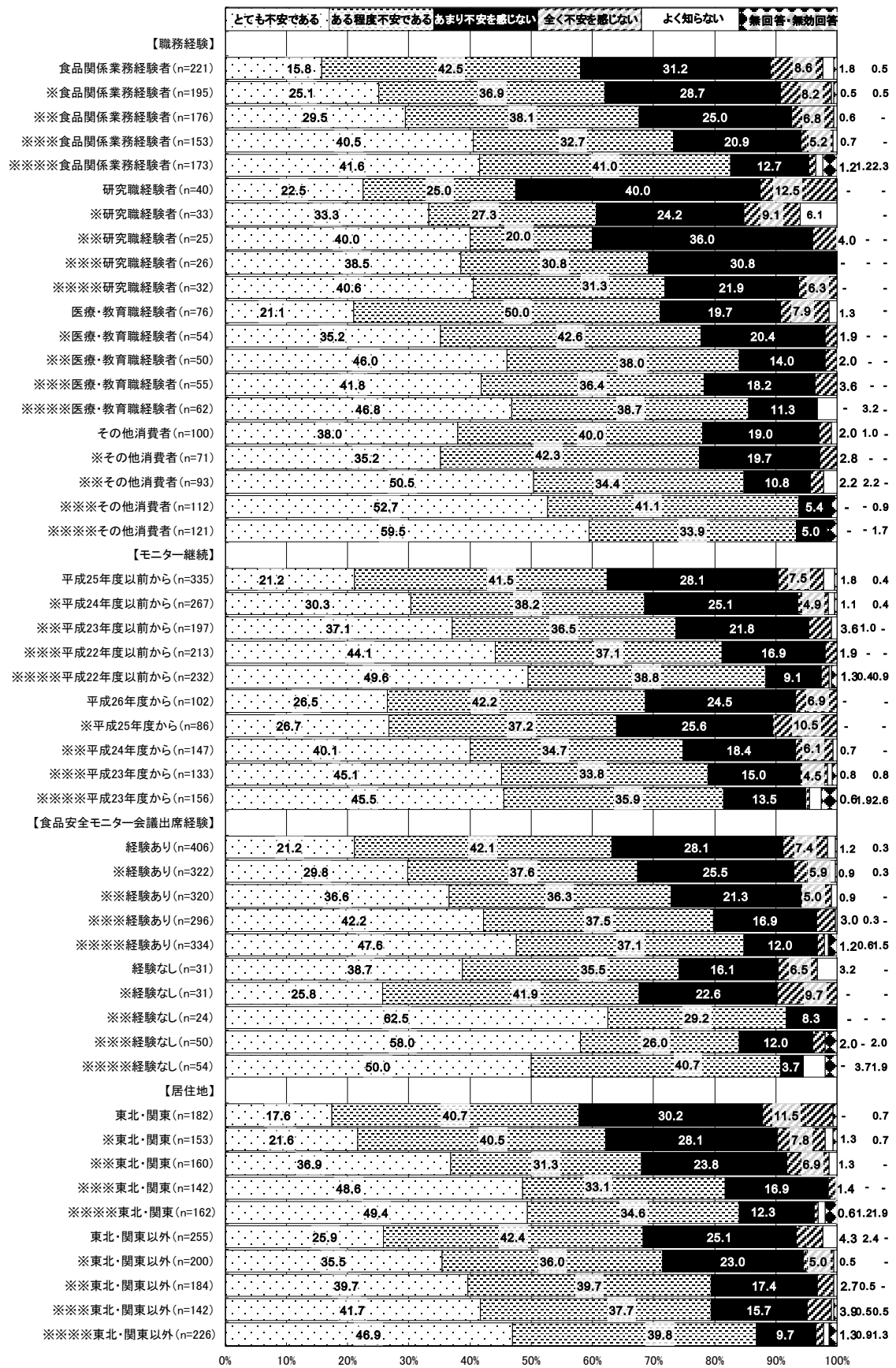
研究職経験者：今回調査の「研究職経験者」

医療・教育職経験者：今回調査の「医療職経験者」、「教育職経験者」

その他消費者：今回調査の「その他消費者」

図表 2-2L.②食品の安全性の観点から感じている不安の程度<放射性物質>  
 一段目：今回調査、二段目※：平成 25 年度調査、三段目※※：平成 24 年度調査、  
 四段目※※※：平成 23 年度調査（第 2 回）、五段目※※※※：平成 23 年度調査（第 1 回）





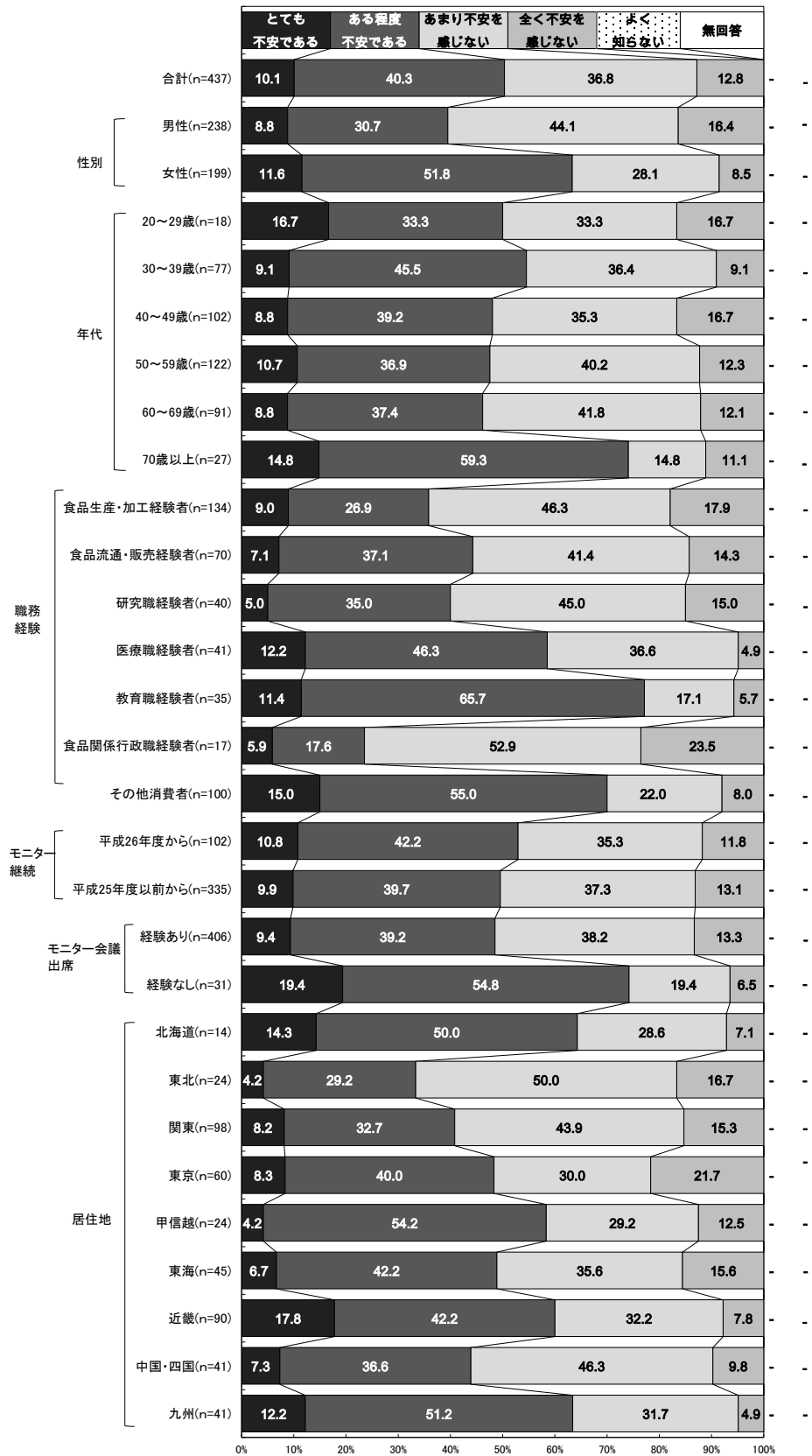
## 2-3 食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度の属性別回答割合

### A. 食品添加物

■ 食品添加物についての不安の程度は、性別では女性、職務経験では、教育職経験者、その他消費者、医療職経験者が高い。

- 食品添加物についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性（39.5%）よりも女性（63.4%）のほうが不安の程度が有意に高い。
- 年齢別では、70代がサンプル数は27と少ないが、特に高い（74.1%）。
- 職務経験別では、教育職経験者(77.1%)、その他消費者(70.0%)、医療職経験者（58.5%）で高く、食品関係行政経験者(23.5%)は特に低いという有意な差が見られる。
- モニター継続は、平成26年度から新たにモニターになった者（53.0%）より平成25年度以前から継続しているモニター(49.6%)のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人（74.2%）より出席経験のある人(48.6%)のほうが有意に低い。
- 居住地別では、北海道(64.3%)、九州(63.4%)、近畿(60.0%)、甲信越(58.4%)で高く、東北(33.4%)で低い。

図表 2-3 A. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度＜食品添加物・属性別＞

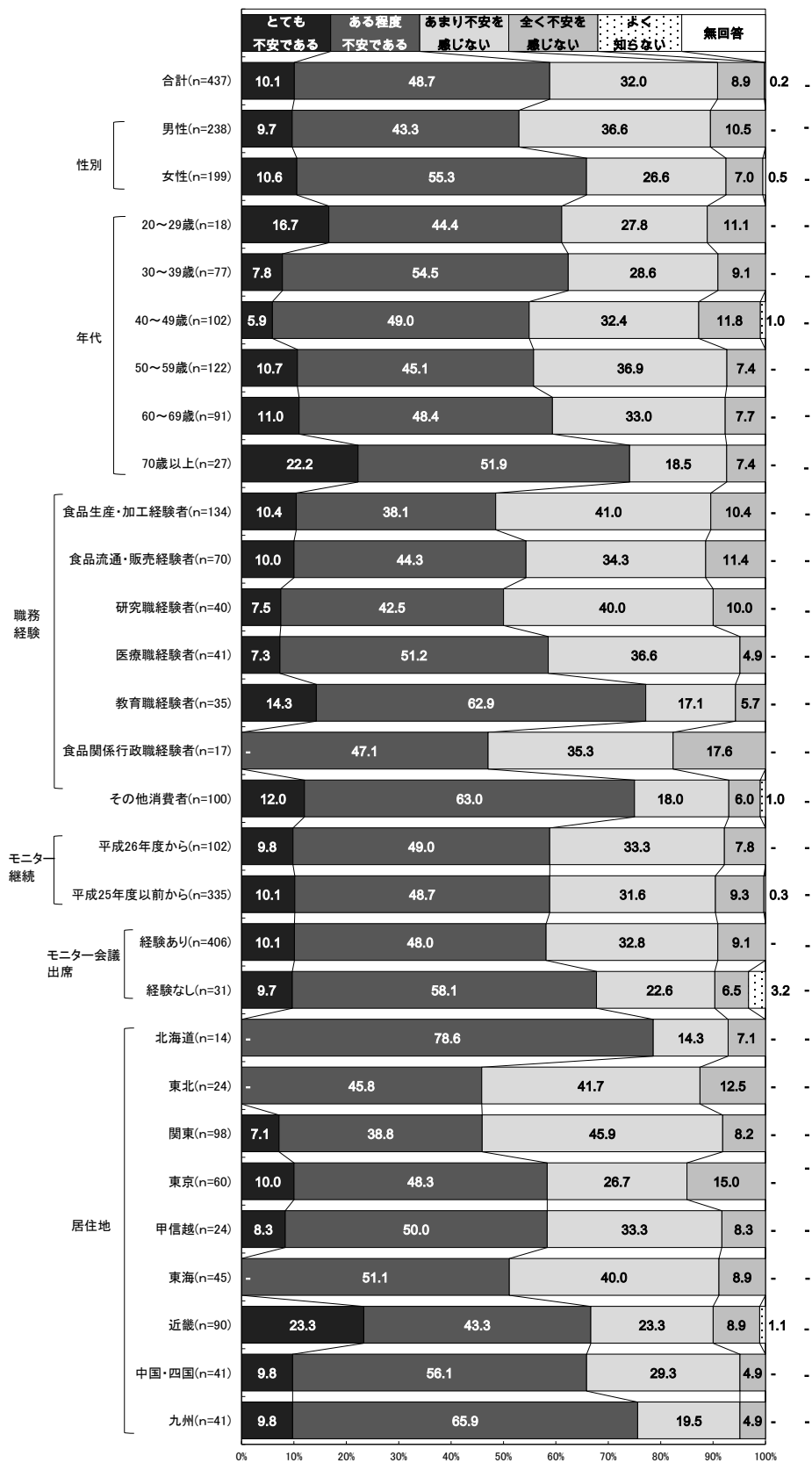


## B. 残留農薬

■ 残留農薬についての不安の程度は、性別では女性、職務経験では教育職経験者、その他消費者が高い。

- 残留農薬についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(53.0%)よりも女性(65.9%)のほうが高い。
- 年齢別では、70代がサンプル数は少ないが特に高い(74.1%)。
- 職務経験別では、教育職経験者(77.2%)、その他消費者(75.0%)で高い。
- モニター継続別では、差は見られない。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(67.8%)より出席経験のある人(58.1%)のほうが有意に低い。
- 居住地別では、北海道(78.6%)と九州(75.7%)で有意に高く、東北(45.8%)は有意に低い。「とても不安である」に限って見ると、近畿で23.3%と特に高い。

図表 2-3 B. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度<残留農薬・属性別>



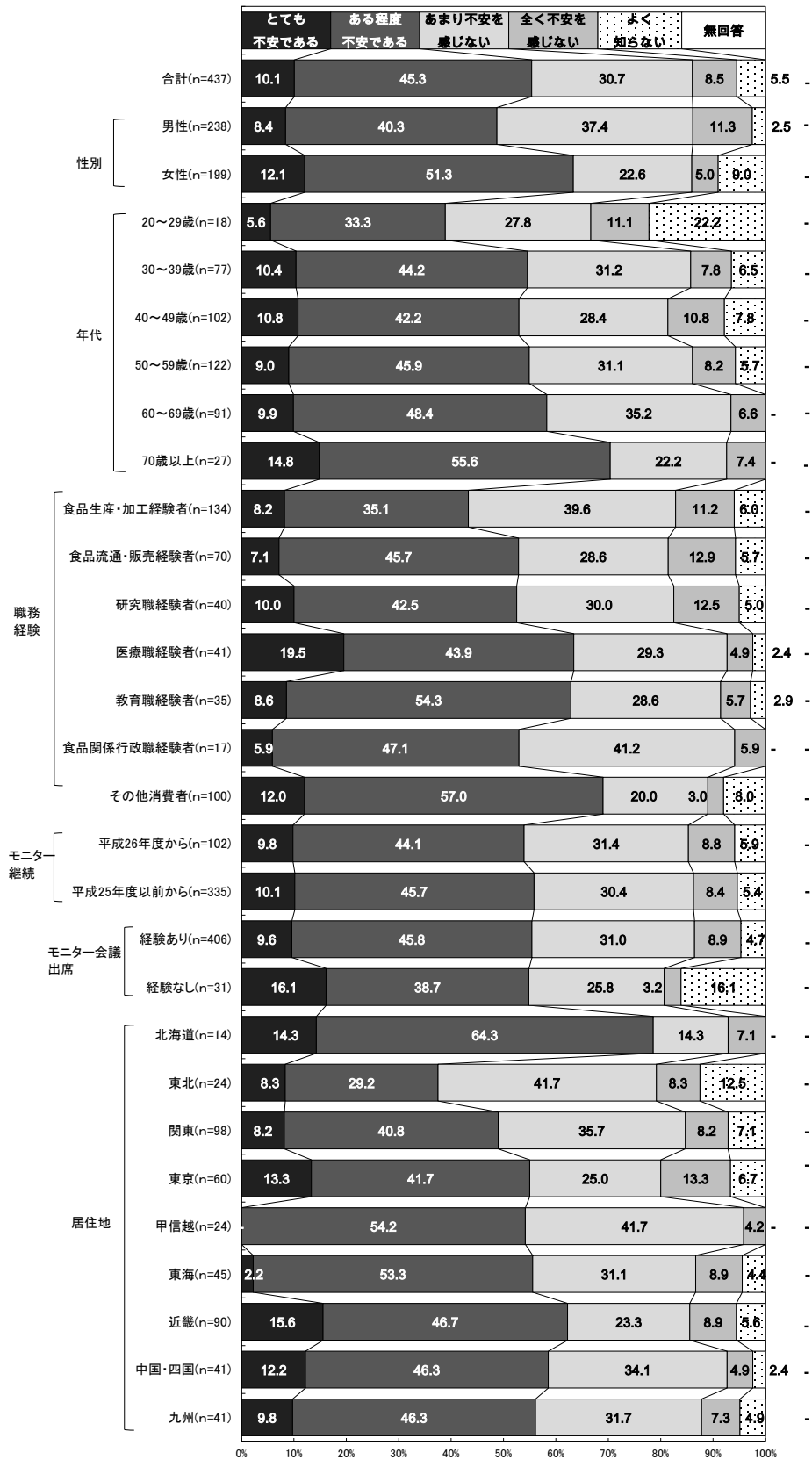
### C. 家畜用抗生物質

■ 家畜用抗生物質についての不安の程度は、性別では女性、職務経験ではその他消費者、医療職経験者、教育職経験者が高い。

- 家畜用抗生物質についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(48.7%)よりも女性(63.4%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、70代がサンプル数は少ないが特に高い(70.4%)。
- 職務経験別では、その他消費者(69.0%)、医療職経験者(63.4%)、教育職経験者(62.9%)で不安の程度が高い。
- モニター継続別では、ほとんど差は見られない。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(54.8%)のほうが出席経験のある人(55.4%)より不安の程度が有意に低い。
- 居住地別では、サンプル数は少ないが北海道(78.6%)で不安を感じる割合が高く、東北(37.5%)は低い。



図表 2-3 C. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度<家畜用抗生物質・属性別>

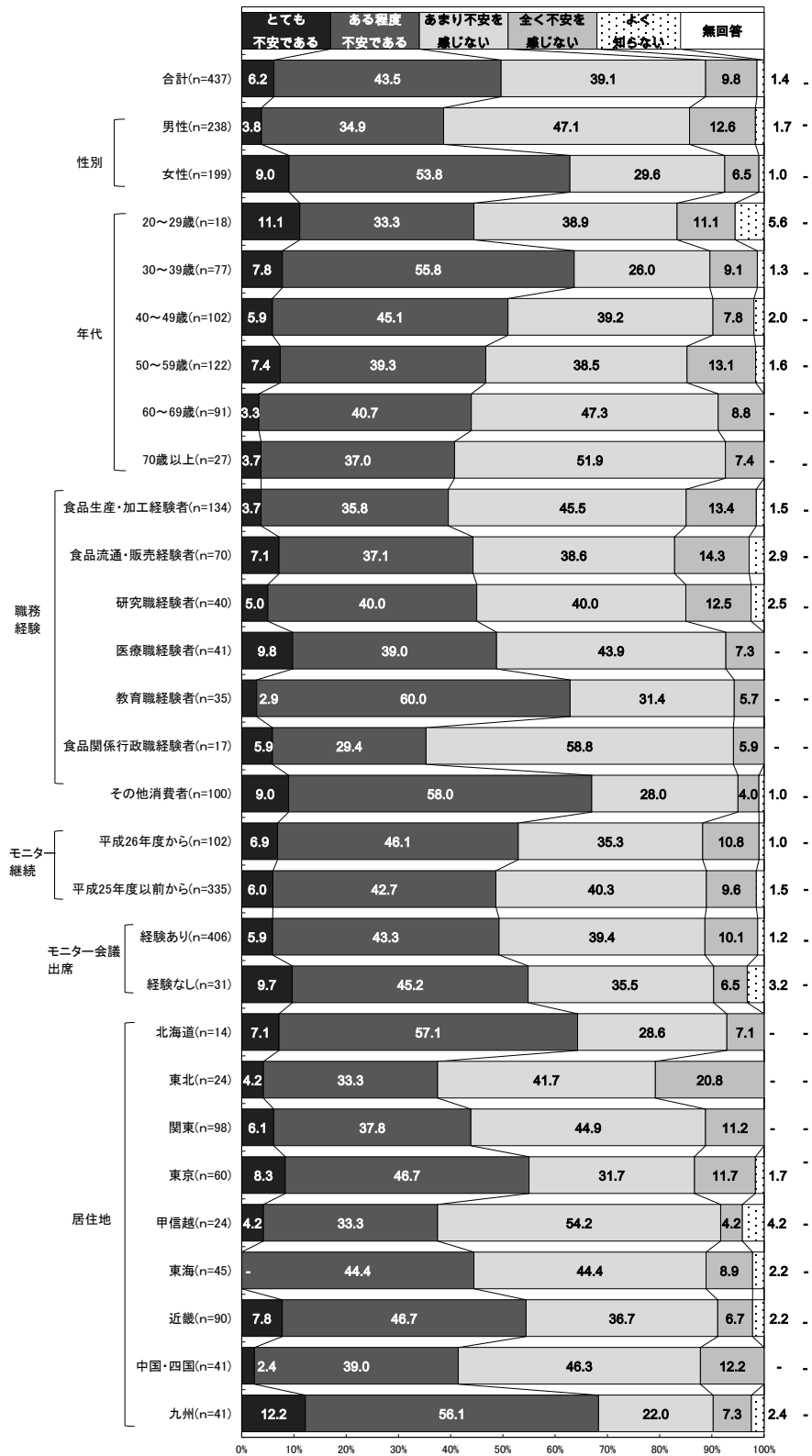


#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

■ 器具・容器包装からの溶出化学物質についての不安の程度は、性別では女性、職務経験ではその他消費者、教育職経験者が高い。

- 器具・容器包装からの溶出化学物質についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(38.7%)よりも女性(62.8%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、30代(63.6%)が高い。
- 職務経験別では、その他消費者(67.0%)、教育職経験者(62.9%)が高い。
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニター(53.0%)より25年度以前から継続しているモニター(48.7%)のほうがやや低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(54.9%)より出席経験のある人(49.2%)のほうが低い。
- 居住地別では、九州(68.3%)と北海道(64.2%)が高く、東北(37.5%)、甲信越(37.5%)は低い。

図表 2-3 D. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質・属性別>

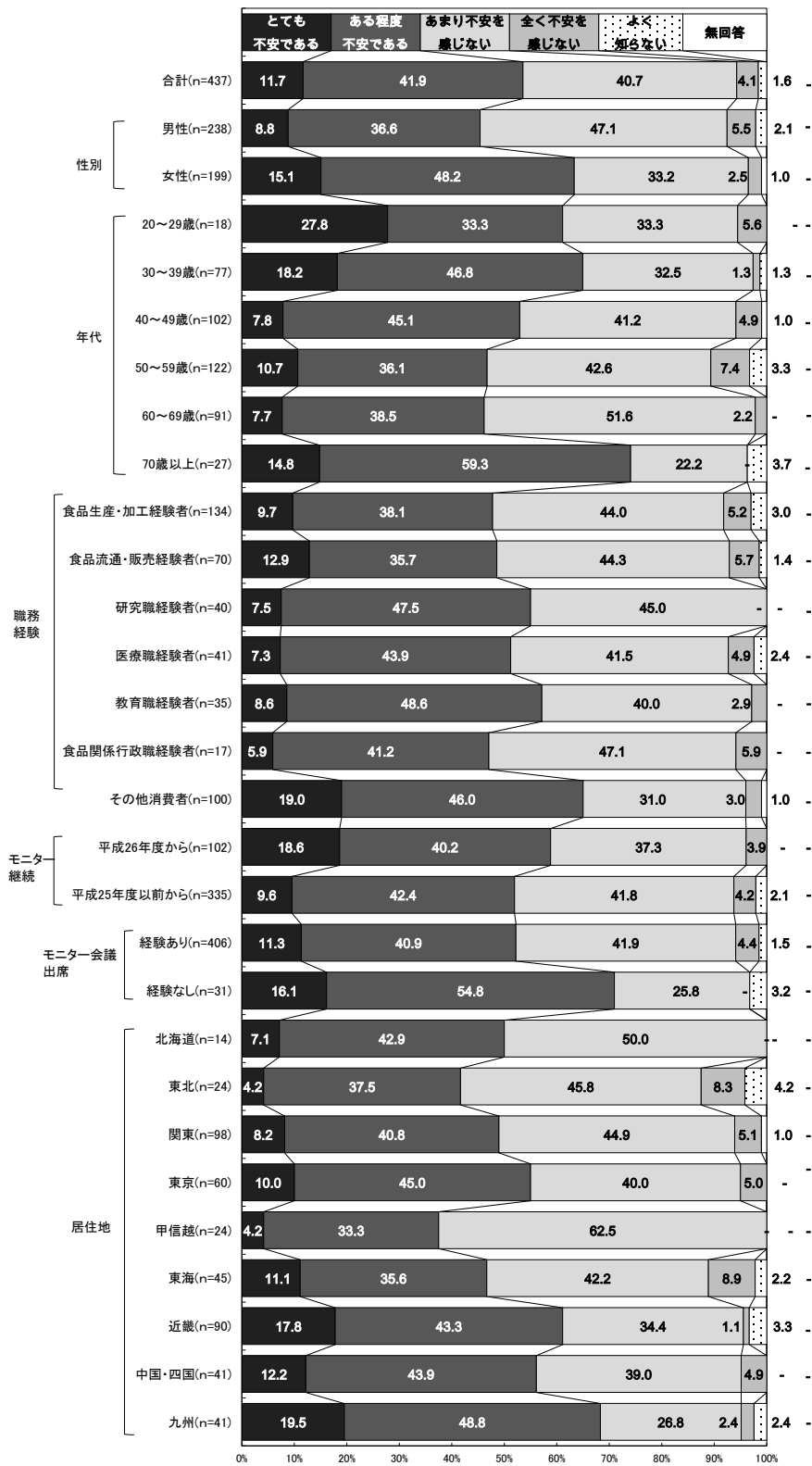


#### E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

■ 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）についての不安の程度は、性別では女性、年代では 20 代、30 代の若い層と 70 代、職務経験ではその他消費者で高い。

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(45.4%)よりも女性(63.3%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、20 代(61.1%)、30 代(65.0%)の若い層と 70 代(74.1%)で有意に高い。
- 職務経験別では、その他消費者(65.0%)、教育職経験者(55.0%)で高い。  
モニター継続別では、平成 26 年度新規のモニター(58.8%)より平成 25 年度以前から(52.0%)のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(70.9%)より出席経験のある人(52.2%)のほうが低い。
- 居住地別では、九州（68.3%）と近畿(61.1%)で高く、甲信越(37.5%)は低い。

図表 2-3 E. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）・属性別>

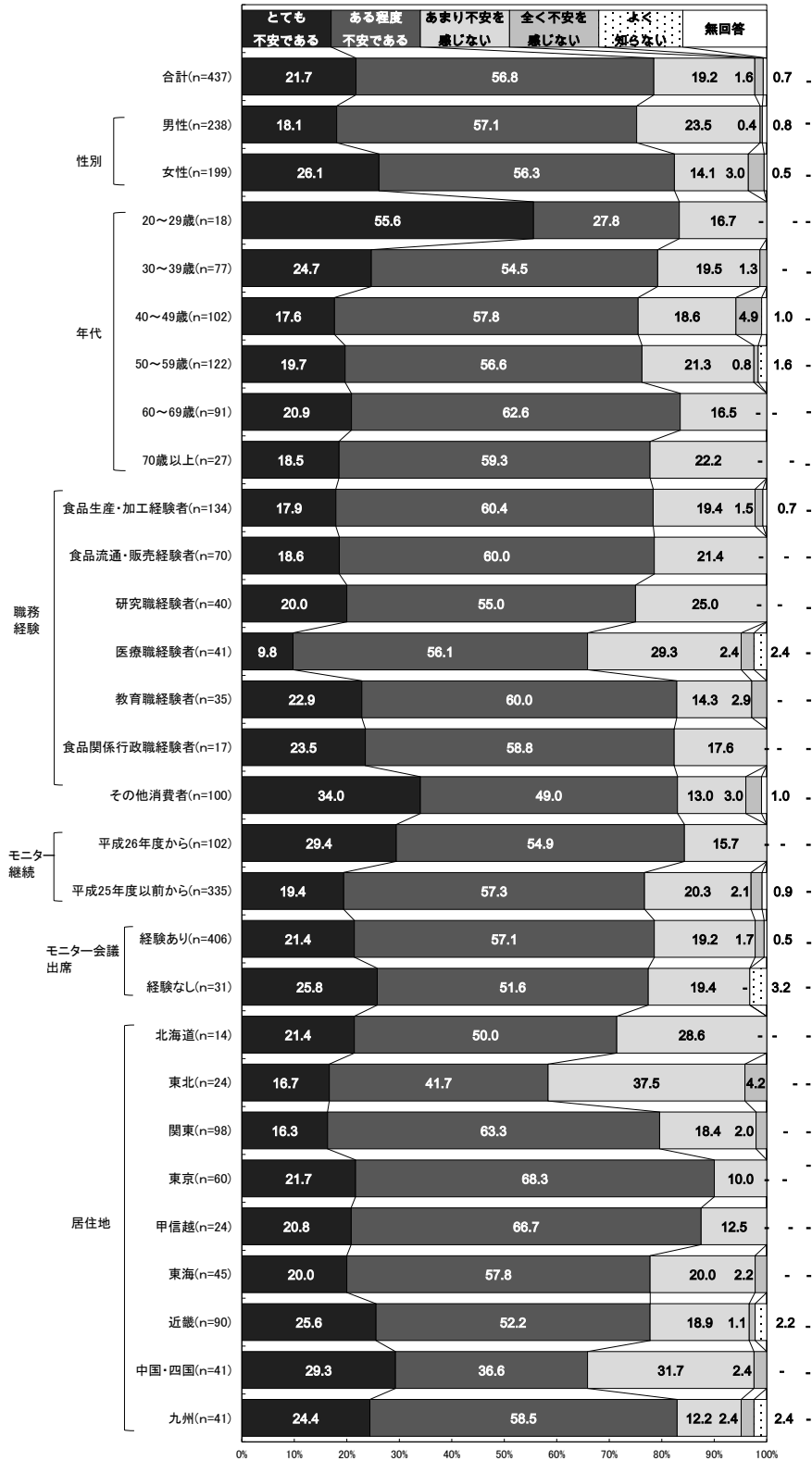


## F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

■ 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等についての不安の程度は、性別では女性、年代では 20 代と 70 代、職務経験ではその他消費者で高い。

- 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(75.2%)よりも女性(82.4%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、20 代で「とても不安である」の割合(55.6%)が高い。
- 職務経験別では、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、医療職経験者(65.9%)のみ低い。
- モニター継続別では、平成 26 年度新規のモニター(84.3%)より平成 25 年度以前から継続しているモニター(76.7%)のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(77.4%)のほうが出席経験のある人(78.5%)より低い。
- 居住地別では、東京(90.0%)で高く、東北(58.4%)、中国・四国(65.9%)は低い。

図表 2-3 F. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <有害微生物（細菌等）ウイルス等による食中毒等・属性別>



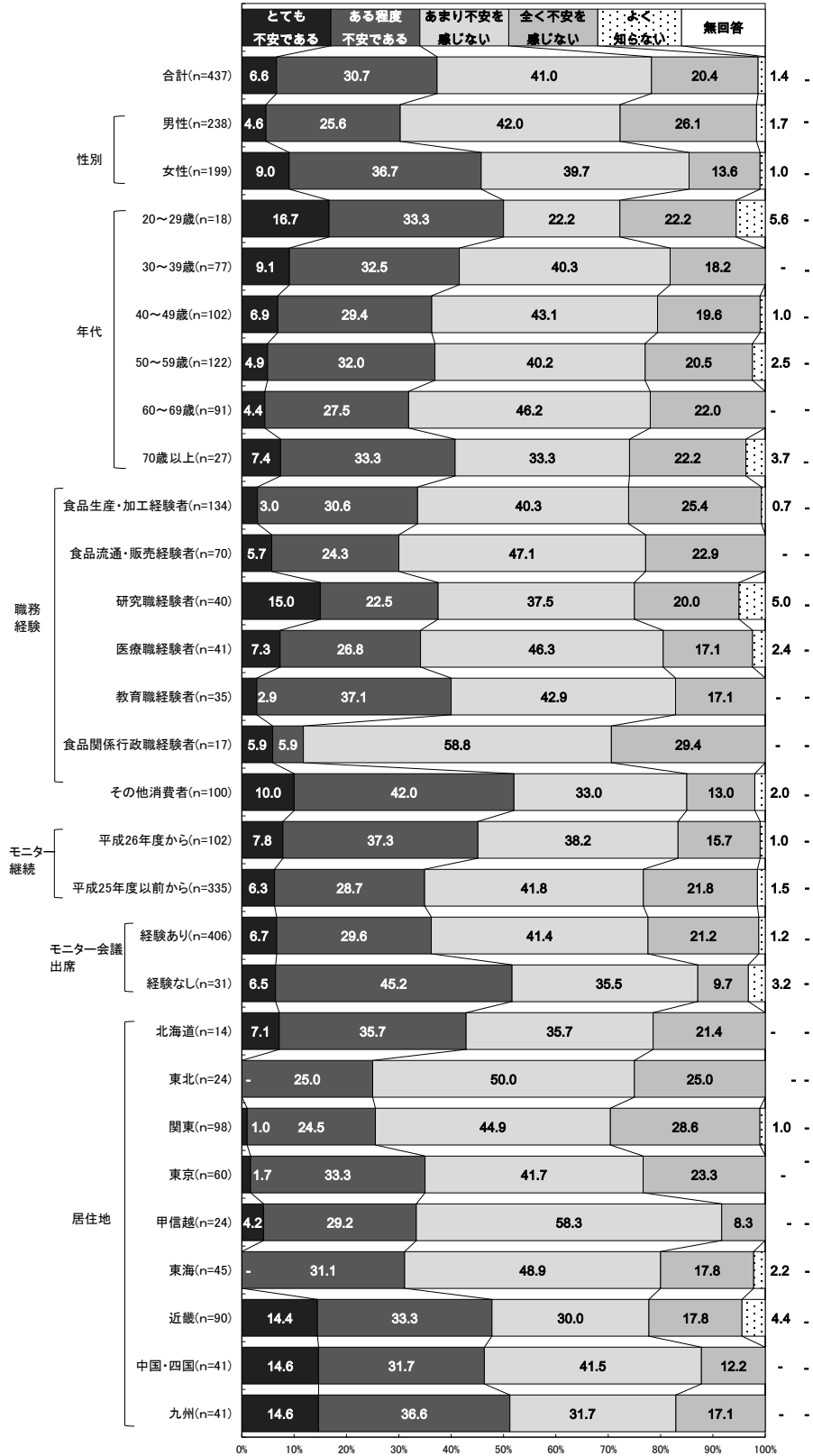
## G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

■ BSE（伝達性牛海綿状脳症）についての不安の程度は、性別では女性、職務経験では  
その他消費者で高い。

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(30.2%)よりも女性(45.7%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、サンプル数は少ないが、20代で「とても不安である」の割合(16.7%)が高い。
- 職務経験別では、その他消費者(52.0%)で高く、食品関係行政経験者(11.8%)では低い。
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニター(45.1%)より平成25年度以前から継続しているモニター(35.%)のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(51.7%)より出席経験のある人(45.1%)のほうが低い。
- 居住地別では、「とても不安である」の割合が九州(14.6%)、中国・四国(14.6%)、近畿(14.4%)で高く、東北、東海は皆無と有意な差が見られる。



図表 2-3 G. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）・属性別>

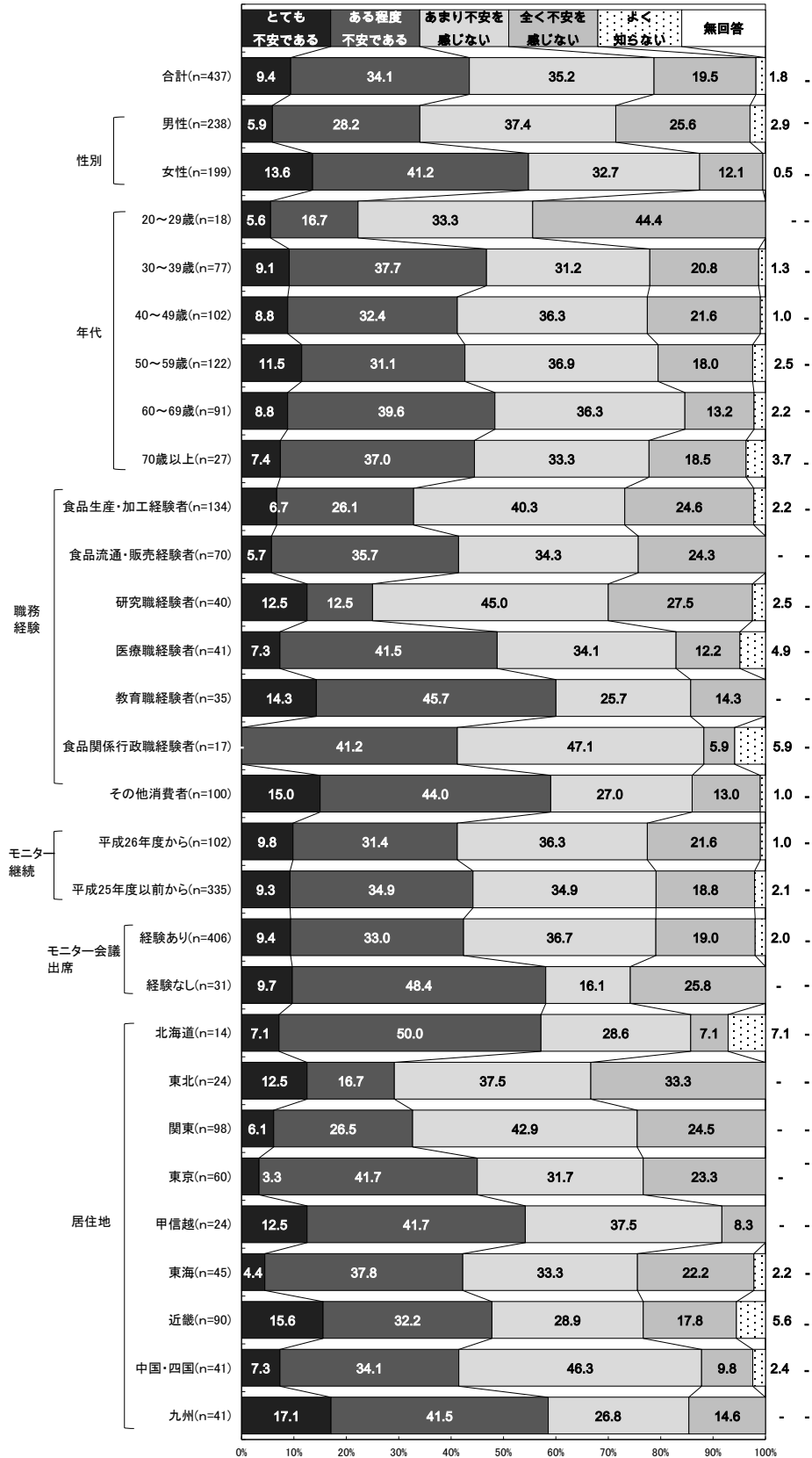


## H. 遺伝子組換え

■ 遺伝子組換えについての不安の程度は、性別では女性、職務経験では教育職経験者、その他消費者で高い。

- 遺伝子組み換えについての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(34.1%)よりも女性(54.8%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、30代(46.8%)と60代(48.4%)で高く、20代(22.3%)では低い。
- 職務経験別では、教育職経験者(60.0%)やその他消費者(59.0%)で高く、研究職経験者(25.0%)や食品生産・加工経験者(32.8%)では低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、ほとんど差がない。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(58.1%)より出席経験のある人(42.4%)のほうが低い。
- 居住地別では、九州(58.6%)、北海道(57.1%)、甲信越(54.2%)で高く、東北(29.2%)、関東(32.6%)では低いという有意な差が見られる。

図表 2-3 H. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <遺伝子組換え・属性別>

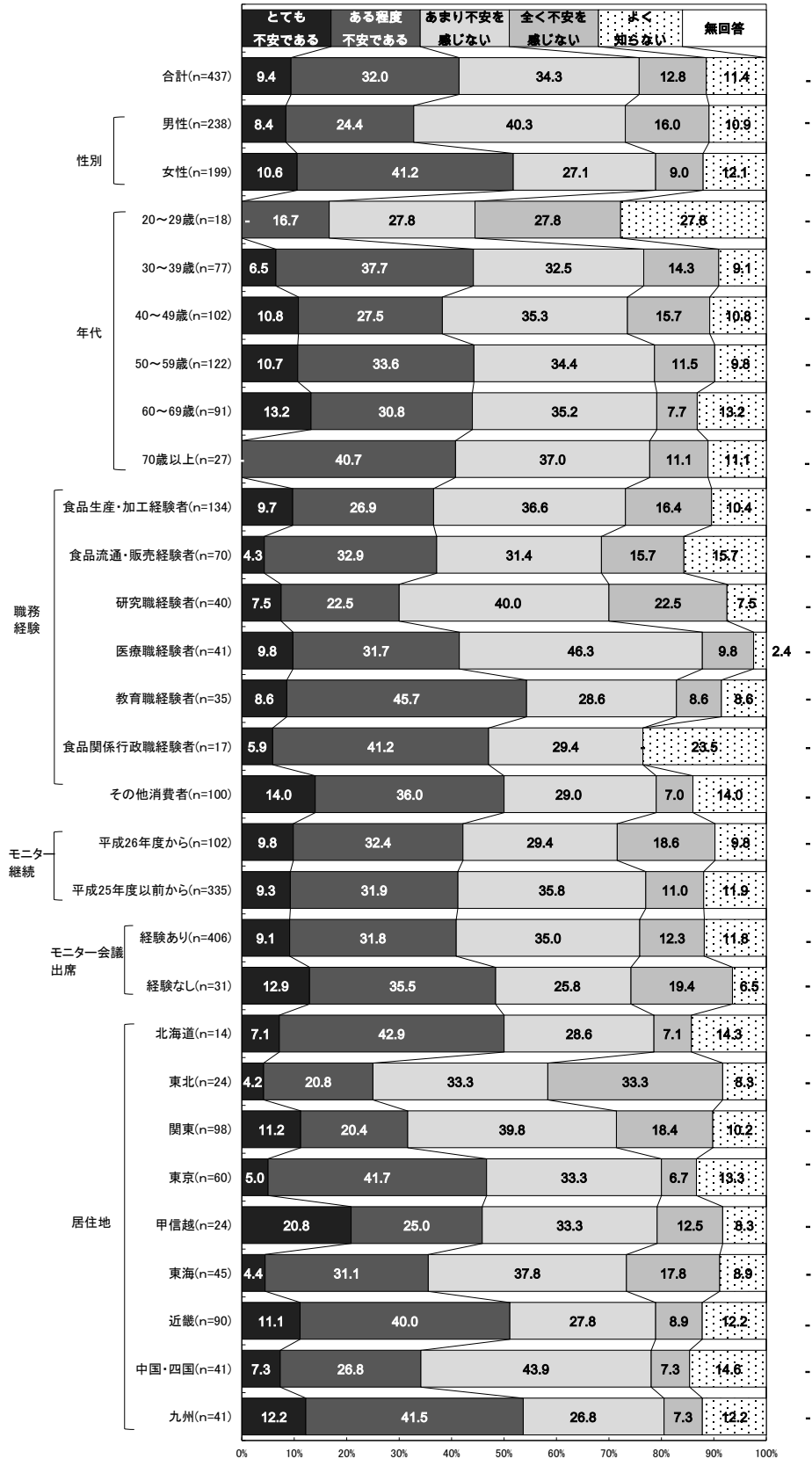


## 1. 体細胞クローン

■ 体細胞クローンについての不安の程度は、性別では女性、職務経験では教育職経験者、その他消費者で高い。

- 体細胞クローンについての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(32.8%)よりも女性(51.8%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、50代(44.3%)、60代(44.0%)、30代(44.2%)で高く、20代(16.7%)と70代(40.7%)では低い。
- 職務経験別では、教育職経験者(54.3%)、その他消費者(50.0%)で高く、研究職経験者(30.0%)では低い。
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニター(42.2%)より平成25年度以前から継続しているモニター(41.2%)のほうがやや低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(48.4%)より出席経験のある人(40.9%)のほうが低い。
- 居住地別では、九州(53.7%)、北海道(50.0%)、東京(46.7%)、甲信越(45.8%)、近畿(51.1%)で高く、東北(25.0%)で低い。

図表 2-31. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <体細胞クローン・属性別>

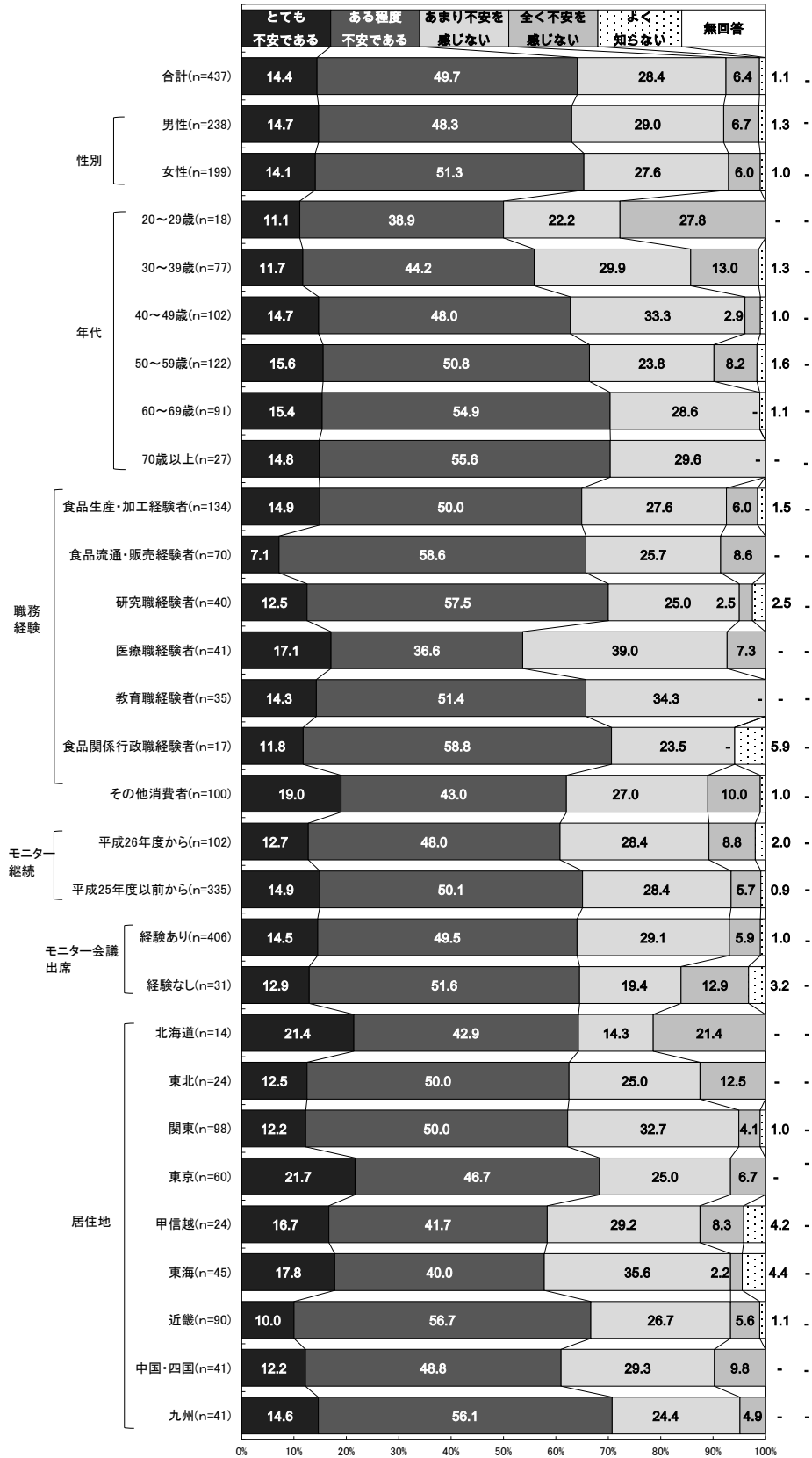


## J. いわゆる健康食品

■ いわゆる健康食品についての不安の程度は、高齢層、食品関係行政経験者、研究職経験者、食品流通・販売経験者、食品生産・加工経験者で高い。

- いわゆる健康食品についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」、「ある程度不安である」の合計は、性別ではあまり差が見られない。
- 年齢別では、年齢が高くなるほどが高くなる傾向が有意に見られる。
- 職務経験別では、食品関係行政経験者(70.6%)、研究職経験者(70.0%)、食品流通・販売経験者(65.7%)、食品生産・加工経験者(64.9%)、で高く、医療職経験者では「とても不安である」の割合は高い(17.1%)が、「ある程度不安である」を含めた割合(53.7%)はむしろ最も低い。
- モニター継続別では、平成 26 年度新規のモニター (60.7%) より 25 年度以前から継続しているモニター (65.0%) のほうが高い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、差はみられない。
- 居住地別では、九州(70.7%)、東京(68.4%)、北海道(64.3%)で高い。

図表 2-3 J. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <いわゆる健康食品・属性別>



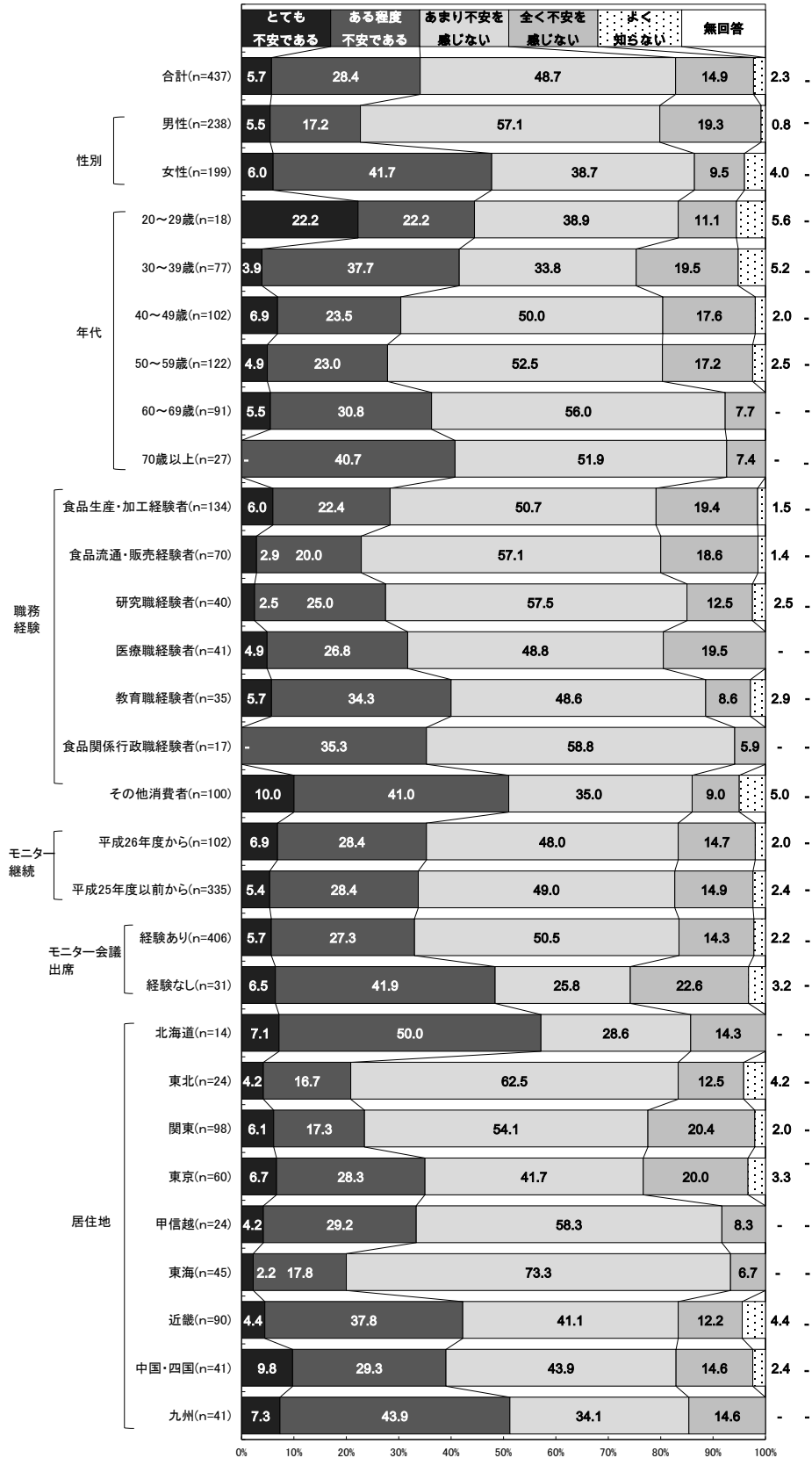
## K. 肥料・飼料等

■ 、肥料・飼料等についての不安の程度は、性別では女性、年齢別では20代、職務経験ではその他消費者で高い。

- 肥料・飼料等についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(22.7%)よりも女性(47.7%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、20代で「とても不安である」の割合(22.2%)が有意に高い。
- 職務経験別では、その他消費者(51.0%)で高い。
- モニター継続別では、あまり差がない。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(48.4%)より出席経験のある人(33.0%)のほうが低い。
- 居住地別では、北海道(57.1%)、九州(51.2%)で高く、東北(20.9%)、東海(20.0%)では低い。



図表 2-3 K. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <肥料・飼料等・属性別>

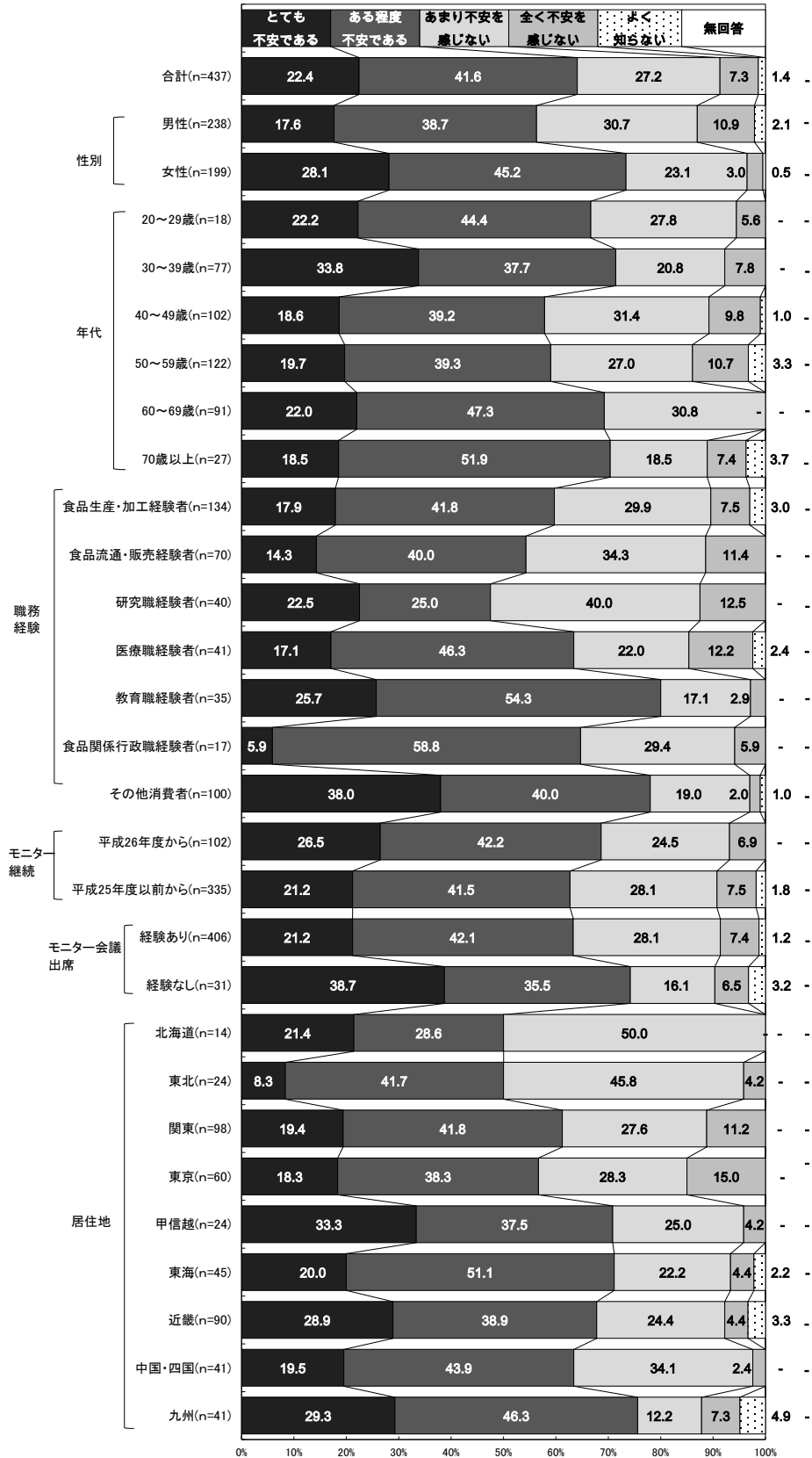


## L. 放射性物質

■ 放射性物質についての不安の程度は、性別では女性、年齢では 30 代、職務経験では教育職経験者、その他消費者で高い。

- 放射性物質についての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(56.5%)よりも女性(73.3%)のほうが有意に高い。
- 年齢別では、30 代(71.5%)で高い。
- 職務経験別では、教育職経験者(80.0%)やその他消費者(78.0%)で有意に高く、研究職経験者(47.5%)では有意に低い。
- モニター継続別では、平成 26 年度新規のモニター (68.7%) より平成 25 年度以前から継続しているモニター (62.7%) のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(74.2%)より出席経験のある人(68.7%)のほうが低い。
- 居住地別では、九州(75.6%)、甲信越(70.8%)で高く、東北(50.0%)では低い。

図表 2-3 L. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <放射性物質・属性別>

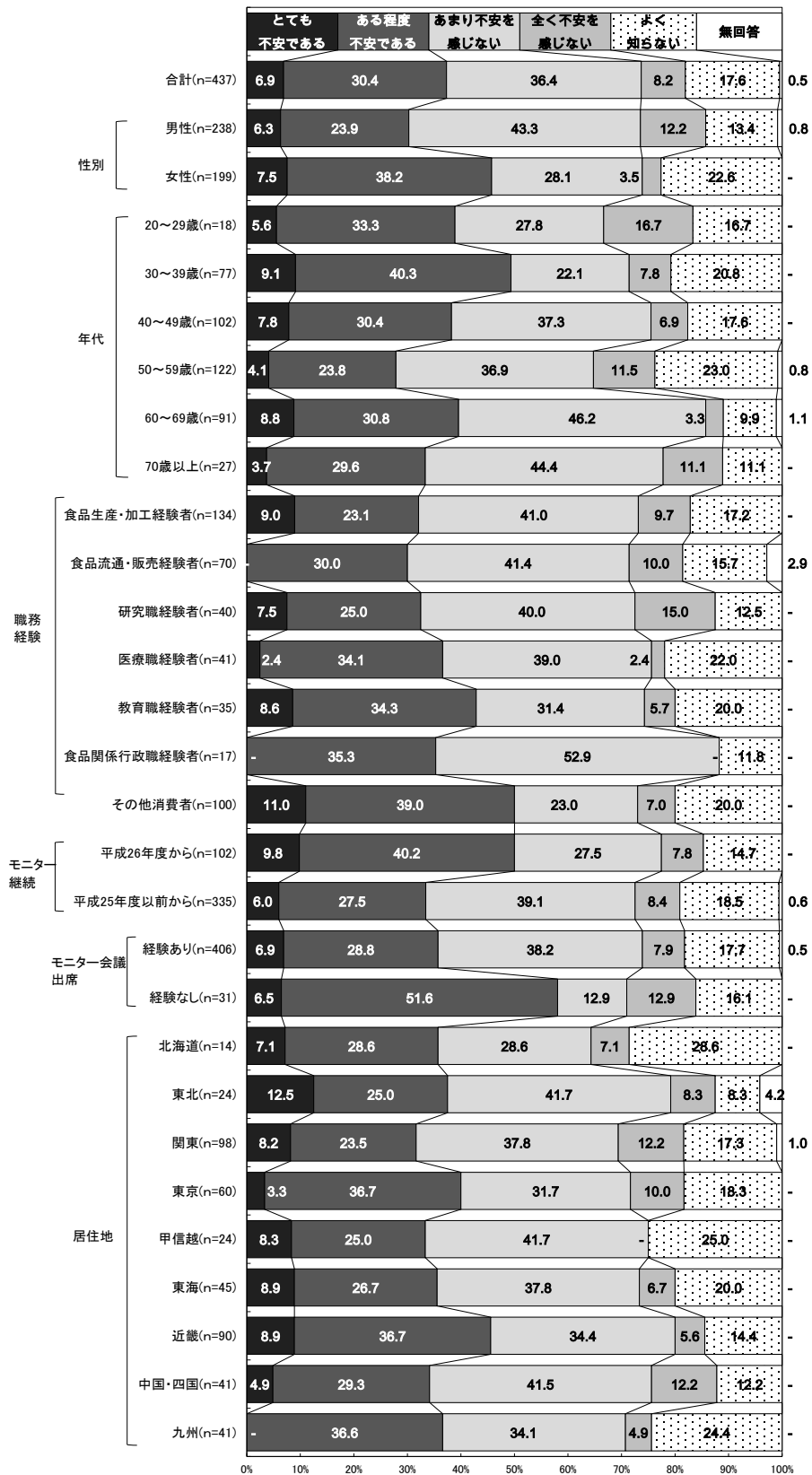


## M. アクリルアミド

- アクリルアミドについての不安の程度は、性別では女性、職務経験ではその他消費者、教育職経験者で高い。
- 今回調査から新たに加えられたハザードであり、「よく知らない」の割合が2割以上を占める属性も少なくない。

- アクリルアミドについての不安の程度を属性別に比較したところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計は、性別では男性(30.2%)よりも女性(45.7%)のほうが有意に高い。また、女性では「よく知らない」が22.6%を占める。
- 年齢別では、30代(49.4%)で高い。30代、50代では「よく知らない」が2割以上を占める。(20.8%、23.0%)
- 職務経験別では、その他消費者(50.0%)や教育職研究者(42.9%)で高く、食品流通・販売経験者(30.0%)、食品関係行政経験者(35.3%)では低い。医療職経験者(36.5%)、教育職研究者、その他消費者では「よく知らない」が2割以上を占める。(20.0%、20.0%)
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニター(50.0%)より平成25年度以前から継続しているモニター(33.5%)のほうが低い。
- 食品安全モニター会議出席経験については、出席経験のない人(58.1%)より出席経験のある人(35.7%)のほうが有意に低い。
- 居住地別では、近畿(45.6%)で高く、関東(31.7%)、中国・四国(34.2%)九州(36.6%)では低い。北海道、甲信越、東海、九州では「よく知らない」が2割以上を占める。(28.6%、25.0%、20.0%、24.4%)

図表 2-3 M. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度  
 <アクリルアミド・属性別>



### 3. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由（放射性物質以外）（問3）

- 食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「とても不安である」、「ある程度不安である」と回答した者に対し、不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」は、遺伝子組換え、体細胞クローンでは他の理由と比べて特に多い。
- 「過去に問題になった事例があるために不安」は、汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）、BSE（伝達性牛海綿状脳症）、有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等で他の理由と比べて特に多い。
- 「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」では、残留農薬、家畜用抗生物質、有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等、肥料・飼料等で多い。

- 問2で、放射性物質以外のハザードについて、食品の安全性の観点から「とても不安である」、「ある程度不安である」と回答した者に対し、食品の安全性の観点から不安を感じている理由を尋ね、ハザードごとに比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に疑問」は、「体細胞クローン」（47.0%）、「遺伝子組換え」（45.3%）、「食品添加物」（30.0%）、「器具・容器包装からの溶出化学物質」（30.0%）、「いわゆる健康食品」（28.5%）、「アクリルアミド」（22.7%）で多い。
- 「行政による規制が不十分」では、すべてのハザードで回答割合が少ないが、その中でも「いわゆる健康食品」（16.1%）が最も多い。
- 「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」では、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（37.0%）、「残留農薬」（32.7%）、「肥料・飼料等」（30.9%）で多い。
- 「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」については、すべてのハザードで回答割合が少ないが、その中でも「アクリルアミド」（13.5%）が多い。
- 「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」では、「肥料・飼料等」（14.1%）、「いわゆる健康食品」（13.2%）で特に多い。
- 「過去に問題になった事例があるために不安」では、「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」（37.6%）、「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」（32.5%）、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（25.1%）で多い。
- 「漠然とした不安」では、「アクリルアミド」（21.5%）、「体細胞クローン」（18.8%）で多い。

図表 3. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

< [ ] 内は回答者全体 (437 名) に占める割合 >

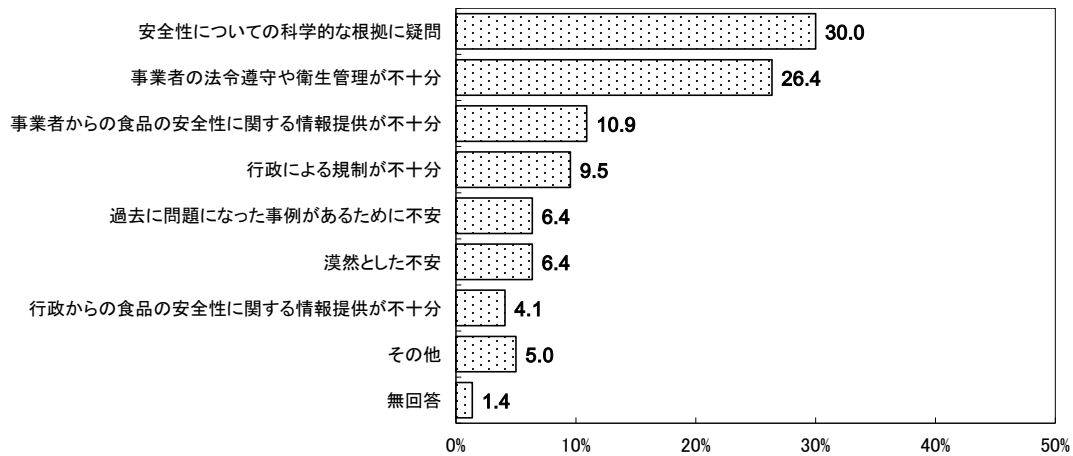
ハザード	1 位	2 位	3 位
食品添加物	安全性についての科学的な根拠に疑問 (30.0%) [15.1%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (26.4%) [13.3%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分 (10.9%) [5.5%]
残留農薬	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (32.7%) [19.2%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (17.5%) [10.3%]	過去に問題になった事例があるために不安 (13.2%) [7.8%]
家畜用抗生物質	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (28.1%) [15.6%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (19.4%) [10.8%]	漠然とした不安 (11.6%) [6.4%]
器具・容器包装からの溶出化学物質	安全性についての科学的な根拠に疑問 (30.0%) [14.9%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (15.2%) [7.6%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分 (12.0%) [5.9%]
汚染物質 (カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)	過去に問題になった事例があるために不安 (37.6%) [20.1%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (14.5%) [7.8%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (12.0%) [6.4%]
有害微生物 (細菌等)、ウイルス等による食中毒等	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (37.0%) [29.1%]	過去に問題になった事例があるために不安 (25.1%) [19.7%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (8.2%) [6.4%]
BSE (伝達性牛海綿状脳症)	過去に問題になった事例があるために不安 (32.5%) [12.1%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (16.0%) [5.9%]	行政による規制が不十分 (12.3%) [4.6%] 事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (12.3%) [4.6%]
遺伝子組換え	安全性についての科学的な根拠に疑問 (45.3%) [19.7%]	行政による規制が不十分 (13.2%) [5.7%]	漠然とした不安 (11.1%) [4.8%]
体細胞クローン	安全性についての科学的な根拠に疑問 (47.0%) [19.5%]	漠然とした不安 (18.8%) [7.8%]	行政による規制が不十分 (9.4%) [3.9%]
いわゆる健康食品	安全性についての科学的な根拠に疑問 (28.6%) [18.3%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (21.4%) [13.7%]	行政による規制が不十分 (16.1%) [10.3%]
肥料・飼料等	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分 (30.9%) [10.5%]	安全性についての科学的な根拠に疑問 (19.5%) [6.6%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分 (14.1%) [4.8%]
アクリルアミド	安全性についての科学的な根拠に疑問 (22.7%) [8.5%]	漠然とした不安 (21.5%) [8.0%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分 (13.5%) [5.0%]

## A. 食品添加物

- 食品添加物について不安を感じている理由は、「安全性についての科学的な根拠に疑問」と「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が上位2位。
- 年度別では、5年連続で「安全性についての科学的な根拠に疑問」が第1位。

- 食品添加物について不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が30.0%で最も多く、次いで、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が26.4%となっている。
- 年度別に比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が平成22年度以降毎年第1位となっている。
- 

図表 3-A. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <食品添加物> (n=220)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-A. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <食品添加物・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=220)	30.0	9.5	26.4	4.1	10.9	6.4	6.4	5.0	1.4
平成25年度調査(n=177)	36.7	9.0	22.6	4.0	6.2	7.9	7.9	2.3	3.4
平成24年度調査(n=185)	37.8	7.6	24.9	6.5	9.7	4.3	4.3	3.8	1.1
平成23年度調査(第1回)(n=193)	39.9	6.7	15.5	7.3	12.4	7.3	6.7	3.1	1.0
平成22年度調査(n=240)	33.3	7.5	20.4	6.3	9.6	7.9	4.2	10.4	0.4
平成21年度調査(n=254)	10.6	25.6	28.0	16.1	-	11.0	4.7	3.9	0.0
平成20年度調査(n=233)	11.6	26.2	27.0	18.9	-	8.2	4.7	0.9	2.6
平成19年度調査(n=295)	17.3	25.8	25.1	13.9	-	10.8	2.7	3.1	1.4
平成18年度調査(n=335)	11.0	31.3	22.7	14.6	-	10.1	3.9	2.7	3.6
平成17年度調査(n=340)	12.1	32.4	29.7	12.9	-	7.9	2.9	1.8	0.3
平成16年度調査(n=348)	15.5	33.3	23.0	13.8	-	7.2	2.9	3.2	1.1

※網掛け:各年度の第1位



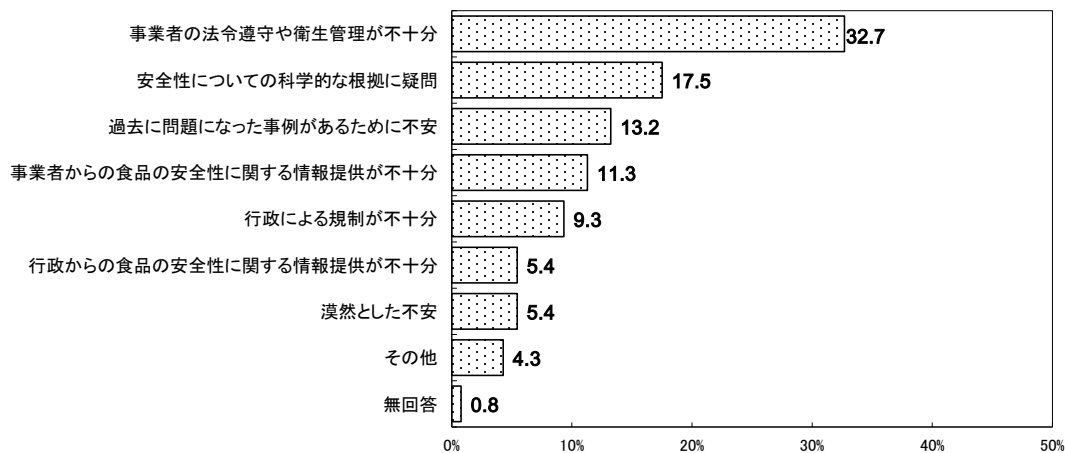
## B. 残留農薬

- 残留農薬について不安を感じている最も多い理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」。
- 年度別では、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が平成16年度以降第1位。

- 残留農薬について不安を感じている理由を尋ねると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が32.7%で最も多く、次いで「安全性についての科学的な根拠に疑問」が17.5%、「過去に問題になった事例があるために不安」が13.2%となっている。
- 年度別に比較みると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が平成16年度以降毎年第1位となっている。

図表 3-B. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<残留農薬> (n=257)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-B. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<残留農薬・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=257)	17.5	9.3	32.7	5.4	11.3	13.2	5.4	4.3	0.8
平成25年度調査(n=217)	19.4	12.4	29.5	4.1	7.8	11.5	7.4	4.6	3.2
平成24年度調査(n=218)	23.4	6.4	30.7	5.0	9.6	10.6	8.7	3.2	2.3
平成23年度調査(第1回)(n=234)	20.1	13.7	34.6	5.1	4.3	9.8	7.3	4.3	0.9
平成22年度調査(n=273)	19.0	10.6	30.4	3.3	8.4	13.2	4.8	8.4	1.8
平成21年度調査(n=297)	8.8	18.2	34.7	10.8	-	16.5	5.7	5.1	0.3
平成20年度調査(n=286)	6.3	16.4	43.7	6.6	-	17.5	4.5	2.1	2.8
平成19年度調査(n=351)	8.0	20.5	40.2	9.7	-	14.0	3.4	2.3	2.0
平成18年度調査(n=379)	5.3	21.4	39.8	9.5	-	11.3	4.7	5.0	2.9
平成17年度調査(n=405)	7.7	25.4	36.8	8.4	-	13.3	5.2	2.0	1.2
平成16年度調査(n=409)	8.6	23.7	31.8	13.0	-	14.4	4.9	2.7	1.0

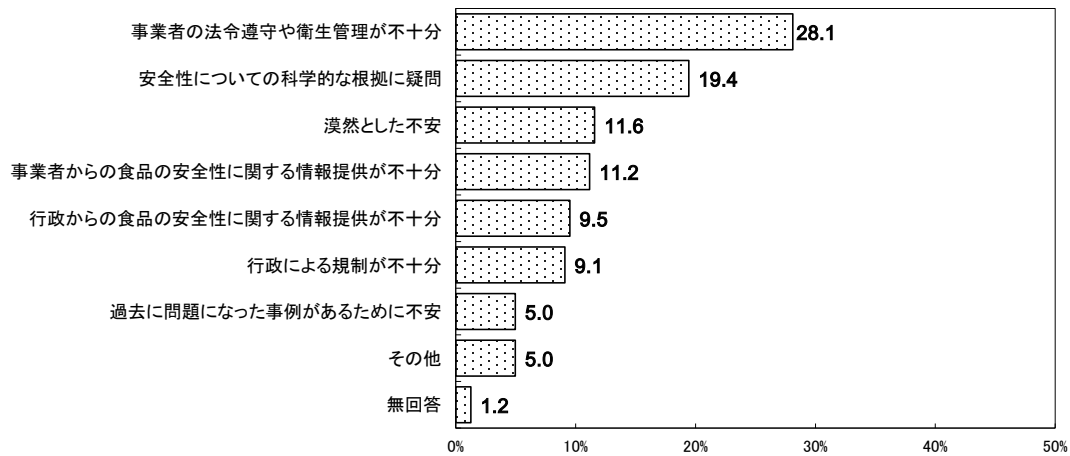
※網掛け: 各年度の第1位

### C. 家畜用抗生物質

- 家畜用抗生物質について不安を感じている最も多い理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」。
- 年度別では、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が平成16年度以降第1位。

- 家畜用抗生物質について不安を感じている理由を尋ねると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が28.1%で最も多く、次いで「安全性についての科学的な根拠に疑問」が19.4%、「漠然とした不安」が11.6%となっている。
- 年度別に比較したところ、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が平成16年度以降毎年第1位となっているが、平成24年度以降は低下傾向が見られる。

図表 3-C. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <家畜用抗生物質> (n=242)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-C. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <家畜用抗生物質・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=242)	19.4	9.1	28.1	9.5	11.2	5.0	11.6	5.0	1.2
平成25年度調査(n=210)	18.1	11.4	32.4	8.1	10.0	3.3	8.1	4.8	3.8
平成24年度調査(n=197)	21.3	6.1	35.0	7.6	12.7	5.1	8.1	3.6	0.5
平成23年度調査(第1回)(n=219)	22.8	11.4	29.7	9.6	9.1	4.1	9.6	2.7	0.9
平成22年度調査(n=252)	21.0	7.5	27.4	10.7	11.5	4.4	10.3	5.2	2.0
平成21年度調査(n=277)	14.4	12.6	35.4	19.5	-	5.4	9.0	3.2	0.4
平成20年度調査(n=261)	10.0	11.5	39.8	13.8	-	6.5	12.6	4.2	1.5
平成19年度調査(n=325)	13.2	16.3	39.7	13.5	-	6.8	7.1	1.8	1.5
平成18年度調査(n=356)	8.1	14.6	40.4	15.7	-	4.5	8.4	4.2	3.9
平成17年度調査(n=377)	10.6	14.3	44.3	18.0	-	3.4	6.6	2.4	0.3
平成16年度調査(n=381)	9.7	14.4	41.5	19.7	-	3.1	7.9	3.7	0.0

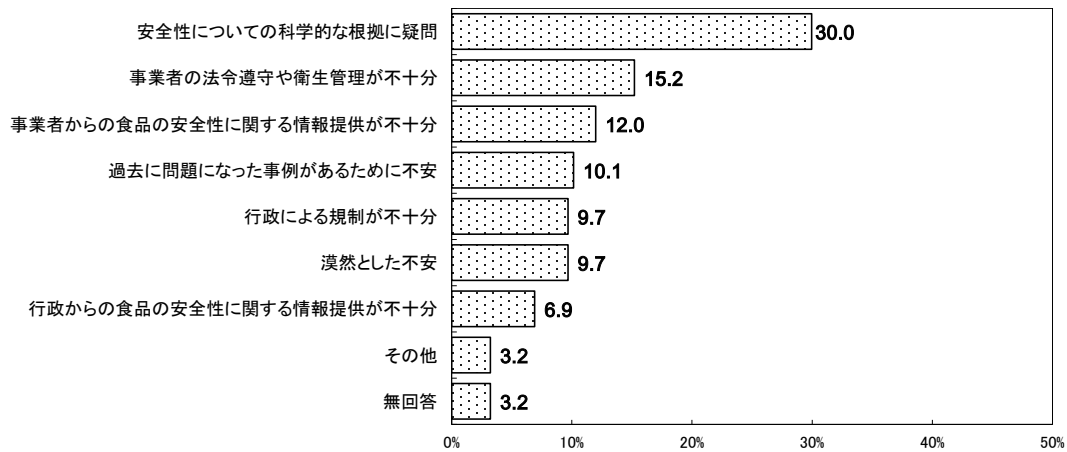
※網掛け:各年度の第1位

#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

- 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安を感じている最も多い理由は、「安全性についての科学的な根拠に疑問」。
- 年度別では、「安全性についての科学的な根拠に疑問」は、直近の5年で連続第1位。

- 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が30.0%で最も多く、突出している。
- 年度別にみると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が平成22年度以降毎年第1位となっており、最近3年間で上昇傾向が見られる。

図表 3-D. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質> (n=217)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-D. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=217)	30.0	9.7	15.2	6.9	12.0	10.1	9.7	3.2	3.2
平成25年度調査(n=179)	27.4	11.2	16.2	6.1	8.4	14.0	10.1	3.4	3.4
平成24年度調査(n=191)	23.0	11.5	18.3	6.3	14.7	9.4	12.0	4.2	0.5
平成23年度調査(第1回)(n=192)	30.2	9.4	12.0	9.9	11.5	13.0	11.5	2.1	0.5
平成22年度調査(n=240)	21.7	7.5	12.9	12.1	12.1	16.3	10.4	4.2	2.9
平成21年度調査(n=274)	10.9	27.0	18.2	10.6	-	16.1	13.1	4.0	0.0
平成20年度調査(n=256)	14.1	24.2	12.9	16.4	-	12.5	16.0	2.7	1.2

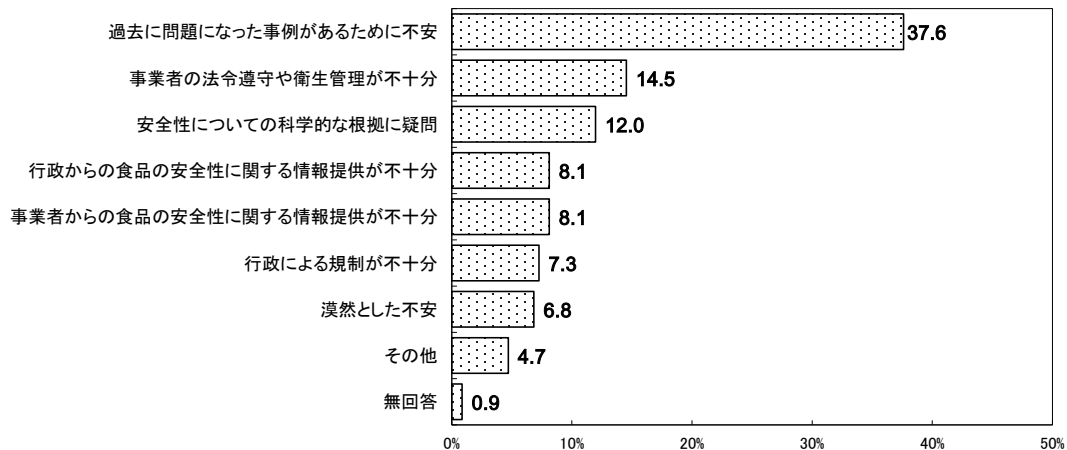
※網掛け:各年度の第1位

E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）について不安を感じている最も多い理由は、「過去に問題になった事例があるために不安」。
- 年度別では、「過去に問題になった事例があるために不安」は、平成20年度以降は7年連続で第1位。

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）について不安を感じている理由を尋ねると、「過去に問題になった事例があるために不安」が37.6%と最も多く突出している。
- 年度別に比較したところ、「過去に問題になった事例があるために不安」が平成20年度以降毎年第1位となっている。
- 

図表 3-E. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）> (n=234)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-E. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=234)	12.0	7.3	14.5	8.1	8.1	37.6	6.8	4.7	0.9
平成25年度調査(n=221)	14.9	11.8	12.2	5.9	4.5	33.9	7.7	4.1	5.0
平成24年度調査(n=222)	14.4	10.8	18.5	5.9	5.0	36.5	5.0	3.2	0.9
平成23年度調査(第1回)(n=227)	10.6	9.7	9.7	8.8	3.5	42.7	9.7	4.0	1.3
平成22年度調査(n=247)	10.5	9.3	10.9	9.3	4.5	38.1	6.9	7.3	3.2
平成21年度調査(n=317)	7.3	6.9	18.0	8.8	-	49.5	6.3	2.8	0.3
平成20年度調査(n=303)	4.0	9.9	16.5	7.3	-	51.2	6.6	3.3	1.3
平成19年度調査(n=387)	8.5	11.1	30.7	8.8	-	28.2	7.0	3.9	1.8
平成18年度調査(n=404)	7.2	10.1	20.3	15.1	-	29.5	9.7	4.7	3.5
平成17年度調査(n=423)	6.4	10.6	27.2	10.6	-	32.4	7.1	4.3	1.4
平成16年度調査(n=418)	6.2	10.0	23.4	10.3	-	35.4	10.0	3.6	1.0

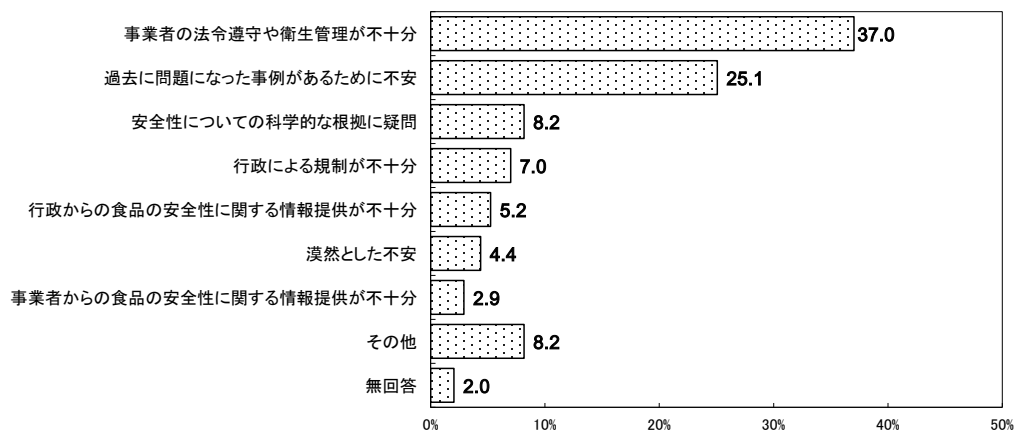
※網掛け:各年度の第1位

## F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

- 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等について不安を感じている理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」と「過去に問題になった事例があるために不安」が上位2位。
- 年度別では、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」は、平成16年度以降第1位。

- 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等について不安を感じている理由を尋ねると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が37.0%で最も多く、次いで「過去に問題になった事例があるために不安」が25.1%となっている。
- 年度別に比較したところ、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」と「過去に問題になった事例があるために不安」が上位2位である傾向は、平成16年度以降横ばいである。

図表 3-F. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等> (n=343)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-F. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=343)	8.2	7.0	37.0	5.2	2.9	25.1	4.4	8.2	2.0
平成25年度調査(n=285)	10.5	9.8	33.7	3.5	3.9	20.7	5.6	9.1	3.2
平成24年度調査(n=272)	8.1	5.9	40.4	5.5	2.9	21.7	9.6	4.4	1.5
平成23年度調査(第1回)(n=295)	5.8	8.5	35.3	6.4	2.7	20.7	9.2	8.5	3.1
平成22年度調査(n=306)	6.5	5.6	32.7	6.2	4.6	21.2	9.2	11.1	2.9
平成21年度調査(n=323)	5.3	5.0	40.9	6.8	-	27.9	9.6	3.7	0.9
平成20年度調査(n=305)	4.9	3.0	30.5	12.5	-	18.4	21.0	6.9	3.0
平成19年度調査(n=343)	5.2	6.7	31.2	11.1	-	17.8	16.3	5.8	5.8
平成18年度調査(n=373)	5.4	3.8	28.4	10.2	-	20.9	19.0	7.0	5.4
平成17年度調査(n=372)	3.2	3.2	34.4	11.8	-	21.0	19.9	5.1	1.3
平成16年度調査(n=369)	4.6	3.3	35.2	13.6	-	18.7	17.9	5.4	1.4

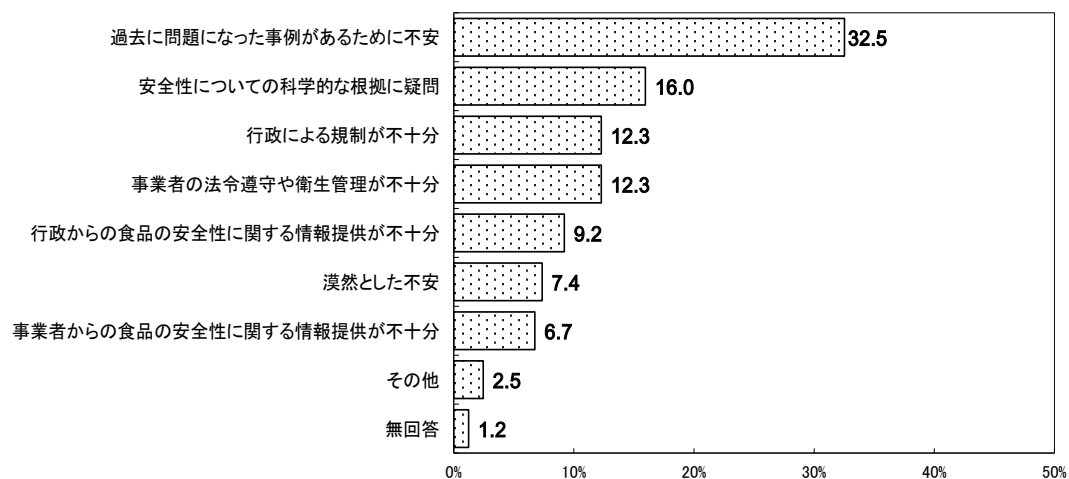
※網掛け:各年度の第1位

## G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）について不安を感じている最も多い理由は、「過去に問題になった事例があるために不安」。
- 年度別では、「過去に問題になった事例があるために不安」は、平成16年度以降第1位。

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）について不安を感じている理由を尋ねると、「過去に問題になった事例があるために不安」が32.5%で最も多く、2位以下を大きく離している。
- 年度別に比較したところ、「過去に問題になった事例があるために不安」が平成16年度以降毎年第1位となっている。

図表 3-G. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）> (n=163)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-G. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=163)	16.0	12.3	12.3	9.2	6.7	32.5	7.4	2.5	1.2
平成25年度調査(n=140)	17.9	17.1	11.4	9.3	2.1	28.6	5.7	2.1	5.7
平成24年度調査(n=272)	15.1	13.9	11.4	6.6	3.6	39.8	5.4	3.0	1.2
平成23年度調査(第1回)(n=169)	10.7	8.3	11.8	9.5	4.7	45.0	6.5	1.8	1.8
平成22年度調査(n=178)	11.2	11.8	12.4	11.8	3.4	38.2	7.3	2.2	1.7
平成21年度調査(n=251)	20.3	4.8	18.7	5.2	-	39.0	8.0	3.6	0.4
平成20年度調査(n=253)	13.4	7.5	17.4	7.1	-	43.5	5.9	3.6	1.6
平成19年度調査(n=282)	15.6	5.0	22.3	6.0	-	40.4	5.7	2.1	2.8
平成18年度調査(n=346)	11.8	8.1	26.9	8.7	-	31.8	5.2	4.3	3.2
平成17年度調査(n=353)	18.1	7.9	17.0	11.3	-	32.0	6.5	5.7	1.4
平成16年度調査(n=340)	11.8	5.3	21.8	14.7	-	31.2	10.3	3.8	1.2

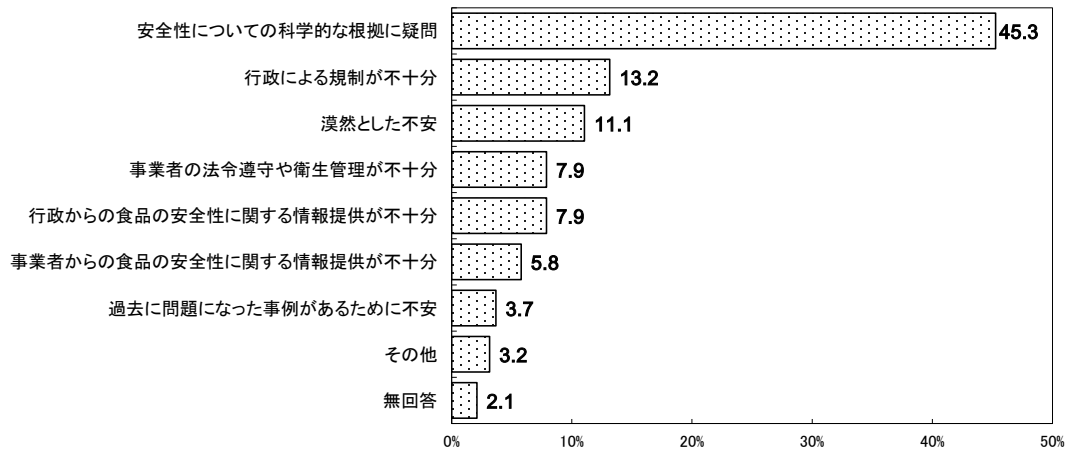
※網掛け:各年度の第1位

## H. 遺伝子組換え

- 遺伝子組換えについて不安を感じている最も多い理由は「安全性についての科学的な根拠に疑問」が他の理由と比べて突出している。
- 年度では、「安全性についての科学的な根拠に疑問」は、平成16年度以降第1位。

- 遺伝子組換えについて不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が45.3%で最も多く、2位以下を大きく離している。
- 年度別にみると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が平成16年度以降毎年第1位となっている。

図表 3-H. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <遺伝子組換え> (n=190)



※回答割合が多いものに並び替え。

図表 3-H. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <遺伝子組換え・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=190)	45.3	13.2	7.9	7.9	5.8	3.7	11.1	3.2	2.1
平成25年度調査(n=170)	51.2	8.2	10.6	7.1	2.4	4.1	7.6	4.1	4.7
平成24年度調査(n=170)	49.4	12.4	8.2	8.8	2.4	2.4	11.8	2.4	2.4
平成23年度調査(第1回)(n=181)	55.2	3.9	3.3	8.3	6.6	3.3	13.3	5.0	1.1
平成22年度調査(n=189)	48.7	5.3	4.2	12.7	5.3	2.1	13.8	5.3	2.6
平成21年度調査(n=262)	49.2	12.2	4.2	19.1	-	1.1	9.2	5.0	0.0
平成20年度調査(n=237)	45.6	12.2	3.4	23.2	-	1.3	6.3	6.3	1.7
平成19年度調査(n=269)	46.5	10.8	3.7	17.1	-	1.9	8.9	8.9	2.2
平成18年度調査(n=321)	40.5	14.0	5.3	18.1	-	2.2	8.1	8.1	3.7
平成17年度調査(n=361)	44.0	11.6	8.9	17.5	-	1.4	8.0	7.5	1.1
平成16年度調査(n=341)	47.2	12.3	4.1	14.4	-	2.3	10.9	7.9	0.9

※網掛け:各年度の第1位

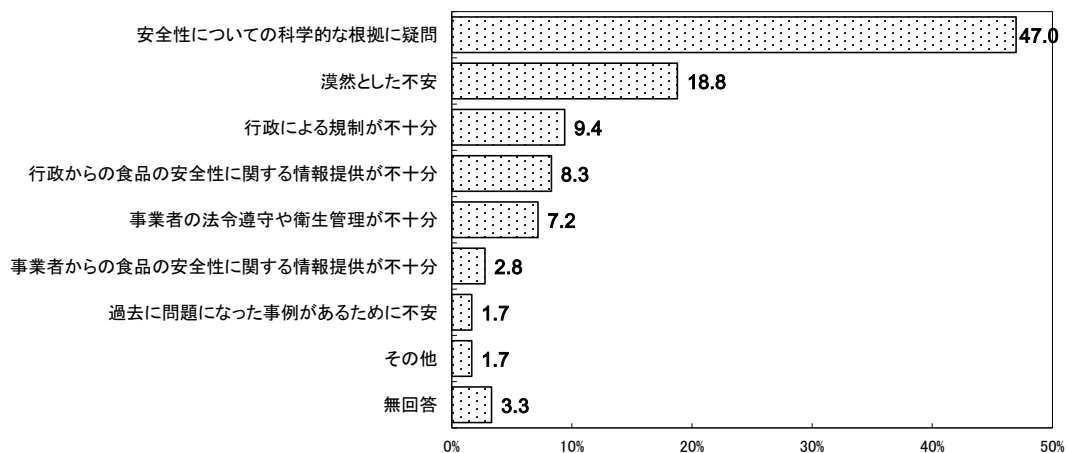
## I. 体細胞クローン

- 体細胞クローンについて不安を感じている最も多い理由は、「安全性についての科学的な根拠に疑問」。
- 年度別では、「安全性についての科学的な根拠に疑問」は、平成20年度以降第1位。

- 体細胞クローンについて不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が47.0%で最も多く、2位以下を大きく離している。
- 年度別に比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が平成20年度以降毎年第1位となっている。

図表 3-I. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<体細胞クローン> (n=181)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-I. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<体細胞クローン・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=181)	47.0	9.4	7.2	8.3	2.8	1.7	18.8	1.7	3.3
平成25年度調査(n=169)	52.7	7.7	5.3	5.3	0.6	3.0	17.2	4.7	3.6
平成24年度調査(n=177)	49.7	8.5	3.4	12.4	4.5	2.8	15.3	1.7	1.7
平成23年度調査(第1回)(n=192)	51.6	3.1	2.1	10.9	3.1	2.1	21.4	3.6	2.1
平成22年度調査(n=196)	52.0	4.1	3.1	10.2	2.6	1.5	19.4	5.1	2.0
平成21年度調査(n=252)	52.4	6.3	3.2	14.3	-	2.4	15.1	4.4	2.0
平成20年度調査(n=240)	40.0	5.8	2.1	22.1	-	2.1	23.8	2.9	1.3

※網掛け:各年度の第1位



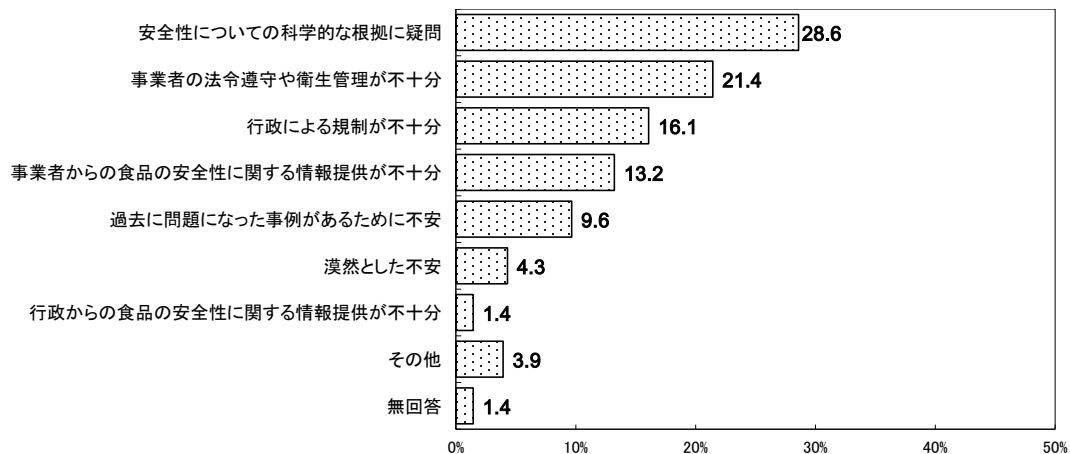
## J. いわゆる健康食品

- いわゆる健康食品についての不安を感じている最も多い理由は、「安全性についての科学的な根拠に疑問」。
- 年度別では、「安全性についての科学的な根拠に疑問」のほか、「行政による規制が不十分」第1位となる年がみられる。

- いわゆる健康食品について不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が28.6%で最も多く、次いで、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が21.4%、「行政による規制が不十分」が16.1%となっている。年度別に比較したところ、長期的には「安全性についての科学的な根拠に疑問」と「行政による規制が不十分」が拮抗している。なお、今回調査で初めて「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が第2位となり、「行政による規制が不十分」は第3位に低下している。

図表 3-J. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<いわゆる健康食品> (n=280)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-J. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<いわゆる健康食品・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=280)	28.6	16.1	21.4	1.4	13.2	9.6	4.3	3.9	1.4
平成25年度調査(n=221)	19.5	21.3	18.6	3.6	16.3	7.2	4.5	5.4	3.6
平成24年度調査(n=191)	22.5	20.9	17.8	4.2	13.1	10.5	2.1	6.8	2.1
平成23年度調査(第1回)(n=213)	27.2	16.0	14.6	1.4	15.5	10.8	5.6	4.2	4.7
平成22年度調査(n=226)	30.1	14.2	13.7	5.3	16.4	6.2	6.6	3.1	4.4
平成21年度調査(n=251)	25.6	28.4	18.0	10.4	-	10.8	2.8	3.2	0.8
平成20年度調査(n=214)	28.5	28.0	18.7	7.9	-	9.8	1.4	4.2	1.4
平成19年度調査(n=275)	29.5	30.2	14.2	9.5	-	10.5	1.5	2.2	2.5
平成18年度調査(n=303)	27.7	27.1	17.2	7.3	-	9.2	2.0	5.6	4.0
平成17年度調査(n=291)	29.2	28.2	18.9	7.2	-	8.9	3.1	4.5	0.0
平成16年度調査(n=296)	19.3	38.5	14.2	7.1	-	12.5	4.4	3.4	0.7

※網掛け:各年度の第1位

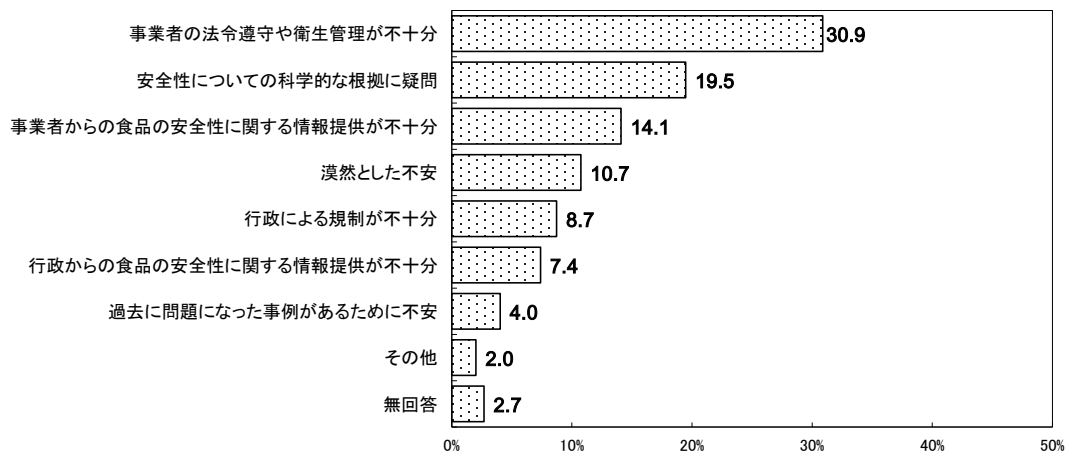
## K. 肥料・飼料等

- 肥料・飼料等について不安を感じている最も多い理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」。
- 年度別では、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」は、平成22年度以降毎年第1位。

- 肥料・飼料等について不安を感じている理由を尋ねると、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が30.9%で最も多く、次いで、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が19.5%、「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」が14.1%となっている。
- 年度別に比較したところ、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分」が最も多く、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が続いているという傾向は、平成22年度以降変動していない。

図表 3-K. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

<肥料・飼料等> (n=149)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-K. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由<肥料・飼料等・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=149)	19.5	8.7	30.9	7.4	14.1	4.0	10.7		2.7
平成25年度調査(n=145)	20.7	13.1	30.3	4.8	8.3	6.9	7.6	1.4	6.9
平成24年度調査(n=135)	16.3	11.1	34.8	5.9	13.3	7.4	7.4	3.0	0.7
平成23年度調査(第1回)(n=215)	14.9	14.4	21.4	5.1	7.0	9.3	14.9	5.1	7.9
平成22年度調査(n=158)	18.4	13.3	26.6	6.3	15.8	5.7	8.9	1.9	3.2

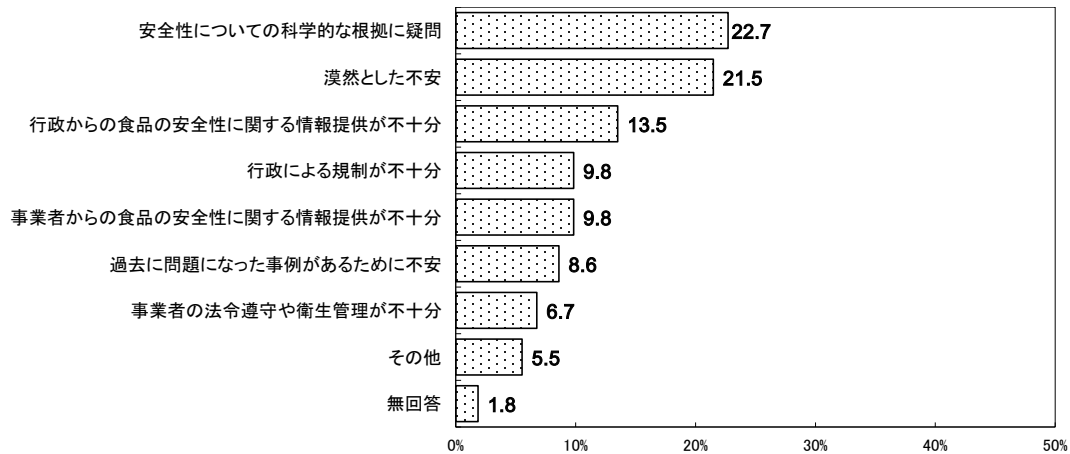
※網掛け:各年度の第1位

## M. アクリルアミド

■ アクリルアミドについて不安を感じている理由は、「安全性についての科学的な根拠に疑問」と「漠然とした不安」が上位2位。

- アクリルアミドについて不安を感じている理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に疑問」が22.7%で最も多く、次いで、「漠然とした不安」が21.5%となっている。

図表 3-M. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由  
 <アクリルアミド> (n=163)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 3-M. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由<アクリルアミド・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答
今回調査(n=163)	22.7	9.8	6.7	13.5	9.8	8.6	21.5	5.5	1.8

※網掛け:各年度の第1位

※本項目は今回調査から追加

その他（不安を感じている理由）

- A. 食品添加物（回答者数 10 人 うち「とても不安である」が 1 人）  
現在予想されていない被害が発症する恐れがあるなどの回答があった。
- B. 残留農薬（回答者数 10 人 うち「とても不安である」が 1 人）  
輸入品の監視体制、信頼性に不安などの回答があった。
- C. 家畜用抗生物質（回答者数 12 人 うち「とても不安である」が 2 人）  
輸入畜産物に関する安全性の検証がされているのか確証が持てないなどの回答があった。
- D. 器具・容器包装からの溶出化学物質（回答者数 7 人）  
製造上生じたり残存しうる有害物質を十分理解できていない、溶出試験方法への不安、輸入加工食品の包装素材の安全性に不安などの回答があった。
- E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（回答者数 11 人 うち「とても不安である」が 3 人）  
他国との規制値の差、おいしい米ほどカドミウムが多く国際規格を超えるものがある、中国など工業・商業の急速な発達による汚染・対策不備などの回答があった。
- F. 有害微生物（細菌）、ウイルス等による食中毒等（回答者数 26 人 うち「とても不安である」が 7 人）  
自己防衛・対策・予防に限界がある、他のハザードに比べ発生・被害が出る確率が高いなどの回答があった。
- G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）（回答者数 4 人 うち「とても不安である」が 1 人）  
未だ解明されていない点においていつかまた大きな問題になるのではないか、畜産農家の世代交代に伴い危険認識が低下していないか懸念されるなどの回答があった。
- H. 遺伝子組換え（回答者数 6 人 うち「とても不安である」が 2 人）  
生態系に対する影響・食品として食べた場合の影響が未知数、自然界の生物に対する予測不能の影響があるからなどの回答があった。
- I. 体細胞クローン（回答者数 3 人）  
動物食品は健康な動物由来のものであるべき、食品にとっては新しい分野であるため、安全性に関わる情報が少なく、規制の状況も良くわからないためなどの回答があった。

**J. いわゆる健康食品** (回答者数9人 うち「とても不安である」が1人)

定義が曖昧、安全性と効果の現れが分からない、一定の物質を大量に摂取することによる健康被害の危険性が周知されていないなどの回答があった。

**K. 肥料・飼料等** (回答者数3人)

有機肥料に不安などの回答があった。

**L. アクリルアミド** (回答者数8人 うち「とても不安である」が3人)

あまりにありふれ他のハザードのように低減化できているか不明、審議中だから、日々の調理の積み重ねによる過剰摂取を懸念するためなどの回答があった。

#### 4. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（放射性物質以外）（問4）

- 食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」と回答した人に対し、食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて不安を感じていない理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に納得」は、食品添加物、遺伝子組換え、アクリルアミドが多い。特に、食品添加物、遺伝子組換えは、他の理由と比べて特に多い。
- 「行政による規制が十分」は、残留農薬、家畜用抗生物質、器具・容器包装からの溶出化学物質、汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）、BSE（伝達性牛海綿状脳症）、肥料・飼料等が多い。特に、汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）、BSE（伝達性牛海綿状脳症）は、他の理由と比べて特に多い。
- 「事業者の法令遵守や衛生管理が十分」では、有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等が多い。
- 「漠然とした安心」では、体細胞クローン、いわゆる健康食品が多い。

- 問2で、食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」と回答した者に対し、食品の安全性の観点から不安を感じていない理由をハザードごとに比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に納得」は、「食品添加物」（59.4%）、「遺伝子組換え」（40.6%）、「アクリルアミド」（28.7%）が他の理由と比べて特に多い。
- 「行政による規制が十分」では、「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」（45.9%）、「残留農薬」（41.3%）、「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」（41.0%）、「家畜用抗生物質」（35.7%）、「器具・容器包装からの溶出化学物質」（27.6%）、「肥料・飼料等」（31.7%）で他の理由と比べて特に多い。
- 「事業者の法令遵守や衛生管理が十分」では、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（27.5%）で最も多い。
- 「行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分」では、すべてのハザードで少ないが、その中でも「アクリルアミド」（11.3%）が多い。
- 「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分」は、すべてのハザードで少ない。
- 「過去に問題になった事例がないので安心」は、すべてのハザードで少ないが、その中でも「体細胞クローン」（15.5%）が多い。
- 「漠然とした安心」では、「体細胞クローン」（23.8%）、「アクリルアミド」（23.1%）、「いわゆる健康食品」（23.0%）が多い。

図表 4. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

< [ ] 内は回答者全体（437名）に占める割合 >

ハザード	1位	2位	3位
食品添加物	安全性についての科学的な根拠に納得 (59.4%) [29.5%]	行政による規制が十分 (20.3%) [10.1%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分 (4.1%) [2.1%]
残留農薬	行政による規制が十分 (41.3%) [16.9%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (32.4%) [13.3%]	事業者の法令遵守や衛生管理が十分 (10.6%) [4.3%]
家畜用抗生物質	行政による規制が十分 (35.7%) [14.0%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (26.9%) [10.5%]	漠然とした安心 (12.3%) [4.8%]
器具・容器包装からの溶出化学物質	行政による規制が十分 (27.6%) [13.5%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (24.8%) [12.1%]	漠然とした安心 (14.0%) [6.9%]
汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)	行政による規制が十分 (45.9%) [20.6%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (15.3%) [6.9%]	漠然とした安心 (12.8%) [5.7%]
有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等	事業者の法令遵守や衛生管理が十分 (27.5%) [5.7%]	行政による規制が十分 (20.9%) [4.3%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (14.3%) [3.0%]
BSE (伝達性牛海綿状脳症)	行政による規制が十分 (41.0%) [25.2%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (25.7%) [15.8%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分 (9.7%) [5.9%]
遺伝子組換え	安全性についての科学的な根拠に納得 (40.6%) [22.2%]	行政による規制が十分 (19.7%) [10.5%]	過去に問題になった事例がないので安心 (9.6%) [5.3%]
体細胞クローン	漠然とした安心 (23.8%) [11.2%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (22.3%) [10.8%]	行政による規制が十分 (20.9%) [9.8%]
いわゆる健康食品	漠然とした安心 (23.0%) [8.0%]	行政による規制が十分 (21.7%) [7.6%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (9.2%) [3.2%]
肥料・飼料等	行政による規制が十分 (31.7%) [20.1%]	漠然とした安心 (19.8%) [12.6%]	安全性についての科学的な根拠に納得 (16.9%) [10.8%]
アクリルアミド	安全性についての科学的な根拠に納得 (28.7%) [12.8%]	漠然とした安心 (23.1%) [10.3%]	行政による規制が十分 (11.8%) [5.3%]

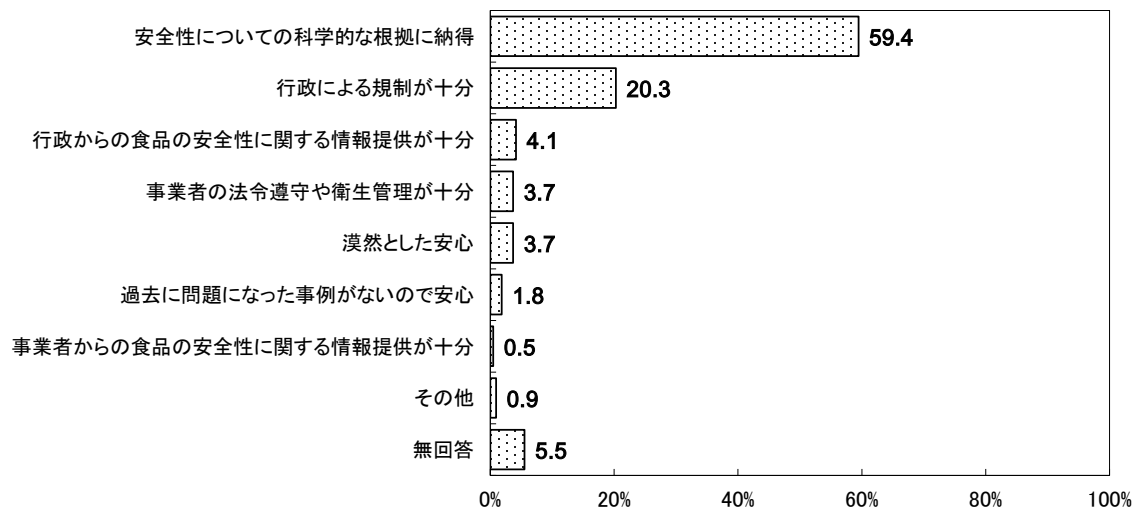
## A. 食品添加物

■ 食品添加物について不安を感じていない理由は、5年連続で「安全性についての科学的な根拠に納得」が第1位。

- 食品添加物について不安を感じていない理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に納得」が59.4%と2位以下を圧倒している。
- 年度別に比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に納得」が平成22年度以降毎年第1位となっている。

図表 4-A. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<食品添加物> (n=217)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-A. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<食品添加物・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=217)	59.4	20.3	3.7	4.1	0.5	1.8	3.7	0.9	5.5
平成25年度調査(n=176)	60.2	19.9	8.0	3.4	0.6	1.1	4.0	0.6	2.3
平成24年度調査(n=158)	53.2	23.4	5.1	1.9	0.6	1.9	5.1	1.9	7.0
平成23年度調査(第1回)(n=193)	49.7	23.3	5.2	5.7	1.0	3.1	3.6	3.1	5.2
平成22年度調査(n=160)	51.9	29.4	2.5	4.4	0.0	2.5	3.1	3.8	2.5
平成21年度調査(n=150)	22.7	52.7	6.7	8.0		2.7	2.0	2.7	2.7

※網掛け:各年度の第1位

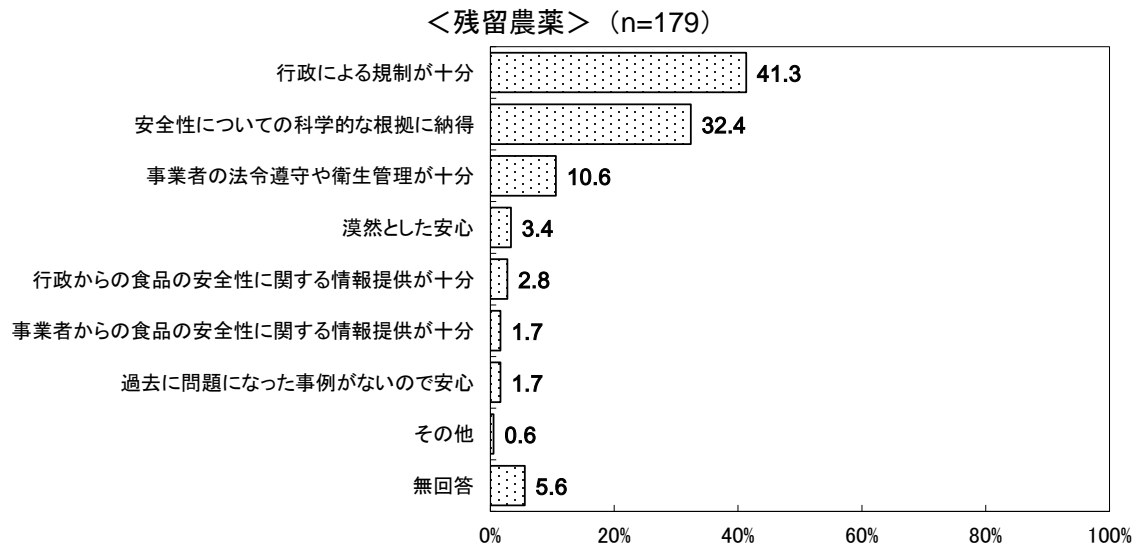


## B. 残留農薬

■ 残留農薬について不安を感じていない理由は、平成 21 年度以降「行政による規制が十分」が第 1 位。

- 残留農薬について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」が 41.3%で最も多く、次いで、「安全性についての科学的な根拠に納得」が 32.4%となっている。
- 年度別に比較したところ、「行政による規制が十分」が、本設問を追加した平成 21 年度以降第 1 位となっている。「安全性についての科学的な根拠に納得」は年々増加し、25 年度は「行政による規制が十分」と並んだが、今回調査では減少に転じた。

図表 4-B. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-B. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

＜残留農薬・年度別＞

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=179)	32.4	41.3	10.6	2.8	1.7	1.7	3.4	0.6	5.6
平成25年度調査(n=135)	39.3	39.3	8.1	4.4	1.5	0.0	3.7	0.0	3.7
平成24年度調査(n=125)	39.2	43.2	6.4	0.0	0.8	1.6	5.6	1.6	1.6
平成23年度調査(第1回)(n=150)	38.0	40.0	6.0	2.7	0.0	3.3	6.0	1.3	2.7
平成22年度調査(n=127)	33.1	44.9	7.1	3.9	1.6	1.6	3.1	3.1	1.6
平成21年度調査(n=105)	24.8	43.8	14.3	6.7		1.9	3.8	1.9	2.9

※網掛け:各年度の第 1 位

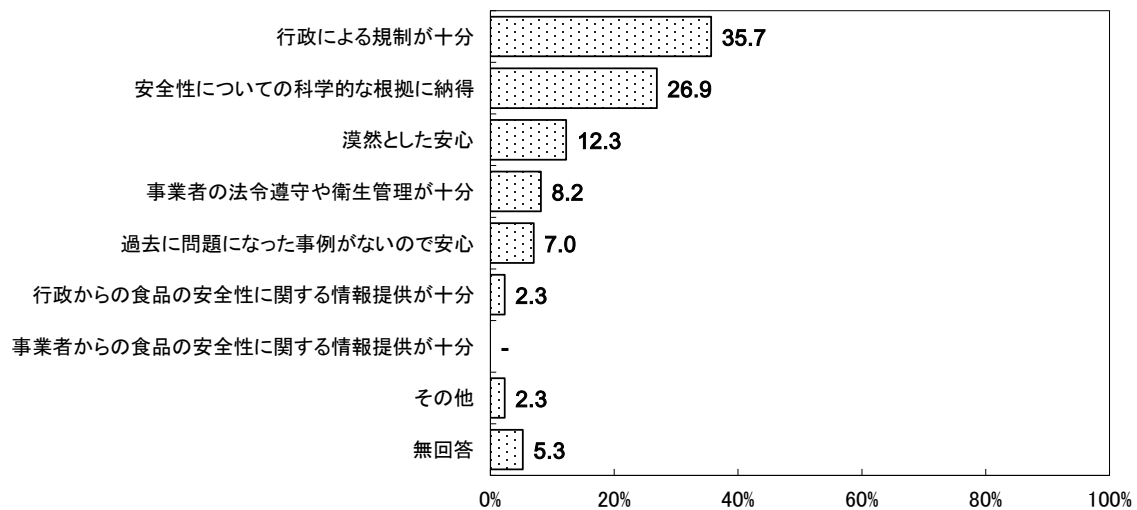
### C. 家畜用抗生物質

■ 家畜用抗生物質について不安を感じていない理由は、平成 21 年度以降「行政による規制が十分」が第 1 位。

- 家畜用抗生物質について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」が 35.7%で最も多く、次いで、「安全性についての科学的な根拠に納得」が 26.9%となっている。
- 年度別に比較したところ、「行政による規制が十分」が、本設問を追加した平成 21 年度以降第 1 位となっている。

図表 4-C. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

＜家畜用抗生物質＞ (n=171)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-C. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

＜家畜用抗生物質・年度別＞

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=171)	26.9	35.7	8.2	2.3	0.0	7.0	12.3	2.3	5.3
平成25年度調査(n=128)	31.3	38.3	12.5	2.3	0.8	6.3	5.5	0.8	2.3
平成24年度調査(n=122)	25.4	36.9	11.5	0.8	2.5	4.9	14.8	0.8	2.5
平成23年度調査(第1回)(n=142)	26.1	31.0	7.7	3.5	0.7	9.2	12.7	4.9	4.2
平成22年度調査(n=121)	24.8	38.0	7.4	3.3	2.5	9.9	9.1	2.5	2.5
平成21年度調査(n=98)	10.2	32.7	22.4	6.1		11.2	11.2	1.0	5.1

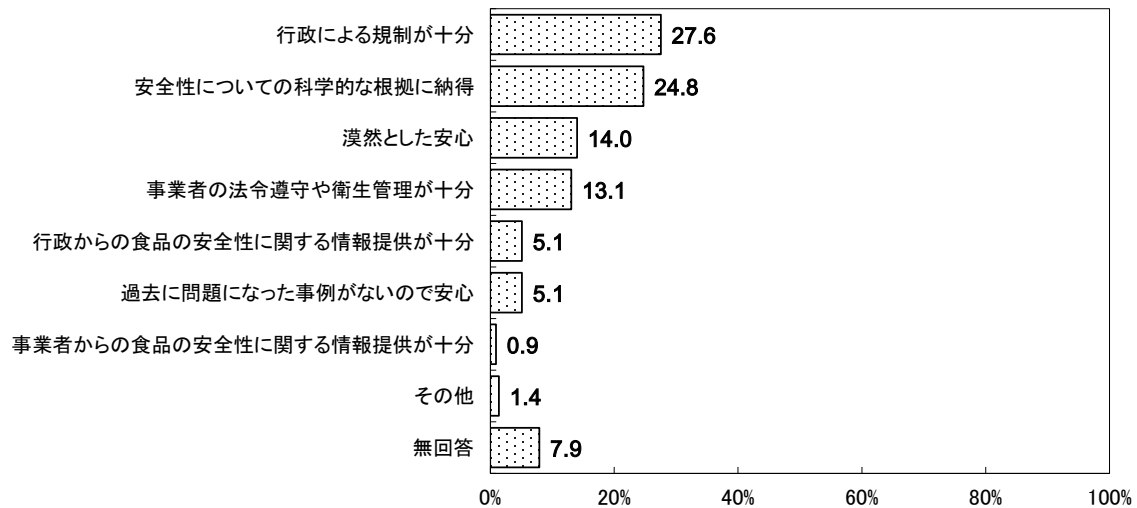
※網掛け:各年度の第 1 位

#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

■ 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安を感じていない理由は、平成 21 年度以降「行政による規制が十分」が第 1 位。

- 器具・容器包装からの溶出化学物質について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」(27.6%)と「安全性についての科学的な根拠に納得」(24.8%)が上位 2 位となっている。
- 年度別に比較したところ、「行政による規制が十分」が、本設問を追加した平成 21 年度以降第 1 位となっている。
- 

図表 4-D. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質> (n=214)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-D. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=214)	24.8	27.6	13.1	5.1	0.9	5.1	14.0	1.4	7.9
平成25年度調査(n=164)	27.4	28.7	12.2	4.3	3.0	6.1	11.6	0.6	6.1
平成24年度調査(n=144)	20.1	25.7	16.0	2.8	2.8	3.5	18.1	2.8	8.3
平成23年度調査(第1回)(n=184)	19.6	21.7	15.8	4.9	1.1	9.2	16.8	4.3	6.5
平成22年度調査(n=152)	23.7	27.0	14.5	5.3	2.6	5.3	13.2	2.6	5.9
平成21年度調査(n=119)	12.6	35.3	7.6	6.7		7.6	17.6	1.7	10.9

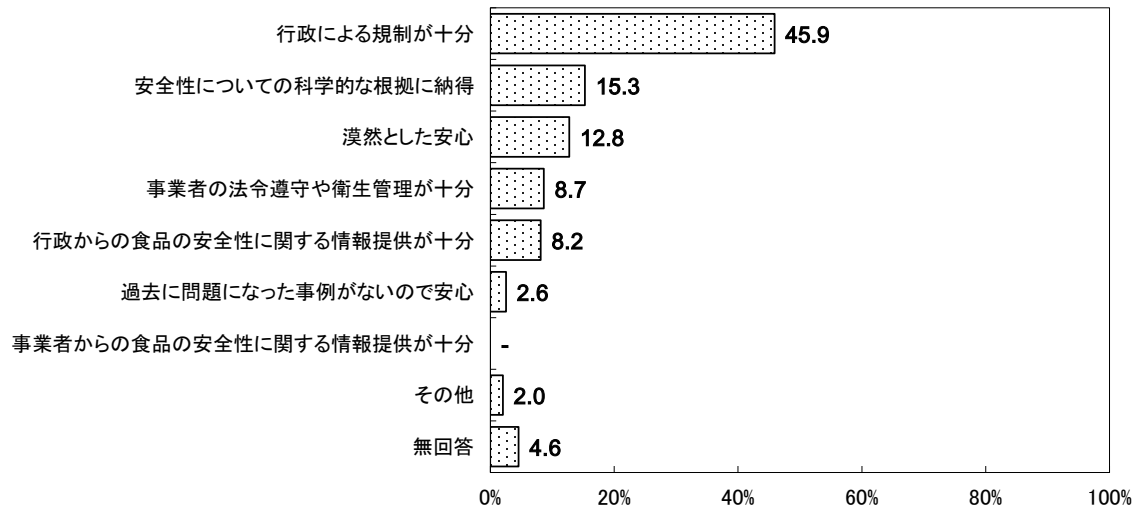
※網掛け:各年度の第 1 位

E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

■ 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）について不安を感じていない理由は、平成 21 年度以降「行政による規制が十分」が第 1 位。

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」が 45.9%で 2 位以下を大きく離している。
- 年度別に比較したところ、「行政による規制が十分」が、本設問を追加した平成 21 年度以降第 1 位となっている。

図表 4-E. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）> (n=196)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-E. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=196)	15.3	45.9	8.7	8.2	0.0	2.6	12.8	2.0	4.6
平成25年度調査(n=123)	19.5	45.5	13.0	7.3	0.8	0.8	8.1	0.0	4.9
平成24年度調査(n=116)	15.5	45.7	9.5	4.3	2.6	0.9	12.9	1.7	6.9
平成23年度調査(第1回)(n=153)	14.4	45.8	11.8	4.6	2.0	3.3	9.8	3.3	5.2
平成22年度調査(n=147)	14.3	46.3	9.5	8.2	1.4	0.7	12.2	3.4	4.1
平成21年度調査(n=78)	11.5	34.6	16.7	12.8		5.1	7.7	6.4	5.1

※網掛け:各年度の第 1 位

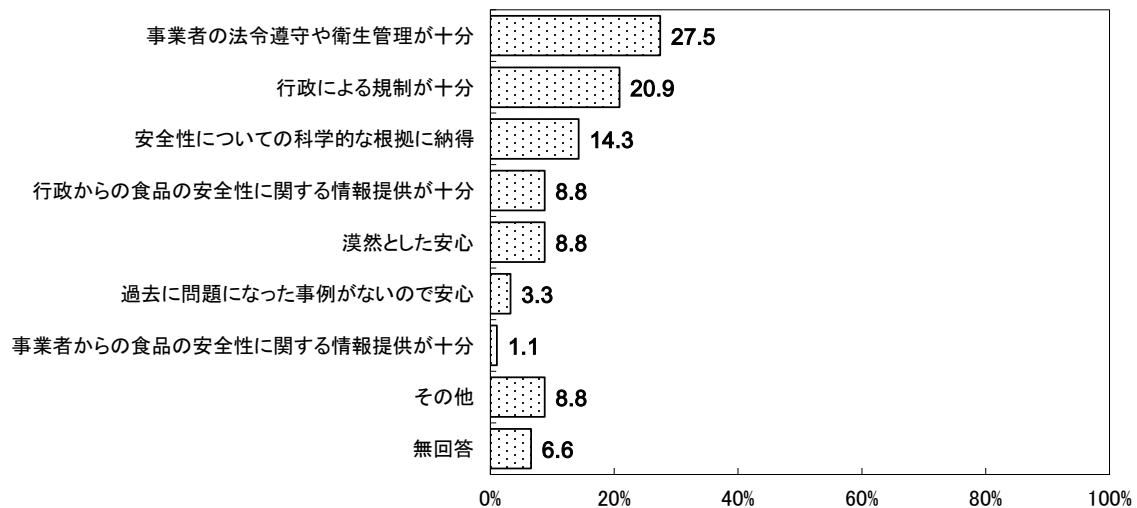
## F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

■ 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等について不安を感じていない理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が十分」が最近2年間では第1位。

- 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等について不安を感じていない理由は、「事業者の法令遵守や衛生管理が十分」が27.5%で最も多く、次いで、「行政による規制が十分」が20.9%となっている。
- 年度別に比較したところ、「事業者の法令遵守や衛生管理が十分」が前回調査から第1位となっている。
- 平成24年度まで第1位だった「行政による規制が十分」は、前回調査で3位だったが、2位に浮上している。

図表 4-F. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等> (n=91)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-F. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=91)	14.3	20.9	27.5	8.8	1.1	3.3	8.8	8.8	6.6
平成25年度調査(n=66)	21.2	16.7	22.7	7.6	4.5	1.5	7.6	12.1	6.1
平成24年度調査(n=72)	15.3	22.2	20.8	15.3	1.4	2.8	5.6	11.1	5.6
平成23年度調査(第1回)(n=89)	12.4	20.2	14.6	12.4	2.2	2.2	15.7	13.5	6.7
平成22年度調査(n=94)	13.8	23.4	21.3	14.9	0.0	2.1	10.6	6.4	7.4
平成21年度調査(n=76)	7.9	6.6	32.9	30.3		1.3	5.3	6.6	9.2

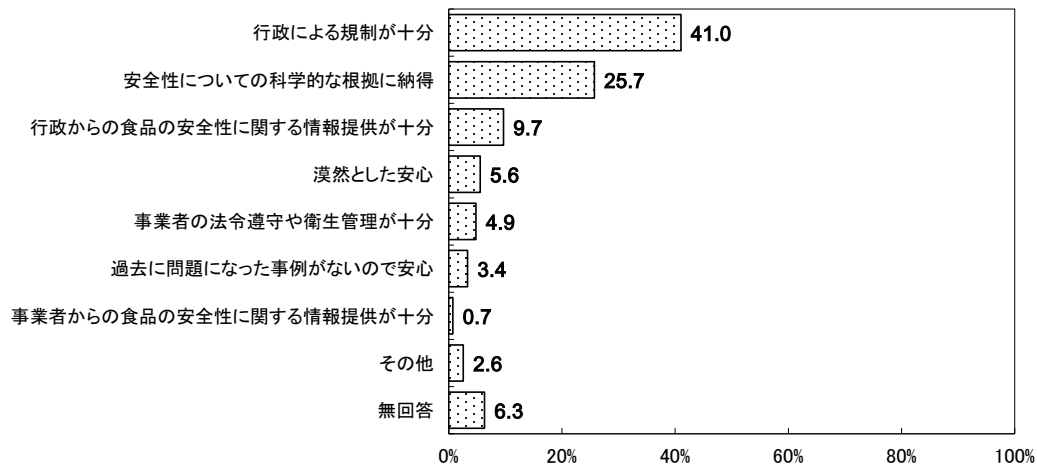
※網掛け:各年度の第1位

## G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）について不安を感じていない最も多い理由は、「行政による規制が十分」。
- 年度別では、「行政による規制が十分」と「安全性についての科学的な根拠に納得」が6年連続で上位2位となっており、平成22年度以降はこの2つの理由で6割を占めている。

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」が41.0%で最も多く、次いで、「安全性についての科学的な根拠に納得」が25.7%となっている。
- 年度別でみると、今回調査で「行政による規制が十分」が第1位に上昇している。
- 「行政による規制が十分」と「安全性についての科学的な根拠に納得」は6年連続で上位2位となっている。

図表 4-G. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）> (n=268)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-G. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=268)	25.7	41.0	4.9	9.7	0.7	3.4	5.6	2.6	6.3
平成25年度調査(n=212)	34.9	30.2	6.6	11.8	1.9	2.4	3.3	0.9	8.0
平成24年度調査(n=173)	25.4	40.5	8.1	11.6	0.0	1.7	4.6	4.0	4.0
平成23年度調査(第1回)(n=214)	20.1	41.1	5.1	7.0	1.4	3.7	11.7	2.8	7.0
平成22年度調査(n=220)	27.7	35.0	2.3	13.6	0.0	2.7	9.1	4.5	5.0
平成21年度調査(n=147)	28.6	23.8	9.5	11.6		4.1	8.2	8.2	6.1

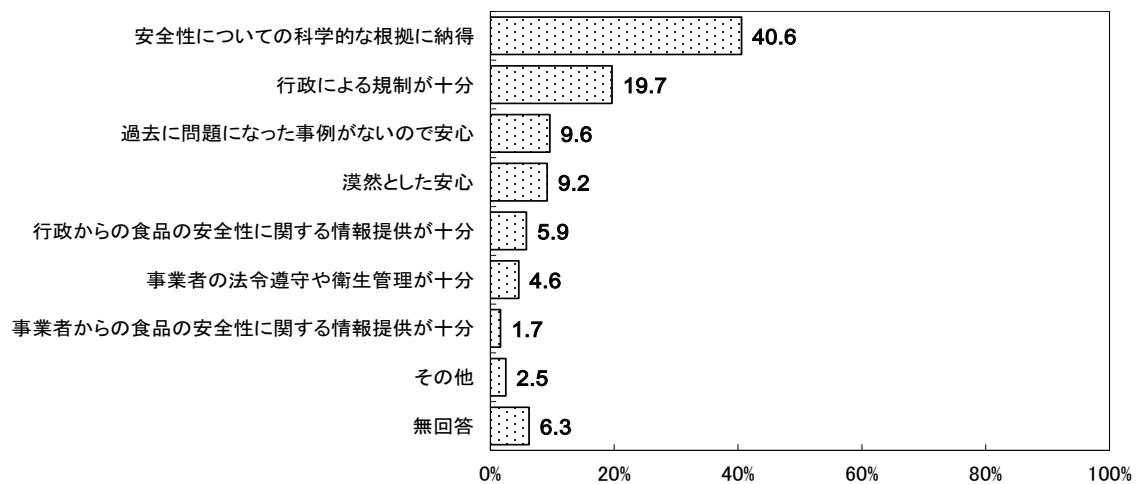
※網掛け:各年度の第1位

## H. 遺伝子組換え

■ 遺伝子組換えについて不安を感じていない理由は、平成 21 年度以降「安全性についての科学的な根拠に納得」が第 1 位。

- 遺伝子組換えについて不安を感じていない理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に納得」が 40.6% で最も多く、2 位以下を大きく離している。
- 年度別に比較したところ、「安全性についての科学的な根拠に納得」が、本設問を追加した平成 21 年度以降第 1 位となっている。

図表 4-H. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <遺伝子組換え> (n=239)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-H. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <遺伝子組換え・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=239)	40.6	19.7	4.6	5.9	1.7	9.6	9.2	2.5	6.3
平成25年度調査(n=178)	40.4	21.9	2.8	10.7	1.7	7.3	8.4	0.6	6.2
平成24年度調査(n=170)	37.6	18.2	3.5	4.7	1.8	12.9	11.8	2.9	6.5
平成23年度調査(第1回)(n=202)	37.1	14.4	2.5	5.9	2.0	10.9	16.3	4.0	6.9
平成22年度調査(n=203)	39.9	12.8	2.5	8.4	2.5	17.2	10.3	1.5	4.9
平成21年度調査(n=139)	48.2	11.5	1.4	2.9		15.8	12.2	4.3	3.6

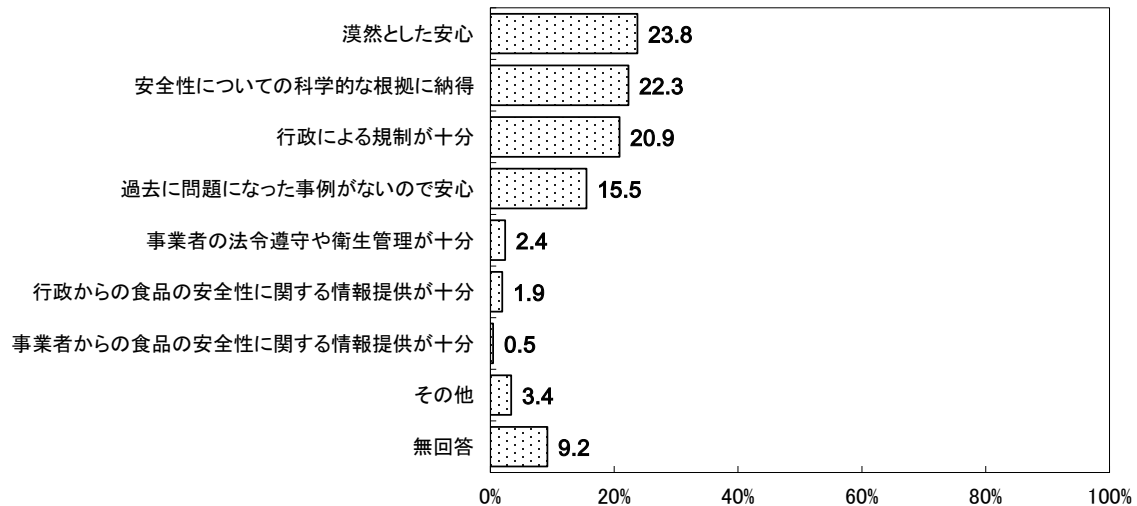
※網掛け: 各年度の第 1 位

## I. 体細胞クローン

■ 体細胞クローンについて不安を感じていない最も多い理由は「漠然とした安心」で、今回調査で初めて第1位に。

- 体細胞クローンについて不安を感じていない理由を尋ねると、前年度まで第1位であった「安全性についての科学的根拠に納得」が大きく減少し（22.3%）、「漠然とした安心」が23.8%とわずかに上回り第1位となった。次いで、「行政による規制が十分」が20.9%となっている。

図表 4-I. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <体細胞クローン> (n=206)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-I. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <体細胞クローン・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=206)	22.3	20.9	2.4	1.9	0.5	15.5	23.8	3.4	9.2
平成25年度調査(n=154)	31.2	16.9	1.9	4.5	1.3	16.9	17.5	2.6	7.1
平成24年度調査(n=133)	30.1	22.6	1.5	3.0	0.8	9.8	21.8	2.3	8.3
平成23年度調査(第1回)(n=159)	32.1	21.4	1.3	3.1	0.6	8.8	23.3	4.4	5.0
平成22年度調査(n=162)	35.8	13.6	1.9	6.8	1.2	12.3	20.4	4.3	3.7
平成21年度調査(n=116)	47.4	12.1	3.4	4.3		12.9	12.9	1.7	5.2

※網掛け:各年度の第1位



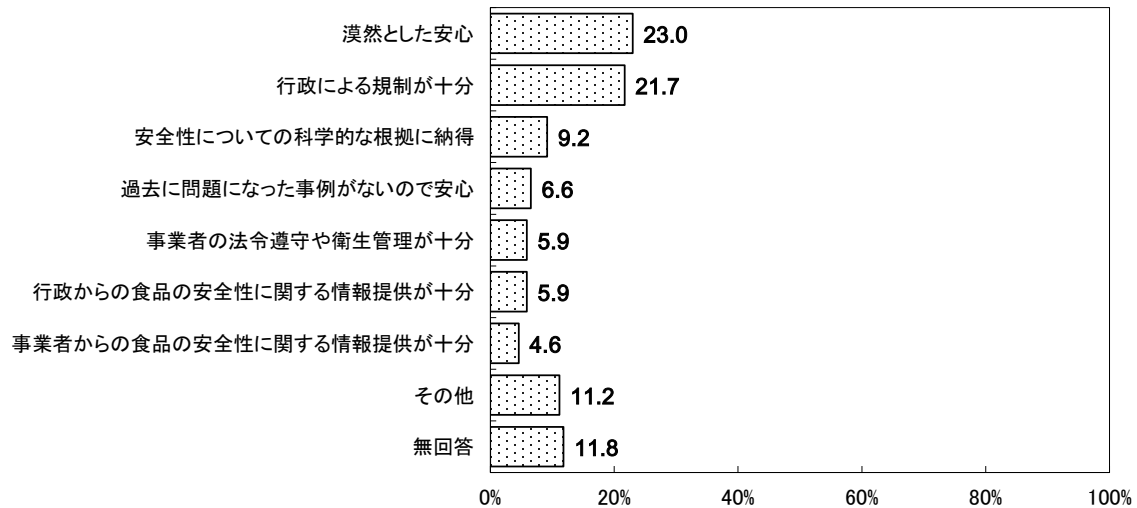
## J. いわゆる健康食品

- いわゆる健康食品について不安を感じていない理由は、「漠然とした安心」が平成21年度以降毎年第1位。
- 「行政による規制が十分」が最近3年間で上昇傾向が見られる。

- いわゆる健康食品について不安を感じていない理由を尋ねると、「漠然とした安心」が23.0%で最も多く、次いで、「行政による規制が十分」が21.7%となっている。
- 年度別に比較したところ、「漠然とした安心」が平成21年度以降毎年第1位となっている。
- 「行政による規制が十分」は、平成23年度以降上昇傾向が見られ、今回調査で初めて20%以上となっている。

図表 4-J. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<いわゆる健康食品> (n=152)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-J. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

<いわゆる健康食品・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=152)	9.2	21.7	5.9	5.9	4.6	6.6	23.0	11.2	11.8
平成25年度調査(n=126)	11.9	17.5	8.7	6.3	2.4	4.0	21.4	16.7	11.1
平成24年度調査(n=147)	15.0	13.6	6.8	3.4	0.7	5.4	24.5	18.4	12.2
平成23年度調査(第1回)(n=162)	11.1	11.7	2.5	4.3	2.5	4.9	30.2	22.2	10.5
平成22年度調査(n=162)	8.6	16.0	6.2	4.3	4.3	6.2	35.2	12.3	6.8
平成21年度調査(n=144)	9.0	18.1	12.5	4.2		6.9	20.8	18.8	9.7

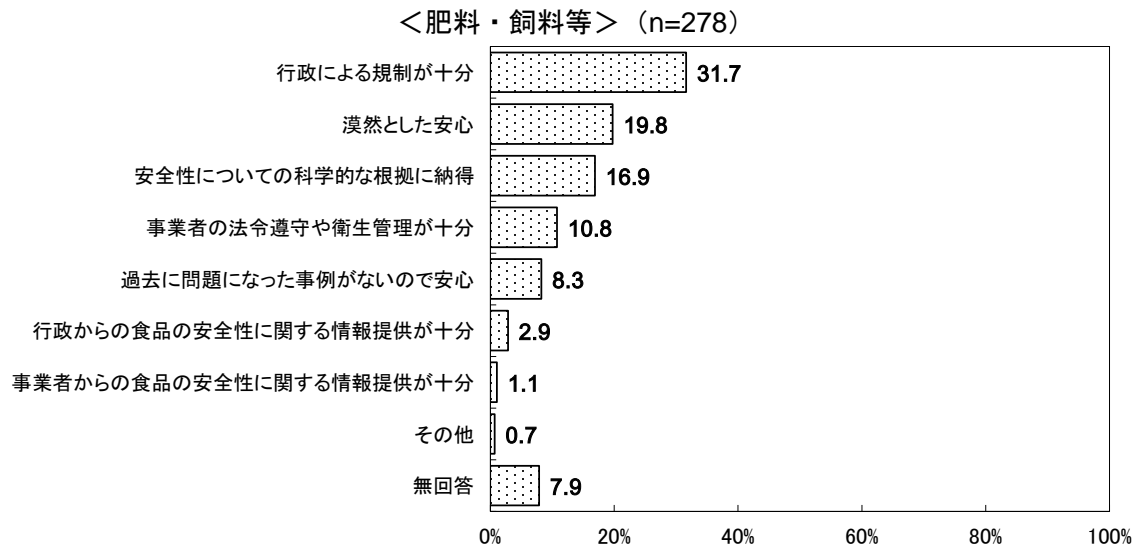
※網掛け:各年度の第1位

## K. 肥料・飼料等

■ 肥料・飼料等について不安を感じていない理由は、「行政による規制が十分」が3年連続で第1位。

- 肥料・飼料等について不安を感じていない理由を尋ねると、「行政による規制が十分」が31.7%で最も多く、次いで、「漠然とした安心」が19.8%、「安全性についての科学的な根拠に納得」が16.9%となっている。
- 年度別に比較したところ、「行政による規制が十分」が平成24年度以降第1位となっている。
- 「漠然とした安心」は、平成22年度以降年々低下している。

図表 4-K. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-K. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

＜肥料・飼料等・年度別＞

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=278)	16.9	31.7	10.8	2.9	1.1	8.3	19.8	0.7	7.9
平成25年度調査(n=199)	20.1	29.1	9.5	4.0	2.0	6.0	20.6	0.5	8.0
平成24年度調査(n=197)	16.2	32.5	8.1	2.5	1.0	7.6	21.3	2.0	8.6
平成23年度調査(第1回)(n=155)	15.5	23.2	13.5	3.2	0.6	8.4	23.9	3.2	8.4
平成22年度調査(n=216)	11.1	24.5	8.8	2.3	2.8	10.2	32.9	0.9	6.5

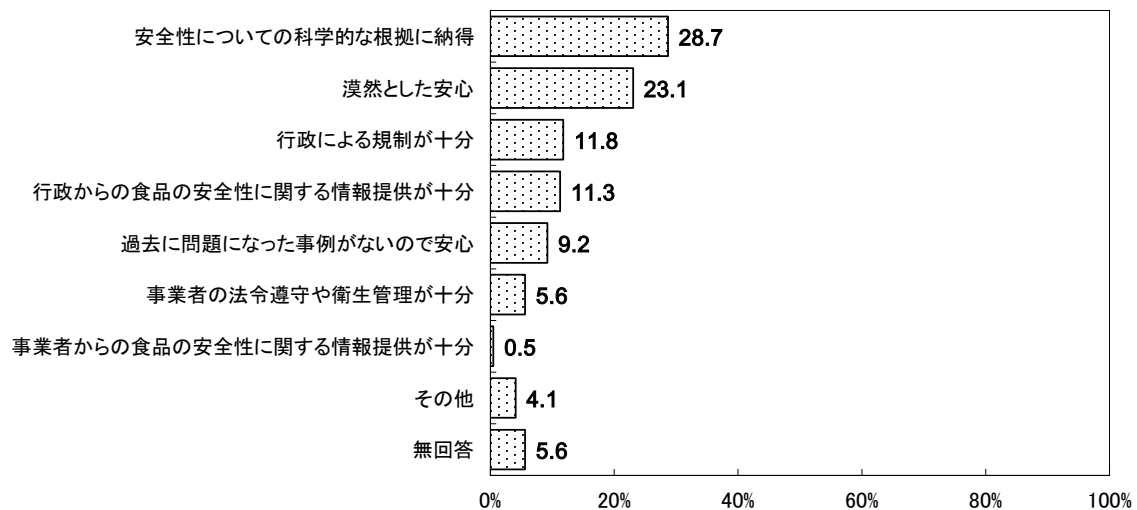
※網掛け:各年度の第1位

## M. アクリルアミド

■ アクリルアミドについて不安を感じていない理由は、「安全性についての科学的な根拠に納得」と「漠然とした安心」が上位2位。

- アクリルアミドについて不安を感じていない理由を尋ねると、「安全性についての科学的な根拠に納得」が28.7%で最も多く、次いで、「漠然とした安心」が23.1%となっている。

図表 4-M. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <アクリルアミド> (n=195)



※回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 4-M. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由  
 <アクリルアミド・年度別>

	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答
今回調査(n=195)	28.7	11.8	5.6	11.3	0.5	9.2	23.1	4.1	5.6

※網掛け:各年度の第1位

※本項目は今回調査から追加

その他（不安を感じていない理由）

- A. 食品添加物（回答者数2人 うち「全く不安を感じない」が1人）  
添加物の少ない食品を選んでいるからなどの回答があった。
- B. 残留農薬（回答者数1人 うち「全く不安を感じない」が1人）  
農薬の改良が進んで、現状では残量農薬濃度は全く心配にならない濃度と農水省からの報告を読むとわかるという回答があった。
- C. 家畜用抗生物質（回答者数4人 うち「全く不安を感じない」が2人）  
なるべく食さないようにしている、抗生物質も農薬同様に食品には含まれていないことが厚労省の報告を見ているので安心などの回答があった。
- D. 器具・容器包装からの溶出化学物質（回答者数3人 うち「全く不安を感じない」が1人）  
一定の規制が設けられているので、製造企業の意識が高く予め予測される使用状態を想定しての試験を行っており信頼できるなどの回答があった。
- E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（回答者数4人）  
過去の事故の検証が進んでおり、再び同様の事故が起こらないように注意が行き届いている、近年、発生頻度がほとんど起きていないと考えられるためなどの回答があった。
- F. 有害微生物（細菌）、ウイルス等による食中毒等（回答者数8人 うち「全く不安を感じない」が1人）  
消費者自身の注意力によってコントロール可能な部分だから、被害が小さいなどの回答があった。
- G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）（回答者数7人 うち「全く不安を感じない」が1人）  
近年国内では全く発生がないため、肉骨粉との疫学的関係が明らかになって、正しく規制されて、BSEの発生はぴたりと止まったなどの回答があった。
- H. 遺伝子組換え（回答者数6人 うち「全く不安を感じない」が3人）  
遺伝子組み換え自体に問題があるとは全く思えない、動植物において、突然変異等の事例が今のところ報告が無いためなどの回答があった。
- I. 体細胞クローン（回答者数7人 うち「全く不安を感じない」が5人）  
不安を感じる根拠がない、食の安全性を脅かすほど世に出回っていないように思うためなどの回答があった。

**J. いわゆる健康食品** (回答者数16人 うち「全く不安を感じない」が1人)

摂取しないため、過剰摂取をしなければ大事にはならないことが多いなどの回答があった。

**K. 肥料・飼料等** (回答者数2人 うち「全く不安を感じない」が1人)

情報がなくわからないから、多少の逸脱があっても、大きな被害にならないのではないかと感じているとの回答があった。

**M. アクリルアミド** (回答者数8人 うち「とても不安である」が2人)

単体でとりあげても無意味であると感じている、行政指導が効果を上げているなどの回答があった。

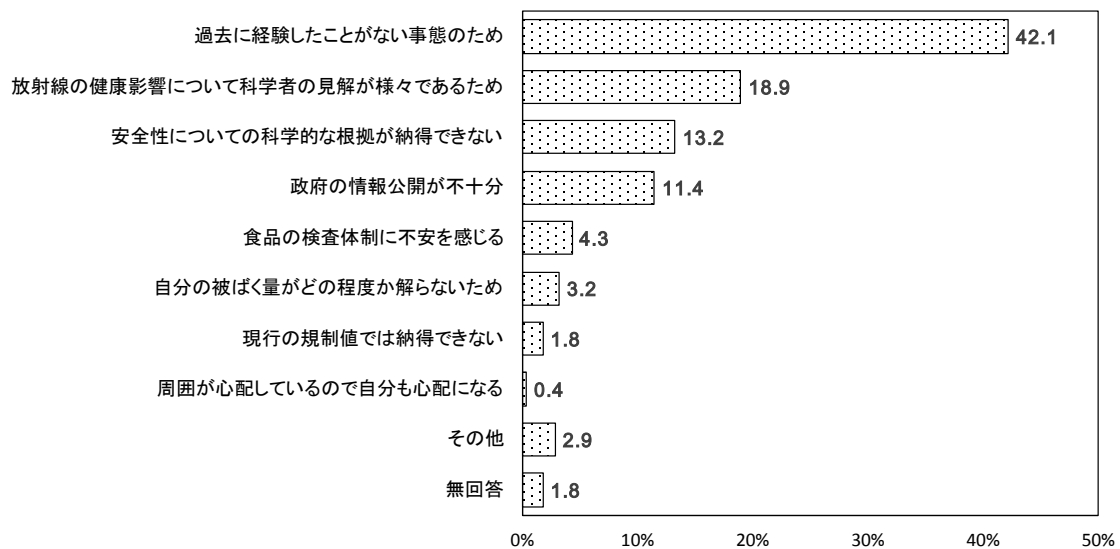
## 5. 放射性物質について不安を感じる理由（問5）

### 5-1 放射性物質について不安を感じる理由の回答割合

■ 放射性物質について不安を感じる理由は、「過去に経験したことがない事態のため」が最も多い。

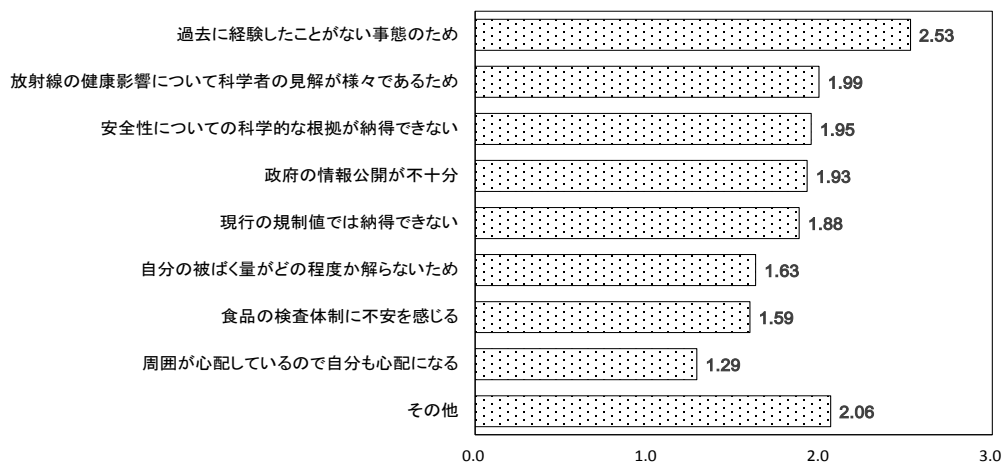
- 放射性物質について不安を感じる理由を、強く当てはまる順に3つ尋ねたところ、第1位は「過去に経験したことがない事態のため」が42.1%で最も多く、2位以降を大きく離している。
- 放射性物質について不安を感じる理由を第1位から第3位までの平均スコア（1位：3点、2位：2点、3位：1点の平均点数。以下同じ）で比較すると、「過去に経験したことがない事態のため」（2.53）、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々なため」（1.99）、「安全性についての科学的な根拠が納得できない」（1.95）が上位3位となっている。

図表 5-1. ①放射性物質について不安を感じる理由（第1位）



※回答者割合が多い順に並び替え。

図表 5-2. ②放射性物質について不安を感じる理由(平均スコア)



※平均スコアが高いもの順に並び替え。

※平均スコア：得点：1位：3点、2位：2点、3位：1点の平均点数。

**その他（放射性物質について不安を感じている理由）**

**第1位（回答者数6人）**

震災から3年たった今でも次々に放射性物質の拡散の事実が出てくるため、放射能が減衰するまで果てしなく長期間かかるため、あまりにも放射線量の事を簡単に考え過ぎている、健康に与える影響のデータが十分ではないなどの回答があった。

**第2位（回答者数1人）**

福島原発の収束の目途が立たず、放射性物質の海洋へのたれ流し、空気中への放出があり、特に魚、海藻への影響が続いているとの回答があった。

**第3位（回答者数8人）**

原発推進政府により福島原発事故の教訓が活かされず国民健康をないがしろにされている、政府の情報コントロールを感じるため、長期的な科学的根拠がないためなどの回答があった。

## 5-2 放射性物質について不安を感じる理由の年度別回答割合

■ 放射性物質について不安を感じる理由は、「過去に経験したことがない事態のため」が平成 23 年度以降毎年第 1 位。

- 放射性物質について不安を感じる理由を年度別に比較したところ、「過去に経験したことがない事態のため」(42.1%)、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」(18.9%)、「安全性についての科学的な根拠が納得できない」(13.2%)の「政府の情報公開が不十分」(11.4%) の上位 4 位は、平成 24 年度以降変動はない。
- 第 1 位に限定すると、「政府の情報公開が不十分」は平成 23 年度（第 2 回）(10.4%) 以降低下傾向（平成 24 年度：10.2%、平成 25 年度：8.8%）が見られていたものの、今回調査で若干上昇(11.4%)している。
- 第 1 位から第 3 位までの合計の割合を比べてみると、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々である」「安全性についての科学的な根拠が納得できない」は増加している。また、「自分の被ばく量がどの程度かわからないため」は、23 年度第 2 回調査以降は減少していたが、今回調査では増加に転じている。
- 一方で、第 1 位から第 3 位までの合計の割合が減少傾向にあるのは、「過去に経験したことがない事態のため」「食品の検査体制に不安を感じる」となっている。

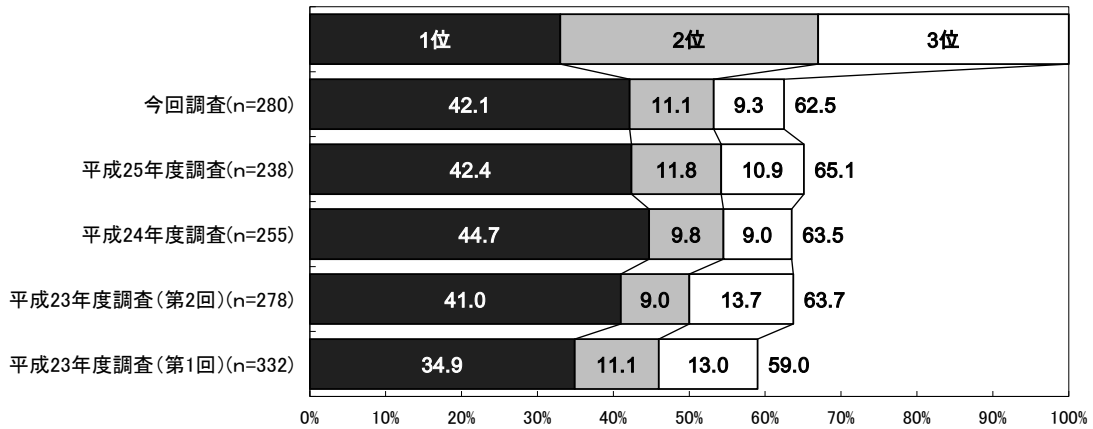


図表 5-2. 放射性物質について不安を感じる理由（年度別順位）

年度	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
今回調査	過去に経験したことがない事態のため (42.1%)	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため (18.9%)	安全性についての科学的な根拠が納得できない (13.2%)	政府の情報公開が不十分 (11.4%)	食品の検査体制に不安を感じる (4.3%)	自分の被ばく量がどの程度か解らないため (3.2%)	現行の規制値では納得できない (1.8%)	周囲が心配しているので自分も心配になる (0.4%)
平成25年度	過去に経験したことがない事態のため (42.4%)	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため (18.1%)	安全性についての科学的な根拠が納得できない (11.3%)	政府の情報公開が不十分 (8.8%)	食品の検査体制に不安を感じる (6.7%)	自分の被ばく量がどの程度か解らないため (5.0%)	現行の規制値では納得できない (1.3%)	周囲が心配しているので自分も心配になる (0.8%)
平成24年度	過去に経験したことがない事態のため (44.7%)	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため (14.9%)	安全性についての科学的な根拠が納得できない (12.2%)	政府の情報公開が不十分 (10.2%)	自分の被ばく量がどの程度か解らないため (7.5%)	食品の検査体制に不安を感じる (4.3%)	現行の規制値では納得できない (1.6%)	周囲が心配しているので自分も心配になる (0%)
平成23年度 (第2回)	過去に経験したことがない事態のため (41.0%)	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため (17.3%)	政府の情報公開が不十分 (10.4%)	安全性についての科学的な根拠が納得できない (9.7%)	食品の検査体制に不安を感じる (8.3%)	自分の被ばく量がどの程度か解らないため (7.6%)	現行の規制値では納得できない (2.9%)	周囲が心配しているので自分も心配になる (1.1%)
平成23年度 (第1回)	過去に経験したことがない事態のため (34.9%)	安全性についての科学的な根拠が納得できない (16.9%)	政府の情報公開が不十分 (14.8%)	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため (13.9%)	食品の検査体制に不安を感じる (8.4%)	自分の被ばく量がどの程度か解らないため (3.6%)	現行の規制値では納得できない (2.7%)	周囲が心配しているので自分も心配になる (0.6%)

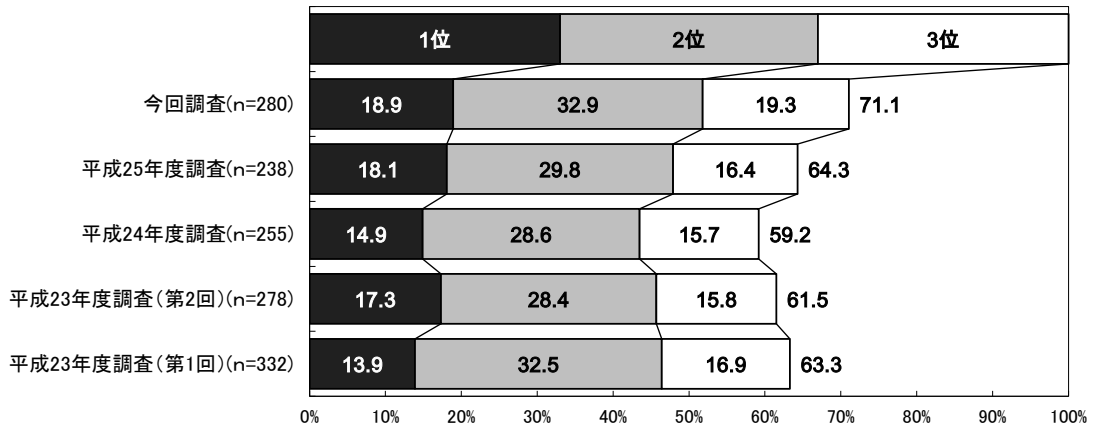
図表 5-2①. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）

＜過去に経験したことがない事態のため＞



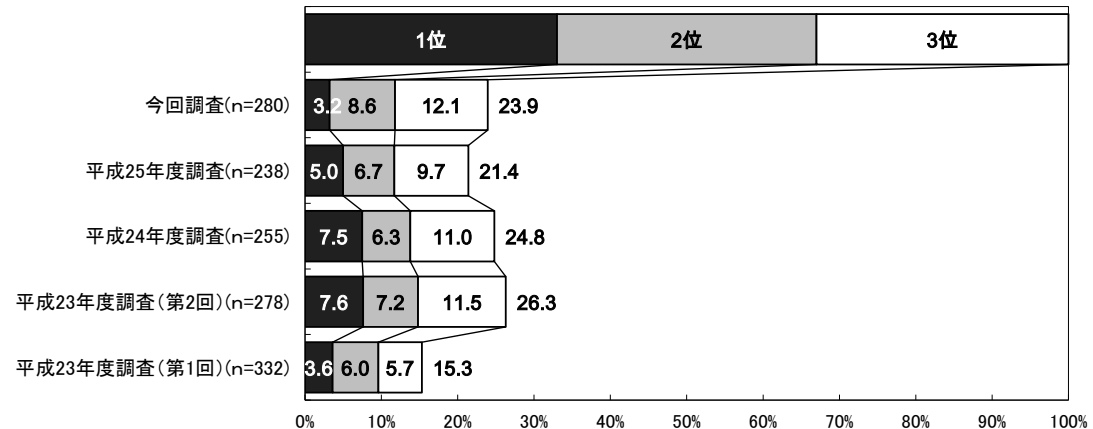
図表 5-2②. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）

＜放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため＞

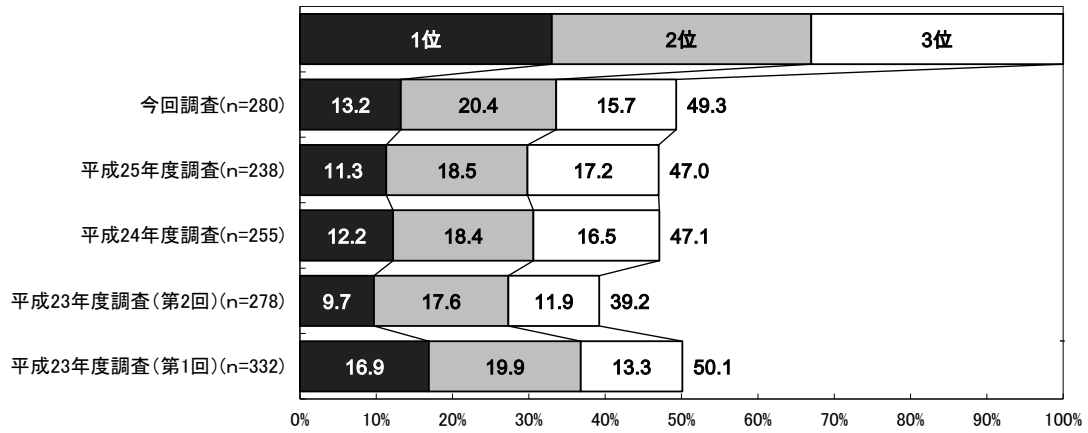


図表 5-2③. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）

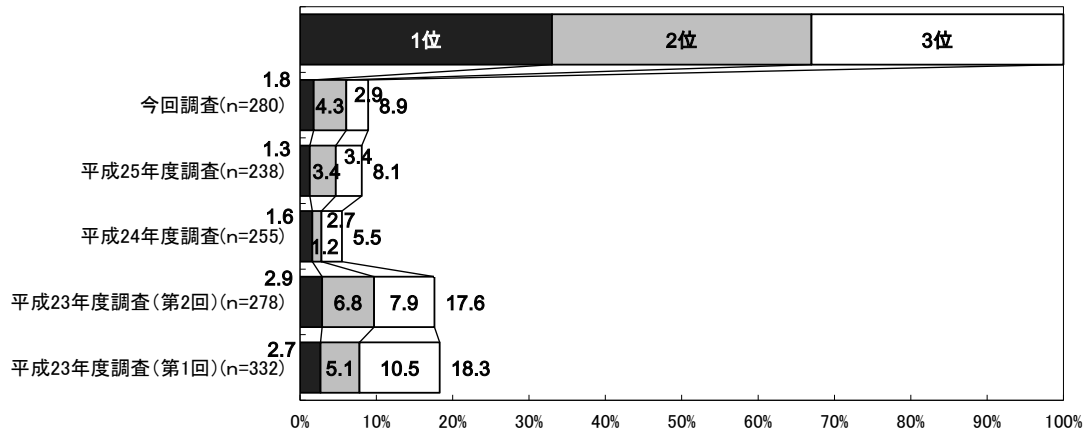
＜自分の被ばく量がどの程度か解らないため＞



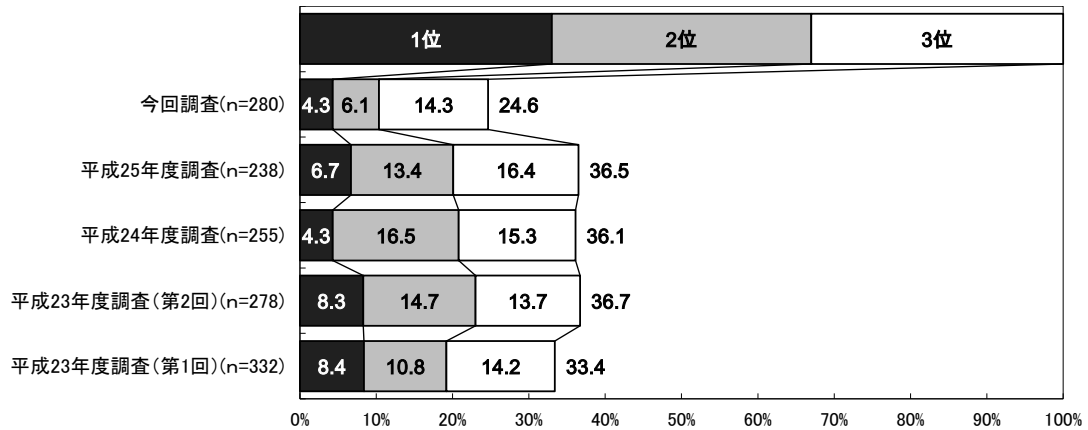
図表 5-2④. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）  
 <安全性についての科学的な根拠が納得できない>



図表 5-2⑤. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）  
 <現行の規制値では納得できない>

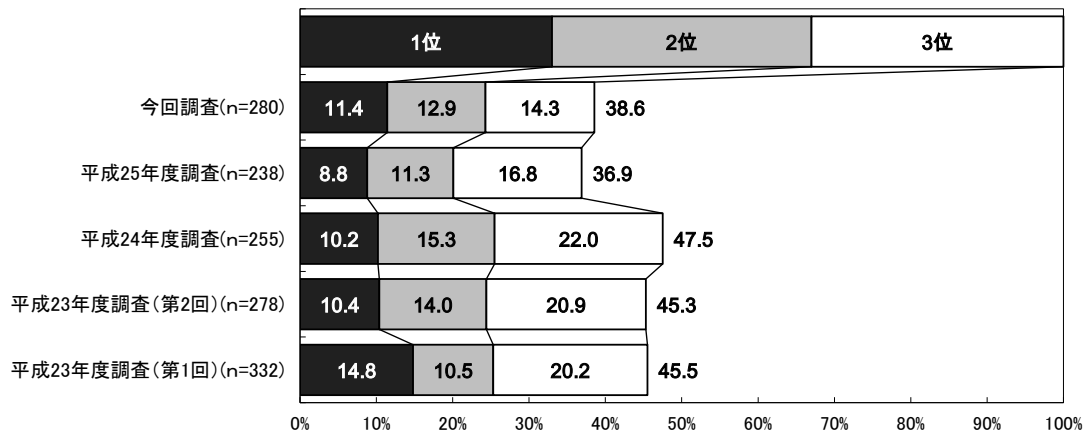


図表 5-2⑥. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）  
 <食品の検査体制に不安を感じる>



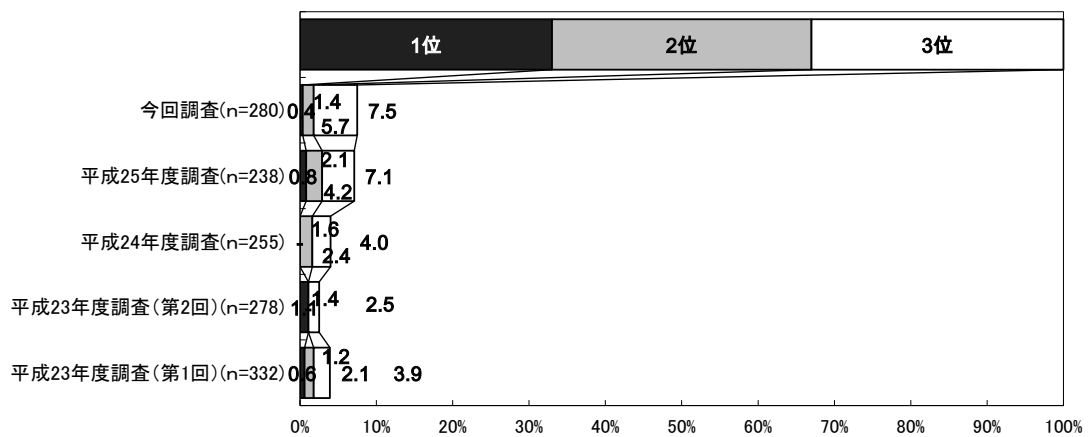
図表 5-2⑦. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）

<政府の情報公開が不十分>



図表 5-2⑧. 放射性物質について不安を感じる理由（上位3位・年度別）

<周囲が心配しているので自分も心配になる>



### 5-3 放射性物質について不安を感じる理由の属性別スコア

■ ほぼすべての属性で「過去に経験したことがない事態のため」が第1位。

- 放射性物質について不安を感じる理由を属性別平均スコア※で比較したところ、性別では「過去に経験したことがない事態のため」が男女ともに最も高い。(男性：2.44、女性：2.61)
- 年齢別では、20代はサンプル数が少ないが「安全性についての科学的な根拠が納得できない」が最も高く(2.67)、30代以上では「過去に経験したことがない事態のため」が高いという有意な差が見られる。(30代：2.41、40代：2.52、50代：2.48、60代：2.68、70代：2.45)
- 職務経験別では、研究職経験者がサンプル数は少ないが「食品の検査体制に不安を感じる」が最も高い(3.00)という有意な差が見られる。
- また、食品関係行政職経験者は「過去に経験したことがない事態のため」と「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」が同率(2.25)で第1位となっている。
- モニター継続別では、「安全性についての科学的な根拠が納得できない」が平成25年度以前から継続しているモニターが第4位(1.85)なのに対して、平成26年度新規のモニターは第2位(2.31)という有意な差が見られる。
- モニター会議出席経験については、ほとんど違いは見られない。
- 居住地別では、中国・四国は「現行の規制値では納得できない」が最も高い(3.00)。

※ 1位：3点、2位：2点、3位：1点として集計し、平均値を算出したもの。

図表 5-3. 放射性物質について不安を感じる理由の属性別スコア

		過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	安全性についての科学的な根拠が納得できない	政府の情報公開が不十分	現行の規制値では納得できない	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	食品の検査体制に不安を感じる	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他
合計(n=280)		2.53	1.99	1.95	1.93	1.88	1.63	1.59	1.29	2.06
性別	男性(n=134)	2.44	2.08	1.90	1.87	2.00	1.52	1.63	1.09	2.56
	女性(n=146)	2.61	1.91	2.00	1.98	1.79	1.71	1.57	1.50	1.43
年代	20～29歳(n=12)	2.63	2.00	2.67	2.50	2.00	1.33	1.40	1.75	-
	30～39歳(n=55)	2.41	1.92	2.18	2.00	2.11	1.80	1.50	1.25	1.00
	40～49歳(n=59)	2.52	1.89	1.92	2.00	1.50	1.64	1.75	1.25	2.33
	50～59歳(n=72)	2.48	1.96	2.00	1.97	1.67	1.61	1.76	1.00	2.25
	60～69歳(n=63)	2.68	2.04	1.76	1.71	2.67	1.60	1.46	1.20	2.60
	70歳以上(n=19)	2.45	2.41	1.73	2.00	1.00	1.50	1.00	1.00	-
職務経験	食品生産・加工経験者(n=80)	2.60	1.96	1.88	1.94	2.20	1.60	1.36	1.22	1.80
	食品流通・販売経験者(n=38)	2.56	1.97	1.83	2.18	1.50	1.50	1.43	1.00	2.67
	研究職経験者(n=19)	2.40	1.80	2.18	1.67	2.33	1.33	3.00	1.00	3.00
	医療職経験者(n=26)	2.43	2.12	2.17	2.17	1.50	1.60	1.29	1.00	1.00
	教育職経験者(n=28)	2.50	2.24	2.00	1.87	2.00	1.00	1.50	1.00	3.00
	食品関係行政職経験者(n=11)	2.25	2.25	1.67	2.00		1.80	1.50	1.00	2.00
	その他消費者(n=78)	2.52	1.92	1.95	1.77	1.88	1.94	1.78	1.80	1.67
モニター継続	平成26年度から(n=70)	2.49	2.00	2.31	1.97	2.00	1.44	1.50	1.38	1.33
	平成25年度以前から(n=210)	2.54	1.99	1.85	1.91	1.84	1.69	1.63	1.23	2.23
モニター会議出席	経験あり(n=257)	2.54	1.98	1.95	1.97	1.88	1.57	1.64	1.22	2.06
	経験なし(n=23)	2.44	2.23	1.92	1.44	-	2.17	1.00	1.67	-
居住地	北海道(n=7)	2.60	2.00	1.67	2.00	-	-	1.00	1.00	-
	東北(n=12)	2.71	1.67	2.60	2.33	-	1.33	1.33	1.33	-
	関東(n=60)	2.49	2.10	1.88	1.71	1.50	1.72	1.40	1.00	2.25
	東京(n=34)	2.36	1.91	2.00	2.06	1.83	1.67	1.86	1.00	2.33
	甲信越(n=17)	2.50	2.00	1.89	1.50	1.50	1.50	2.00	2.00	3.00
	東海(n=32)	2.65	2.10	1.88	2.07	1.50	1.33	1.42	2.00	2.33
	近畿(n=61)	2.67	1.81	2.00	1.96	2.14	1.56	1.78	1.00	1.67
	中国・四国(n=26)	2.00	2.35	1.88	1.88	3.00	2.00	1.83	1.50	1.00
九州(n=31)	2.68	1.88	1.94	2.00	2.00	1.78	1.43	1.00	1.00	

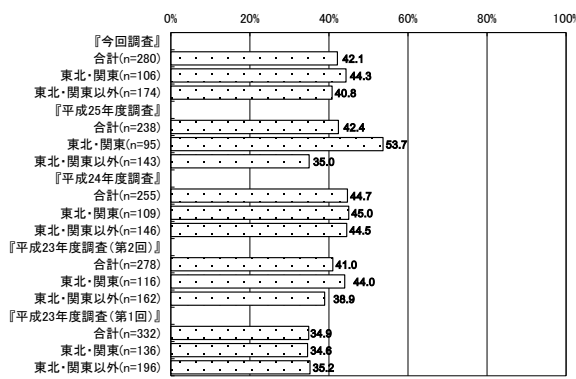
※1位:3点、2位:2点、3位:1点

※濃いグレー・白字:第1位、若干濃いグレー:第2位、薄いグレー:第3位

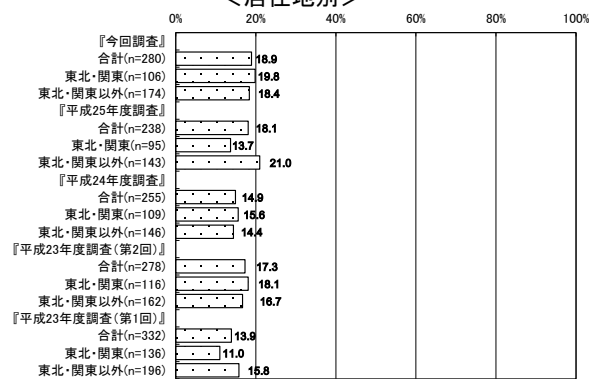
※合計の平均スコアが高いもの順に並び替え。

- 放射性物質について不安を感じている理由の第1位を居住地、年度別に比較したところ、居住地別の平均スコアの比較では、「東北・関東」、「東北・関東以外」ともに不安を感じている理由の第1位は「過去に経験したことがない事態のため」(2.47、2.56)となっている。
- また、「現行の規制値では納得できない」は、「東北・関東」では第5位(1.75)なのに対して、「東北・関東以外」は3位(1.94)となっている。
- 年度別では、「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」と「政府の情報公開が不十分」は、平成25年度では「東北・関東以外」が多いのに対し、今回調査では「東北・関東」が多くなっている。

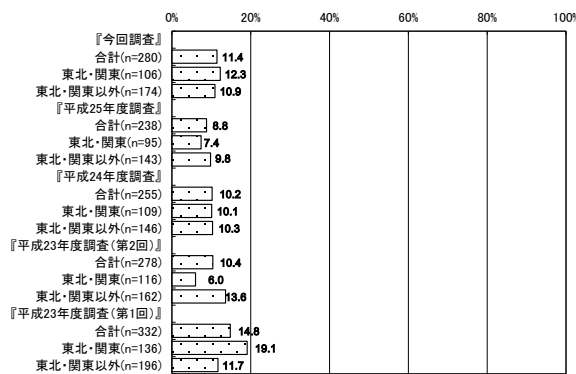
図表 5-3①. 過去に経験したことがない事態のため(居住地別) >



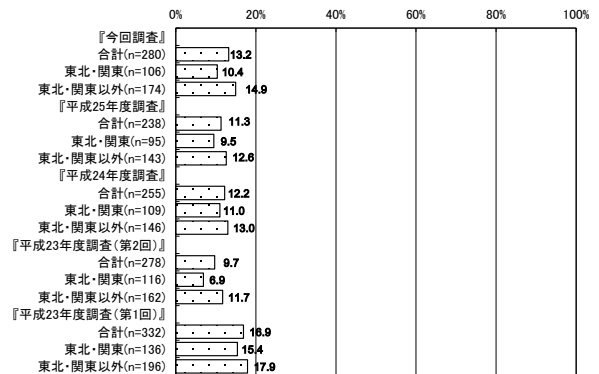
図表 5-3②. 放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため<居住地別>



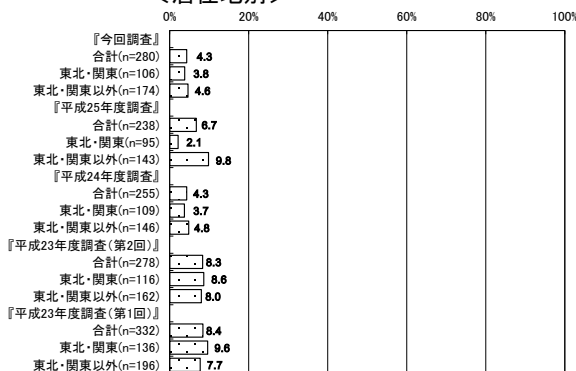
図表 5-3③. 政府の情報公開が不十分<居住地別>



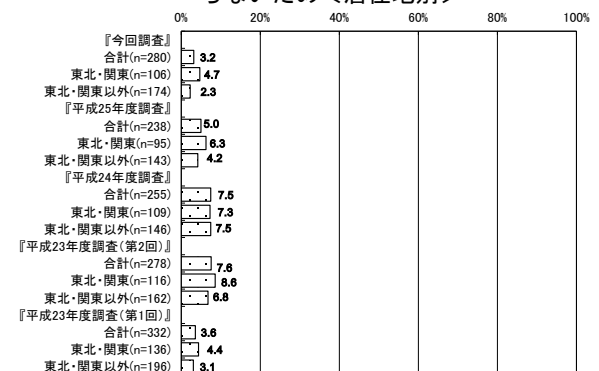
図表 5-3④. 安全性についての科学的な根拠が納得できない<居住地別>



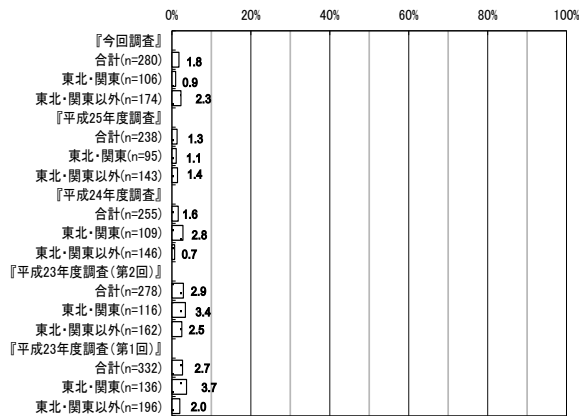
図表 5-3⑤. 食品の検査体制に不安を感じる<居住地別>



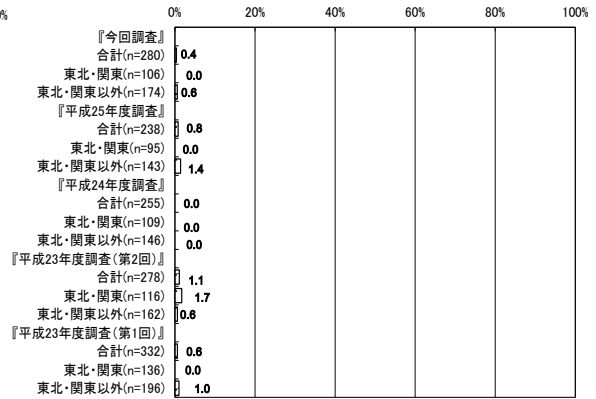
図表 5-3⑥. 自分の被ばく量がどの程度か解らないため<居住地別>



図表 5-3⑦. 現行の規制値では納得できない  
＜居住地別＞



図表 5-3⑧. 周囲が心配しているので自分も心配になる＜居住地別＞



図表 5-3.⑨放射線物質について不安を感じる理由の属性別スコア（居住地別）

	過去に経験したことがない事象のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	安全性についての科学的な根拠が納得できない	政府の情報公開が不十分	現行の規制値では納得できない	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	食品の検査体制に不安を感じる	周囲が心配しているので自分も心配になる
合計(n=280)	2.53	1.99	1.95	1.93	1.88	1.63	1.59	1.29
東北・関東(n=106)	2.47	2.01	2.00	1.91	1.75	1.67	1.52	1.13
東北・関東以外(n=174)	2.56	1.98	1.92	1.93	1.94	1.60	1.63	1.38

※網掛け：各居住地の上位1位

※合計の平均スコアが高いもの順に並び替え。



## II. 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について

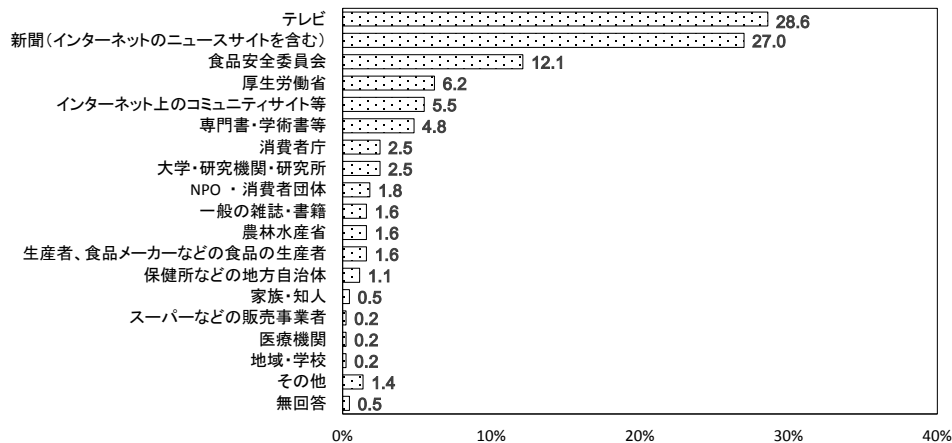
### 6. 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（問6）

#### 6-1 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（第1位）

■ 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報入手先で利用頻度が高いものは、「テレビ」と「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」が上位2位。

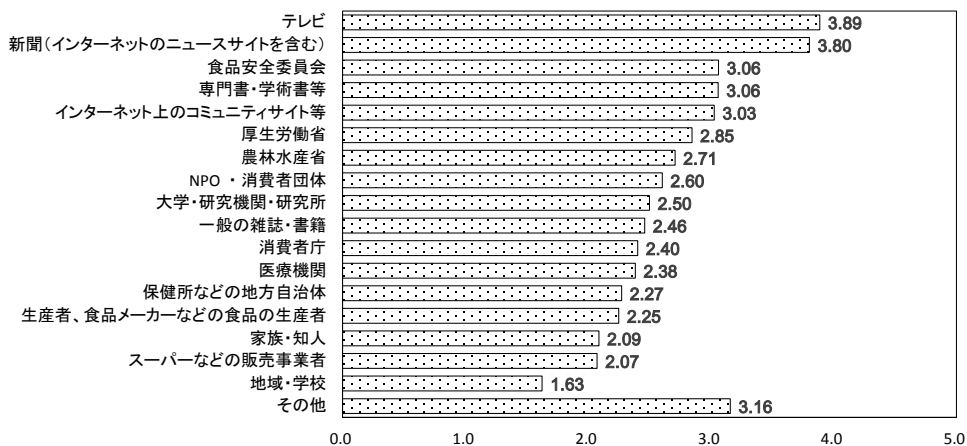
- 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報入手先で利用頻度が高いものを尋ねると、「テレビ」（28.6%）と「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」（27.0%）が特に多く、次いで「食品安全委員会」となっている。
- 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先について第1位から第5位の平均スコア（1位：5点～5位：1点の平均得点）で比較すると、上位3位は第1位の回答割合と変わらないが、「専門書・学術書等」「食品安全委員会」と同率で第3位と高くなっている。

図表 6-1①放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（第1位）



※合計の回答割合が多いもの順に並び替え。

図表 6-1②放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（平均スコア）



※1位:5点、2位:4点、3位:3点、4位:4点、5位:5点

※合計の平均スコアが高いもの順に並び替え。

## その他（放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先）

### 第1位（回答者数6人）

茨城県農林水産部販売流通課より定期的に検査結果が FAX されて放射性物質検査結果情報が入ってきている、自社独自の分析結果、ラジオ、国際機関の情報、学識経験者による講演などの回答があった。

### 第2位（回答者数2人）

専門家の講演などの回答があった。

### 第3位（回答者数3人）

関連学会や機関のホームページ、中部原子力懇談会、ラジオとの回答があった。

### 第4位（回答者数5人）

専門家による講演会、分析機関、国民生活センター、かかりつけ医、広島県下の被爆に関する資料との回答があった。

### 第5位（回答者数2人）

専門家に実際に問い合わせるケースが多い、勤め先の生協で放射性物質の検査に携わっていて生の検査データに触れる機会があるとの回答があった。

6-2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先（上位5位・年度別）

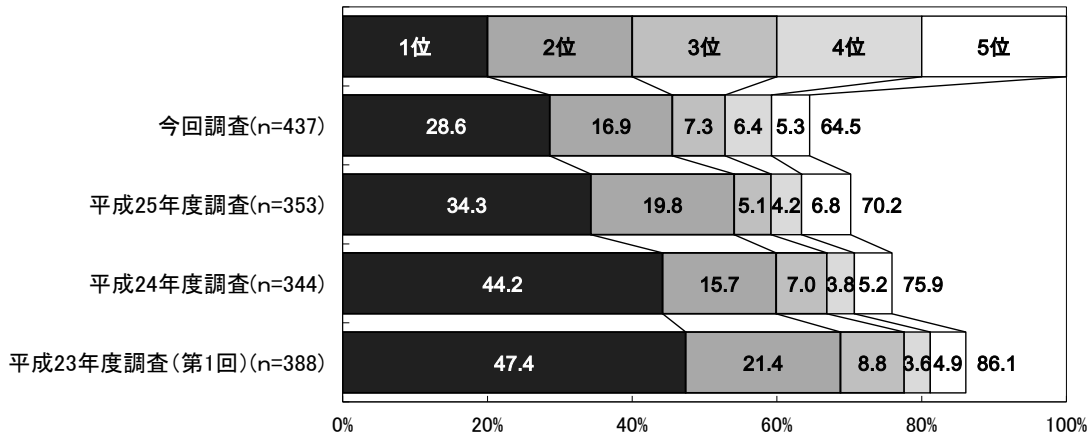
- 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報入手先で利用頻度が高いものは、「テレビ」と「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」が上位2つ。
- しかし、「テレビ」は平成23年度以降、年々低下している。

- 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報入手先で利用頻度が高いものについて尋ね、これを年度別に比較したところ、「テレビ」、「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」、「食品安全委員会」という上位3位は、平成23年度以降変動はない。
- 第1位から第5位までの合計を比べたところ、「テレビ」、「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」、「一般の雑誌・書籍」、「食品安全委員会」は、減少傾向が見られる。
- 一方で、「専門書・学術書等」、「消費者庁」、「大学・研究機関・研究所」は増加傾向が見られる。
- 「厚生労働省」、「保健所などの地方自治体」は、前年度まで増加傾向にあったが今年度は低下している。

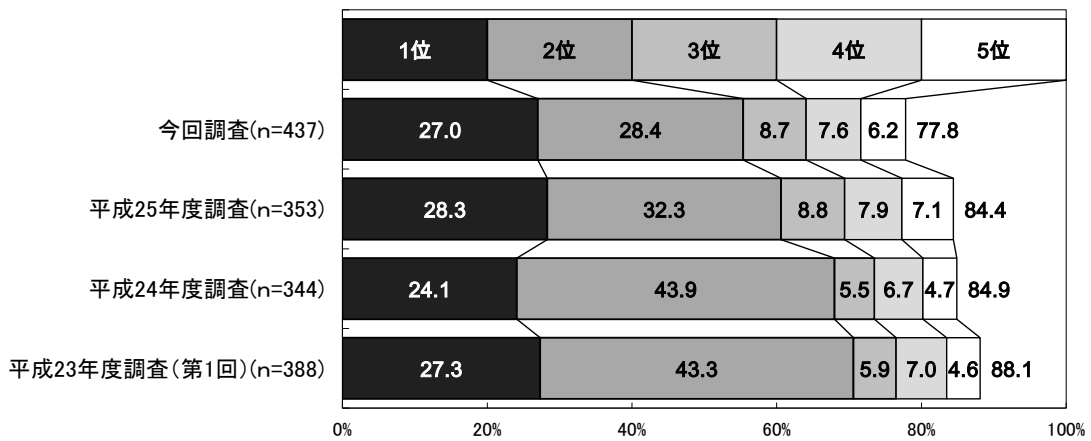
図表 6-2. 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
（上位5位・年度別）

年度	1位	2位	3位	4位	5位
今回調査	テレビ (28.6%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (27.0%)	食品安全委員会 (12.1%)	厚生労働省 (6.2%)	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど) (5.5%)
平成25年度	テレビ (34.3%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (28.3%)	食品安全委員会 (13.6%)	厚生労働省 (7.1%)	専門書・学術書等 (4.2%)
平成24年度	テレビ (44.2%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (24.1%)	食品安全委員会 (10.5%)	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど) (4.1%)	厚生労働省 (3.5%)
平成23年度(第1回)	テレビ (47.4%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (27.3%)	食品安全委員会 (11.1%)	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど) (3.6%)	厚生労働省 (2.8%)

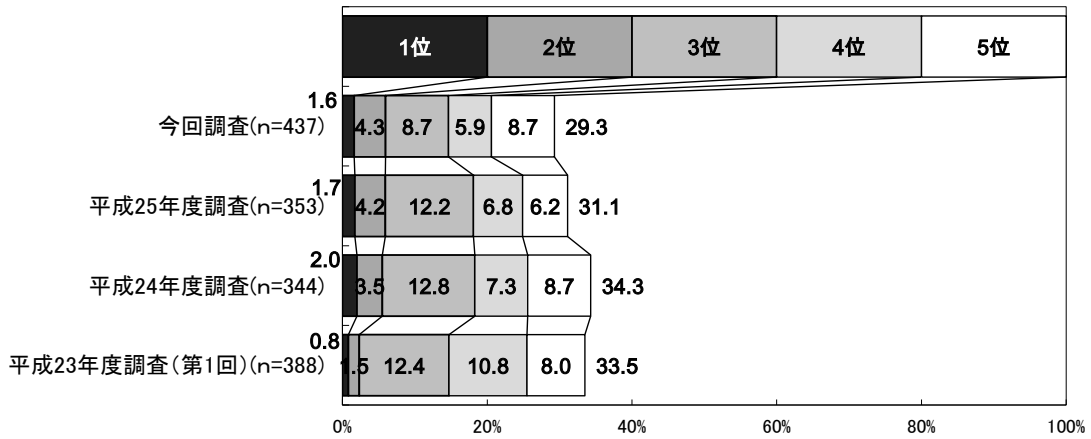
図表 6-2.1 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
(テレビ・年度別)



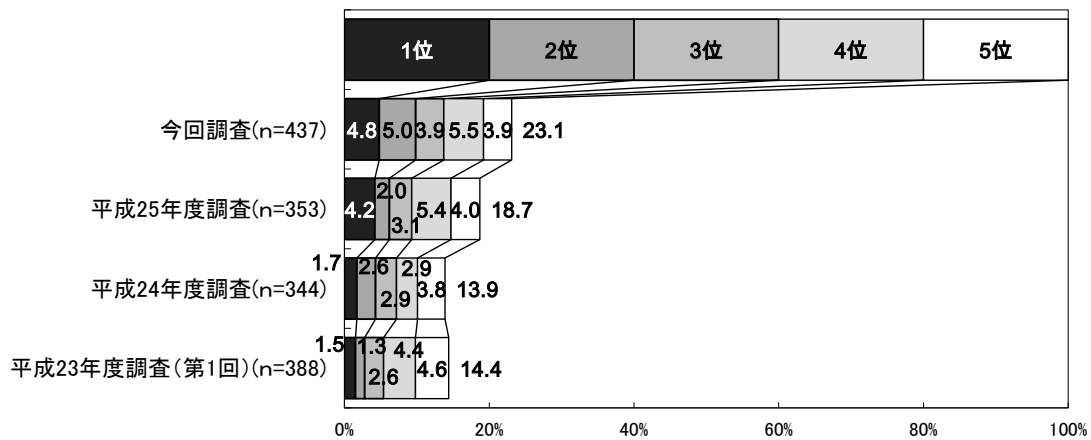
図表 6-2.2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
＜新聞（インターネットのニュースサイトを含む）・年度別＞



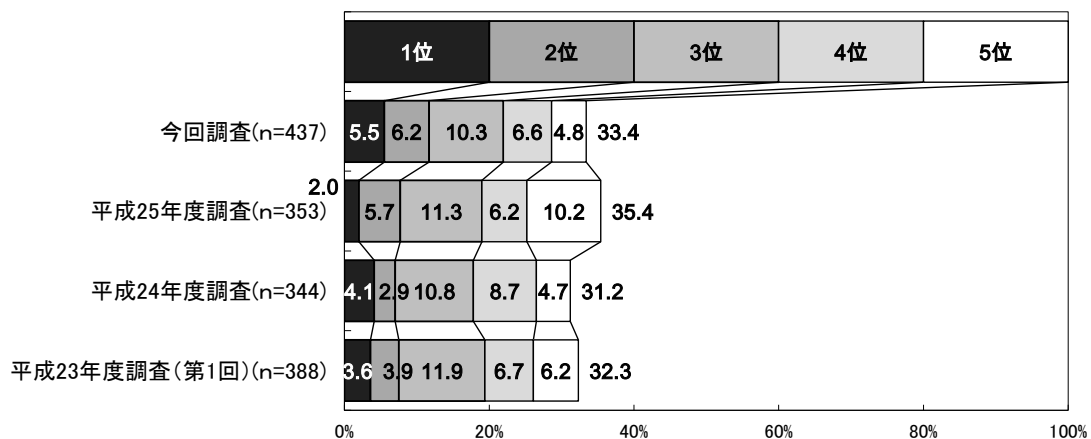
図表 6-2.3 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
＜一般の雑誌・書籍・年度別＞



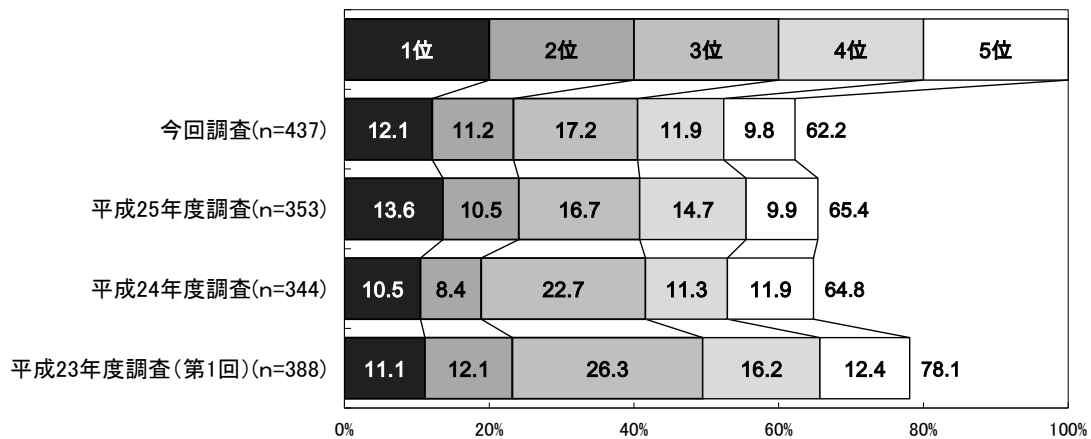
図表 6-2.4 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <専門書・学術書等・年度別>



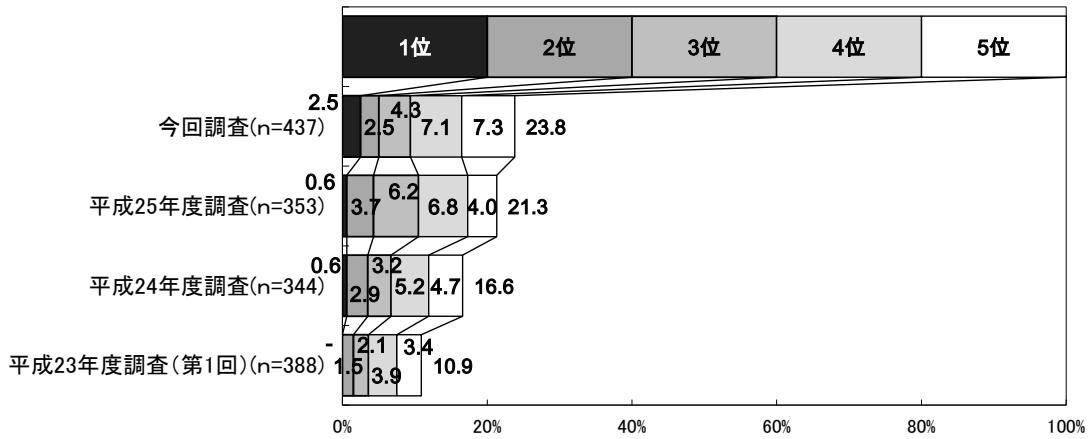
図表 6-2.5 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <インターネット上のコミュニティサイト等（SNS・ブログなど）・年度別>



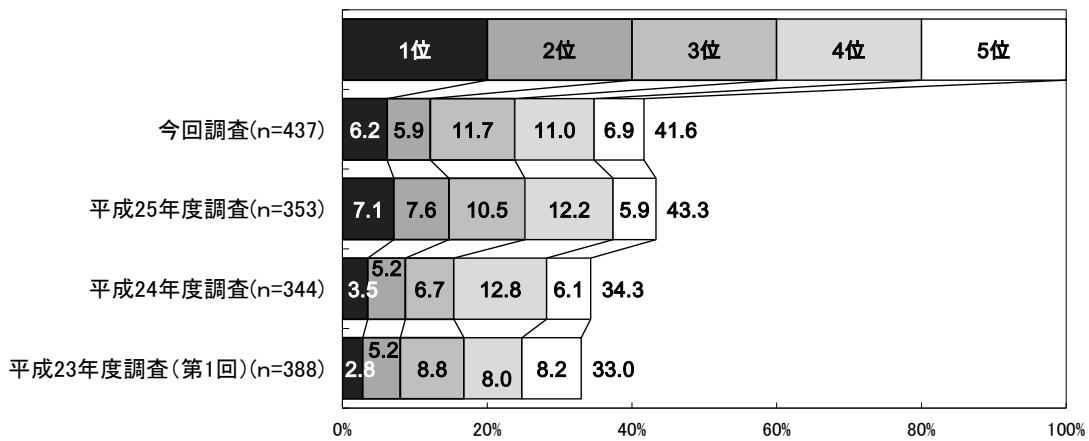
図表 6-2.6 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <食品安全委員会・年度別>



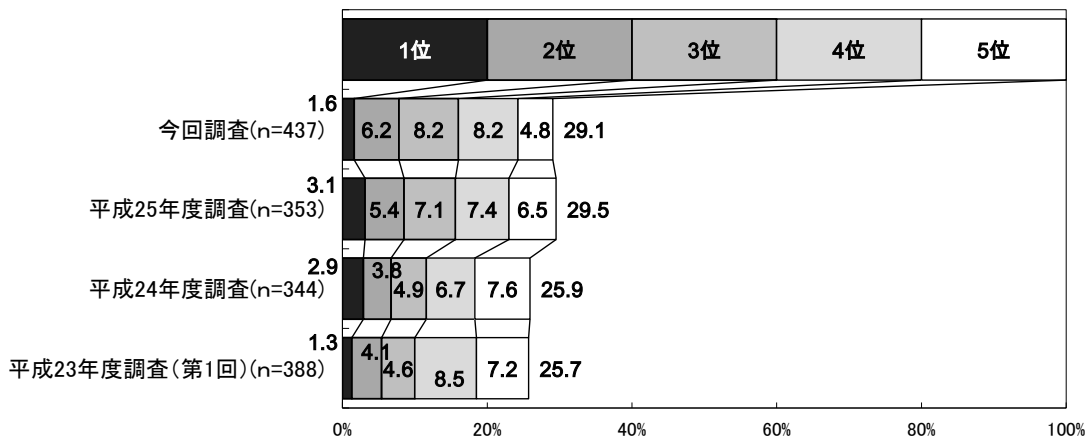
図表 6-2.7 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <消費者庁・年度別>



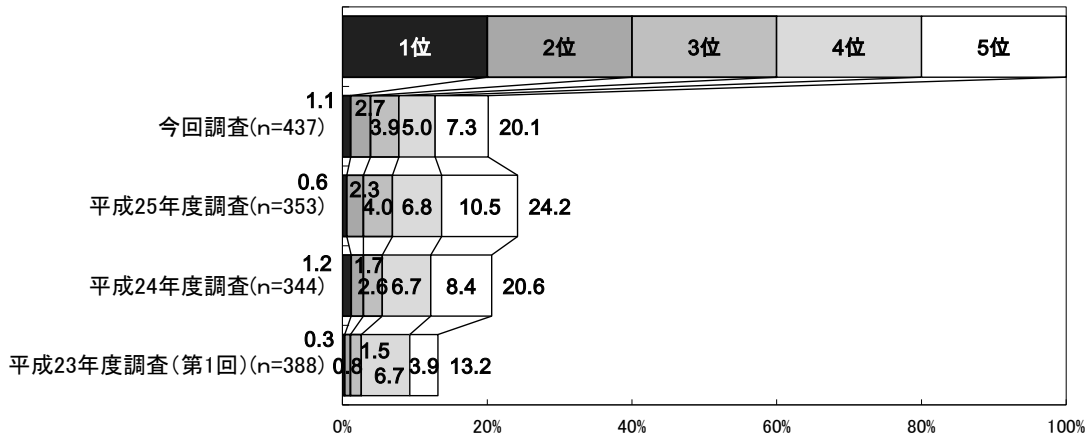
図表 6-2.8 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <厚生労働省・年度別>



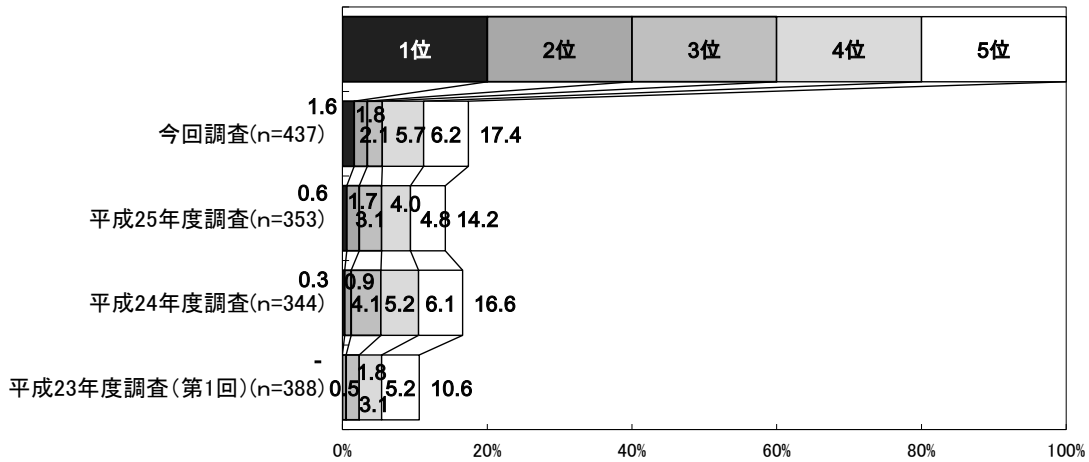
図表 6-2.9 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <農林水産省・年度別>



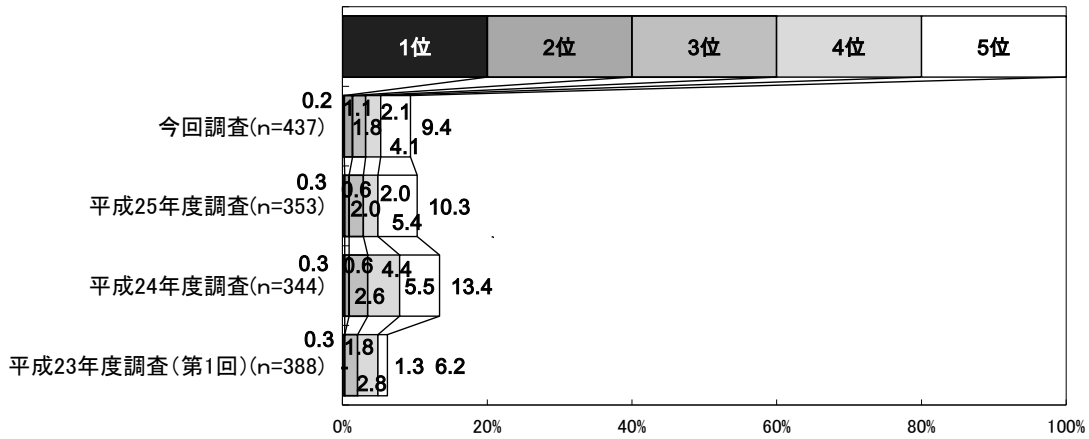
図表 6-2.10 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <保健所などの地方自治体・年度別>



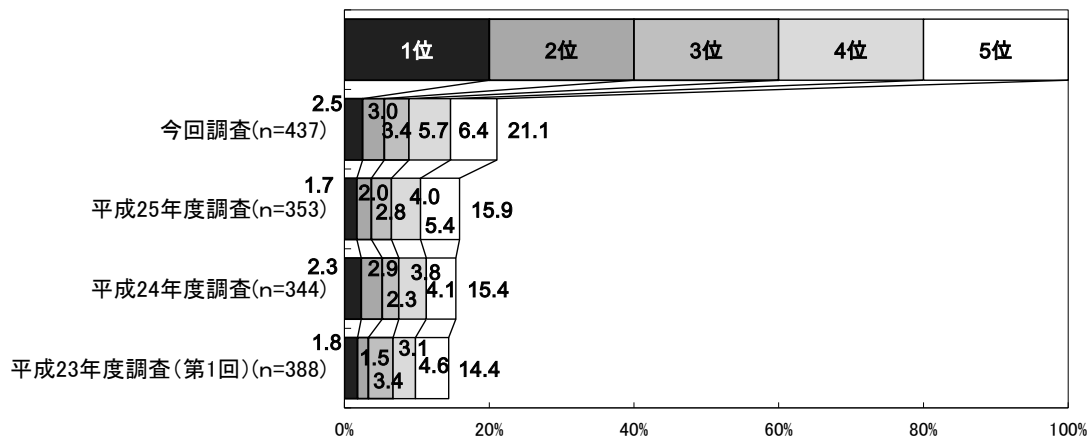
図表 6-2.11 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <生産者、食品メーカーなどの食品の生産者・年度別>



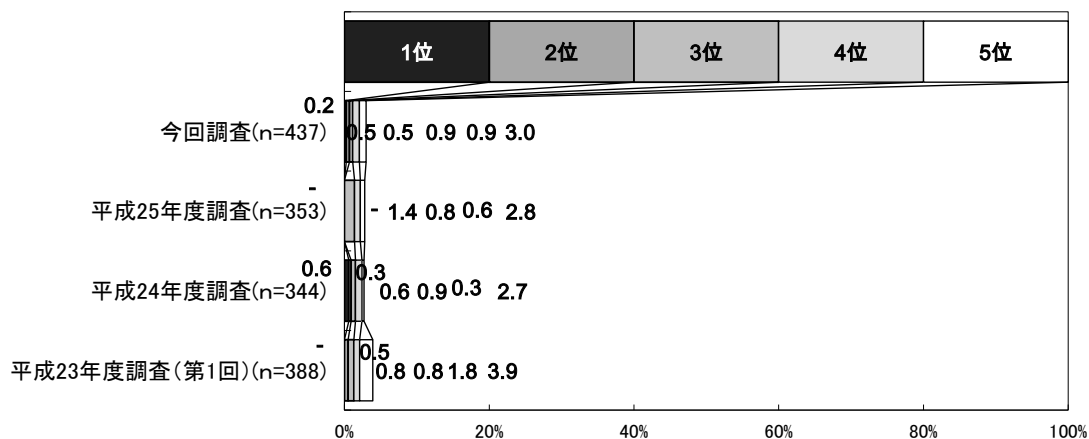
図表 6-2.12 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <スーパーなどの販売事業者・年度別>



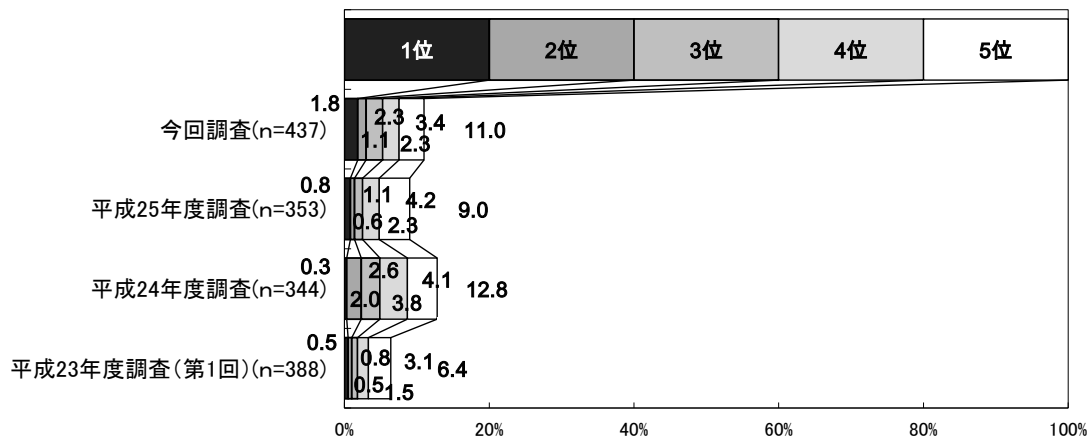
図表 6-2.13 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <大学・研究機関・研究所・年度別>



図表 6-2.14 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <医療機関・年度別>

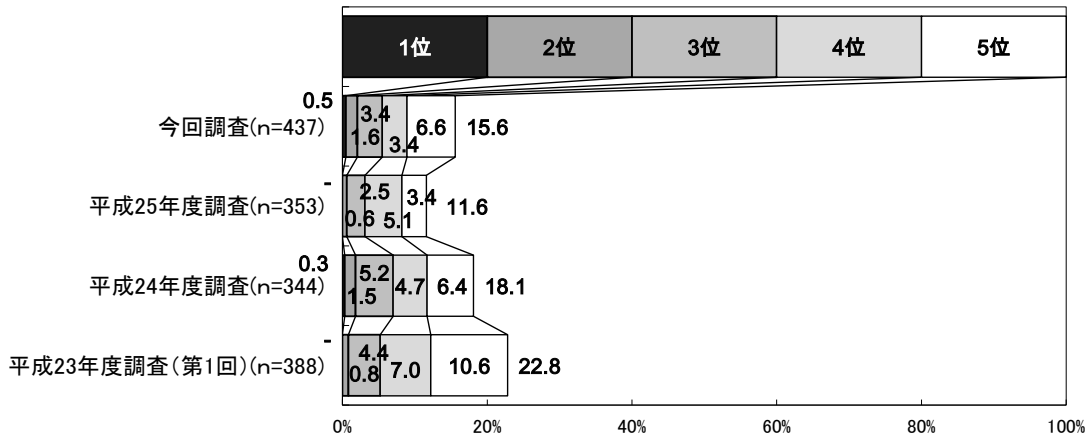


図表 6-2.15 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <NPO・消費者団体・年度別>

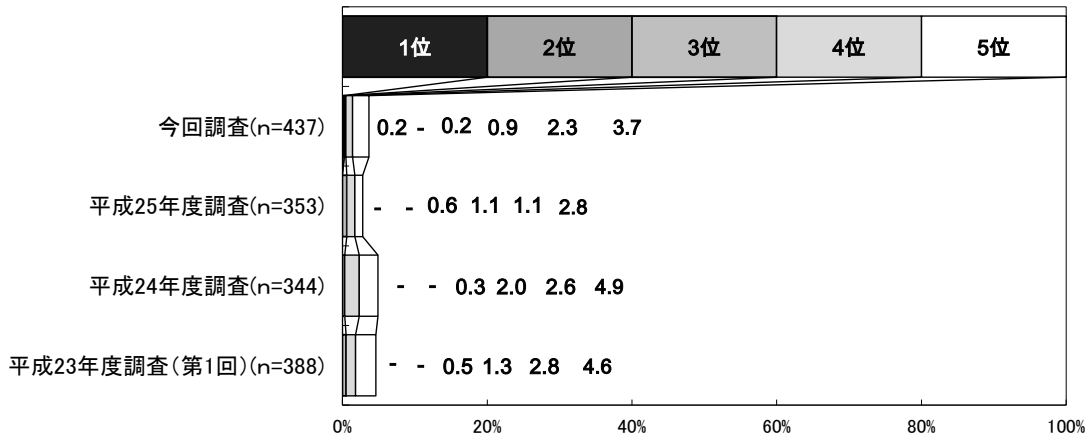




図表 6-2.16 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <家族・知人・年度別>



図表 6-2.17 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
 <地域・学校・年度別>



### 6-3 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の属性別入手先（平均スコア）

- 年代別にみると、20代、30代の若い層は「医療機関」、70歳以上では「専門書・学術書等」が高い。
- 職務経験別では、医療職経験者は「専門書・学術書等」、食品関係行政職経験者は「スーパーなどの販売業者」がそれぞれ高い。

- 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報入手先で利用頻度が第1位のものを属性別平均スコアで比較したところ、性別ではほとんど差は見られない。
- 年代別では、20代、30代は「医療機関」(5.00、4.00)、40代では「テレビ」(3.94)、50代、60代は「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」(3.92、4.00)、70歳以上は「専門書・学術書等」(4.00)が高い。
- 職務経験別でみると、食品生産・加工経験者、食品流通・販売経験者、研究職経験者、教育職経験者、その他消費者（又は全体的に）「テレビ」、「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」が高かったが、医療職経験者は「専門書・学術研究書等」(3.92)、食品行政経験者は「スーパーなどの販売事業者」(4.00)がそれぞれ第1位、「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」(3.47、3.73)が第2位であった。
- モニター継続別では、平成26年度新規のモニターは「医療機関」が最も高く(4.50)、26年度以前から継続しているモニターは「テレビ」が最も高い(3.92)。
- モニター会議出席については、ほとんど違いは見られない。
- 居住地別では、「テレビ」は中国・四国(4.28)、近畿(4.05)、東京(4.07)、甲信越(3.81)、「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」は九州(4.19)、関東(3.77)、「スーパーなどの販売事業者」は東北(3.75)、「医療機関」は東海(5.00)がそれぞれ最も高くなっている。
- また、東京は「NPO・消費者団体」が2位(3.75)と高くなっている。

図表 6-3①放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
(上位 5 位・平均スコア)

		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
合計		テレビ (3.89)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.80)	食品安全委員会 (3.06)	専門書・学術書 等 (3.06)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (3.03)
性別	男性	テレビ (3.84)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.79)	食品安全委員会 (3.11)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (3.07)	専門書・学術書 等 (3.06)
	女性	テレビ (3.94)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.82)	専門書・学術書 等 (3.06)	食品安全委員会 (3.00)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (2.97)
年代	20～29 歳	医療機関 (5.00)	テレビ (4.07)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.55)	厚生労働省 (3.50)	・インターネット 上のコミュニ ティサイト等 ・大学・研究機 関・研究所 (3.20)
	30～39 歳	医療機関 (4.00)	テレビ (3.94)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.67)	食品安全委員会 (3.31)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (3.25)
	40～49 歳	テレビ (3.94)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.65)	NPO・消費者団 体 (3.50)	専門書・学術書 等 (3.12)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (3.09)
	50～59 歳	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.92)	テレビ (3.85)	専門書・学術書 等 (3.07)	食品安全委員会 (2.97)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (2.83)
	60～69 歳	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (4.00)	テレビ (3.93)	食品安全委員会 (3.15)	厚生労働省 (2.91)	専門書・学術書 等 (2.88)
	70 歳以上	専門書・学術書 等 (4.00)	新聞（インター ネットのニュー スサイトを含 む） (3.59)	テレビ (3.50)	食品安全委員会 (3.33)	インターネット 上のコミュニテ ィサイト等 (3.14)

		1位	2位	3位	4位	5位
合計		テレビ (3.89)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.80)	食品安全委員会 (3.06)	専門書・学術書等 (3.06)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.03)
職務経験	食品生産・加工経験者	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.95)	テレビ (3.95)	食品安全委員会 (2.98)	インターネット上のコミュニティサイト等 (2.94)	厚生労働省 (2.86)
	食品流通・販売経験者	テレビ (3.61)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.58)	食品安全委員会 (3.37)	専門書・学術書等 (3.22)	生産者、食品メーカーなどの食品の生産者 (3.08)
	研究職経験者	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.81)	テレビ (3.52)	専門書・学術書等 (3.28)	食品安全委員会 (3.19)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.10)
	医療職経験者	専門書・学術書等 (3.92)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.47)	テレビ (3.43)	厚生労働省 (3.29)	医療機関 (3.25)
	教育職経験者	テレビ (4.00)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.74)	専門書・学術書等 (3.44)	一般の雑誌・書籍 (3.20)	・食品安全委員会 インターネット上のコミュニティサイト等 ・農林水産省 (3.00)
	食品関係行政職経験者	スーパーなどの販売事業者 (4.00)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.73)	NPO・消費者団体 (3.50)	厚生労働省 (3.46)	テレビ (3.44)
	その他消費者	テレビ (4.25)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.96)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.21)	大学・研究機関・研究所 (3.10)	食品安全委員会 (2.91)
モニター継続	平成26年度から	医療機関 (4.50)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.85)	テレビ (3.77)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.13)	NPO・消費者団体 (3.09)
	平成25年度以前から	テレビ (3.92)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.79)	食品安全委員会 (3.10)	専門書・学術書等 (3.10)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.00)
モニター会議出席	経験あり	テレビ (3.85)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.81)	食品安全委員会 (3.05)	専門書・学術書等 (3.05)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.00)
	経験なし	テレビ (4.26)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.77)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.44)	食品安全委員会 (3.27)	専門書・学術書等 (3.11)

		1位	2位	3位	4位	5位
合計		テレビ (3.89)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.80)	食品安全委員会 (3.06)	専門書・学術書等 (3.06)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.03)
職務経験	北海道	食品安全委員会 (3.91)	テレビ (3.78)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.00)	NPO・消費者団体 (3.00)	消費者庁 (3.00)
	東北	スーパーなどの販売事業者 (3.75)	テレビ (3.65)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.63)	農林水産省 (3.40)	・専門書・学術書等 ・インターネット上のコミュニティサイト等 (3.17)
	関東	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.77)	テレビ (3.73)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.12)	厚生労働省 (3.10)	食品安全委員会 (2.97)
	東京	テレビ (4.07)	NPO・消費者団体 (3.75)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.53)	専門書・学術書等 (3.39)	食品安全委員会 (3.29)
	甲信越	テレビ (3.81)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.53)	厚生労働省 (3.33)	専門書・学術書等 (3.20)	保健所などの地方自治体 (3.11)
	東海	医療機関 (5.00)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.83)	テレビ (3.52)	食品安全委員会 (3.12)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.12)
	近畿	テレビ (4.05)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.89)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.18)	食品安全委員会 (3.11)	専門書・学術書等 (3.00)
	中国・四国	テレビ (4.29)	医療機関 (4.00)	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (3.91)	専門書・学術書等 (3.00)	インターネット上のコミュニティサイト等 (2.94)
	九州	新聞（インターネットのニュースサイトを含む） (4.19)	医療機関 (4.00)	テレビ (3.81)	インターネット上のコミュニティサイト等 (3.11)	・食品安全委員会 ・大学・研究機関・研究所 (3.00)

図表 6-3②放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先  
(平均スコア)

		テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	食品安全委員会	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等	厚生労働省	農林水産省	NPO・消費者団体	大学・研究機関・研究所
合計(n=437)		3.89	3.80	3.06	3.06	3.03	2.85	2.71	2.60	2.50
性別	男性(n=238)	3.84	3.79	3.11	3.06	3.07	2.82	2.67	2.35	2.40
	女性(n=199)	3.94	3.82	3.00	3.06	2.97	2.89	2.77	2.84	2.64
年代	20~29歳(n=18)	4.07	3.55	2.57	2.33	3.20	3.50	2.60	2.00	3.20
	30~39歳(n=77)	3.94	3.67	3.31	2.94	3.25	3.12	2.70	2.50	2.67
	40~49歳(n=102)	3.92	3.65	2.89	3.12	3.09	3.00	2.76	3.50	2.43
	50~59歳(n=122)	3.85	3.92	2.97	3.07	2.83	2.58	2.78	2.38	2.62
	60~69歳(n=91)	3.93	4.00	3.15	2.88	2.86	2.91	2.70	1.63	1.86
	70歳以上(n=27)	3.50	3.59	3.33	4.00	3.14	2.54	2.29	2.60	2.67
職務経験	食品生産・加工経験者(n=134)	3.95	3.95	2.98	2.48	2.94	2.86	2.76	2.60	2.43
	食品流通・販売経験者(n=70)	3.61	3.58	3.37	3.22	2.86	2.75	2.54	3.00	2.08
	研究職経験者(n=40)	3.52	3.81	3.19	3.28	3.10	2.58	2.69	2.00	2.50
	医療職経験者(n=41)	3.43	3.47	3.14	3.92	3.08	3.29	2.50	3.00	2.55
	教育職経験者(n=35)	4.00	3.74	3.00	3.44	3.00	2.73	3.00	1.25	2.00
	食品関係行政職経験者(n=17)	3.44	3.73	3.00	3.00	3.00	3.46	2.60	3.50	2.00
モニター継続	経験あり(n=406)	4.25	3.96	2.91	2.56	3.21	2.54	2.82	2.61	3.10
	経験なし(n=31)	3.77	3.85	2.92	2.97	3.13	2.87	2.53	3.09	2.92
モニター会議出席	経験あり(n=406)	3.92	3.79	3.10	3.10	3.00	2.84	2.76	2.46	2.33
	経験なし(n=31)	3.85	3.81	3.05	3.05	3.00	2.88	2.69	2.65	2.48
居住地	北海道(n=14)	4.26	3.77	3.27	3.11	3.44	2.50	3.00	1.50	3.00
	東北(n=24)	3.78	3.55	3.91	2.50	3.00	2.86	2.57	3.00	1.00
	関東(n=98)	3.65	3.63	2.87	3.17	3.17	2.33	3.40	2.00	2.25
	東京(n=60)	3.73	3.77	2.97	2.92	3.12	3.10	2.91	2.86	2.59
	甲信越(n=24)	4.07	3.53	3.29	3.39	2.41	2.84	2.70	3.75	2.00
	東海(n=45)	3.81	3.53	2.88	3.20	3.10	3.33	2.60	3.00	2.83
	近畿(n=90)	3.52	3.83	3.12	3.10	3.12	2.53	2.10	2.57	2.82
	中国・四国(n=41)	4.05	3.89	3.11	3.00	3.18	2.70	2.52	2.56	2.67
	九州(n=41)	4.29	3.91	2.77	3.00	2.94	2.88	2.77	1.60	2.33
九州(n=41)	3.81	4.19	3.00	2.25	3.11	2.92	2.78	1.83	3.00	

		一般の雑誌・書籍	消費者庁	医療機関	保健所などの地方自治体	生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	家族・知人	スーパーなどの販売事業者	地域・学校	その他
合計(n=437)		2.46	2.40	2.38	2.27	2.25	2.09	2.07	1.63	3.16
性別	男性(n=238)	2.61	2.28	2.00	2.39	2.21	1.93	2.64	1.00	2.75
	女性(n=199)	2.25	2.62	2.63	2.18	2.28	2.20	1.78	2.00	3.86
年代	20~29歳(n=18)	1.67	3.00	5.00	2.00	2.20	1.75	2.75	-	-
	30~39歳(n=77)	2.24	2.35	4.00	2.00	2.00	2.33	1.64	2.50	5.00
	40~49歳(n=102)	2.69	2.35	2.40	2.12	2.59	2.33	2.08	1.50	4.20
	50~59歳(n=122)	2.44	2.25	1.80	2.55	2.50	2.06	2.30	1.50	2.29
	60~69歳(n=91)	2.38	2.78	1.00	2.33	1.56	1.00	2.33	1.00	2.67
	70歳以上(n=27)	2.57	1.71	-	2.50	1.50	1.00	1.00	1.00	3.33
職務経験	食品生産・加工経験者(n=134)	2.33	2.33	1.50	2.48	2.00	2.13	2.33	2.75	3.00
	食品流通・販売経験者(n=70)	2.40	2.47	1.00	2.62	3.08	2.25	2.30	1.25	3.25
	研究職経験者(n=40)	2.85	2.14	1.00	2.60	2.09	1.75	3.00	-	3.33
	医療職経験者(n=41)	2.87	2.22	3.25	2.56	2.57	1.60	1.25	1.00	4.00
	教育職経験者(n=35)	3.20	2.71	2.00	2.00	1.80	1.83	1.00	1.00	2.00
	食品関係行政職経験者(n=17)	-	2.11	-	2.33	3.00	-	4.00	-	-
モニター継続	経験あり(n=406)	2.07	2.80	2.75	1.78	2.06	2.31	1.64	1.40	3.00
	経験なし(n=31)	1.90	2.33	-	2.00	1.91	3.00	2.25	2.00	-
居住地	北海道(n=14)	2.00	3.00	-	1.67	1.00	1.50	-	-	2.00
	東北(n=24)	2.33	2.13	-	2.71	3.14	3.00	3.75	-	2.00
	関東(n=98)	2.45	2.32	1.67	2.74	2.00	2.13	1.50	2.00	3.57
	東京(n=60)	2.47	2.92	2.00	2.11	2.75	2.82	2.33	-	2.80
	甲信越(n=24)	2.17	3.00	1.00	3.11	1.83	2.33	1.50	1.00	-
	東海(n=45)	2.82	2.36	5.00	2.57	2.67	1.20	2.60	2.00	3.00
	近畿(n=90)	2.46	2.36	2.00	1.88	2.06	2.23	1.75	1.00	3.50
	中国・四国(n=41)	2.09	2.25	4.00	1.57	1.00	1.70	2.00	1.00	-
	九州(n=41)	2.58	2.13	4.00	1.60	1.80	1.71	1.50	1.50	-

※1位:5点、2位:4点、3位:3点、4位:2点、5位:1点

※網掛け:各属性における上位5位(濃いグレー:各属性における第1位)

※合計の平均スコアが高いもの順に並び替え。

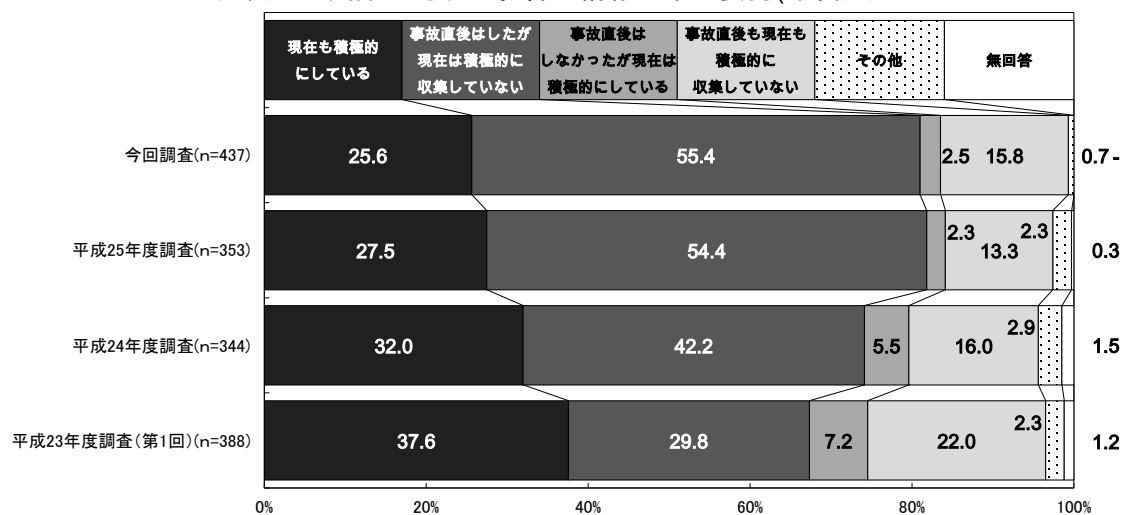
## 7. 食品に対する影響の情報収集の姿勢（問7）

### 7-1 食品に対する影響の情報収集の姿勢の年度別回答割合

■ 東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故後の食品に対する影響の情報収集の姿勢は、事故直後に比べると、年々積極性が薄れている。

- 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っているかを尋ね、年度別に比較したところ、「現在も積極的にしている」という人は、東日本大震災後、年々減少している。
- 「事故直後は積極的にしたが、現在は積極的に収集していない」という人は、増加傾向が見られる。

図表 7-1 食品に対する影響の情報収集の姿勢(年度別)



その他（食品に対する影響の情報収集の姿勢）（回答者数3人）

必要に応じて確認、直後も現在も適当に収集しているなどの回答があった。

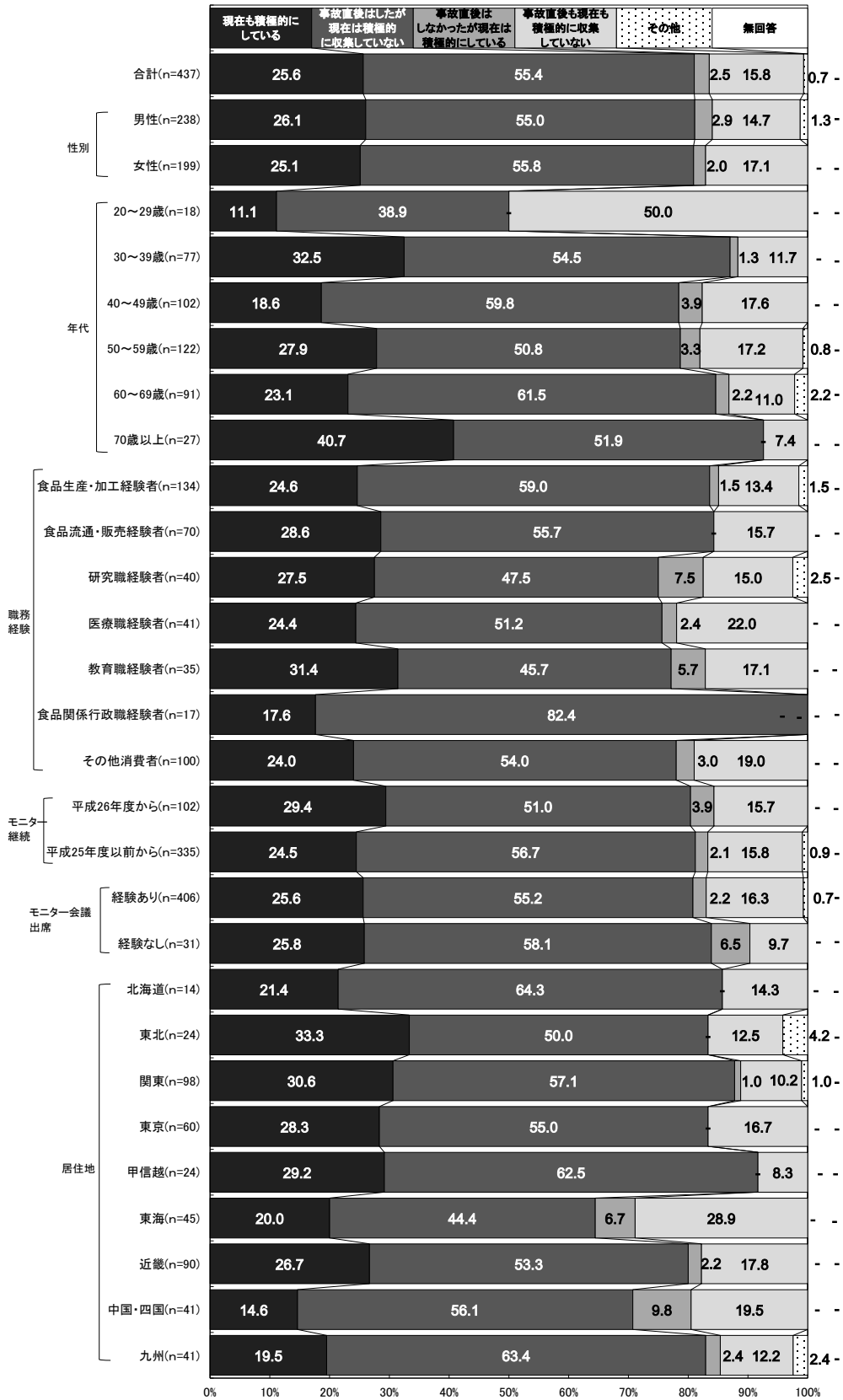
## 7-2 食品に対する影響の情報収集の姿勢の属性別回答割合

■ 年代別では30代、70歳以上、職務経験別では教育職経験者で「現在も積極的にしている」という人が多い。

- 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っているかを属性別に比較したところ、性別ではあまり差は見られない。
- 年代別では、「現在も積極的にしている」という人は、30代(32.5%)、70歳以上(40.7%)で多く、20代がサンプル数は少ないが極端に少ない(11.1%)という有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「現在も積極的にしている」という人は、教育職経験者(31.4%)で最も多く、食品関係行政職経験者(17.6%)で最も少ない。
- モニター継続別では、「現在も積極的にしている」という人は、平成25年度以前から継続しているモニター(24.5%)よりも平成26年度新規のモニター(29.4%)のほうが多い。
- モニター会議出席経験者については、あまり差は見られない。
- 居住地別では、「現在も積極的にしている」という人は、東北(33.3%)、関東(30.6%)、甲信越(29.2%)、東京(28.3%)、近畿(26.7%)で多い。
- 東海は、「事故直後も現在も積極的に収集していない」という人が多い(28.9%)。



図表 7-2 食品に対する影響の情報収集の姿勢(属性別)

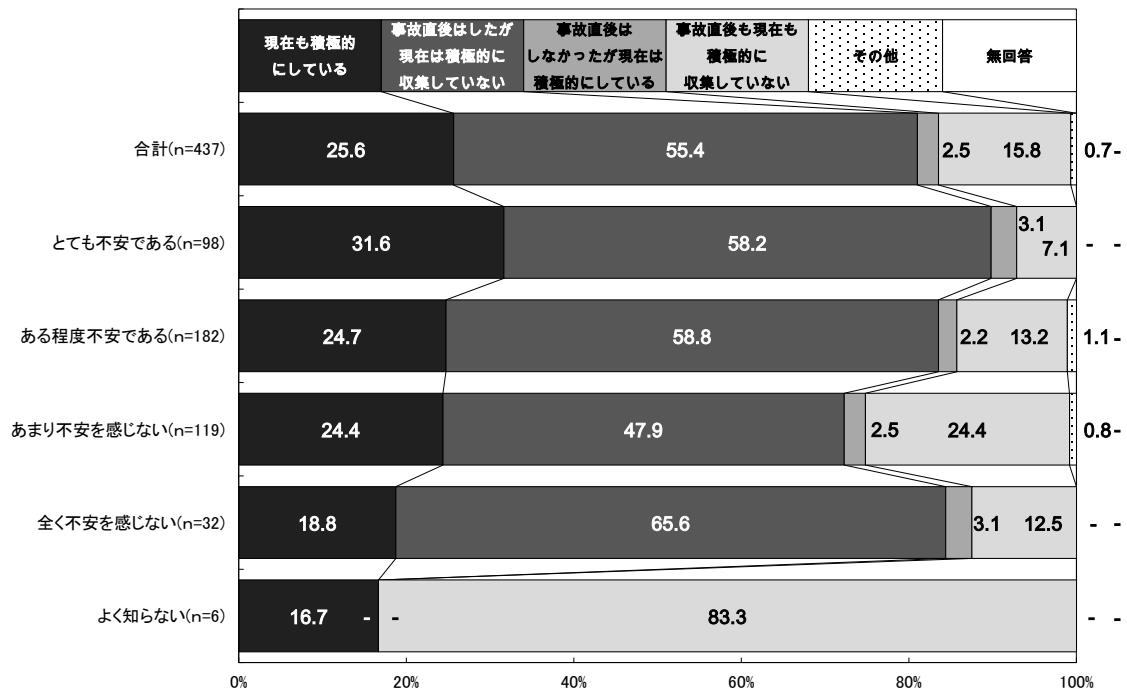


### 7-3 食品に対する影響の情報収集の姿勢と放射性物質に対する不安の程度（問2）の関係

■ 放射性物質に対する不安の程度と食品に対する影響についての情報収集の姿勢の関係は、不安の程度が高くなるほど「現在も積極的にしている」という人が多くなる傾向が見られる。

- 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っているかについての回答と、問2の放射性物質についての不安の程度についての回答との関係を見ると、「とても不安である」と回答した人に、問7で「現在も積極的にしている」と回答した人の割合が多かった(31.6%)。
- また、不安の程度が低くなるほど、「現在も積極的にしている」という人の割合が少なく、「全く不安を感じない」と回答した人のうち「事故直後はしたが現在は積極的に収集していない」(65.6%)という人の割合は、もっとも多い。

図表 7-3 食品に対する影響の情報収集の姿勢と放射性物質に対する不安の程度（問2）の関係



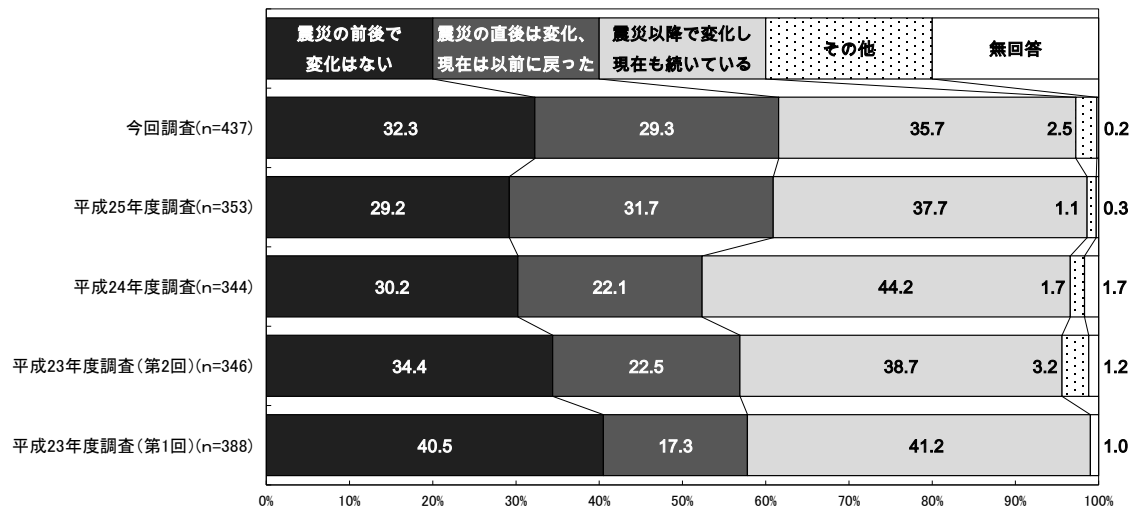
## 8. 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（問8）

### 8-1 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化に関する年度別回答割合

■ 「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」という人は年々低下している。

- 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化について年度別に比較したところ、「東日本大震災の前後で変化はない」「東日本大震災の直後は変化したが、現在は依然と同じに戻った」との回答の合計は61.6%であり、前回調査の60.9%からわずかに増えた。
- 「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」は事故後の平成24年度は44.2%まで増加したが、その後は年々低下し今回調査では35.7%となっている。

図表 8-1 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（年度別）



#### その他（東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化）（回答者数9人）

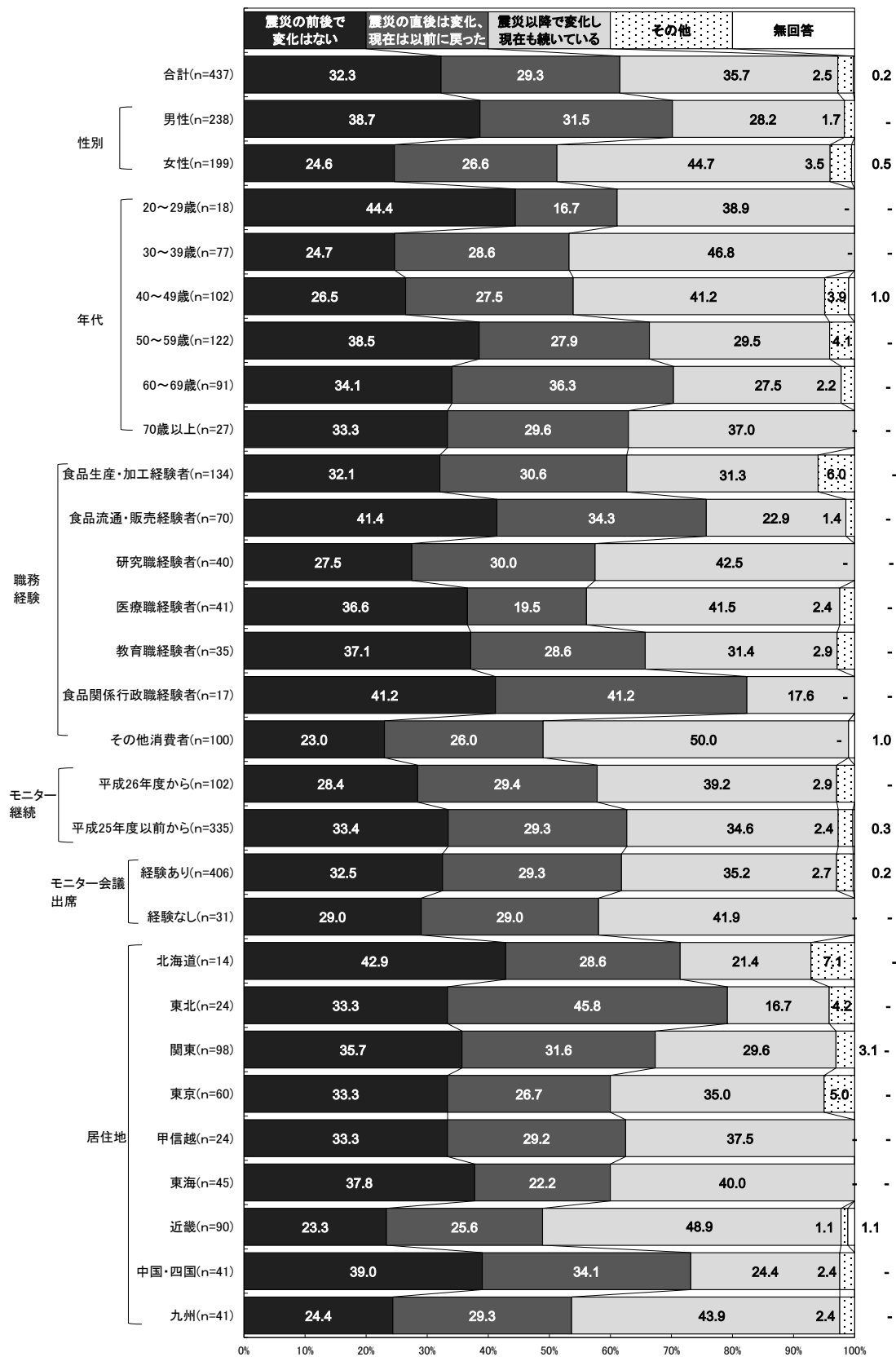
自分が被災地の製造業であり原料原産地に関心があることは当然だが海外の食品については安全かどうか調べるようになった、積極的に被災地の食品を購入するようになった、自分自身で安全であるという確信が持てれば購入するなどの回答があった。

## 8-2 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化に関する属性別回答割合

■ 性別では女性、年代別では 30 代、40 代、70 歳以上、職務経験別では研究職経験者、医療職経験者、その他消費者で「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」という人が多い。

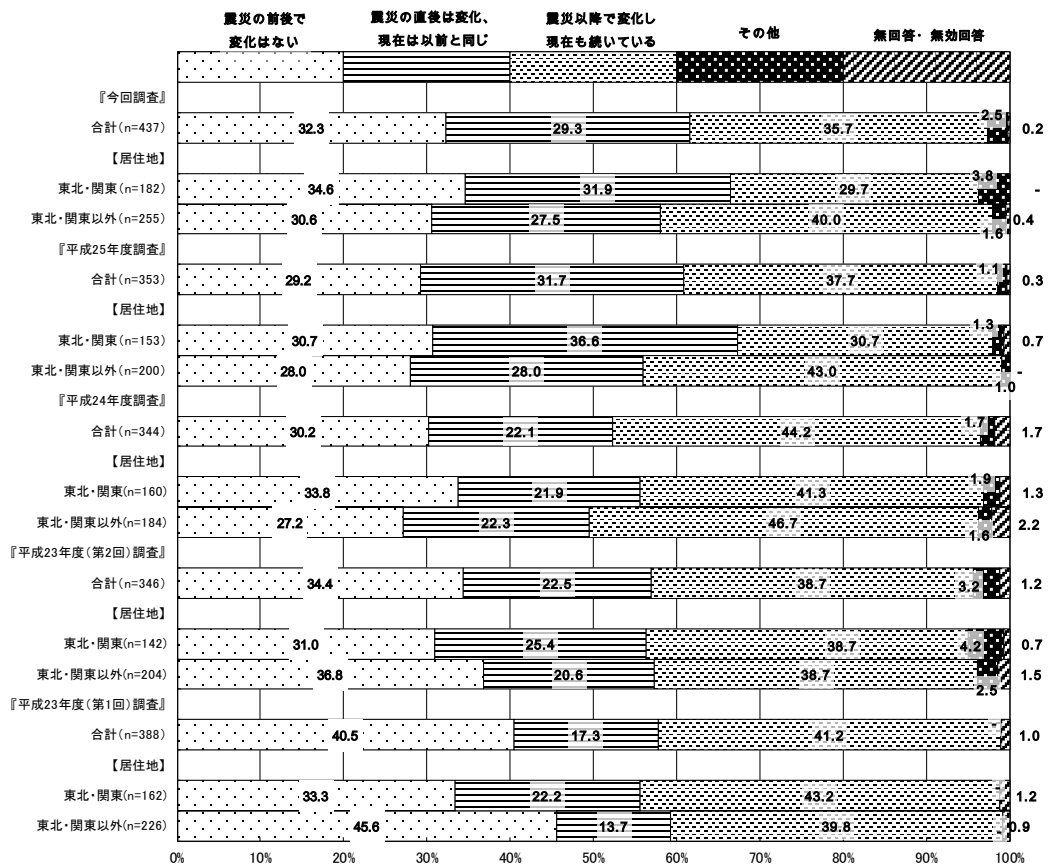
- 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化について属性別に比較したところ、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」という人は、性別では男性(28.2%)より女性(44.7%)の方がが多いという有意な差が見られる。
- 年代別では、20 代では「東日本大震災前後で変化はない」が最も多く(44.4%)、30 代(46.8%)、40 代(41.2%)、70 歳以上(37.0%)は「東日本大震災以降に変化し、現在も続いている」が最も多い。
- 職務経験別では、「東日本大震災前後で変化はない」は食品流通・販売経験者(41.4%)、教育職経験者(37.1%)、食品関係行政職経験者(41.2%)が多く、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」は研究職経験者(42.5%)、医療職経験者(41.5%)、その他消費者(50.0%)が多いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」は平成 25 年度以前からのモニター(34.6%)よりも平成 26 年度からの新規モニター(39.2%)のほうが多い。
- モニター会議出席経験別では、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」は、出席経験のある人(35.2%)より出席経験のない人(41.9%) ほうが多い。
- 居住地別では、「東日本大震災前後で変化はない」は北海道(42.9%)、中国・四国(39.0%)で多く、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」は近畿(48.9%)、九州(43.9%)、東海(40.0%)、甲信越(37.5%)で多い。さらに、「東日本大震災の直後は変化したが、現在は以前に戻った」は東北(45.8%)が多い。

図表 8-2 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（属性別）



- 居住地（「東北・関東」と「東北・関東以外」の2地域別）、年度別で比較すると、前年度と同様の傾向が見られる。また、「東日本大震災以降で変化し、現在も続いている」という人は、東北・関東、東北・関東以外ともに、平成24年度以降年々低下している。

図表 8-2 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（居住地別）

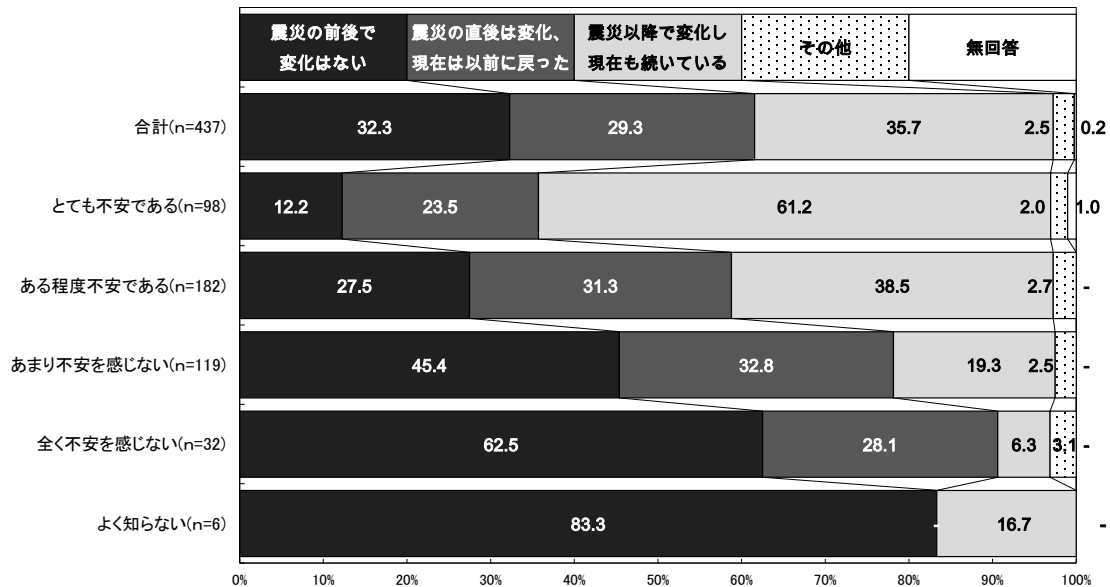


### 8-3 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化と放射性物質に対する不安の程度（問2）との関係

■ 放射性物質に対して不安を感じる人ほど、「東日本大震災以降で変化し、現在も続けている」の割合が高い傾向が見られる。

- 問2で、食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」と回答した者に対し、東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化を尋ねたところ、不安の程度が高くなるほど「東日本大震災以降で変化し、現在も続けている」という回答割合が高くなる傾向が見られる。

図表 8-3 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化と放射性物質に対する不安の程度（問2）との関係



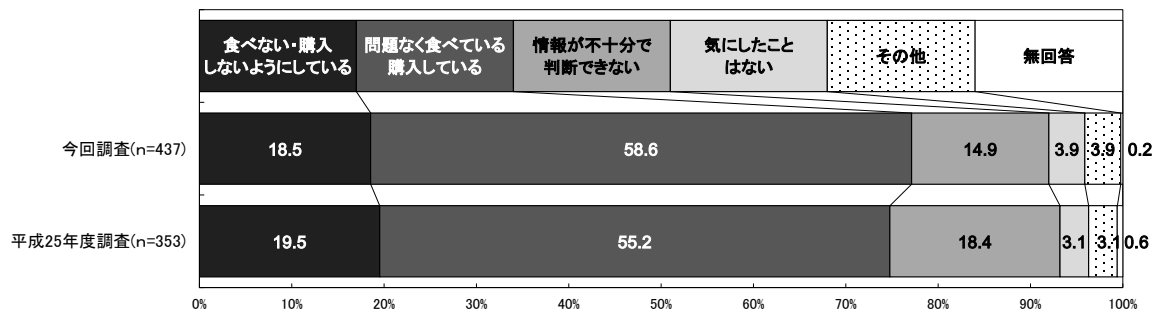
## 9. 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方（問9）

### 9-1 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方に関する年度別回答割合

■ 今回調査では、「現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している」が増加。

- 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方に関して平成25年度と比較したところ、今回調査では「現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している」がやや増加している。（55.2%→58.6%）
- 一方で、「放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない。」（18.4%→14.9%）、「食べない・購入しないようにしている」（19.5%→18.5%）はやや減少している。

図表 9-1 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方（年度別）



※「**食べない・購入しないようにしている**」:放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている。

※「**問題なく食べている・購入している**」:現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している。

※「**情報が不十分で判断できない**」:放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない。

※「**気にしたことはない**」:そもそも放射性物質を含む食品について、気にしたことはない。

#### その他（放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方）（回答者数 14 人）

基準値以下といっても検査の方法等で異なる点があったり、なるべく基準値以下になるような意図を感じるので信用しきれない、食品による、地域というよりは検出されているか（国より厳しい検出限界）どうかの事実に基づき選択している、放射線物質検査を独自にしているなどの回答があった。

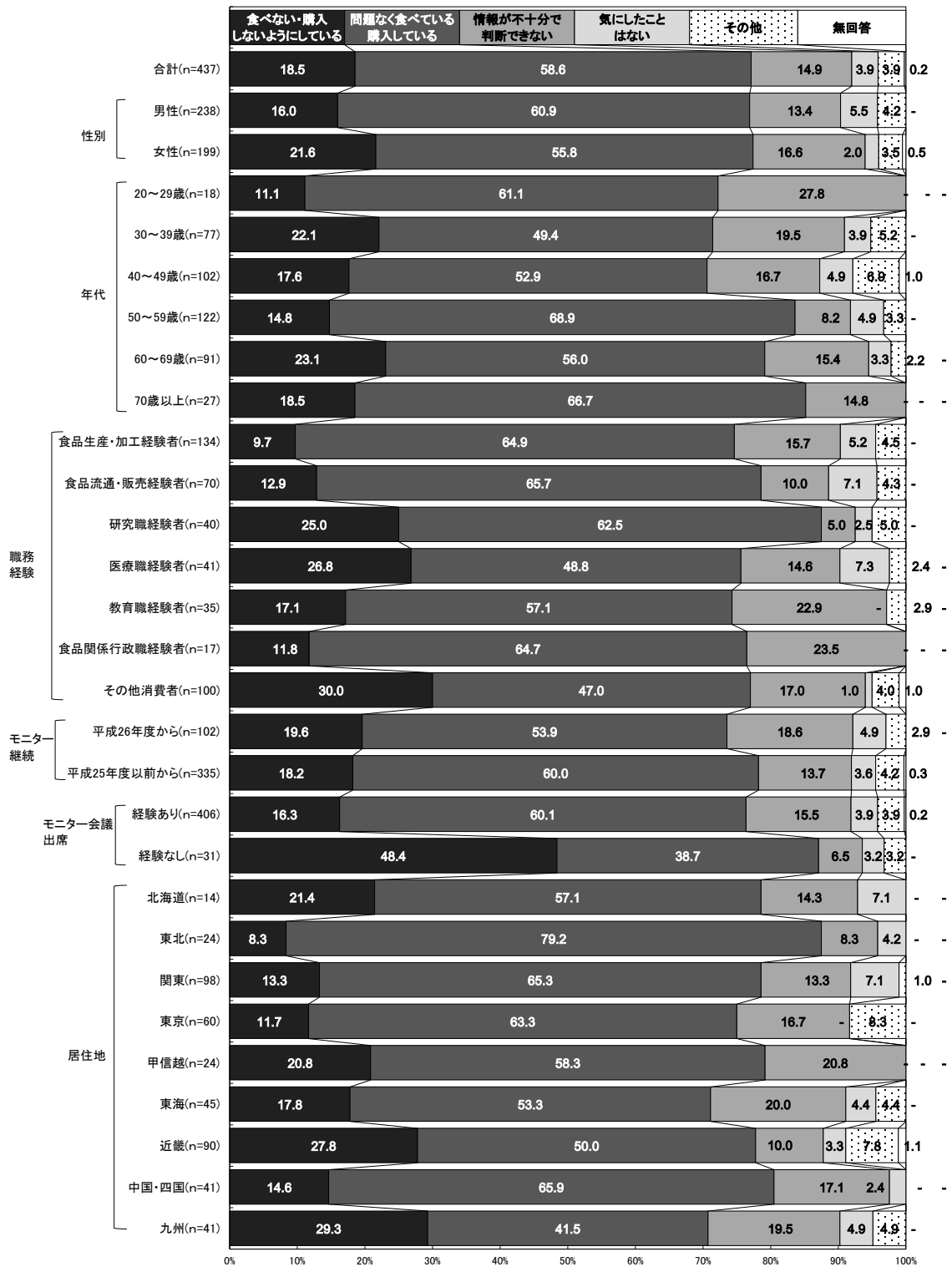


## 9-2 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方に関する属性別回答割合

■ 性別では女性、年代別では 30 代、60 代、職務経験ではその他消費者、医療職経験者、研究職経験者で「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」の割合が高い傾向がみられる。

- 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方について属性別に比較したところ、性別では「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」は、男性（16.0%）より女性（21.6%）の方が高い。
- 年代別では、「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」は、30 代（22.1%）、60 代（23.1%）で高い。
- 職務経験別では、「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」は、その他消費者（30.0%）、医療職経験者（26.8%）、研究職経験者（25.0%）で高いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している」について、平成 26 年度新規のモニター（53.9%）より平成 25 年度以前から継続しているモニター（60.0%）のほうが高い。
- モニター会議出席経験については、「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」で、出席経験のある人（16.3%）より出席経験のない人（48.4%）が高いという有意な差が見られる。
- 居住地別では、「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」について、九州（29.3%）、近畿（27.8%）が高く、東北（8.3%）で低い。

図表 9-2 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方（属性別）



※「**食べない・購入しないようにしている**」:放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている。

※「**問題なく食べている・購入している**」:現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している。

※「**情報が不十分で判断できない**」:放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない。

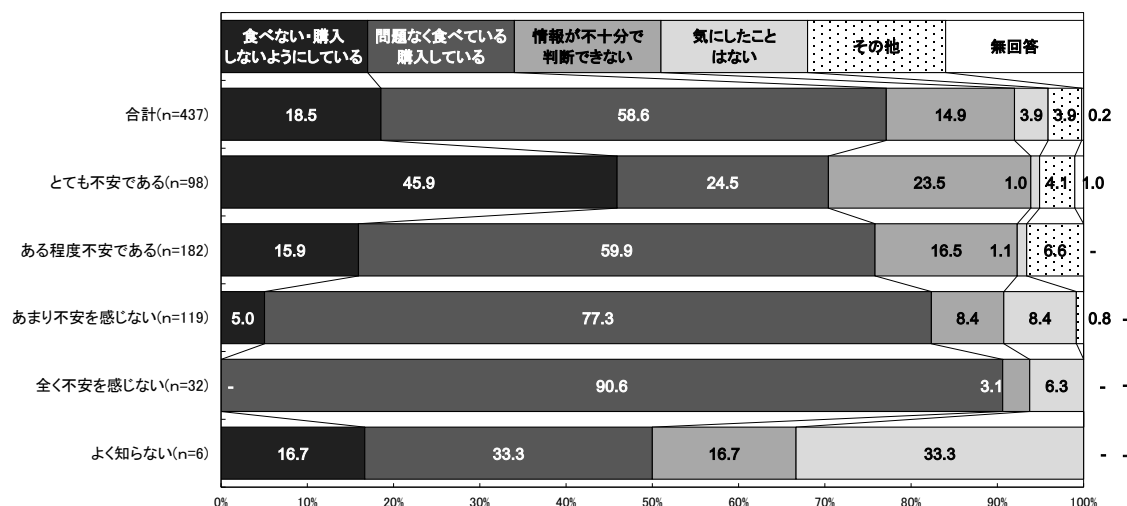
※「**気にしたことはない**」:そもそも放射性物質を含む食品について、気にしたことはない。

9-3 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方と放射性物質に対する不安の程度  
放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方と不安の程度（問2）との関係の回答割合

■ 放射性物質に対して不安の程度が高くなるほど、「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」の割合が高い傾向が見られる。

- 問2で、食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」と回答した者に対し、放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方を尋ねたところ、不安の程度が高い人ほど「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」との割合が高くなる傾向がみられる。
- 逆に、放射性物質に対する不安の程度が低いほど、「現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している」との割合が高くなっている。

図表 9-3 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方と放射性物質に対する不安の程度（問2）との関係



※「**食べない・購入しないようにしている**」:放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている。

※「**問題なく食べている・購入している**」:現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している。

※「**情報が不十分で判断できない**」:放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない。

※「**気にしたことはない**」:そもそも放射性物質を含む食品について、気にしたことはない。

### III. 食品の安全性に係るモニターの意識・行動について

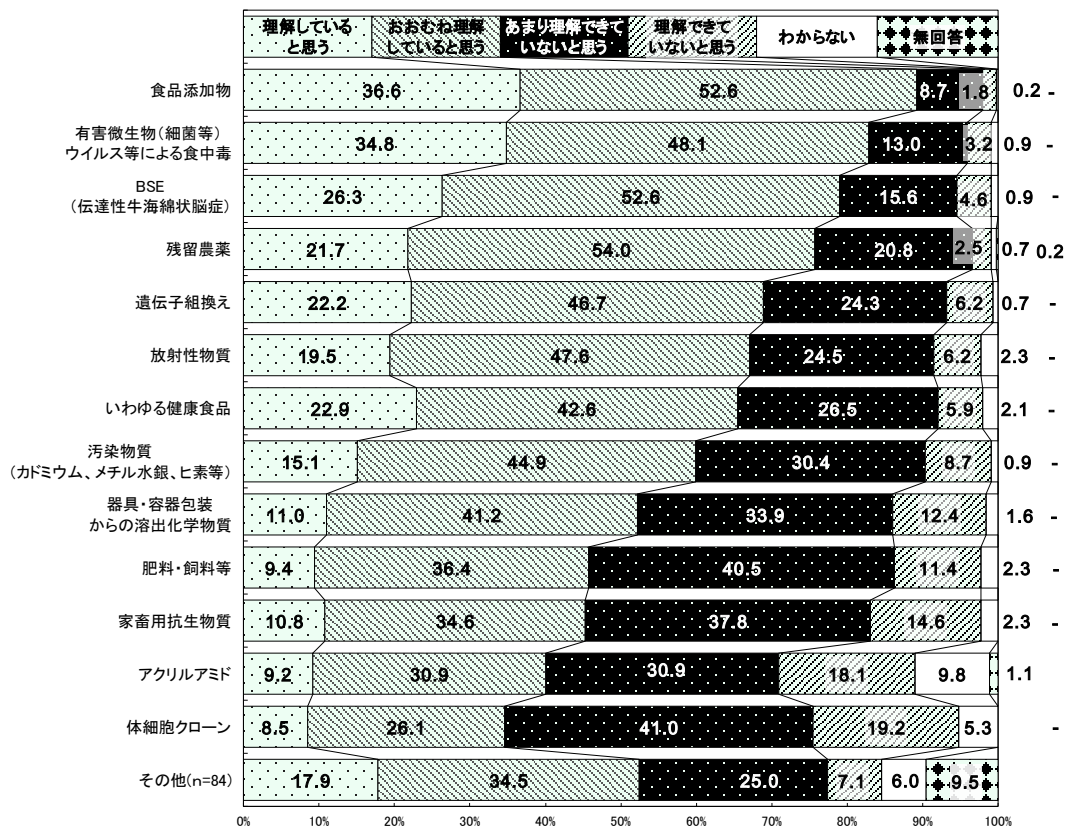
#### 10. 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度（問 10）

##### 10-1 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度

■ 食品の安全性に係るハザード別に、リスクの程度を「理解していると思う」の割合が高いものの上位3位は、「食品添加物」「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」。

- 食品の安全性に係るハザード別に、リスクの程度についての理解度を尋ねたところ、「理解していると思う」の割合は「食品添加物」(36.6%)が最も高く、次いで「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」(34.8%)、「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」(26.3%)が高く、「アクリルアミド」(今回調査から追加 9.2%)、「体細胞クローン」(8.5%)の割合が低くなっている。
- いわゆる健康食品については、「理解していると思う」(22.9%)だけで見ると「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」(26.3%)に次いでいるか、「おおむね理解していると思う」の合計をみると順位が下がっている。

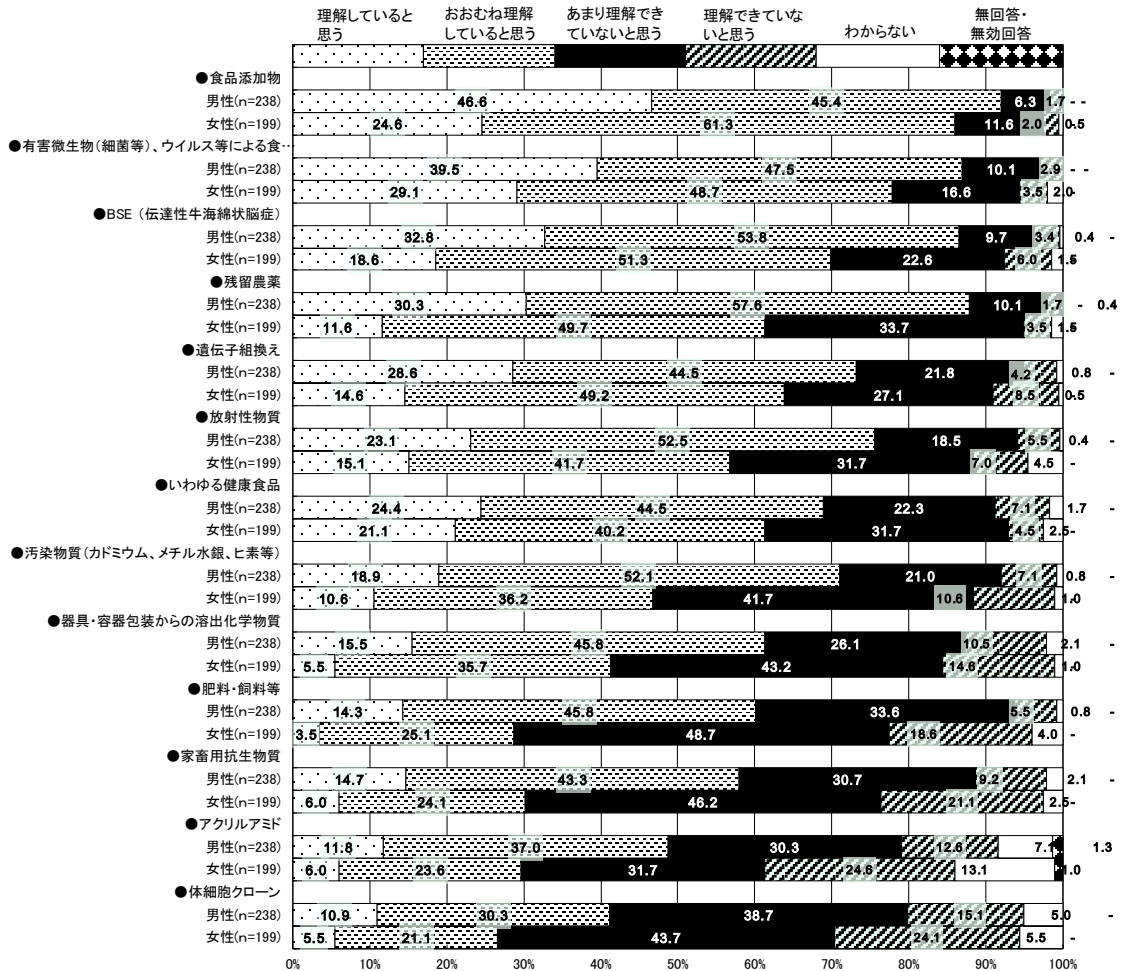
図表 10-1①食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度



※「理解していると思う」「おおむね理解していると思う」の合計が高いもの順に並び替え。

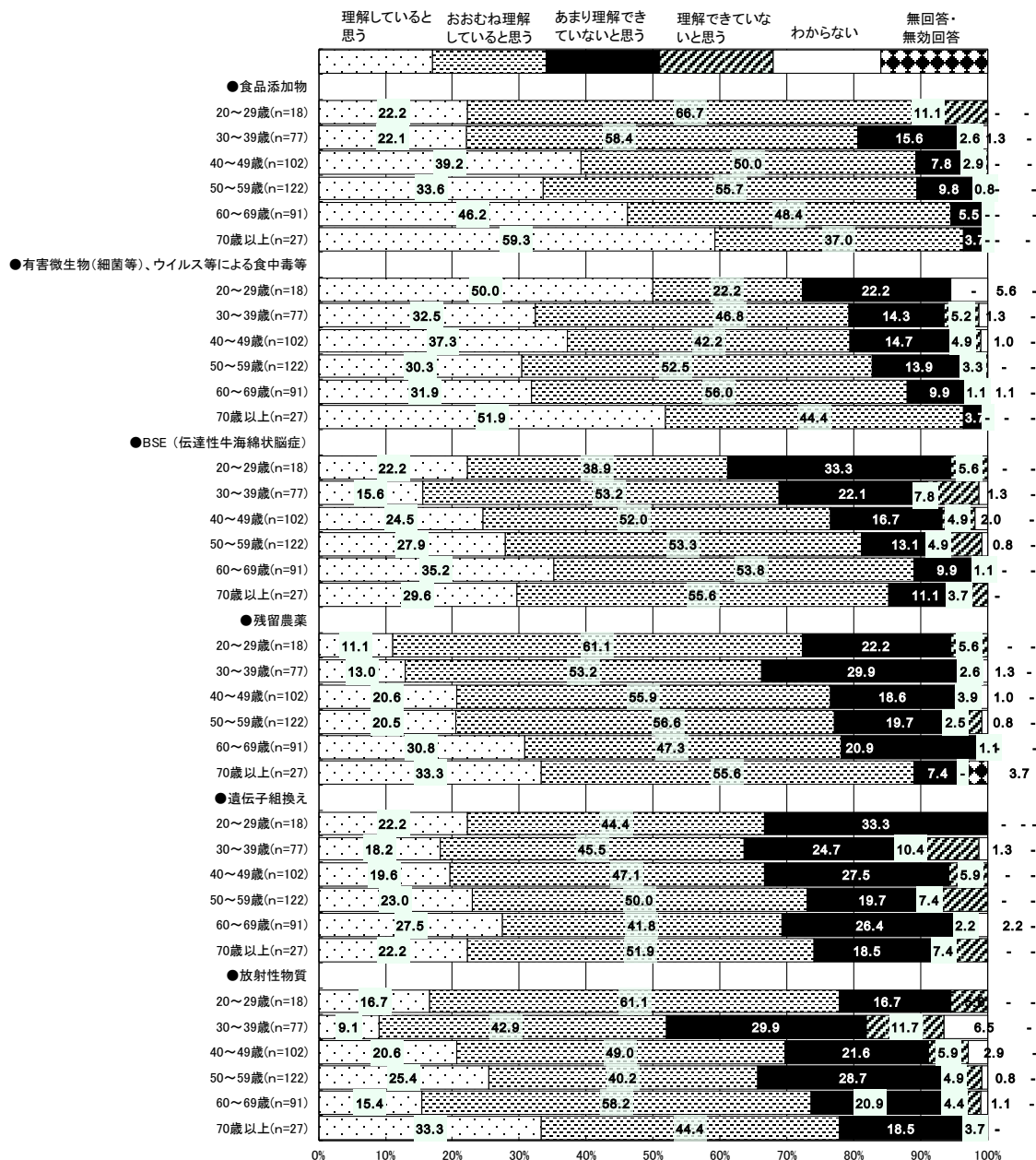
- 性別で見ると、「理解していると思う」の割合はすべてのハザードで男性のほうが高く差が見られるが、「いわゆる健康食品」については、差が小さい。

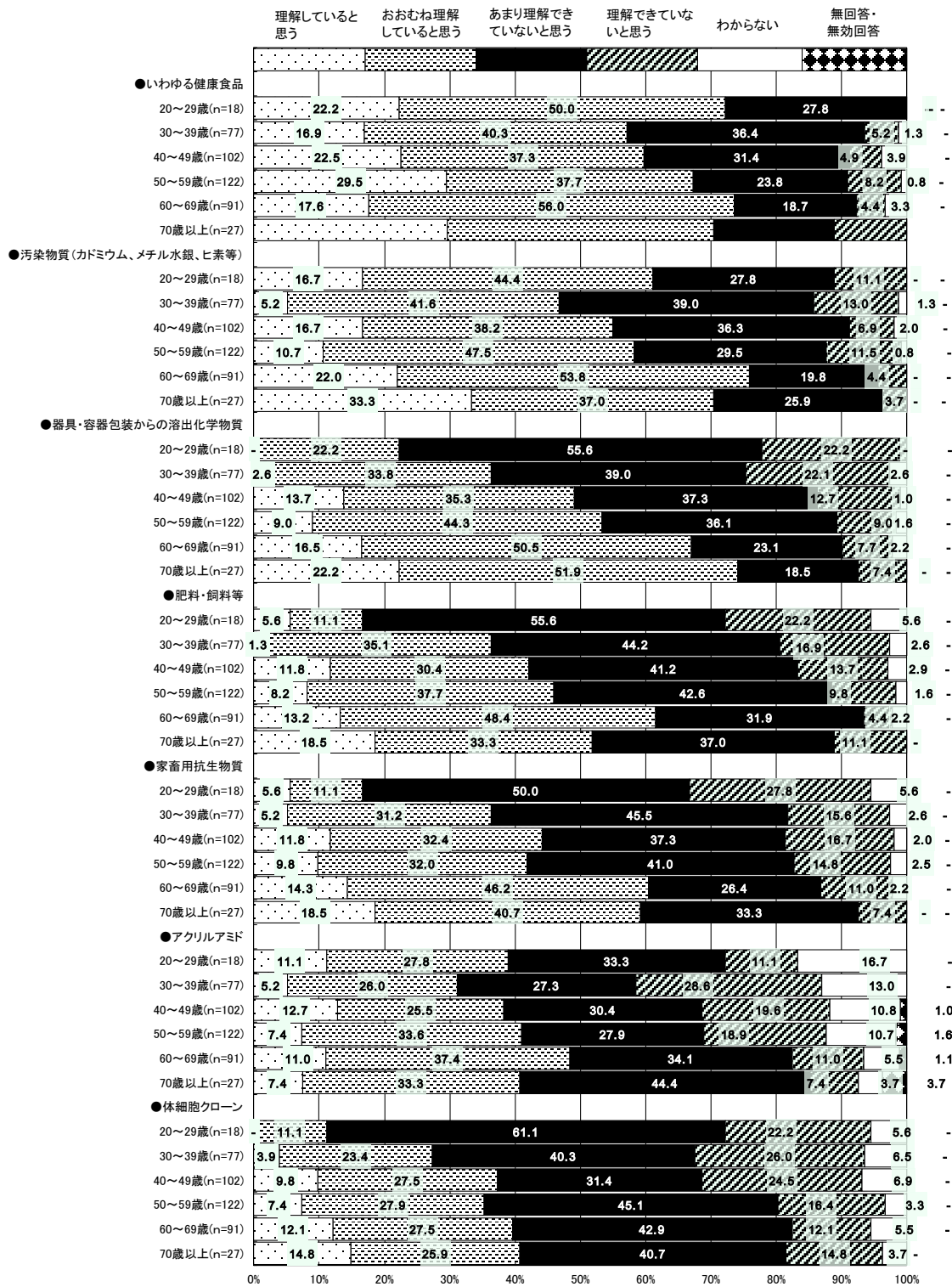
図表 10-1②食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度（性別）



- 年代別に見ると、「食品添加物」「残留農薬」「家畜用抗生物質」「器具・容器包装からの溶出化学物質」「体細胞クローン」は、年代が高い方が「理解していると思う」の割合が高い傾向がみられる。
- 20年代は、サンプル数は少ないが、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」について、「理解していると思う」（50.1%）に限ってみると70歳以上(51.9%)に次いで高いが、「おおむね理解している」との合計(72.2%)は他の年代より低い。

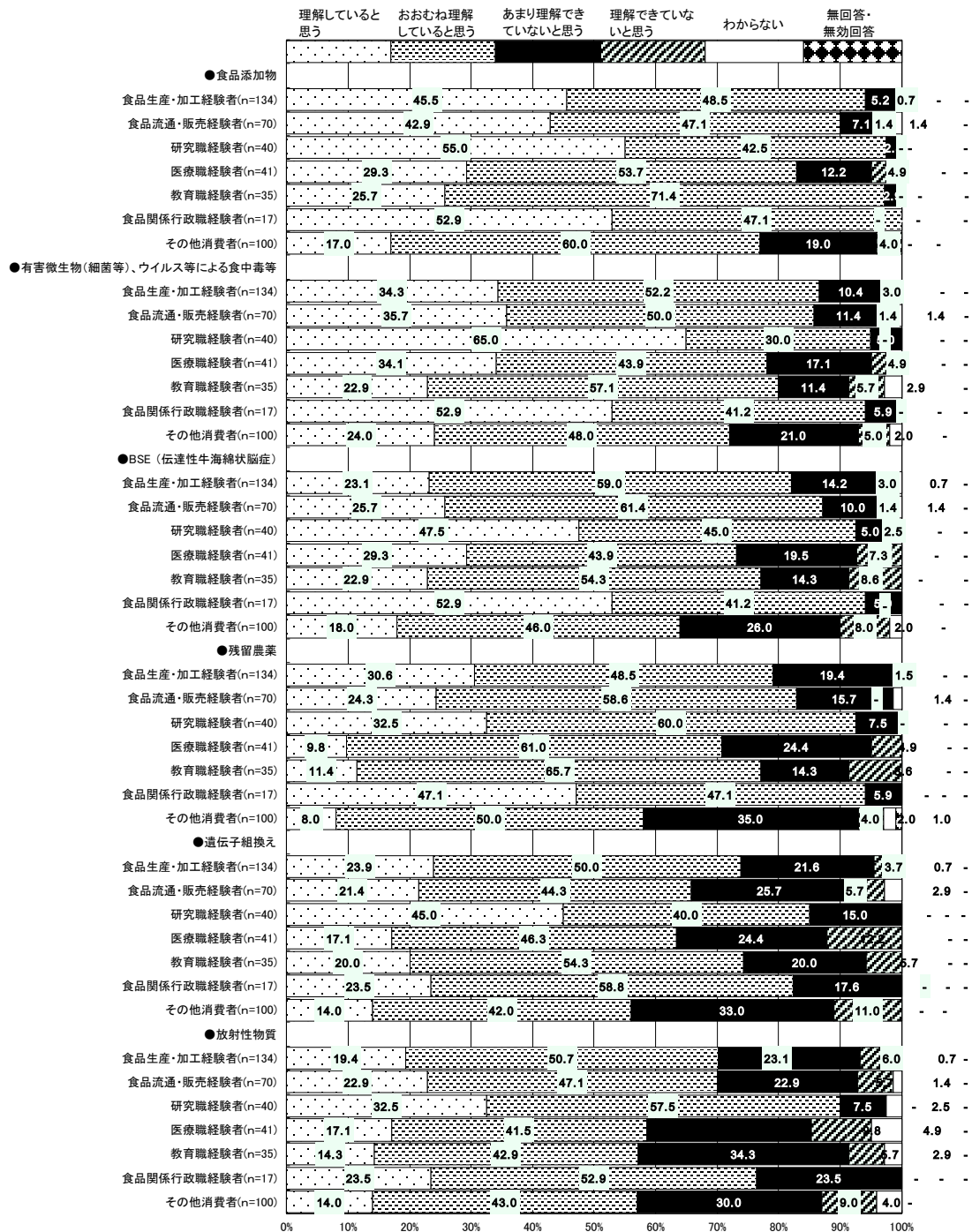
図表 10-1③食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度（年代別）



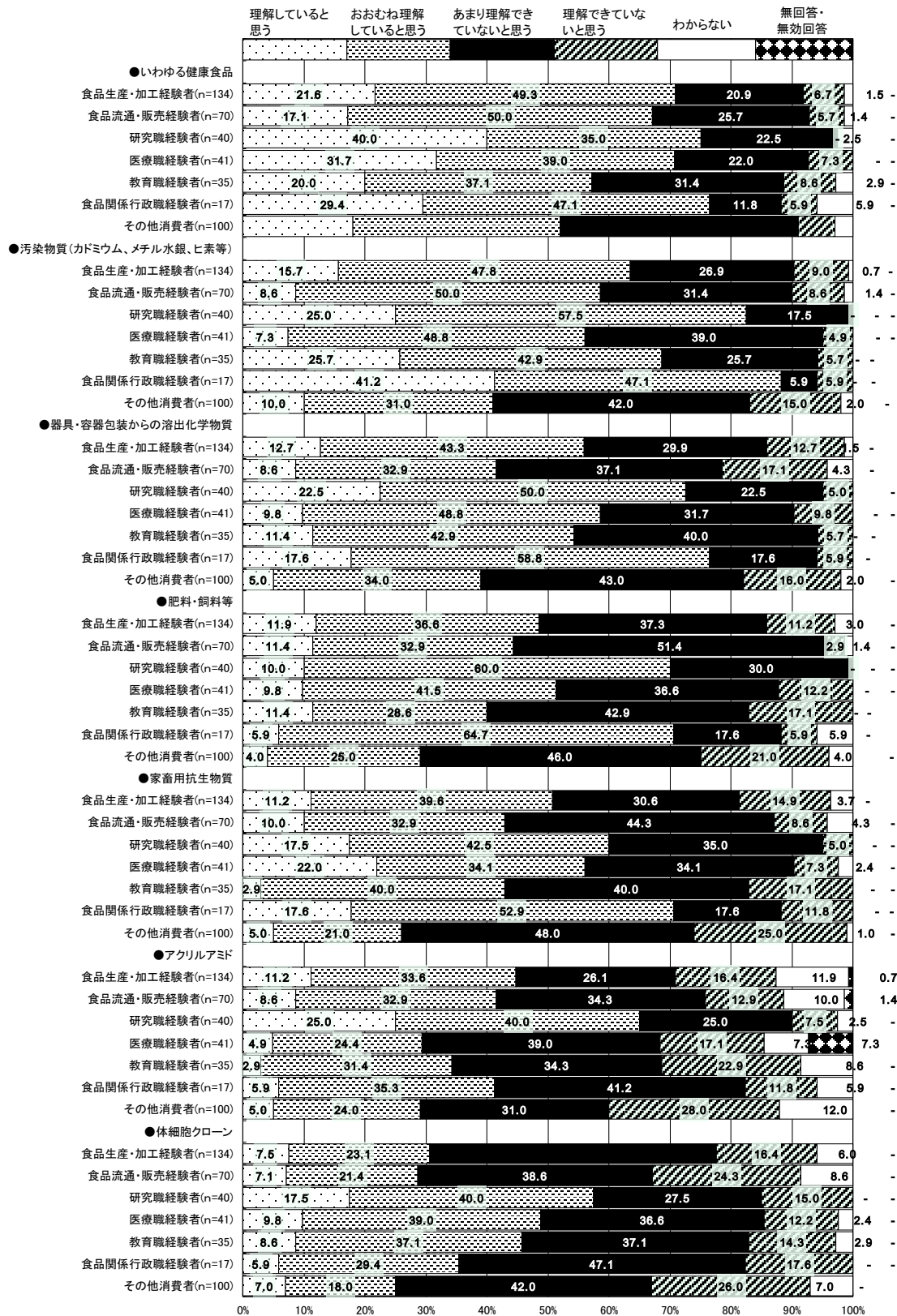


- 職務経験別で見ると、「食品添加物」「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」では研究職経験者及び食品関係行政経験者が、また、「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」では食品関係行政職経験者が、「理解していると思う」の割合が50%を超え高い傾向がみられた。
- 遺伝子組換え、放射性物質、いわゆる健康食品、器具・容器包装からの溶出化学物質、アクリルアミド、体細胞クローンでは、研究職経験者の「理解していると思う」の割合が、他の職務経験に比べて高い。
- アクリルアミド、体細胞クローンは、研究職経験者を除き、「あまり理解できていない」「理解できていない」の割合が高い。

図表 10-1④食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度（職務経験別）







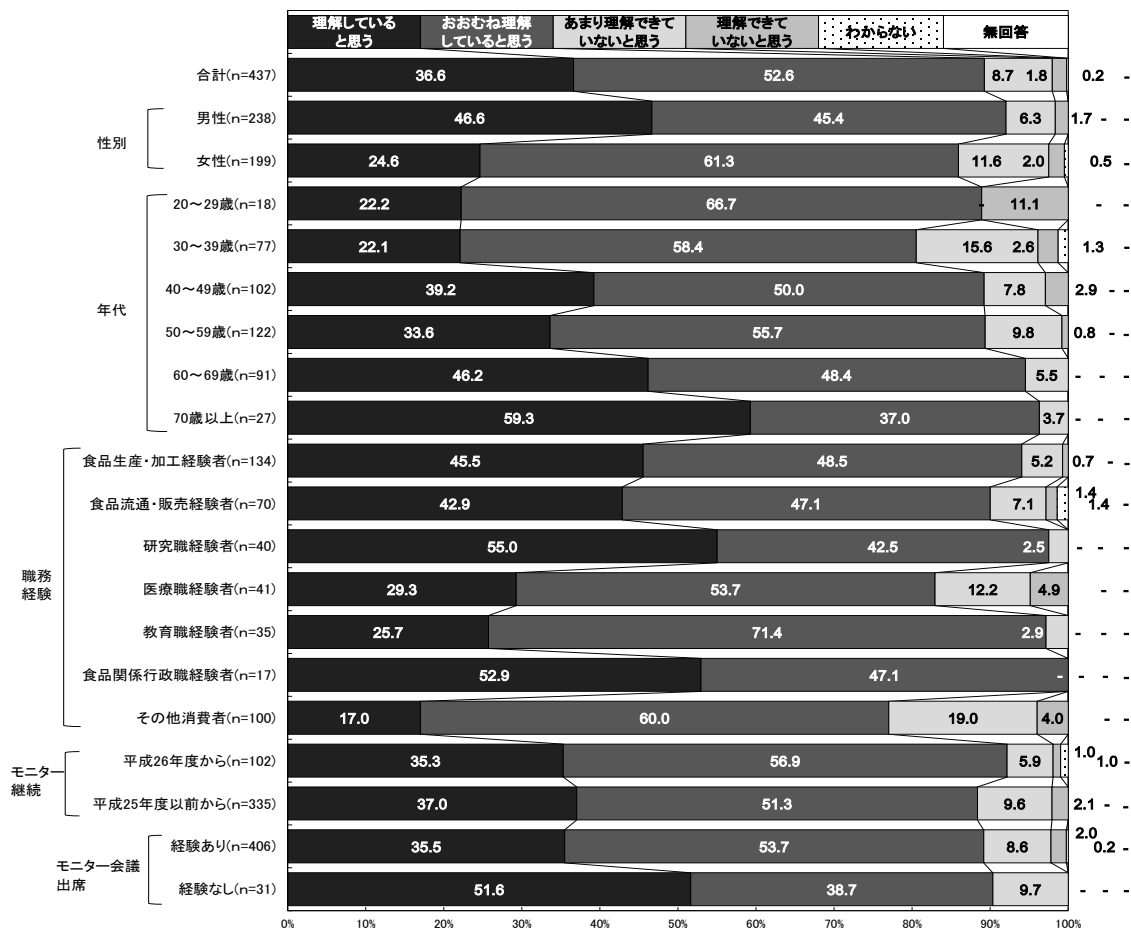
## 10-2 食品の安全性に係るハザード別リスクの属性別理解度

### A. 食品添加物

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、職務経験別では研究職経験者、食品関係行政職経験者で、食品添加物のリスクの程度についての理解度が高い。

- 食品添加物のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合は女性（24.6%）よりも男性（46.6%）のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は70歳以上（59.3%）と高齢になるほど高くなるという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは研究職経験者（55.0%）、食品関係行政職経験者（52.9%）、「理解していると思う」の割合が低いのはその他消費者（17.0%）、教育職経験者（25.7%）と、有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「理解していると思う」の割合は、平成26年度新規のモニター（35.3%）より25年以前から継続しているモニター（37.0%）のほうが高い。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は、出席経験のある人（35.5%）より出席経験のない人（51.6%）のほうが高い。

図表 10-2A 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <食品添加物・属性別>

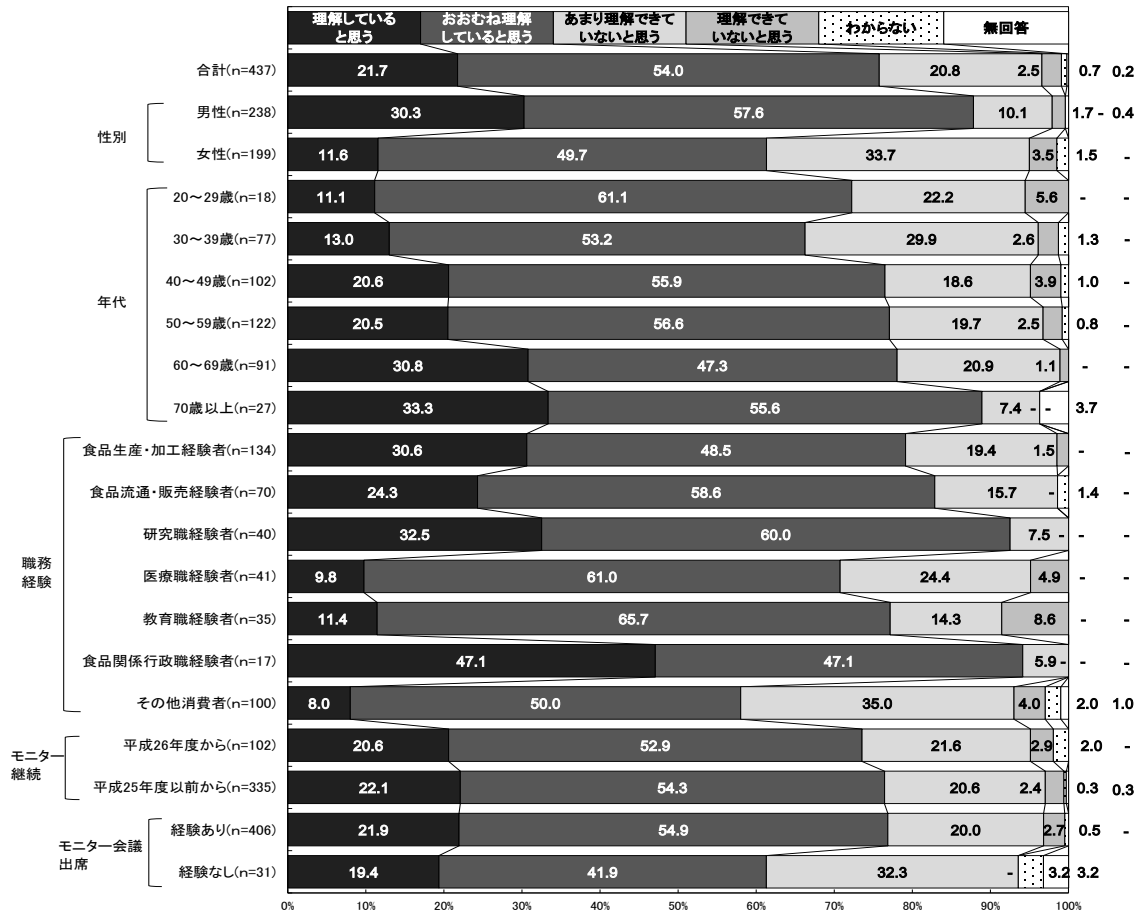


## B. 残留農薬

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、職務経験別では食品関係行政職経験者で、残留農薬のリスクの程度について、理解度が高い。

- 残留農薬のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、性別では「理解していると思う」の割合は、女性(11.6%)よりも男性(30.3%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は、年代が高くなるほど高くなっている。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは、サンプル数が少ないが食品関係行政職経験者(47.1%)、低いのは医療職経験者(9.8%)、教育職経験者(11.4%)で、有意な差が見られる。
- モニター経験別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は、出席経験のない人(19.4%)より出席経験のある人(21.9%)のほうが高い。

図表 10-2B 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <残留農薬・属性別>

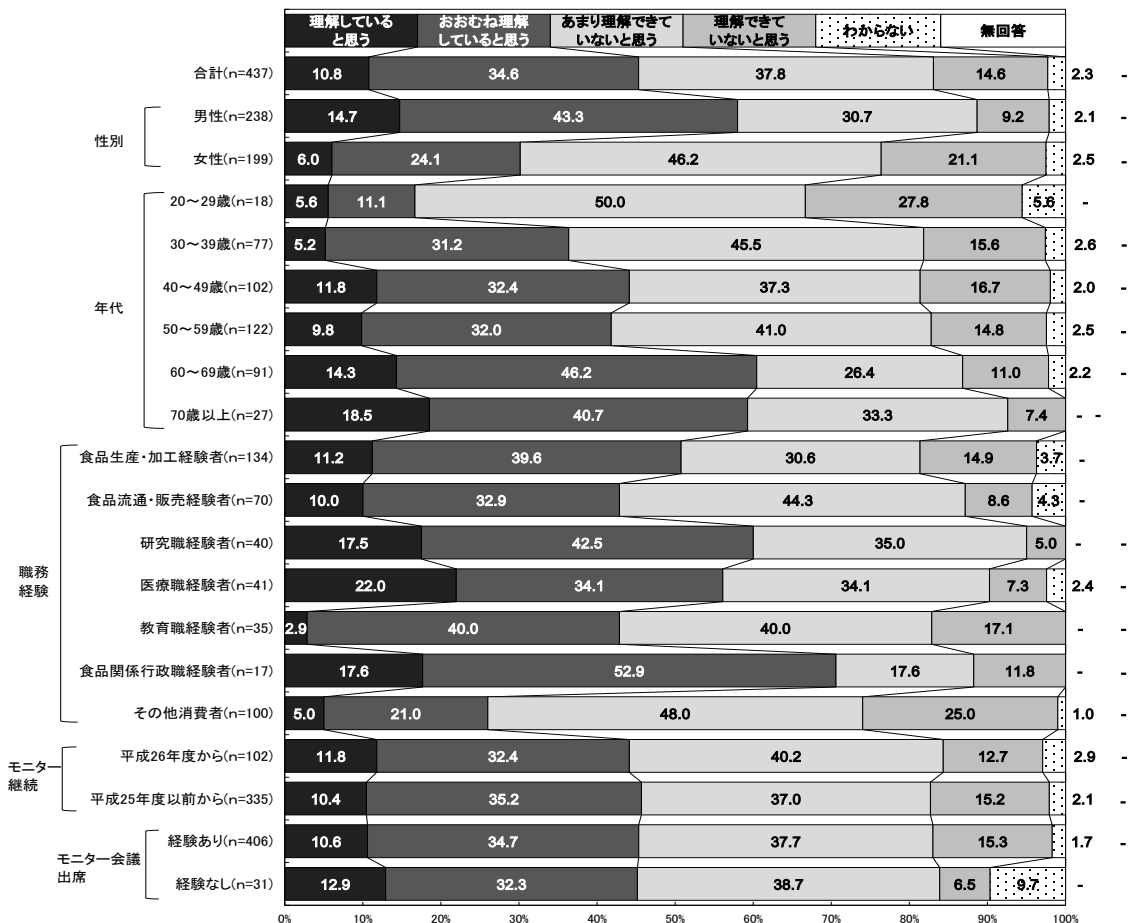


### C. 家畜用抗生物質

■ 性別では男性、年代別では60代、70歳以上、職務経験別では食品関係行政職経験者、研究職経験者、医療職経験者で、家畜用抗生物質のリスクの程度についての理解度が高い。

- 家畜用抗生物質のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは、性別では女性(6.0%)よりも男性(14.7%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は60代(14.3%)、70歳以上(18.5%)と高齢になるほど高くなる傾向がある。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合は医療職経験者(22.0%)、食品関係行政職経験者(17.6%)、研究職経験者(17.5%)、で高く、低いのはその他消費者(5.0%)という有意な差が見られる。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は出席経験のある人(10.6%)のほうが出席経験のない人(12.9%)より若干低いという有意な差が見られる。

図表 10-2C 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <家畜用抗生物質・属性別>

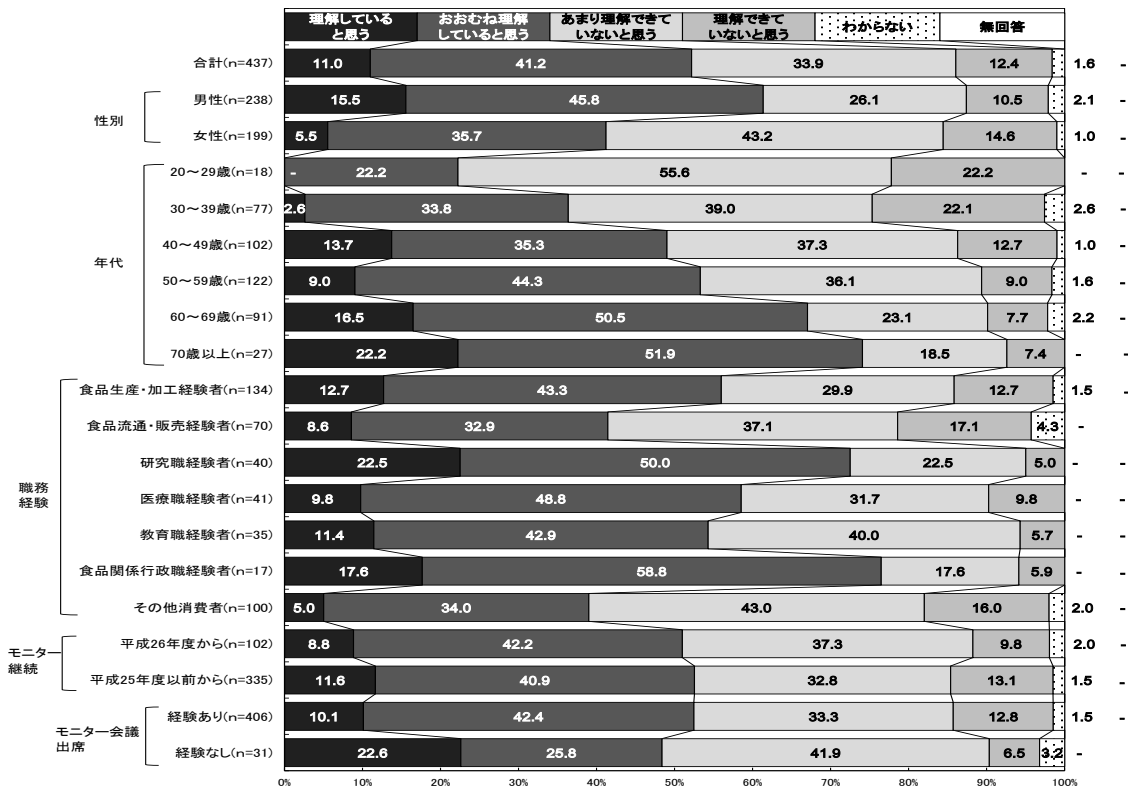


#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、職務経験別では研究職経験者、食品関係行政職経験者で、器具・容器包装からの溶出化学物質のリスクの程度について理解度が高い。

- 器具・容器包装からの溶出化学物質のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、性別では「理解していると思う」の割合が高いのは女性(5.5%)よりも男性(15.5%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は70歳以上が最も高く(22.2%)、高齢になるほど高くなるという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは研究職経験者(22.5%)、食品関係行政職経験者(17.6%)で、逆に低いのはその他消費者(5.0%)、食品流通・販売職経験者(8.6%)、であった。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは、出席経験のある人(10.0%)より出席経験のない人(22.6%)のほうが高い。「理解していると思う」と「おおむね理解していると思う」の合計では、出席経験のない人(48.4%)より出席経験のある人(52.5%)のほうが高くなる。

図表 10-2D 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度理解度  
 <器具・容器包装からの溶出化学物質・属性別>

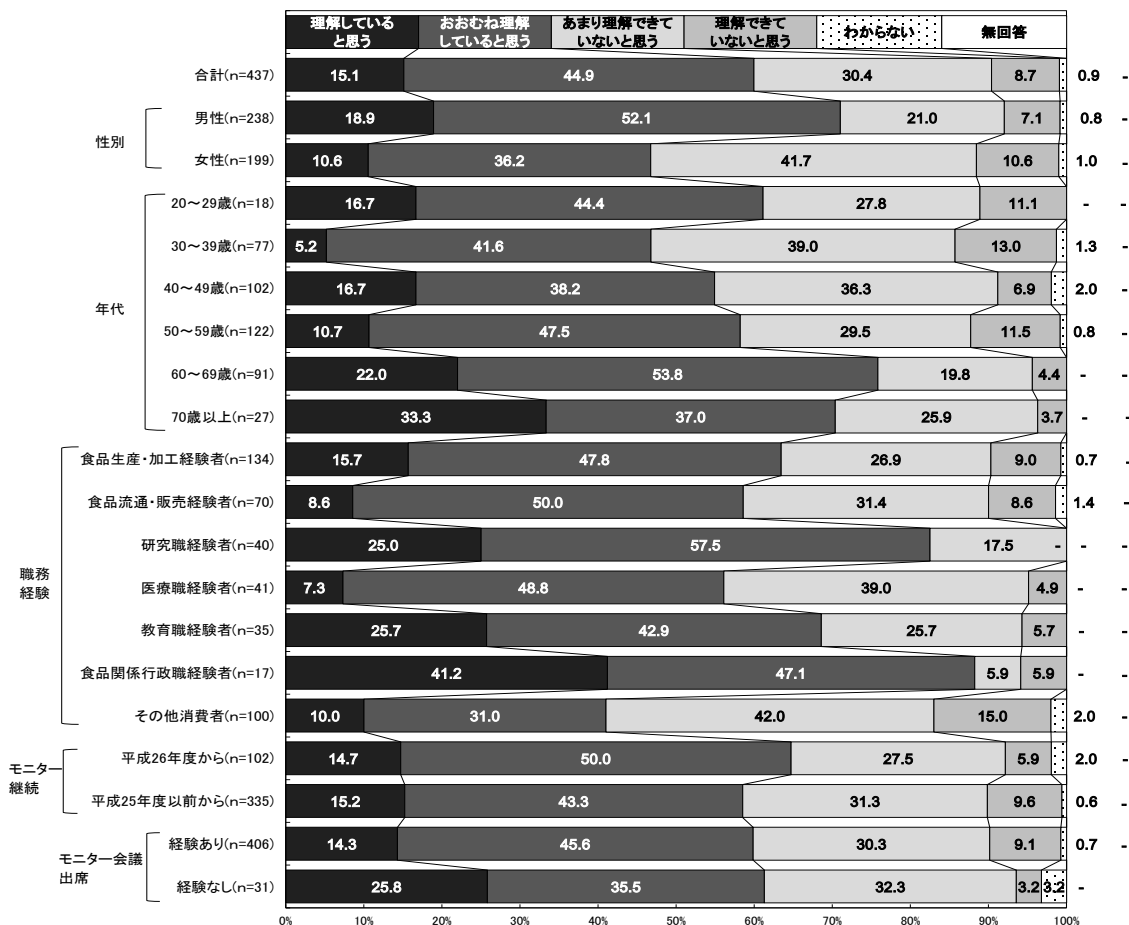


E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

■ 性別では男性、年代別では60代、70歳以上、職務経験別では食品関係行政職経験者、研究職経験者で、汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）のリスクの程度についての理解度が高い。

- 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは、性別では女性（10.6%）よりも男性（18.9%）のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は60代（22.0%）、70歳以上（33.3%）で高く、30代（5.2%）で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは食品関係行政職経験者（41.2%）、研究職経験者（25.0%）で、逆に低いのは医療職経験者（7.3%）、その他消費者（10.0%）で有意な差が見られる。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は出席経験のある人（14.3%）よりも出席経験のない人（25.8%）のほうが高い。

図表 10-2E 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）・属性別>

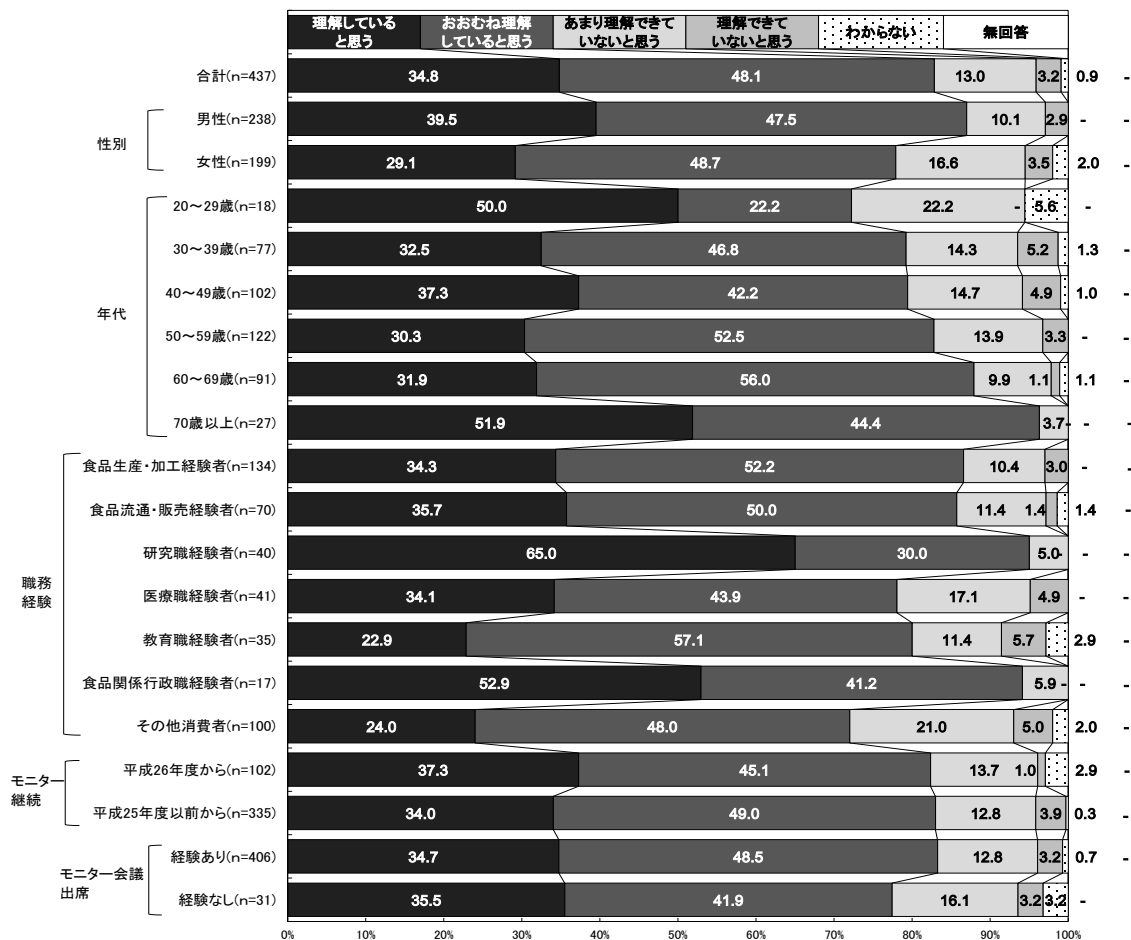


F. 有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、職務経験別では研究職経験者、食品関係行政職経験者で、有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒等のリスクの程度についての理解度が高い。

- 有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒等のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは性別では女性(29.1%)よりも男性(39.5%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は70代(51.9%)、20歳以上(50.0%)で高く、50代(30.3%)、60代(31.9%)、30代(32.5%)で低い。
- 職務経験別では、「理解している」の割合が高いのは研究職経験者(65.0%)、食品関係行政職経験者(52.9%)で、「理解していると思う」の割合が低いのは医療職経験者(34.1%)、その他消費者(24.0%)、教育職経験者(22.9%)で、有意な差が見られる。
- モニター継続別、モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合にあまり差は見られない。

図表 10-2F 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒等・属性別>



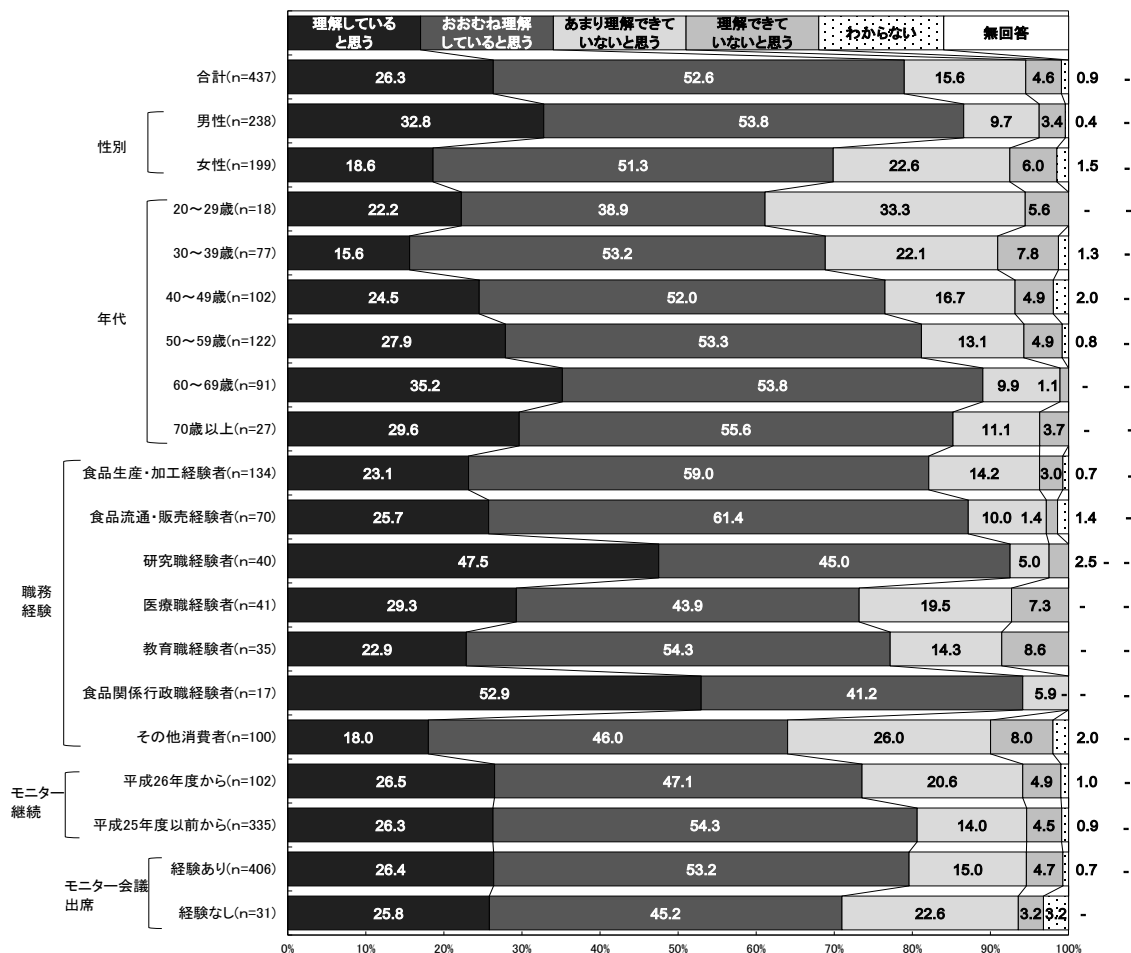


### G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

■ 性別では男性、年代では60代、70歳以上、職務経験別では食品関係行政職経験者、研究職経験者で、BSE（伝達性牛海綿状脳症）のリスクの程度についての理解度が高い。

- BSE（伝達性牛海綿状脳症）のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、性別では、「理解していると思う」の割合が高いのは女性(18.6%)よりも男性(32.8%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は、60代(35.2%)、70歳以上(29.6%)、50代(27.9%)で高い。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは食品関係行政職経験者(52.9%)、研究職経験者(47.5%)で、逆に低いのは医療職経験者(29.3%)、教育職経験者(22.9%)、その他消費者(18.0%)で、有意な差が見られる。
- モニター継続別、モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合にあまり差は見られない。

図表 10-2G 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <BSE（伝達性牛海綿状脳症）・属性別>

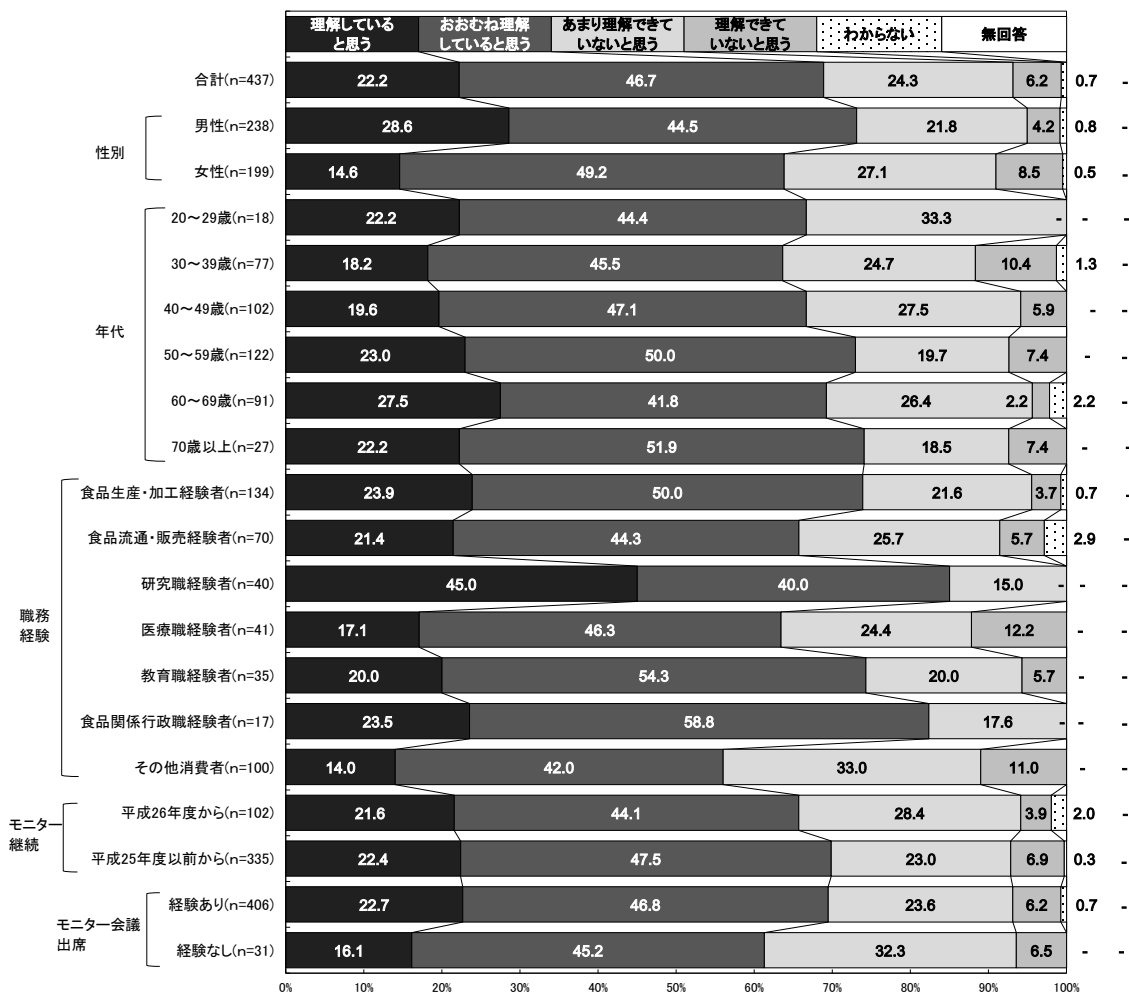


## H. 遺伝子組換え

■ 性別では男性、年代別では50代以上、職務経験別では研究職経験者で、遺伝子組換えのリスクの程度についての理解度が高い。

- 遺伝子組換えのリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは、性別では女性(14.6%)よりも男性(28.6%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は60代(27.5%)、50代(23.0%)、70歳以上(22.2%)、20代(22.2%)で高く、30代(18.2%)でやや低い。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは研究職経験者(45.5%)で、その他消費者(14.0%)、医療職経験者(17.1%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「理解していると思う」の割合にあまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は出席経験のない人(16.1%)より出席経験のある人(22.7%)のほうが高い。

図表 10-2H 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度 understanding  
 <遺伝子組換え・属性別>

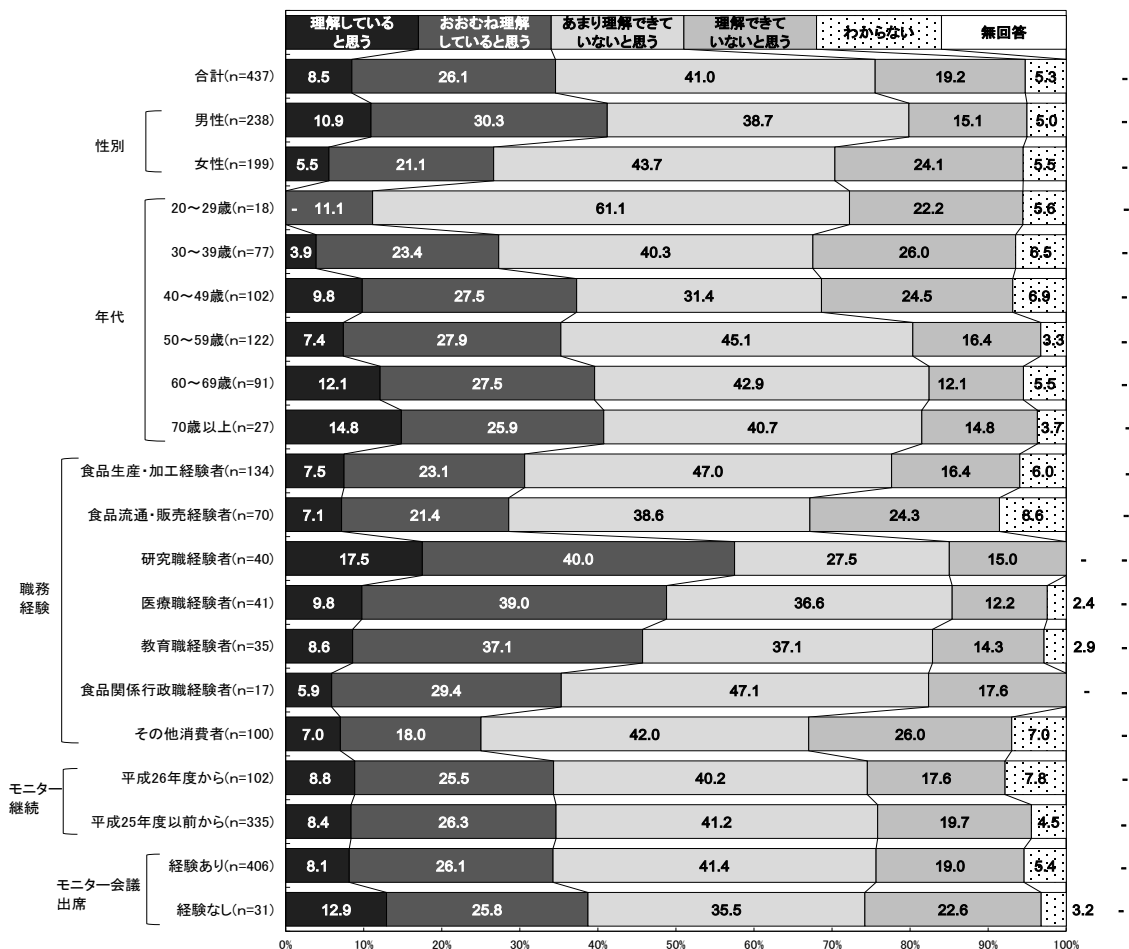


## 1. 体細胞クローン

■ 性別では男性、年代別では60代以上、職務経験別では研究職経験者で、体細胞クローンのリスクの程度についての理解度が高い。

- 体細胞クローンのリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは、性別では女性(5.5%)よりも男性(10.9%)のほうが有意に高い。
- 年代別では「理解していると思う」の割合は70歳以上(14.8%)、60代(12.1%)、で高く、20代がサンプル数は少ないが極端に低い(11.1%)。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは研究職経験者(17.5%)、医療職経験者(9.8%)で、逆に低いのは食品生産・加工経験者(7.5%)、食品流通・販売経験者(7.1%)、その他消費者(7.0%)である。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは経験者(8.1%)よりも出席経験のない人(12.9%)である。

図表 10-21 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <体細胞クローン・属性別>

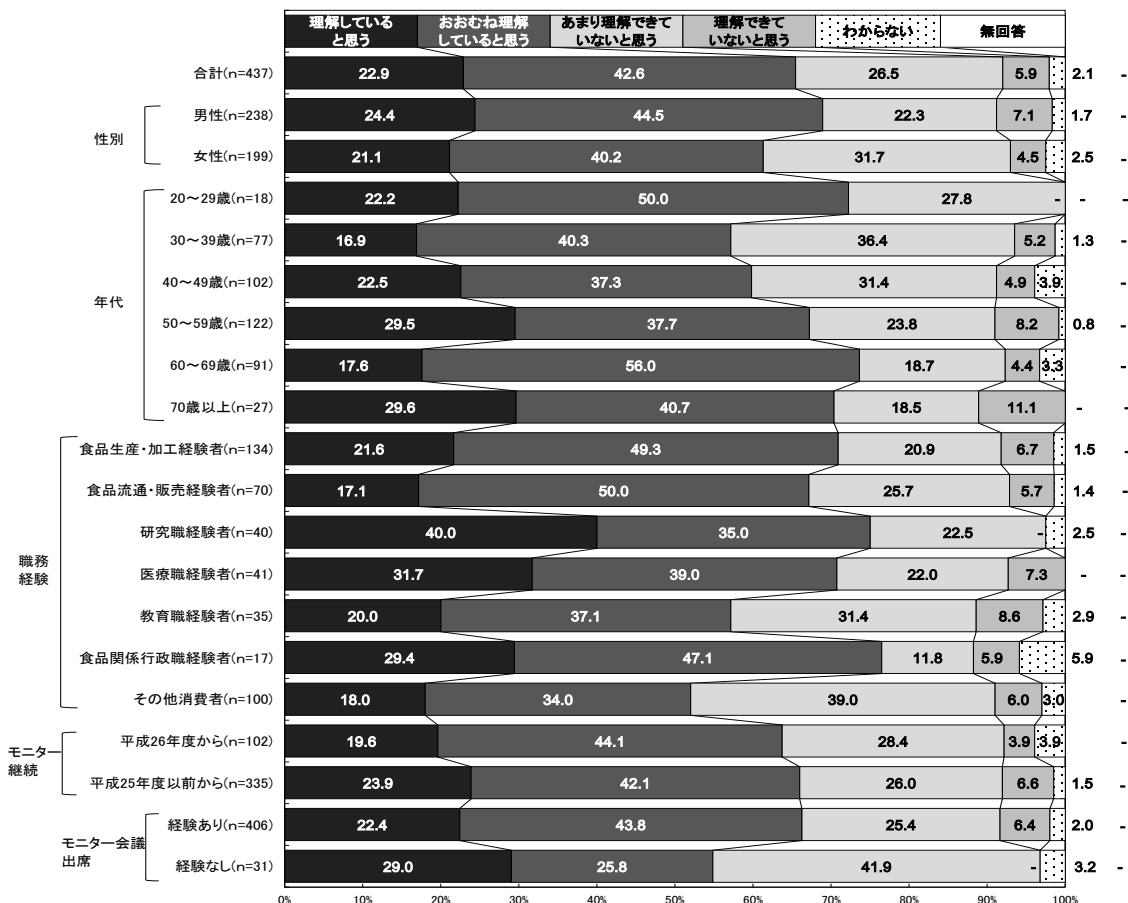


## J. いわゆる健康食品

■ 性別では男性、年代別では50代、70歳以上、職務経験別では研究職経験者、食品関係行政職経験者で、いわゆる健康食品のリスクの程度についての理解度が高い。

- いわゆる健康食品のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは、性別では女性(21.1%)よりも男性(24.4%)のほうが高い。
- 年代別では、「理解している」の割合が高いのは50代(29.6%)、70歳以上(29.6%)である。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは研究職経験者(40.0%)、食品関係行政職経験者(29.4%)で、逆に割合が低いのは、教育職経験者(20.0%)、その他消費者(18.0%)、食品流通・販売経験者(17.1%)である。
- モニター継続別では、「理解していると思う」の割合は平成25年度以前から継続しているモニター(23.9%)のほうが、26年度から新規のモニター(19.6%)より高い。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は、出席経験のある人(22.4%)より出席経験のない人(29.0%)のほうが高い。

図表 10-2J 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <いわゆる健康食品・属性別>

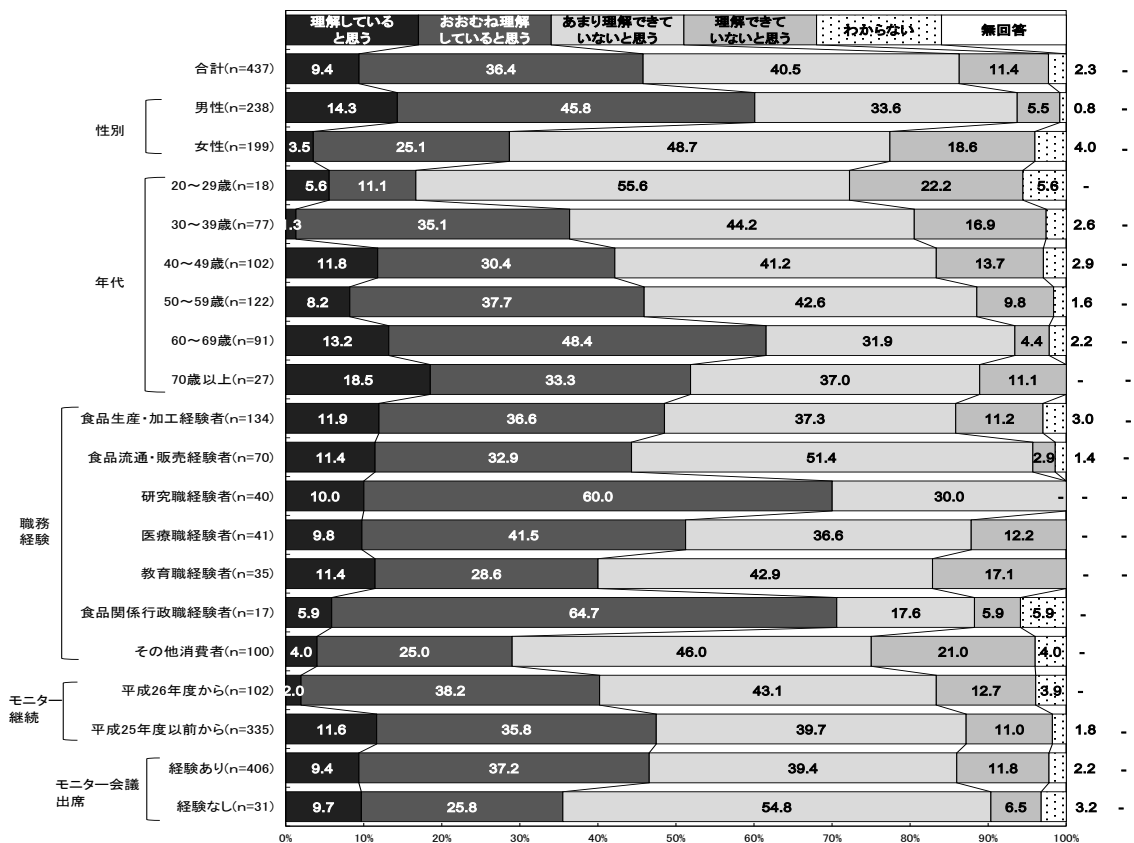


## K. 肥料・飼料等

■ 性別では男性、年代別では60代、70歳以上、職務経験別では食品生産・加工経験者、食品流通・販売経験者、教育職経験者で、肥料・飼料等のリスクの程度についての理解度が高い。

- 肥料・飼料等のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合は、性別では女性(3.5%)よりも男性(14.3%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、70歳以上を除くと年代が高くなるほど理解度が高いという有意な差が見られる。70歳以上(18.5%)がサンプル数は少ないが60代(13.2%)に次いで理解度が高い。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合は食品生産・加工経験者(11.9%)、食品流通・販売経験者(11.4%)、教育職経験者(11.4%)で高く、その他消費者(4.0%)、食品関係行政職経験者(5.9%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「理解していると思う」の割合は平成26年度新規のモニター(2.0%)より平成25年度以前から継続しているモニター(11.6%)のほうが高いという有意な差が見られる。
- モニター会議出席経験別では、あまり差は見られない。

図表 10-2K 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <肥料・飼料等・属性別>

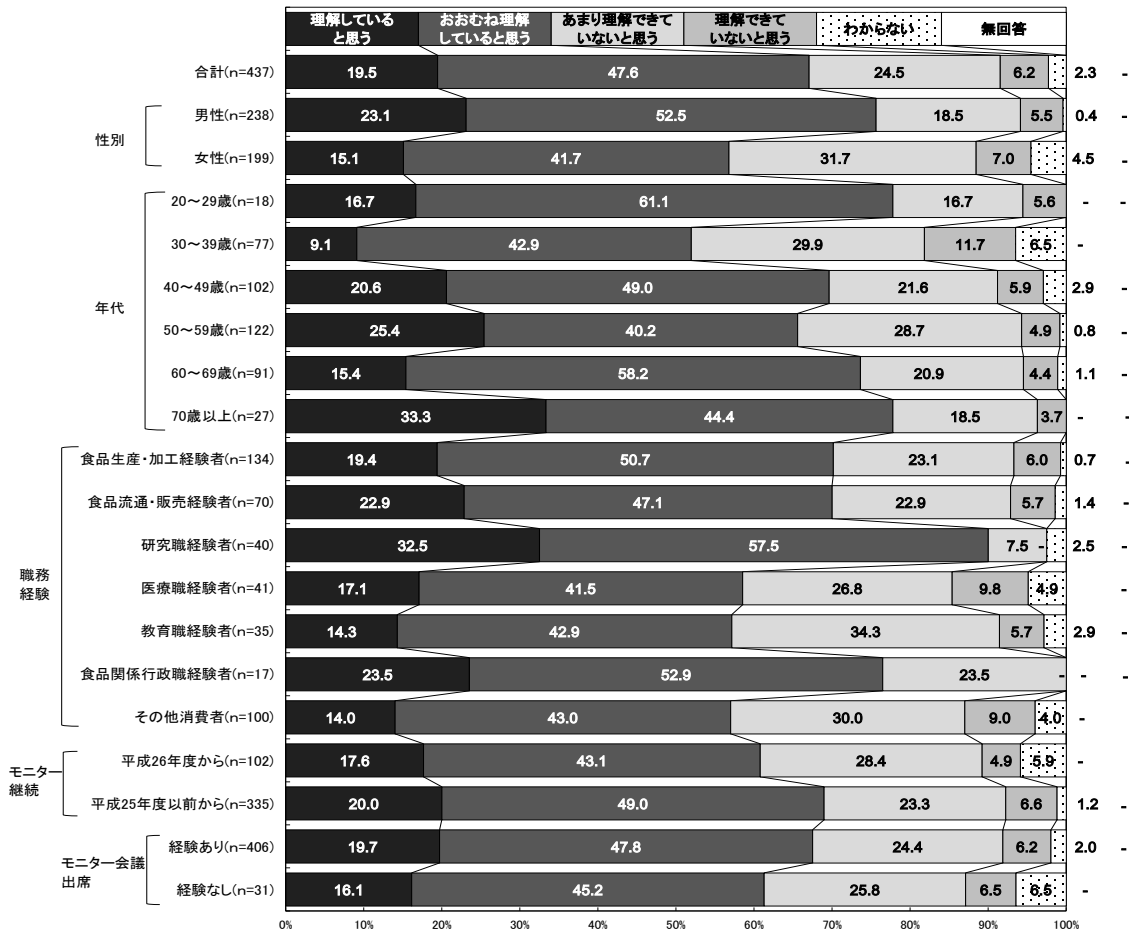


## L. 放射性物質

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、50代、職務経験別では研究職経験者で、放射性物質のリスクの程度についての理解度が高い。

- 放射性物質のリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合は、性別では女性(15.1%)よりも男性(23.1%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合は70歳以上(33.3%)、50代(25.4%)で高く、30代(9.1%)で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合は、研究職経験者(32.5%)で極端に高く、逆に低いのはその他消費者(14.0%)、教育職経験者(14.3%)、医療職経験者(17.1%)である。
- モニター継続別では、「理解していると思う」の割合は、平成26年度新規のモニター(17.6%)より平成25年度以前から継続しているモニター(20.0%)のほうが高い。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合は、出席経験のない人(16.1%)よりも出席経験のある人(19.7%)のほうが高い。

図表 10-2L 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <放射性物質・属性別>

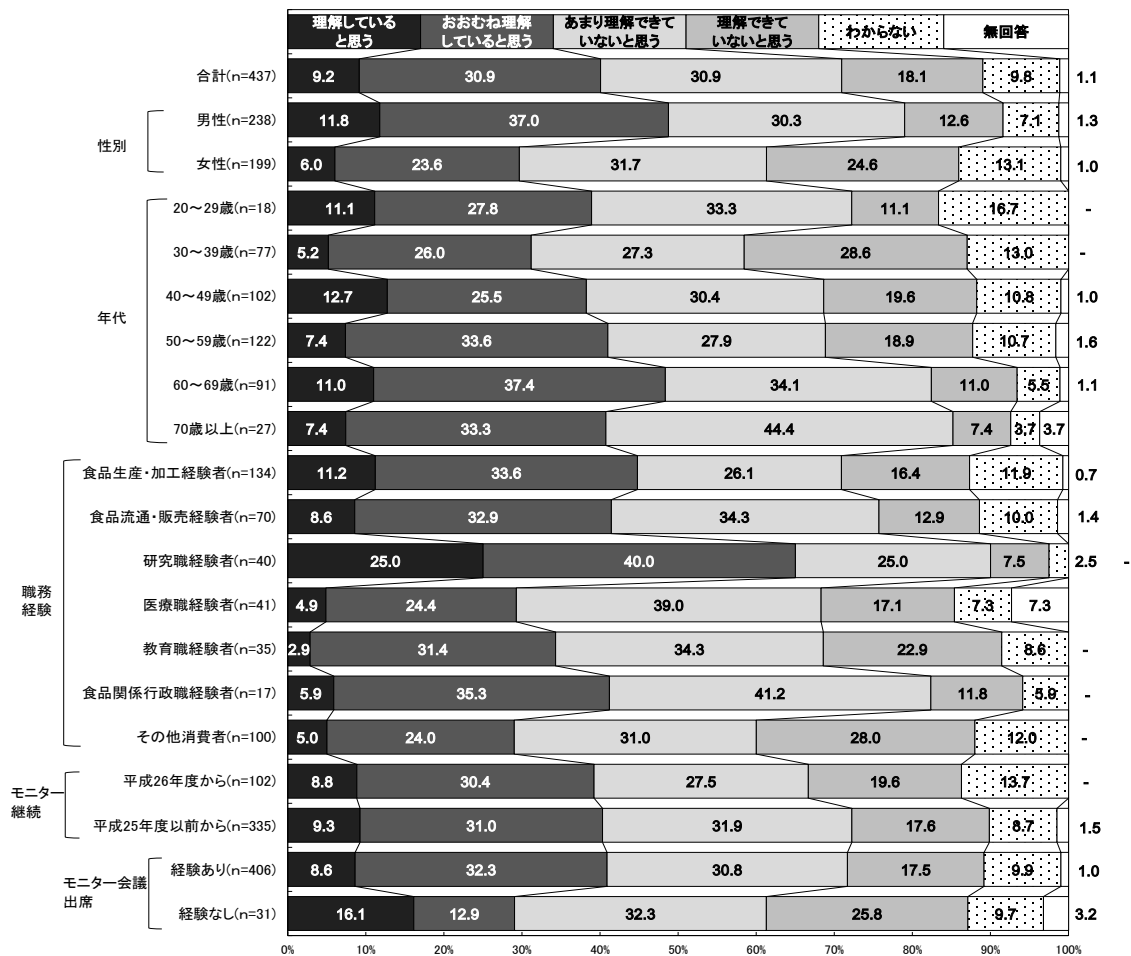


## M. アクリルアミド

■ 性別では男性、年代別では40代、20代、60代、職務経験別では研究職経験者で、アクリルアミドのリスクの程度についての理解度が高い。

- アクリルアミドのリスクの程度について、理解度を属性別に比較したところ、「理解していると思う」の割合が高いのは性別では女性(6.0%)よりも男性(11.8%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「理解していると思う」の割合が高いのは40代(12.7%)、20代(11.1%)、60代(11.0%)で、逆に低いのは、30代(5.2%)であった。
- 職務経験別では、「理解していると思う」の割合は研究職経験者(25.0%)が特に高く、続いて食品生産・加工経験者(11.2%)、食品流通・販売経験者(8.6%)、食品関係行政職経験者(5.9%)、その他消費者(5.0%)、医療職経験者(4.9%)の順で、最も低いのは教育職経験者(2.9%)で、有意な差が見られる。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別では、「理解していると思う」の割合が高いのは、出席経験のある人(8.6%)よりも出席経験のない人(16.1%)であった。

図表 10-2M 食品の安全性に係るハザード別リスクの程度の理解度  
 <アクリルアミド・属性別>



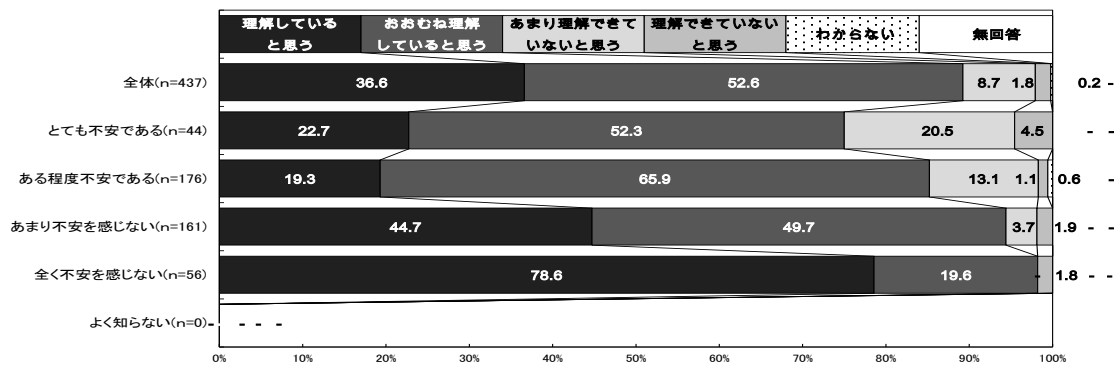
10-3 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度（問 10）とハザード別不安の程度（問 2）との関係の回答割合

A. 食品添加物

■ 「食品添加物」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 食品の安全性にかかるハザード別のリスクの程度についての理解度と問 2 のハザード別の不安の程度についての回答との関係を見ると、問 10 で食品添加物について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」という人に少ない。

図表 10-3A 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係＜食品添加物＞

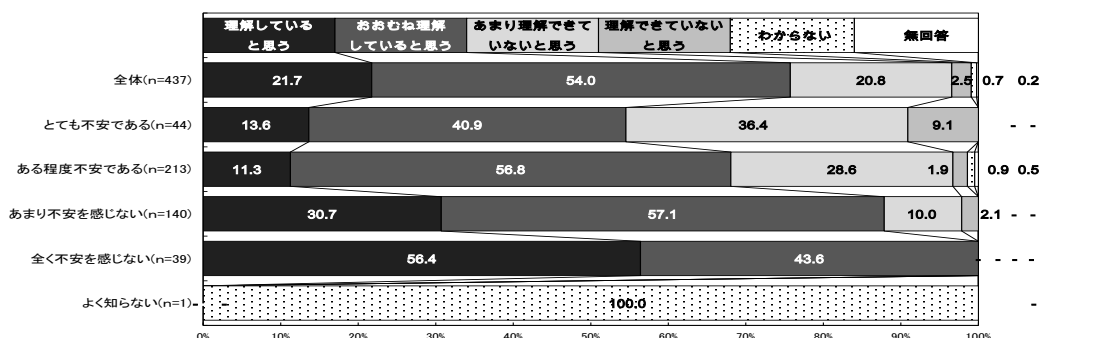


B. 残留農薬

■ 「残留農薬」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で残留農薬について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人には少ない。

図表 10-3B 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係＜残留農薬＞



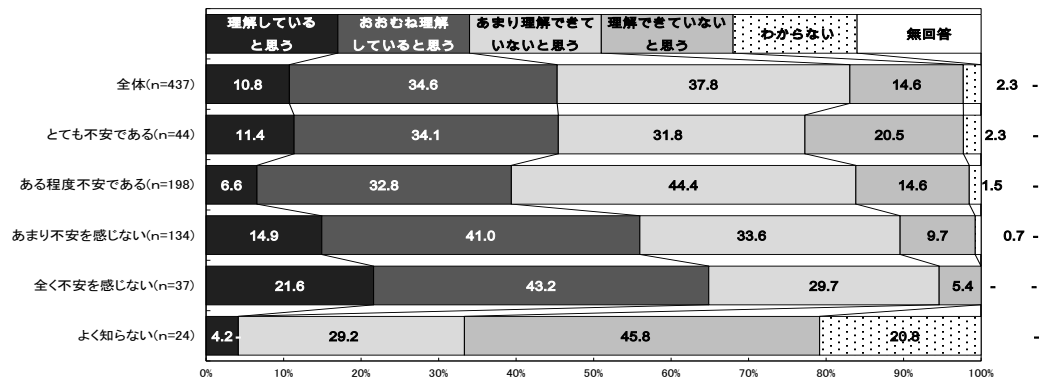


### C. 家畜用抗生物質

■ 「家畜用抗生物質」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で家畜用抗生物質について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3C 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<家畜用抗生物質>

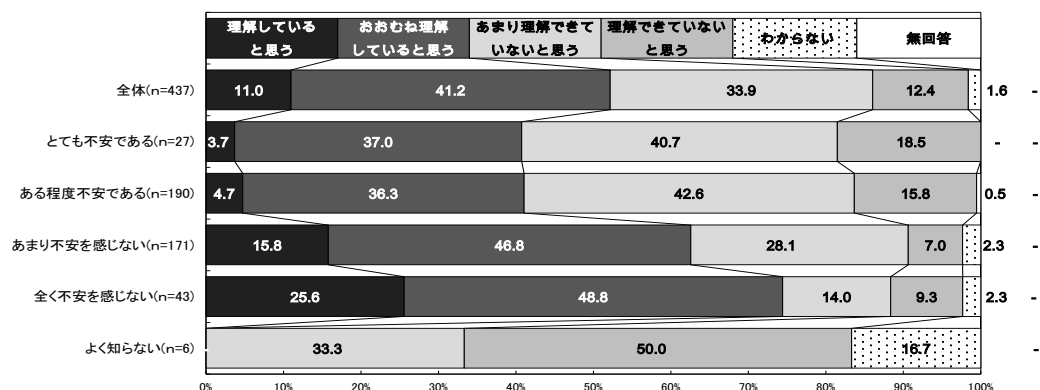


### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

■ 「器具・容器包装からの溶出化学物質」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で器具・容器包装からの溶出化学物質について「理解していると思う」と回答した人は「全く不安を感じない」という人に多く、「とても不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3D 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<器具・容器包装からの溶出化学物質>

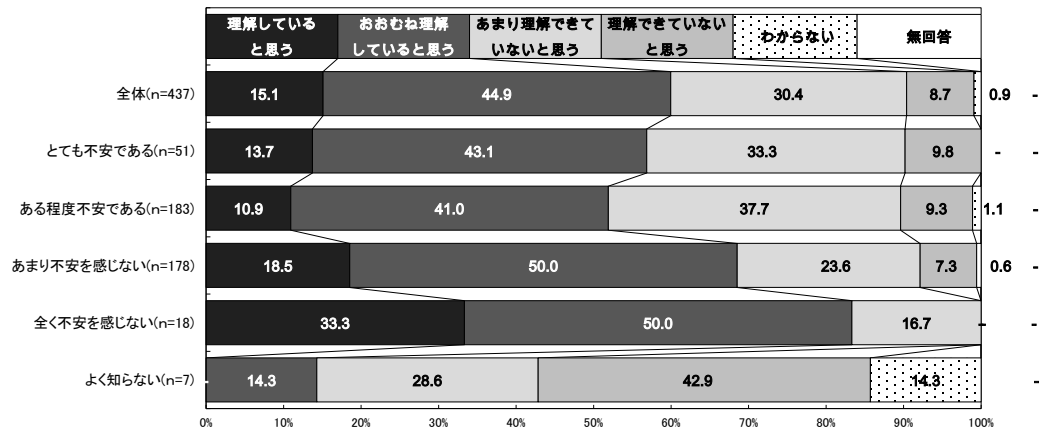


### E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

■ 「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

問10で汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）について「理解していると思う」と回答した人は、問2で「全く不安を感じない」と回答した人で多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3E 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問2）との関係<汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)>

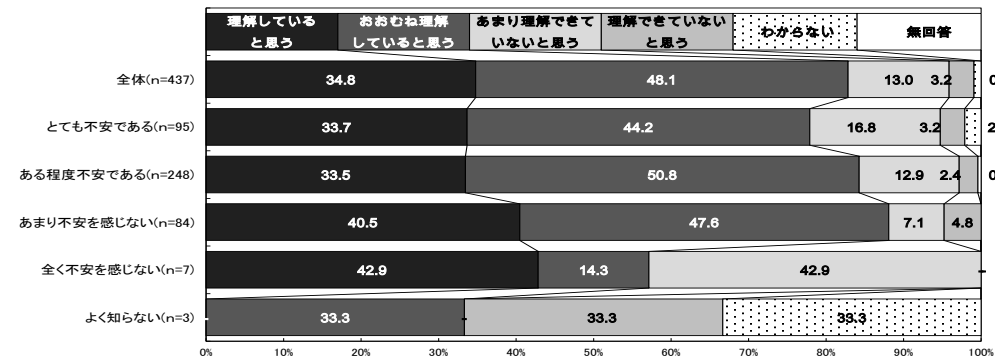


### F. 有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒

■ 「有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒」に対しては、不安の程度の低い人は、リスクの理解度が高い。また、不安の程度が高い人も、理解度が比較的高い。

- 問10で有害物質（細菌等）、ウイルス等による食中毒について「理解していると思う」と回答した人は、サンプル数が少ないが、問2で「全く不安を感じない」と回答した人に多い。「とても不安である」「ある程度不安である」と回答した人も、比較的理解度が高い。

図表 10-3F 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問2）との関係<有害物質(細菌等)、ウイルス等による食中毒>

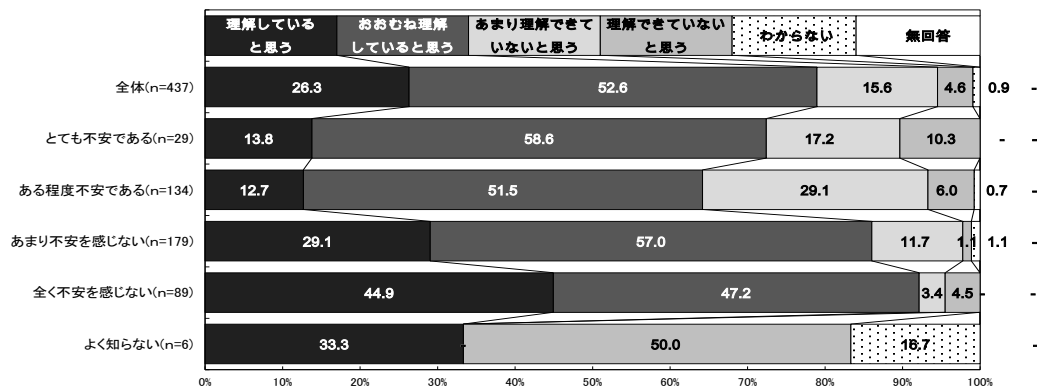


### G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

■ 「BSE（伝達性牛海綿状脳症）」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で BSE（伝達性牛海綿状脳症）について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3G 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<BSE（伝達性牛海綿状脳症）>

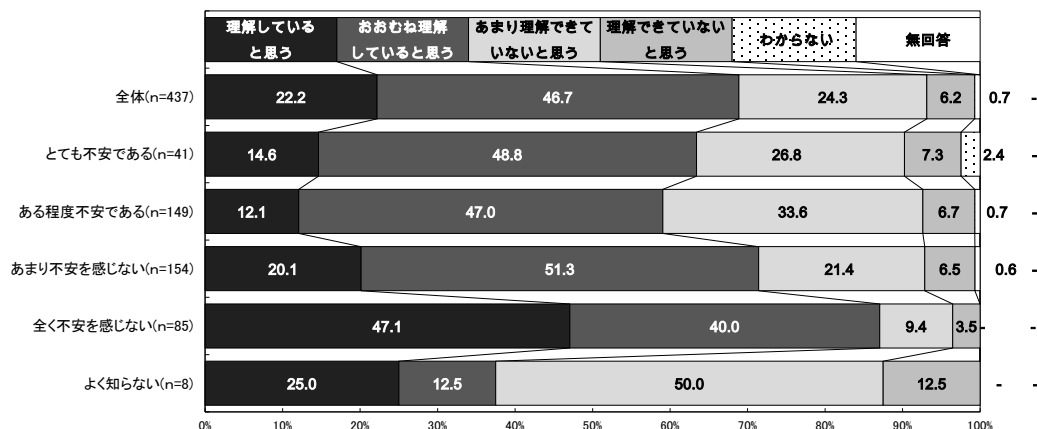


### H. 遺伝子組換え

■ 「遺伝子組換え」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で遺伝子組換えについて「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3H 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<遺伝子組換え>

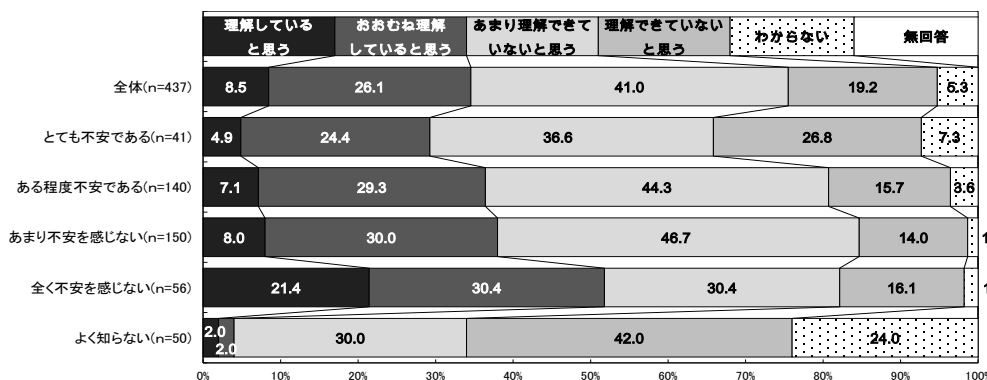


## I. 体細胞クローン

■ 「体細胞クローン」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られるが、全体的にリスクの理解度は低い。

- 問 10 で体細胞クローンについて「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「とても不安である」と回答した人に少ない。
- どの不安の程度とも、理解度は、他のハザードに比べて全体的に低い。

図表 10-3I 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係＜体細胞クローン＞

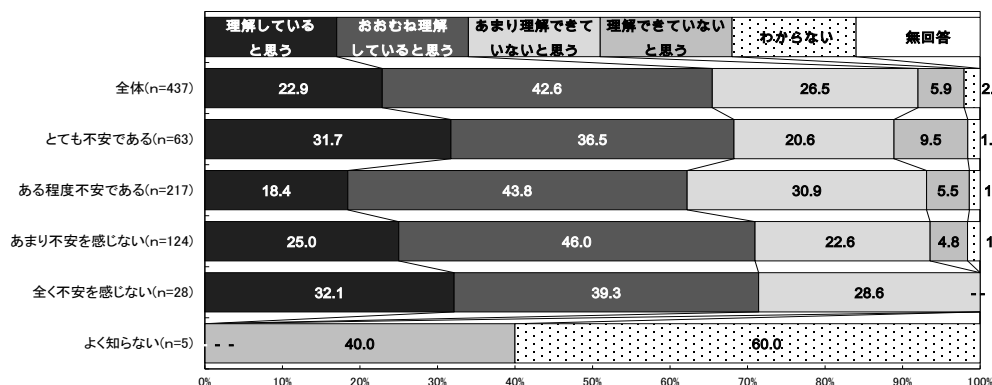


## J. いわゆる健康食品

■ 「いわゆる健康食品」では、「とても不安である」「全く不安を感じない」の双方とも、「理解していると思う」という回答の割合が高い。

- 問 10 でいわゆる健康食品について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。また、「とても不安である」と回答した人にも、「理解していると思う」と回答した人が多い。

図表 10-3J 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係＜いわゆる健康食品＞

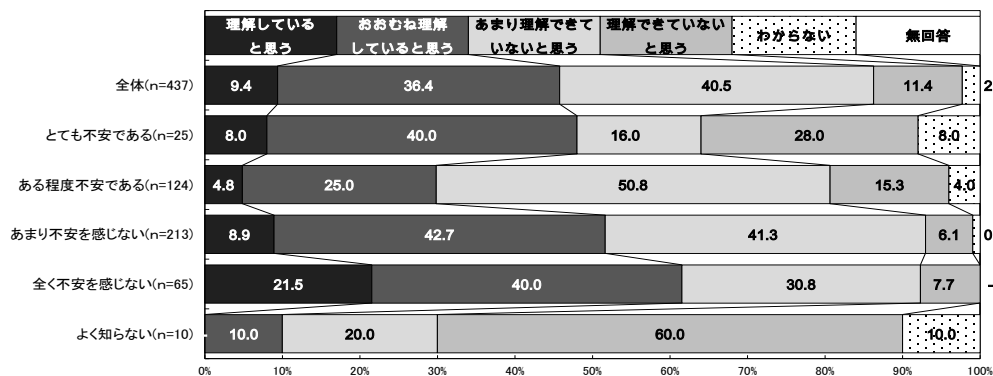


## K. 肥料・飼料等

■ 「肥料・飼料等」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られるが、全体的にリスクの理解度は低い。

- 問 10 で肥料・飼料等について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多い。一方で「ある程度不安である」と回答した人には少ない。
- どの不安の程度とも、理解度は、他のハザードに比べて全体的に低い。

図表 10-3K 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<肥料・飼料等>

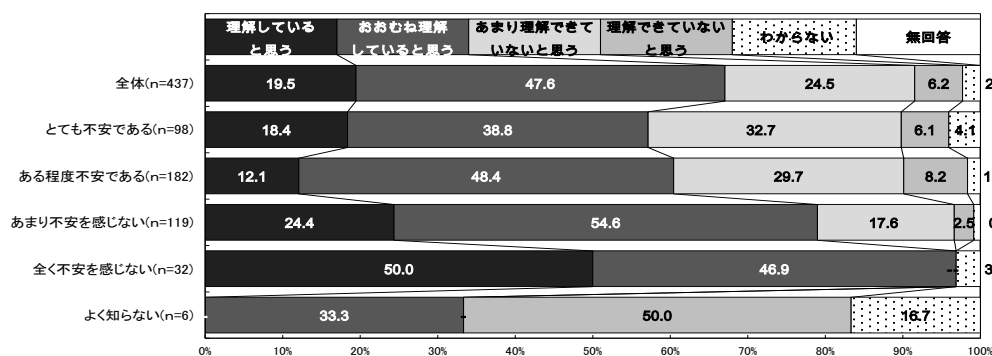


## L. 放射性物質

■ 「放射性物質」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られる。

- 問 10 で放射性物質について「理解していると思う」と回答した人は、問 2 で「全く不安を感じない」と回答した人に多く、「ある程度不安である」と回答した人に少ない。

図表 10-3L 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問 2）との関係<放射性物質>

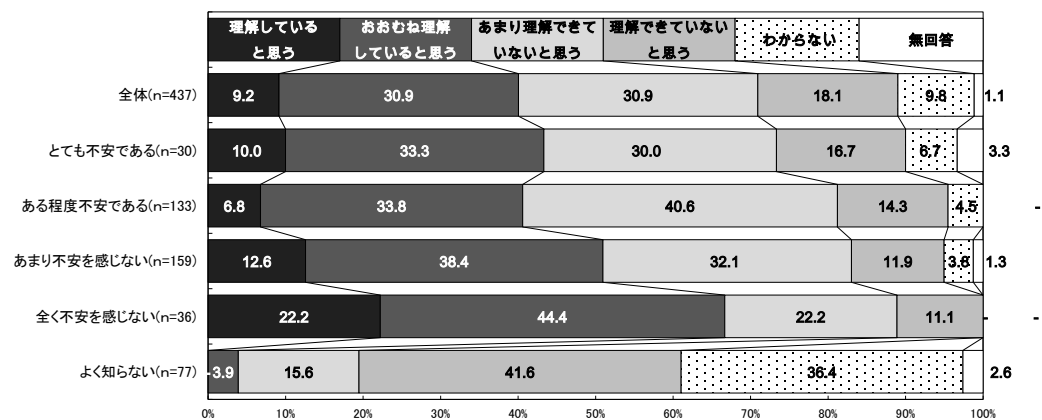


## M. アクリルアミド

■ 「アクリルアミド」に対する不安の程度が低くなるほど、リスクの理解度が高くなる傾向が見られるが、全体的にリスクの理解度はやや低い。

- 問10でアクリルアミドについて「理解していると思う」と回答した人は、問2で「全く不安を感じない」と回答した人が多く、「ある程度不安である」という人に少ない。
- どの不安の程度とも、理解度は、他のハザードに比べて全体的にやや低い。

図表 10-3M 食品の安全性に係るハザード別リスクの理解度とハザード別不安の程度（問2）との関係<アクリルアミド>



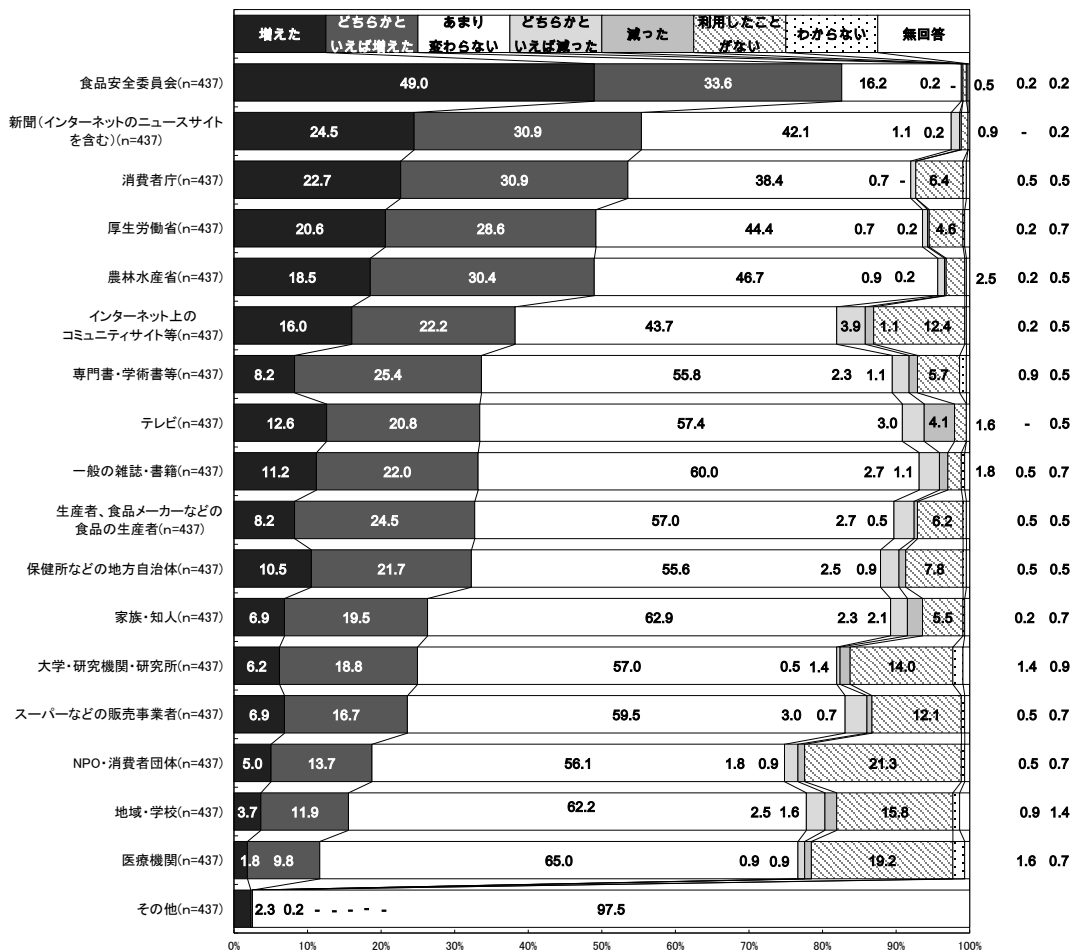
## 11. 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先の変化（問11）

### 11-1 食品安全モニターになってから利用回数が増えた食品に関する情報の入手先別の变化の回答割合

■ 食品に関する情報の入手先について、食品安全モニターになってから利用回数が増えたという割合が高い上位3位は、「食品安全委員会」「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」「消費者庁」。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先別の变化について尋ねたところ、利用回数が増えたという割合が高いのは、「食品安全委員会」（49.0%）、次いで「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」（24.5%）、そして「消費者庁」（22.7%）が続いている。

図表 11-1①食品安全モニターになってから利用回数が増えた食品に関する情報の入手先別の变化



※「増えた」「どちらかといえば増えた」の合計が多いもの順に並び替え。

- 食品安全モニターになってから、利用回数が増えた食品に関する情報の入手先について、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計を性別に上位5位を比較したところ、あまり差は見られない。

図表 11-1②食品安全モニターになってから利用回数が増えた食品に関する情報の入手先の属性別変化  
(上位5位・性別)

性別	1位	2位	3位	4位	5位
男性	食品安全委員会 (79.4%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (55.0%)	消費者庁 (55.0%)	農林水産省 (53.4%)	厚生労働省 (52.9%)
女性	食品安全委員会 (86.4%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (55.8%)	消費者庁 (51.8%)	厚生労働省 (44.7%)	農林水産省 (43.7%)

※性別で利用回数が「増えた」「どちらかといえば増えた」の合計が多い上位5位

- 食品安全モニターになってから利用する回数が増えた食品に関する情報の入手先について、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計を年代別に上位5位を比較したところ、どの年代も「食品安全委員会」が第1位となっている。
- 40代を除いたすべての年代で「新聞(インターネットのニュースサイトを含む)」が第2位となっている。
- 20代は「専門書・学術書等」が第3位と他の年代に比べて高い。
- 40代は「消費者庁」が第2位となっている。
- 全体で8位であった「テレビ」は20代で第5位、70歳以上で第4位と高い。

図表 11-1③食品安全モニターになってから利用回数が増えた食品に関する情報の入手先の属性別変化(上位5位・年代別)

年代	1位	2位	3位	4位	5位
20～29歳	食品安全委員会 (72.2%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (55.6%)	専門書・学術書等 (55.6%)	農林水産省 (55.6%)	テレビ (50.0%)
30～39歳	食品安全委員会 (89.6%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (55.8%)	農林水産省 (53.2%)	消費者庁 (50.6%)	厚生労働省 (46.8%)
40～49歳	食品安全委員会 (84.3%)	消費者庁 (52.9%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (49.0%)	厚生労働省 (48.0%)	農林水産省 (43.1%)
50～59歳	食品安全委員会 (77.0%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (55.7%)	消費者庁 (54.9%)	農林水産省 (46.7%)	厚生労働省 (45.1%)
60～69歳	食品安全委員会 (83.5%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (58.2%)	消費者庁 (56.0%)	厚生労働省 (54.9%)	農林水産省 (49.5%)
70歳以上	食品安全委員会 (85.2%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (66.7%)	農林水産省 (63.0%)	テレビ (59.3%)	厚生労働省 (59.3%)

※年代別で利用回数が「増えた」「どちらかといえば増えた」の合計が多い上位5位



- 職務経験別では、すべての職務経験で「食品安全委員会」が第1位となっている。
- 食品流通・販売経験者では、全体で第2位だった「新聞（インターネットのニュースサイトを含む）」が第5位と他の職務経験区分に比べ低い。
- 食品生産・加工経験者、食品流通・販売経験者、医療職経験者、食品関係行政職経験者では「消費者庁」が第2位となっている。
- 医療職経験者、その他消費者では、全体で第6位であった「インターネット上のコミュニティサイト等（SNS、ブログなど）」が第5位と他の職務経験区分と比べ高い。

図表 11-1④食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
(上位5位・職務経験別)

職務経験	1位	2位	3位	4位	5位
食品生産・加工経験者	食品安全委員会 (82.8%)	消費者庁 (60.4%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)(57.5%)	農林水産省 (52.2%)	厚生労働省 (50.7%)
食品流通・販売経験者	食品安全委員会 (84.3%)	消費者庁 (60.0%)	厚生労働省 (55.7%)	農林水産省 (54.3%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (42.9%)
研究職経験者	食品安全委員会 (85.0%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)(60.0%)	農林水産省 (60.0%)	厚生労働省 (57.5%)	消費者庁 (55.0%)
医療職経験者	食品安全委員会 (82.9%)	消費者庁 (58.5%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)(43.9%)	厚生労働省 (41.5%)	インターネット上のコミュニティサイト等((SNS)、ブログなど)(34.1%)
教育職経験者	食品安全委員会 (74.3%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)(57.1%)	厚生労働省 (54.3%)	消費者庁 (51.4%)	農林水産省 (51.4%)
食品関係行政職経験者	食品安全委員会 (76.5%)	消費者庁 (52.9%)	厚生労働省 (52.9%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む) (47.1%)	農林水産省 (41.2%)
その他消費者	食品安全委員会 (84.0%)	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)(65.0%)	テレビ (47.0%)	農林水産省 (43.0%)	インターネット上のコミュニティサイト等((SNS)、ブログなど)(42.0%)

※職務経験別で利用回数が「増えた」「どちらかといえば増えた」の合計が多い上位5位

その他（食品に関する情報の入手先の変化）（利用回数が「増えた」「どちらかといえば増えた」の回答者）（回答者数 11 人）

学会の情報、メールマガジン、食品関係の専門家・研修会などの回答があった。

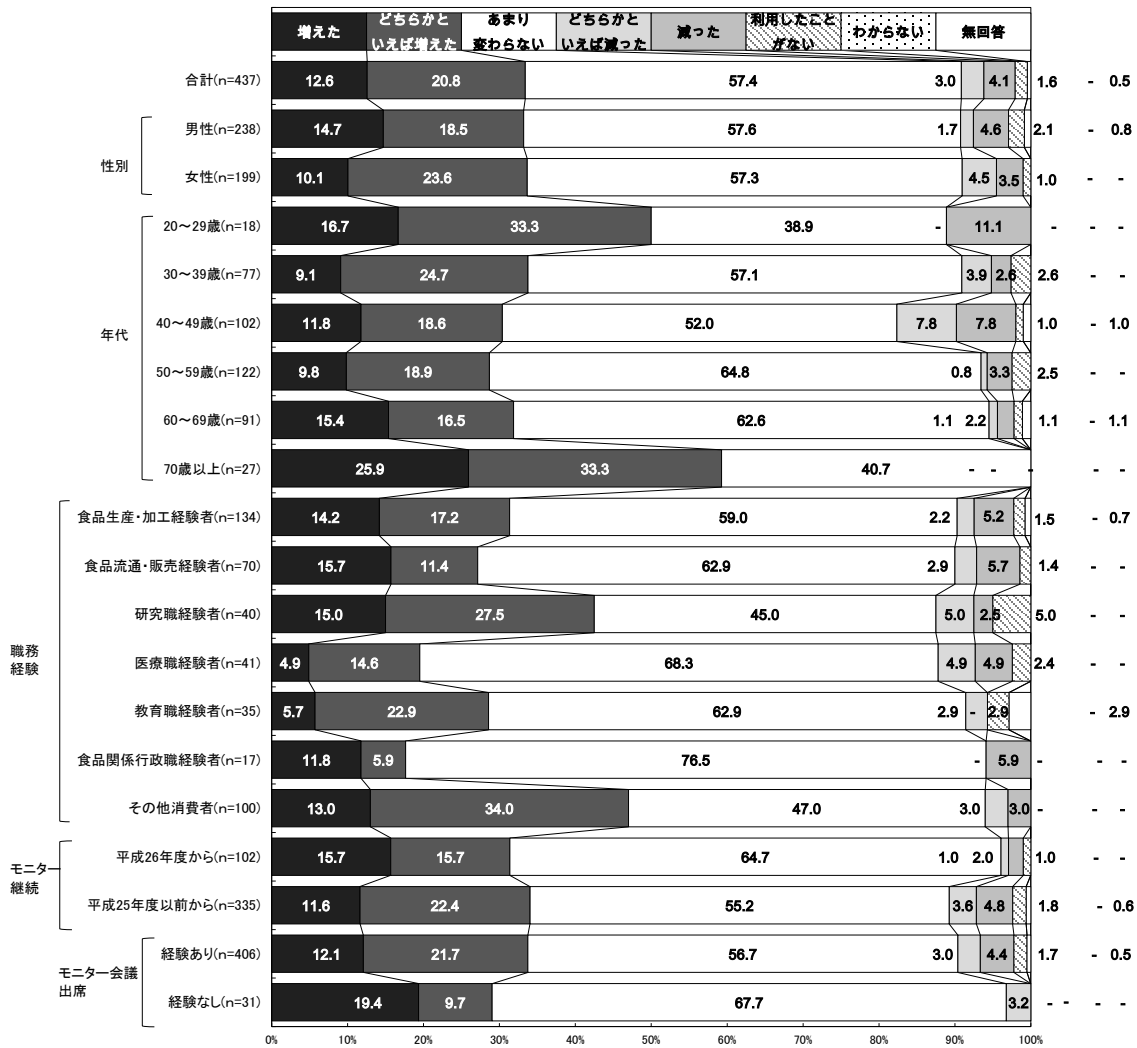
## 11-2 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先の属性別変化

### 1. テレビ

■ 年代別では 20 代、70 歳以上、職務経験別ではその他消費者、研究職経験者でテレビの利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先としてテレビの利用回数の変化を属性別に比較したところ、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は性別ではあまり差は見られない。「増えた」に限定すると、女性(10.1%)よりも男性(14.7%)のほうが割合が高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は 20 代(50.0%)、70 歳以上(59.2%)がサンプル数は少ないが、利用回数が増えた割合が高く、50 代(28.7%)、40 代(30.4%)では低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計はその他消費者(47.0%) 研究職経験者(42.5%)で高い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成 26 年度新規のモニター(31.4%)より平成 25 年度以前から継続しているモニター(34.0%)のほうがやや高い。
- モニター会議出席経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(29.1%)より出席経験のある人(33.8%)の方が有意に高い。「増えた」に限定すると、出席経験のない人(19.4%)のほうが出席経験のある人(12.1%)より有意に高い。

図表 11-2.1 食品安全モニターになってから利用回数が増えた食品に関する情報の入手先の属性別変化<テレビ・属性別>

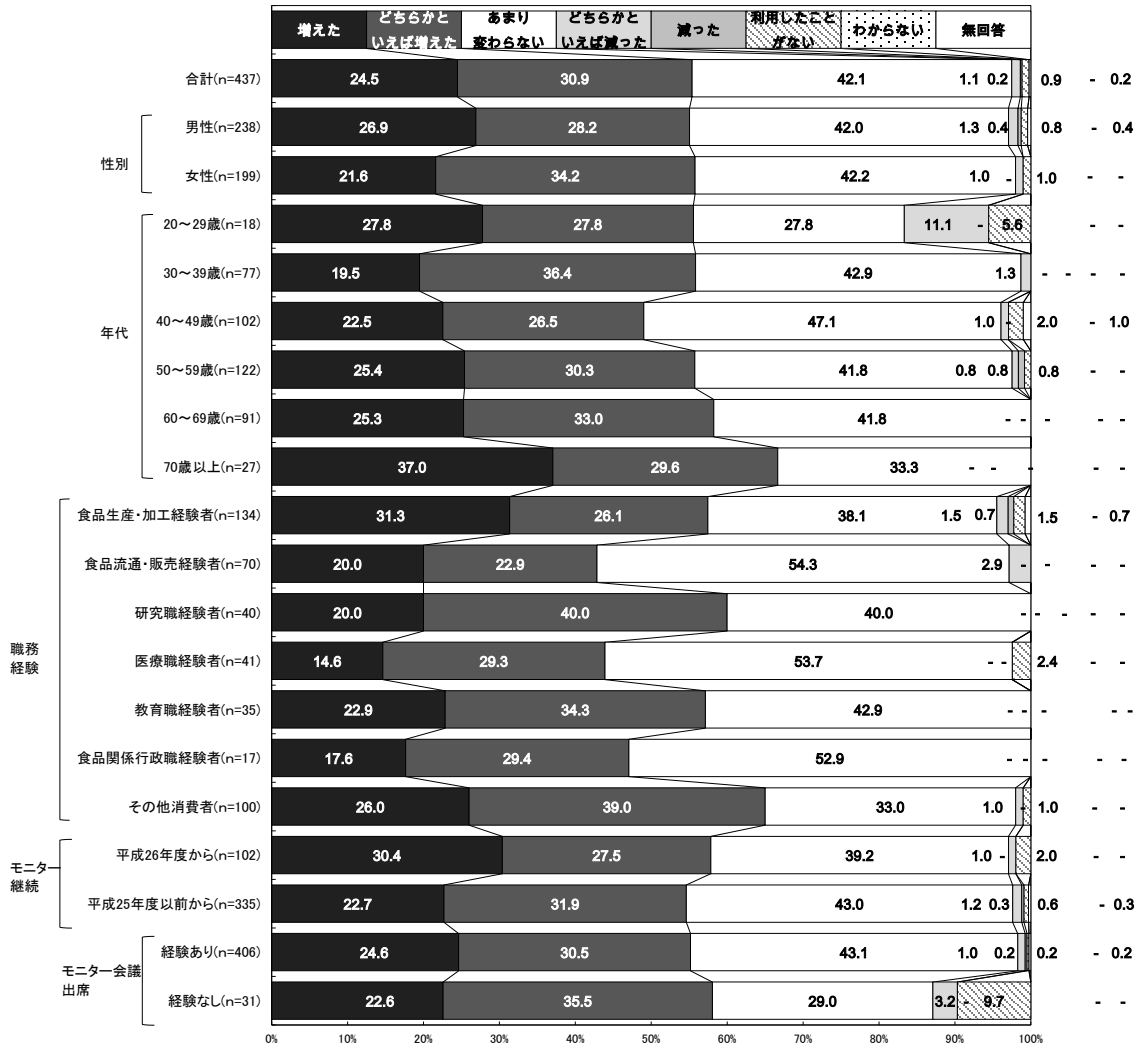


## 2. 新聞（インターネットのニュースサイトを含む）

■ 年代別では70歳以上、職務経験別では研究職経験者、その他消費者で新聞（インターネットのニュースサイトを含む）の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として新聞（インターネットのニュースサイトを含む）の利用回数の変化を属性別に比較したところ、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は性別では差は見られない。「増えた」に限定すると、女性(21.6%)より男性(26.9%)のほうが高い。
- 年代別での「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、70歳以上(66.6%)がサンプル数は少ないが利用回数が増えた割合が高く、40代(49.0%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、研究職経験者(60.0%)、その他消費者(60.0%)で高く、食品関係行政職経験者(47.0%)、医療職経験者(43.9%)、食品流通・販売経験者(42.9%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、平成26年度新規のモニター(57.9%)のほうが25年度から継続しているモニター(54.6%)より高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のある人(55.1%)より出席経験のない人(58.1%)のほうが有意に高い。「増えた」に限定すると、出席経験のある人(24.6%)のほうが出席経験のない人(22.6%)より高い。

図表 11-2.2 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<新聞（インターネットのニュースサイト含む）・属性別>

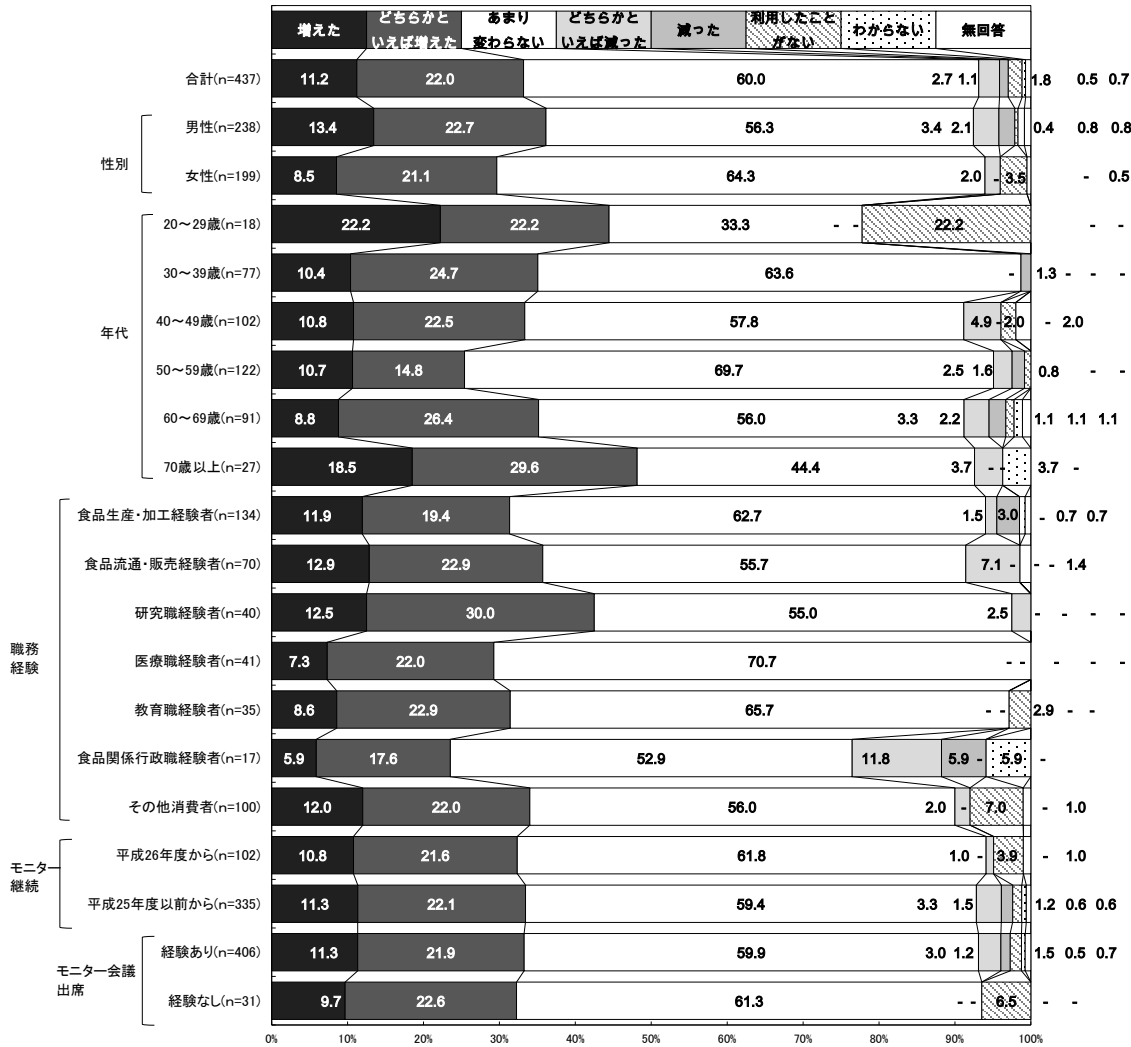


### 3. 一般の雑誌・書籍

■ 性別では男性、年代別では20代、70歳以上、職務経験別では研究職経験者で一般の雑誌・書籍の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として一般の雑誌・書籍の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、女性(29.6%)よりも男性(36.1%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、サンプル数は少ないが、20代(44.4%)、70歳以上(48.1%)が高く、50代(25.5%)で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、サンプル数は少ないが、研究職経験者(42.5%)で高く、食品関係行政職経験者(23.5%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験別については、あまり差は見られない。

図表 11-2.3 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜一般の雑誌・書籍・属性別＞



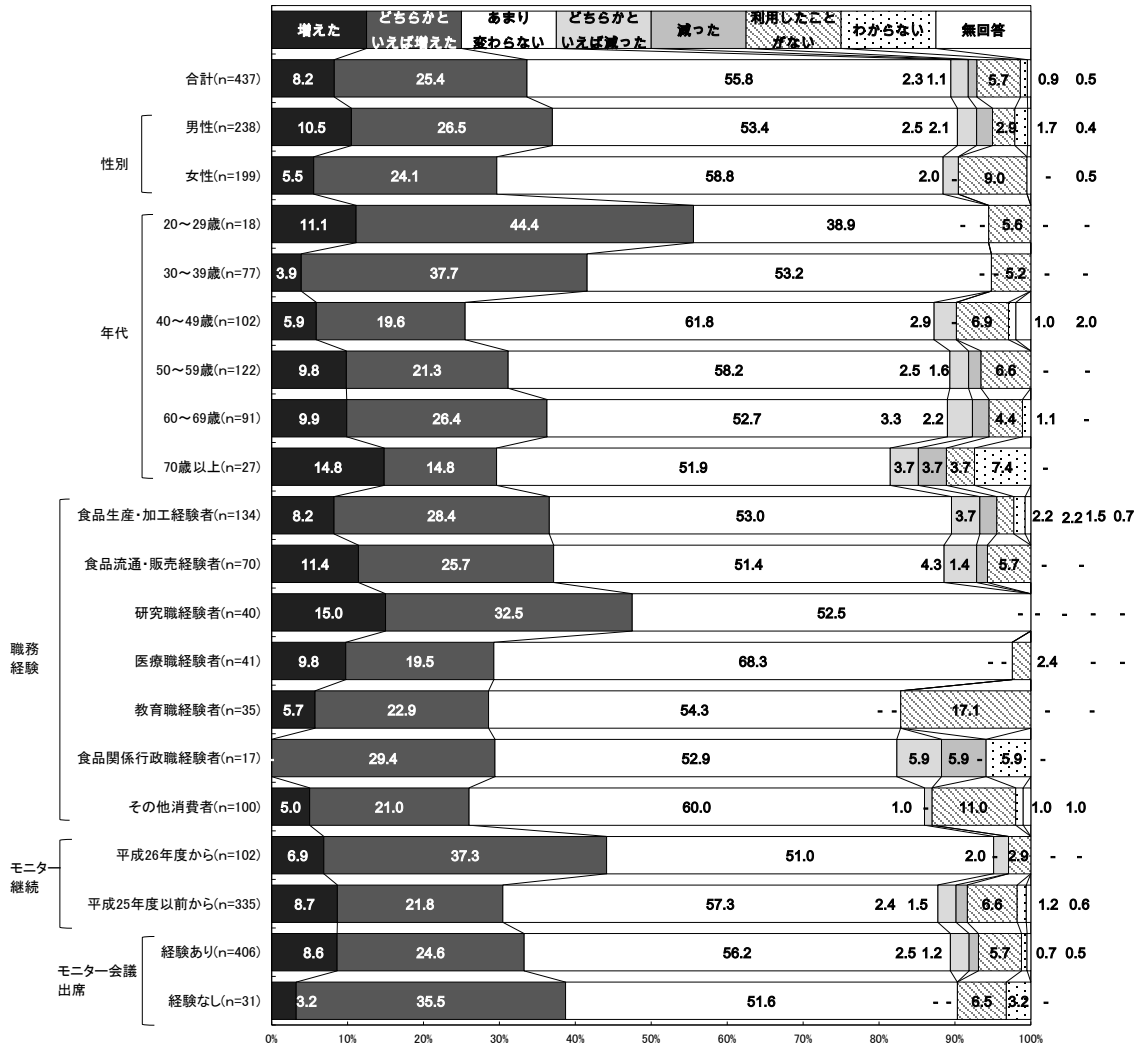


#### 4. 専門書・学術書等

■ 性別では男性、年代別では 20 代、職務経験別では研究職経験者で専門書・学術書等の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として専門書・学術書等の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、女性(29.6%)よりも男性(37.0%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、20 代(55.5%)で高く、40 代(25.5%)、70 歳以上(29.6%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、研究職経験者(47.5%)で高く、医療職経験者(29.3%)、教育職経験者(28.5%)、その他消費者(26.0%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、平成 26 年度新規のモニター(44.2%)のほうが 25 年度から継続しているモニター (30.5%) のほうが有意に高い。
- モニター会議出席経験については、出席経験のない人(38.7%)のほうが経験のある人(33.2%)より高い。

図表 11-2.4 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<専門書・学術書等・属性別>



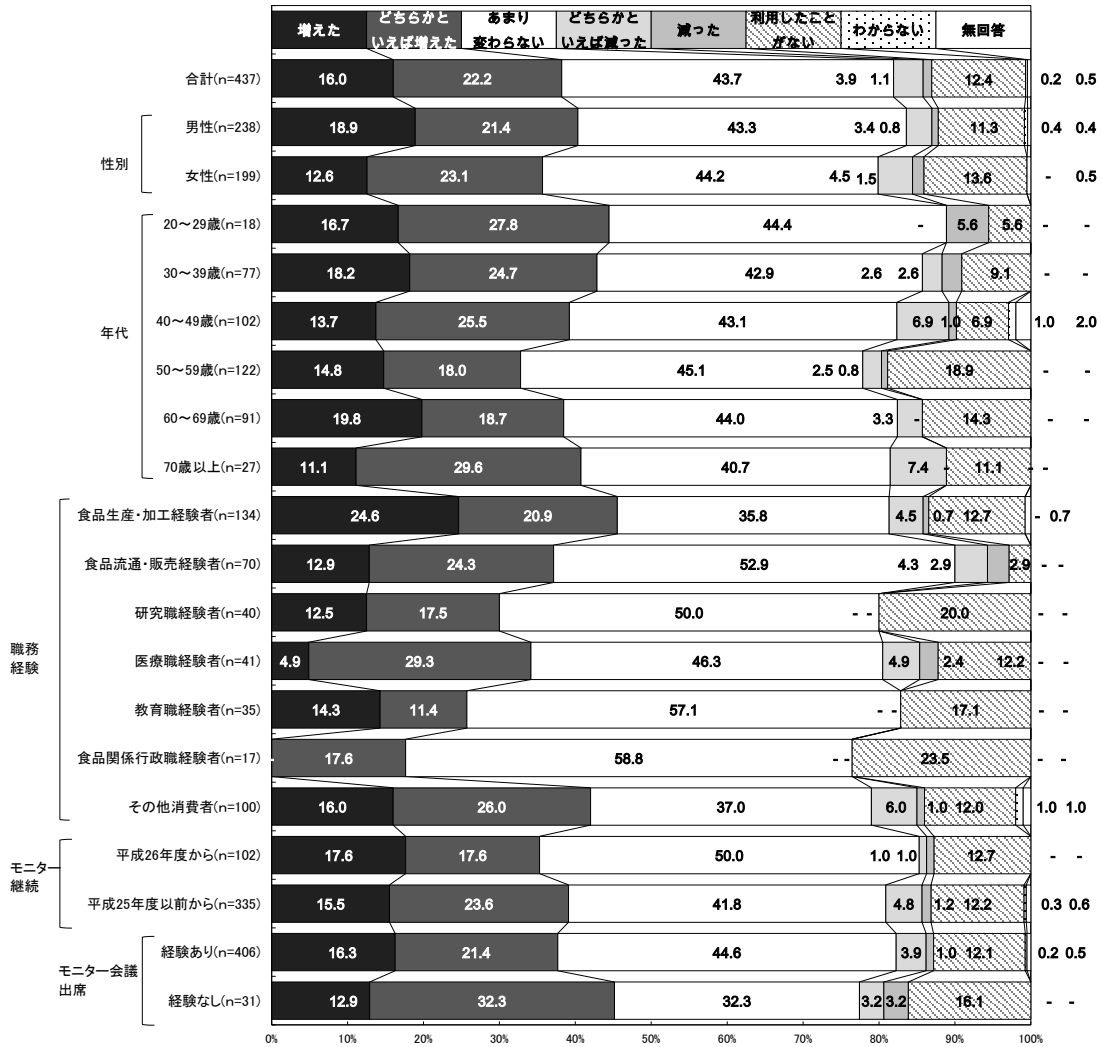
## 5. インターネット上のコミュニティサイト等（SNS、ブログ等）

■ 性別では男性、年代別では 20 代、30 代という若い層、職務経験別では食品生産・加工経験者、その他消費者でインターネット上のコミュニティサイト等（SNS、ブログ等）の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先としてインターネット上のコミュニティサイト等（SNS、ブログ等）の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、女性(35.7%)よりも男性(40.3%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、20 代(44.5%)、30 代(42.9%)という若い層で利用回数が高く、50 代(32.8%)の中堅層で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、食品生産・加工経験者(45.5%)、その他消費者(42.0%)で高く、食品関係行政職経験者(17.6%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、平成 25 年度以前から継続しているモニター(39.1%)のほうが 26 年度新規のモニター(35.2%)より若干高い。
- モニター会議出席経験別については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、出席経験のない人(45.2%)のほうが出席経験のある人(37.7%)より高い。「増えた」に限定すると、出席経験のある人(16.3%)のほうが出席経験のない人 (12.9%) より若干高い。

図表 11-2.5 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化

<インターネット上のコミュニティサイト等（SNS、ブログ等）・属性別>

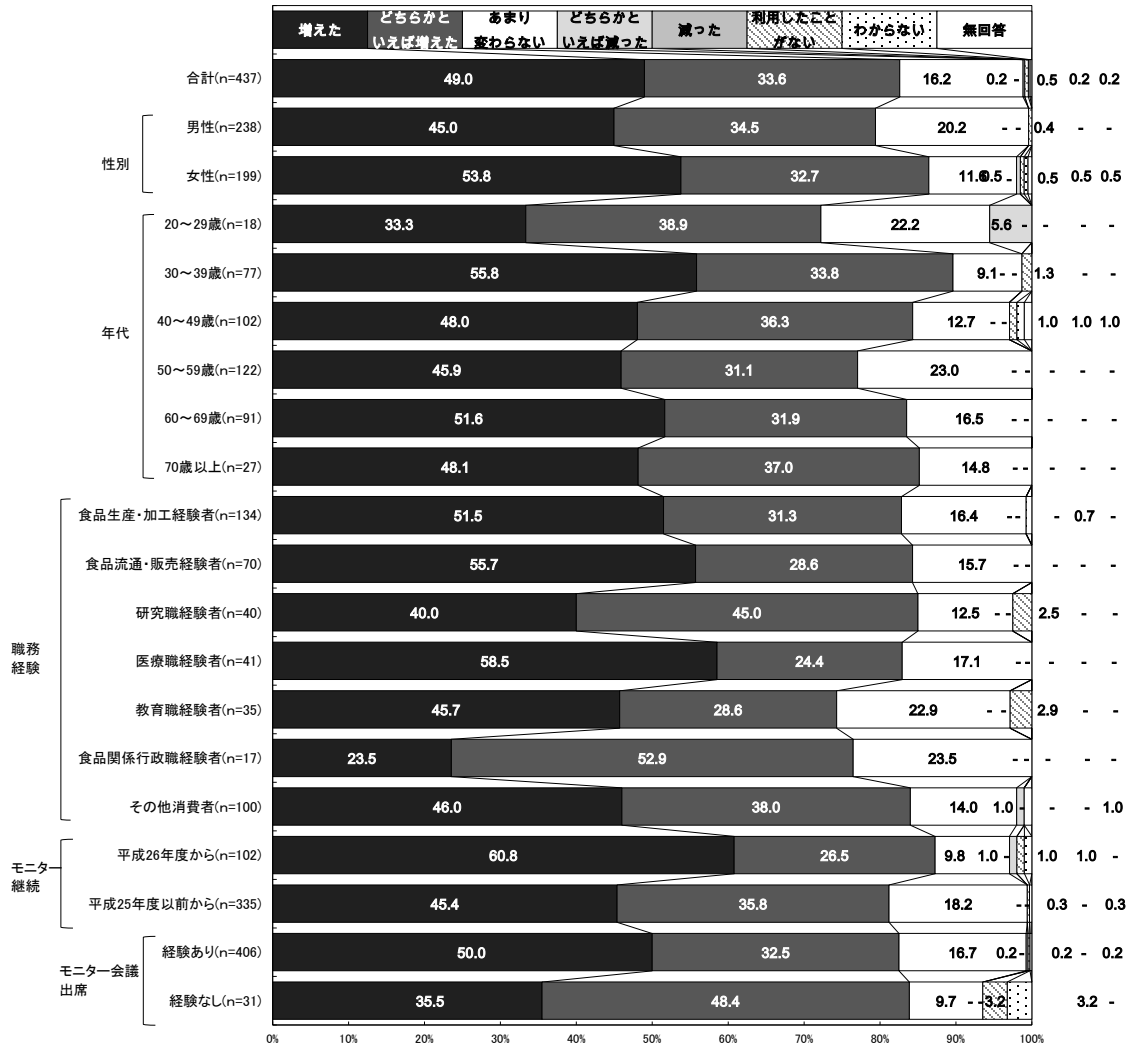


## 6. 食品安全委員会

■ 性別では女性、年代別では30代、職務経験別では研究職経験者、食品流通・販売経験者、その他消費者で食品安全委員会の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として食品安全委員会の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、男性(79.5%)よりも女性(86.5%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、30代(89.6%)で高く、20代(72.2%)で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、研究職経験者(85.0%)、食品流通・販売経験者(84.3%)、その他消費者(84.0%)で高く、教育職経験者(74.3%)、食品関係行政職経験者(76.4%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、平成26年度新規のモニター(87.3%)のほうが25年度以前から継続しているモニター(81.2%)より有意に高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計には差は見られないが、「増えた」に限定すると、出席経験のある人(50.0%)の方が出席経験のない人(35.5%)より高いという有意な差が見られる。

図表 11-2.6 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<食品安全委員会・属性別>

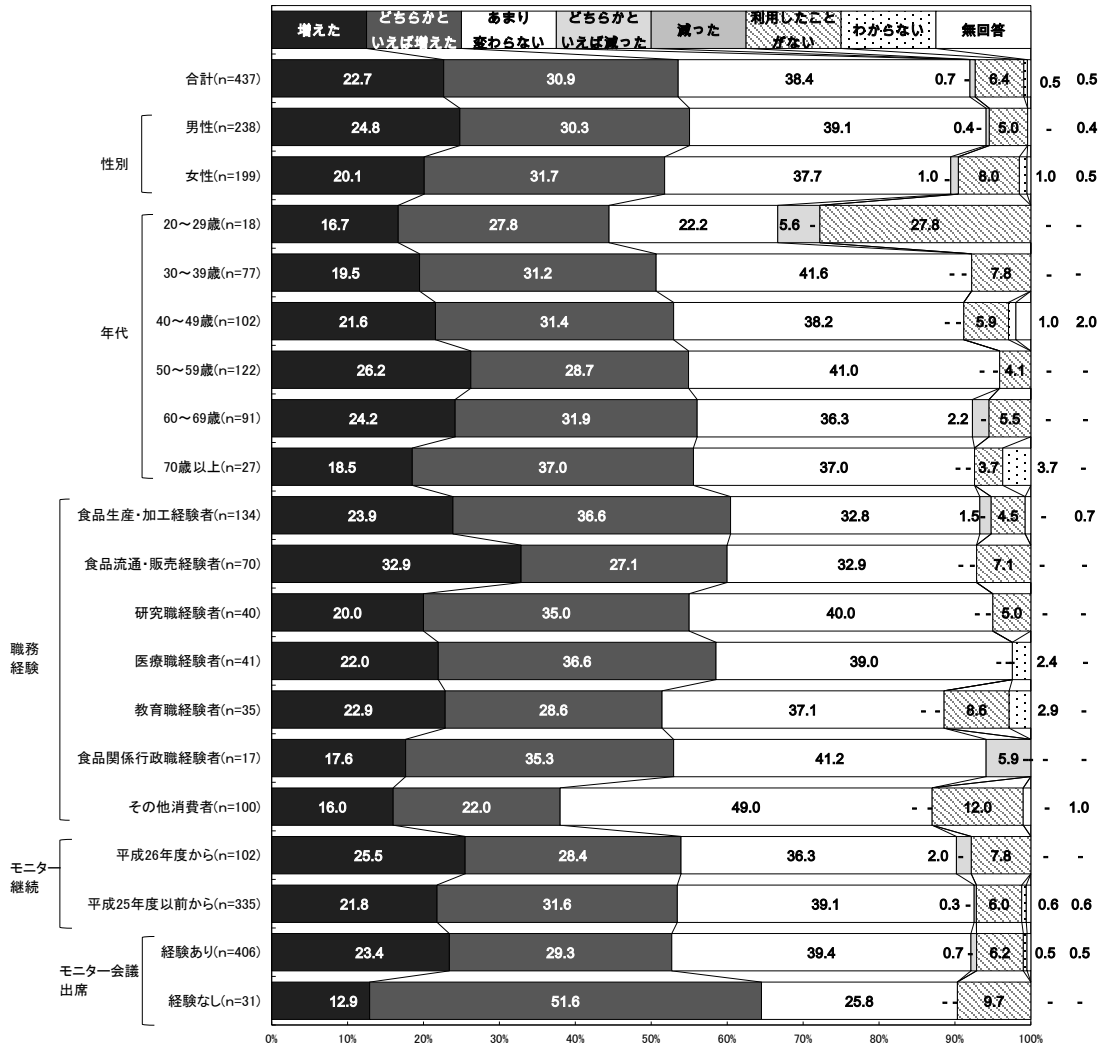


## 7. 消費者庁

■ 性別では男性、年代別では高齢層、職務経験別では食品生産・加工経験者、食品流通・販売経験者で消費者庁の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として消費者庁の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、女性(51.8%)よりも男性(55.1%)のほうが若干高い。
- 年代別では、年代が高くなるほど「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計が高いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、食品生産・加工経験者(60.5%)、食品流通・販売経験者(60.0%)で高く、その他消費者(38.0%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計にあまり差は見られない。「増えた」に限定すると、平成 26 年度新規のモニター(25.5%)のほうが 25 年度以前から継続しているモニター(21.8%)より高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(64.5%)のほうが出席経験のある人(52.7%)より高い。「増えた」に限定すると、出席経験のある人(23.4%)のほうが出席経験のない人(12.9%)より高い。

図表 11-2.7 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜消費者庁・属性別＞



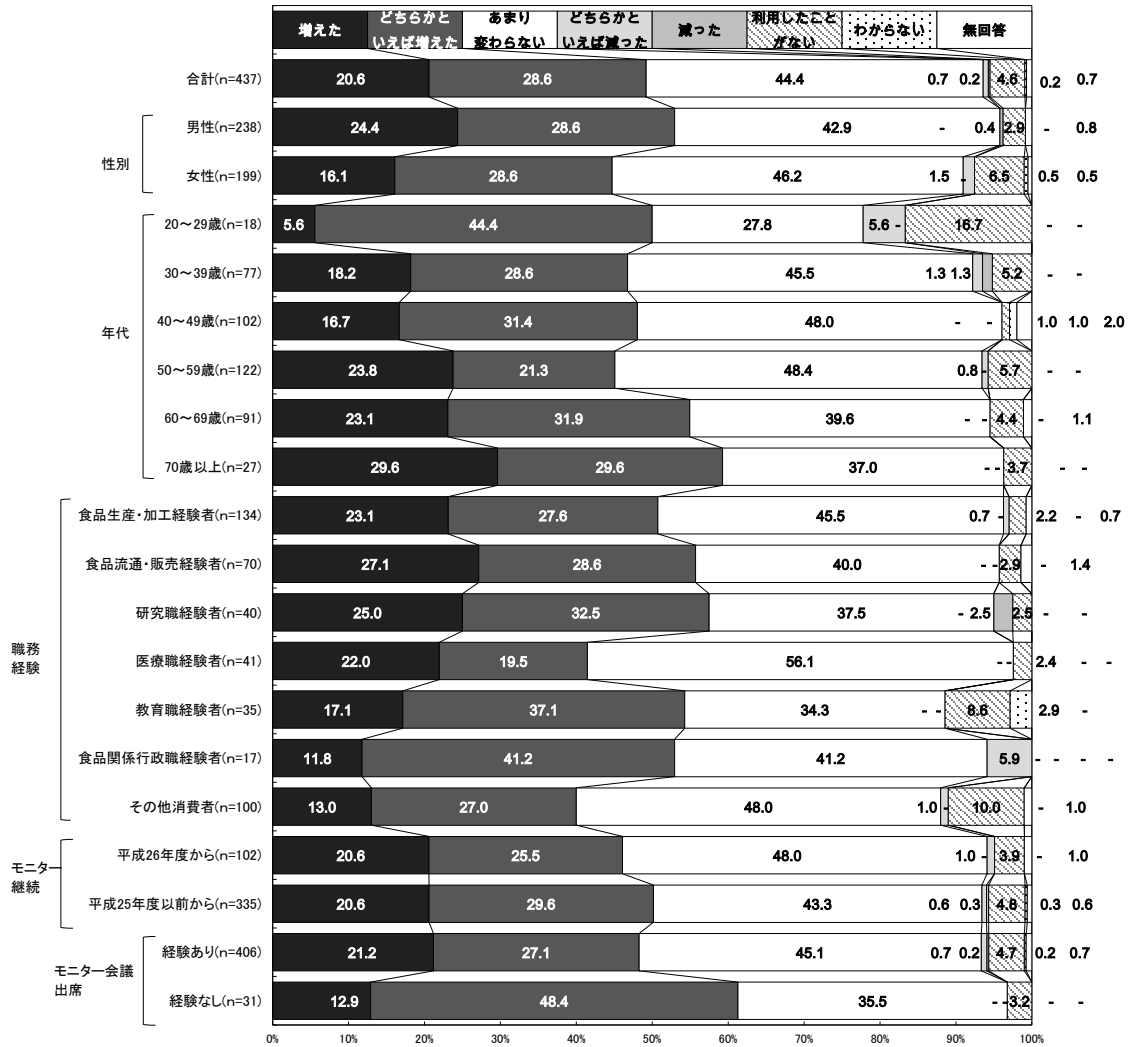


## 8. 厚生労働省

■ 性別では男性、年代別では60歳代以上、職務経験別では研究職経験者、食品流通・販売経験者で厚生労働省の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として厚生労働省の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は女性(44.7%)よりも男性(53.0%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は60代(55.0%)、70歳以上(59.2%)の高齢層で高く、50代(45.1%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者(57.5%)、食品流通・販売経験者(55.7%)で高く、医療職経験者(41.5%)、その他消費者(40.0%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成25年度以前から継続しているモニター(50.2%)のほうが26年度新規のモニター(46.1%)より高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(61.3%)のほうが出席経験のある人(48.3%)より高い。「増えた」に限定すると、出席経験のある人(21.2%)のほうが出席経験のない人(12.9%)より高い。

図表 11-2.8 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<厚生労働省・属性別>

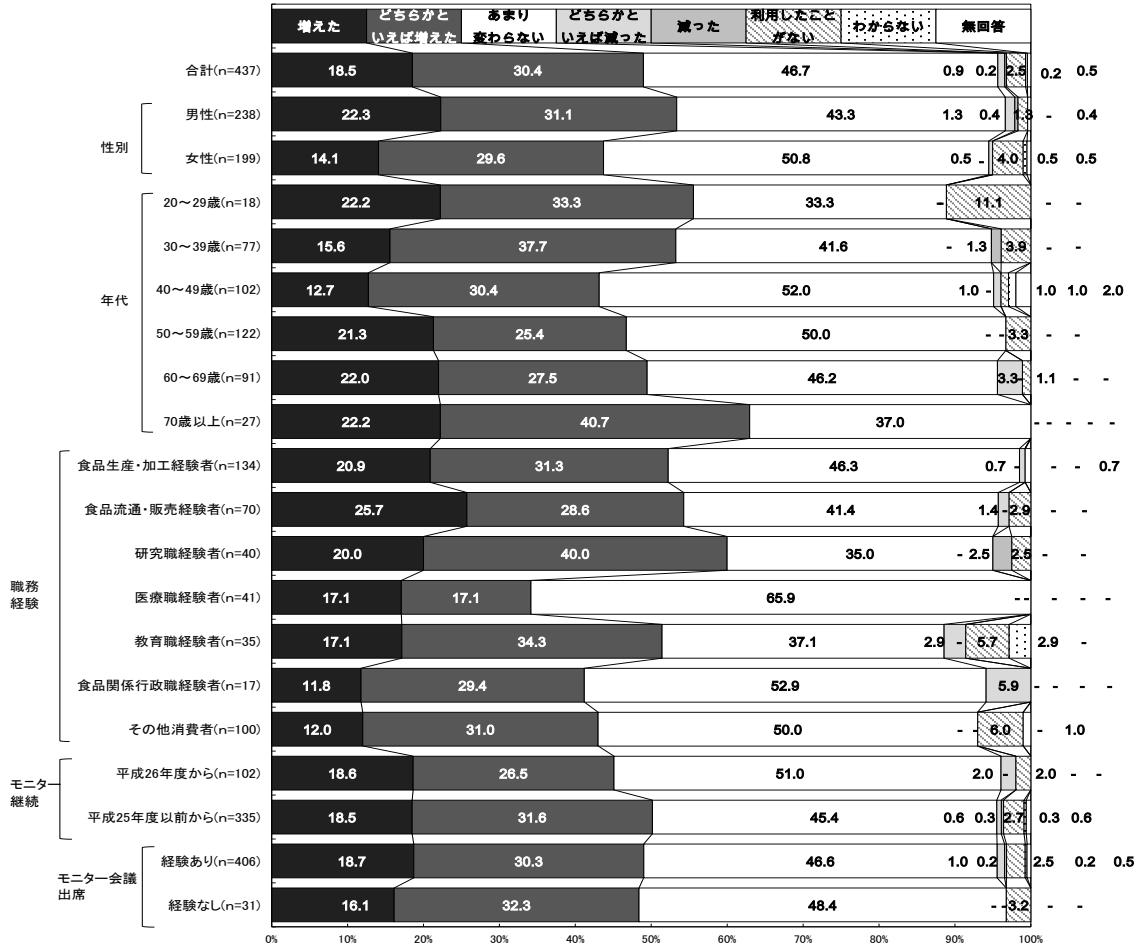


## 9. 農林水産省

■ 性別では男性、年代別では70歳以上、職務経験別では研究職経験者で農林水産省の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として農林水産省の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は女性(43.7%)よりも男性(53.4%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、70歳以上はサンプル数は少ないが利用回数が増えた割合が高く(62.9%)、40代(43.1%)、50代(46.7%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者(60.0%)で高く、医療職経験者(34.2%)で低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成25年度以前から継続しているモニター(50.1%)のほうが26年度新規のモニター(45.1%)より高い。
- モニター会議出席経験については、あまり差は見られない。

図表 11-2.9 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜農林水産省・属性別＞

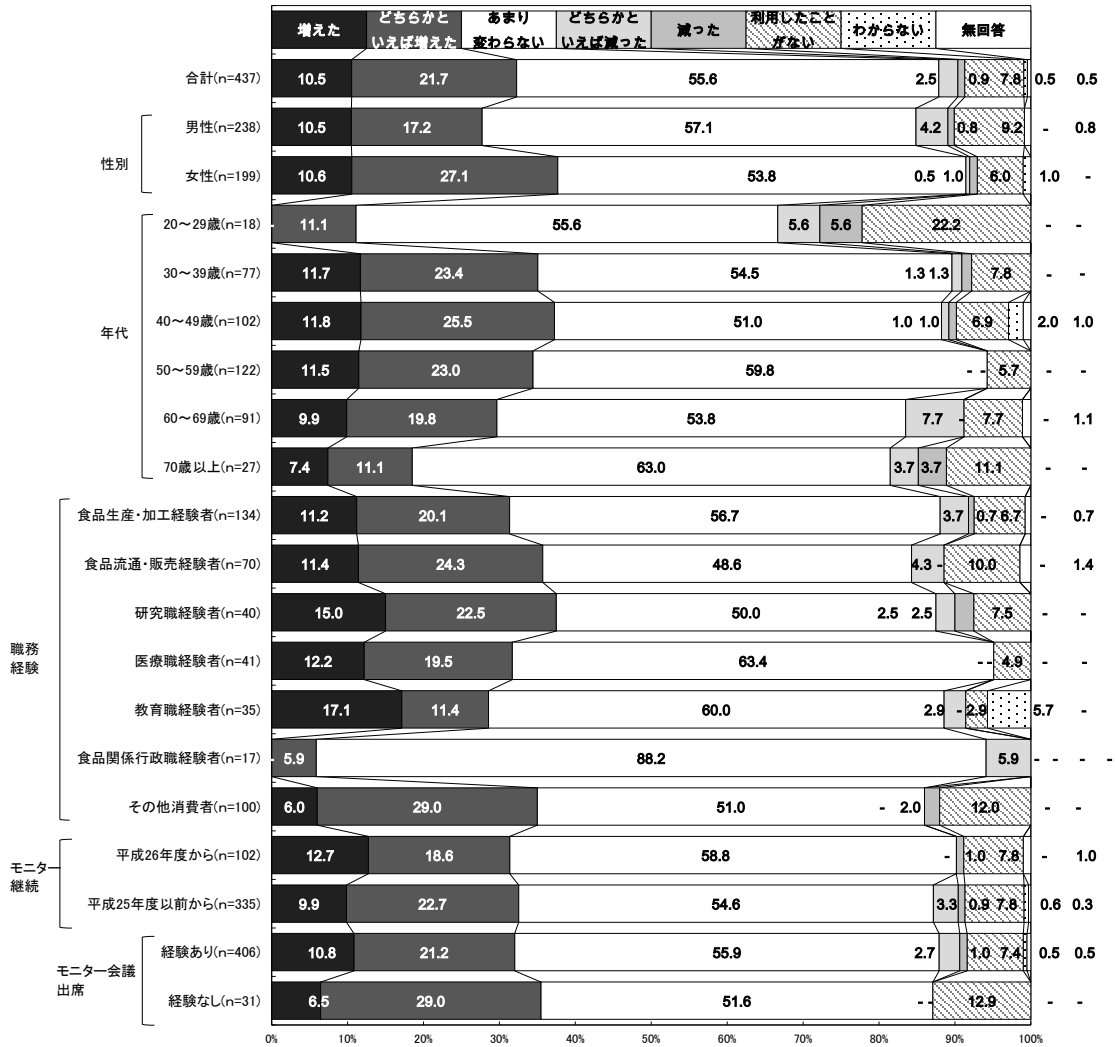


## 10. 保健所などの地方自治体

■ 性別では女性、年代別では30代から50代、職務経験別では研究職経験者、食品流通・販売経験者で保健所などの地方自治体の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として保健所などの地方自治体の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は男性(27.7%)よりも女性(37.7%)のほうが有意に高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は30代(35.1%)、40代(37.3%)、50代(34.5%)の中堅層で高く、20代(11.1%)、70歳以上(18.5%)はサンプル数が少ないが低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者(37.5%)、食品流通・販売経験者(35.7%)で高く、食品関係行政職経験者(5.9%)で極端に低いという有意な差が見られる。
- モニター継続別では、あまり差が見られない。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(35.5%)のほうが出席経験のある人(32.0%)より高い。

図表 11-2.10 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜保健所などの地方自治体・属性別＞

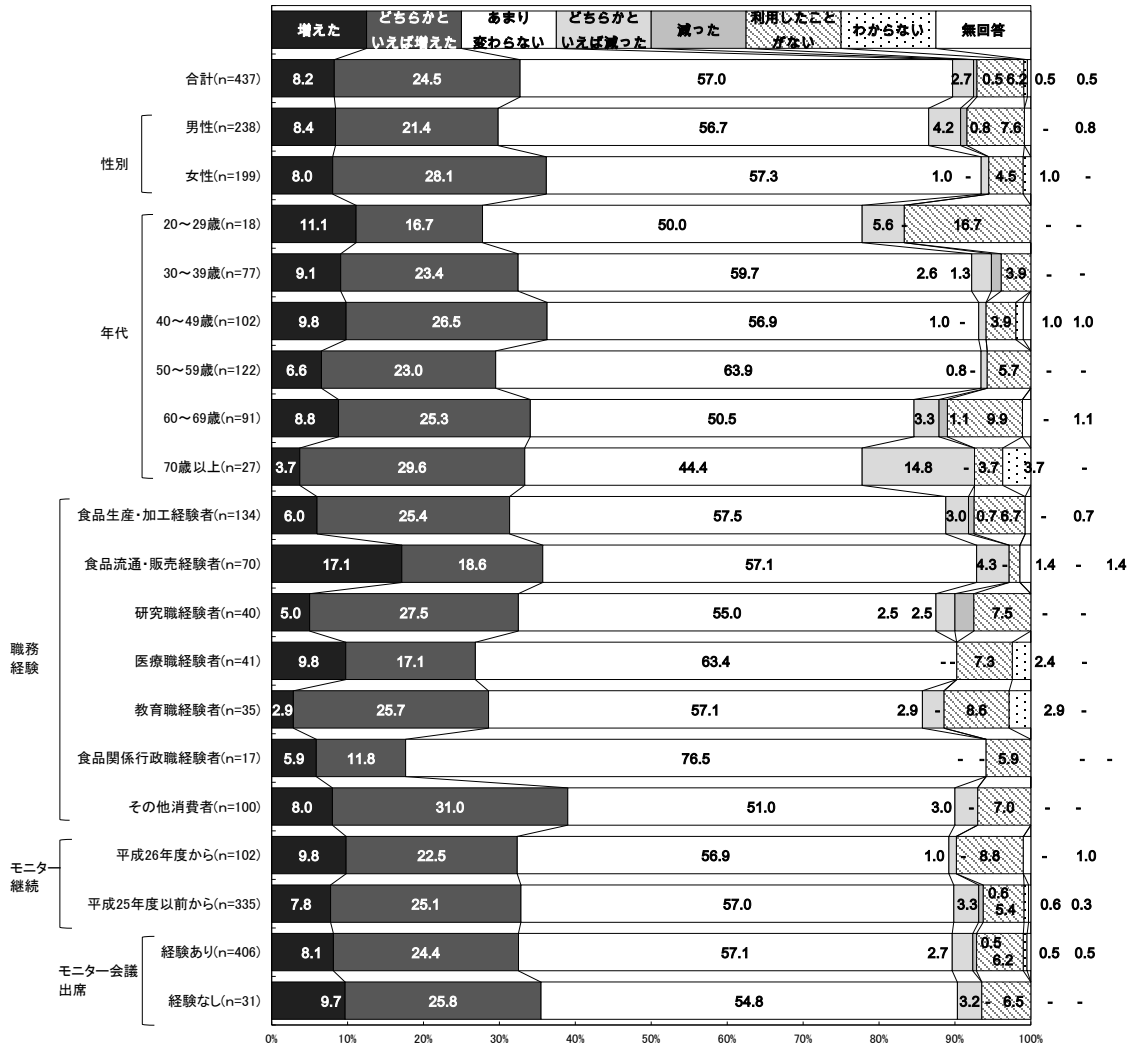


## 11. 生産者、食品メーカーなどの食品の生産者

■ 性別では女性、年代別では40代、職務経験別では食品流通・販売経験者で生産者、食品メーカーなどの食品の生産者の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として生産者、食品メーカーなどの食品の生産者の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は男性(29.8%)よりも女性(36.1%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は40代(36.3%)で若干高く、20代(27.8%)、50代(29.6%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計はその他消費者(39.0%)、食品流通・販売経験者(35.7%)で高く、食品関係行政職経験者(17.7%)で低い。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(35.5%)のほうが出席経験のある人(32.5%)より若干高い。

図表 11-2.11 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<生産者、食品メーカーなどの食品の生産者・属性別>



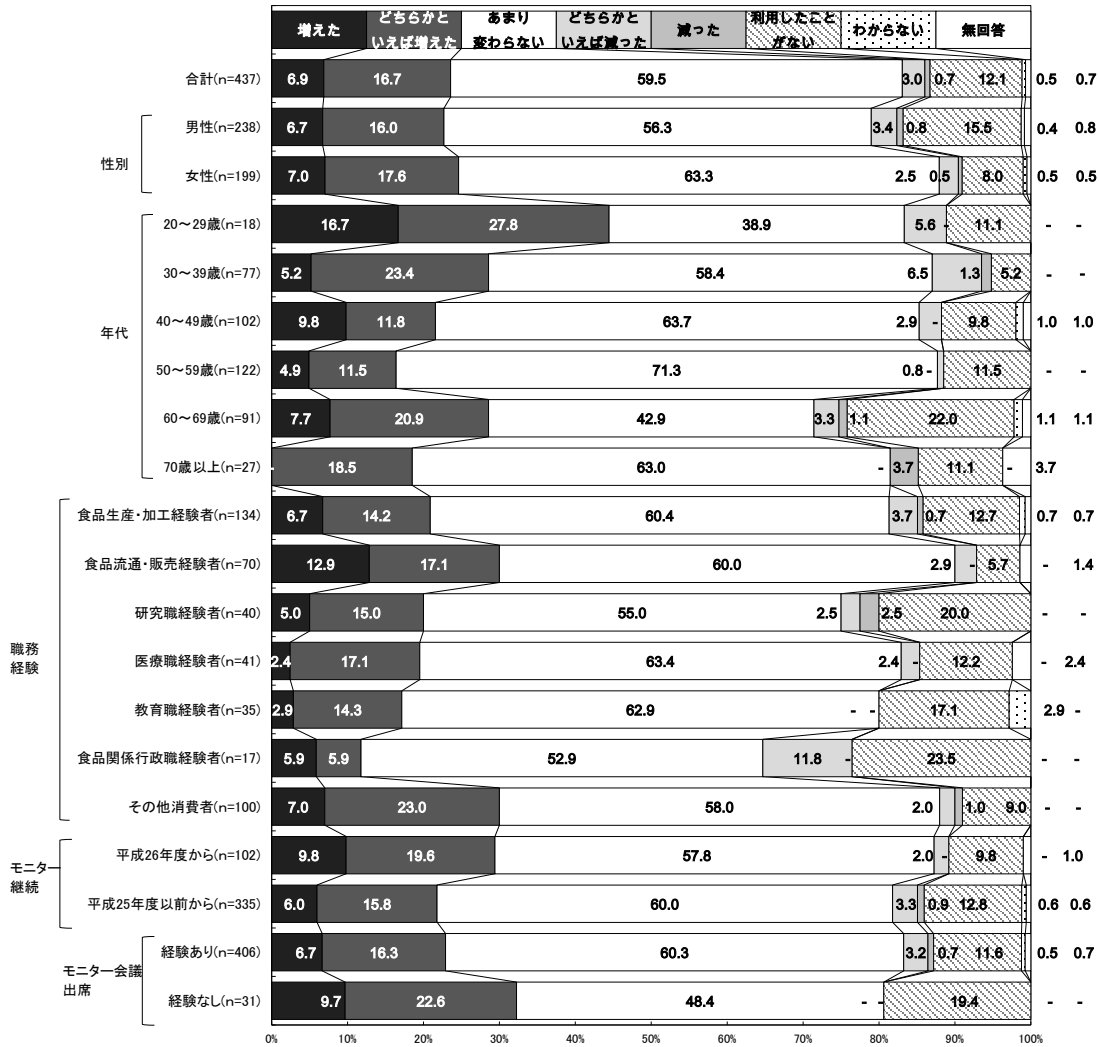


## 12. スーパーなどの販売事業者

■ 20代、職務経験別での食品流通・販売経験者、その他消費者でスーパーなどの販売事業者の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先としてスーパーなどの販売事業者の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別ではあまり差は見られない。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は20代がサンプル数は少ないが極端に高く(44.5%)、50代(16.4%)、70歳以上(18.5%)で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は食品流通・販売経験者(30.0%)、その他消費者(30.0%)で高く、食品関係行政職経験者(11.8%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成26年度新規のモニター(29.4%)のほうが25年度以前から継続しているモニター(21.8%)より高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のない人(32.3%)のほうが出席経験のある人(23.0%)より高い。

図表 11-2.12 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜スーパーなどの販売事業者・属性別＞

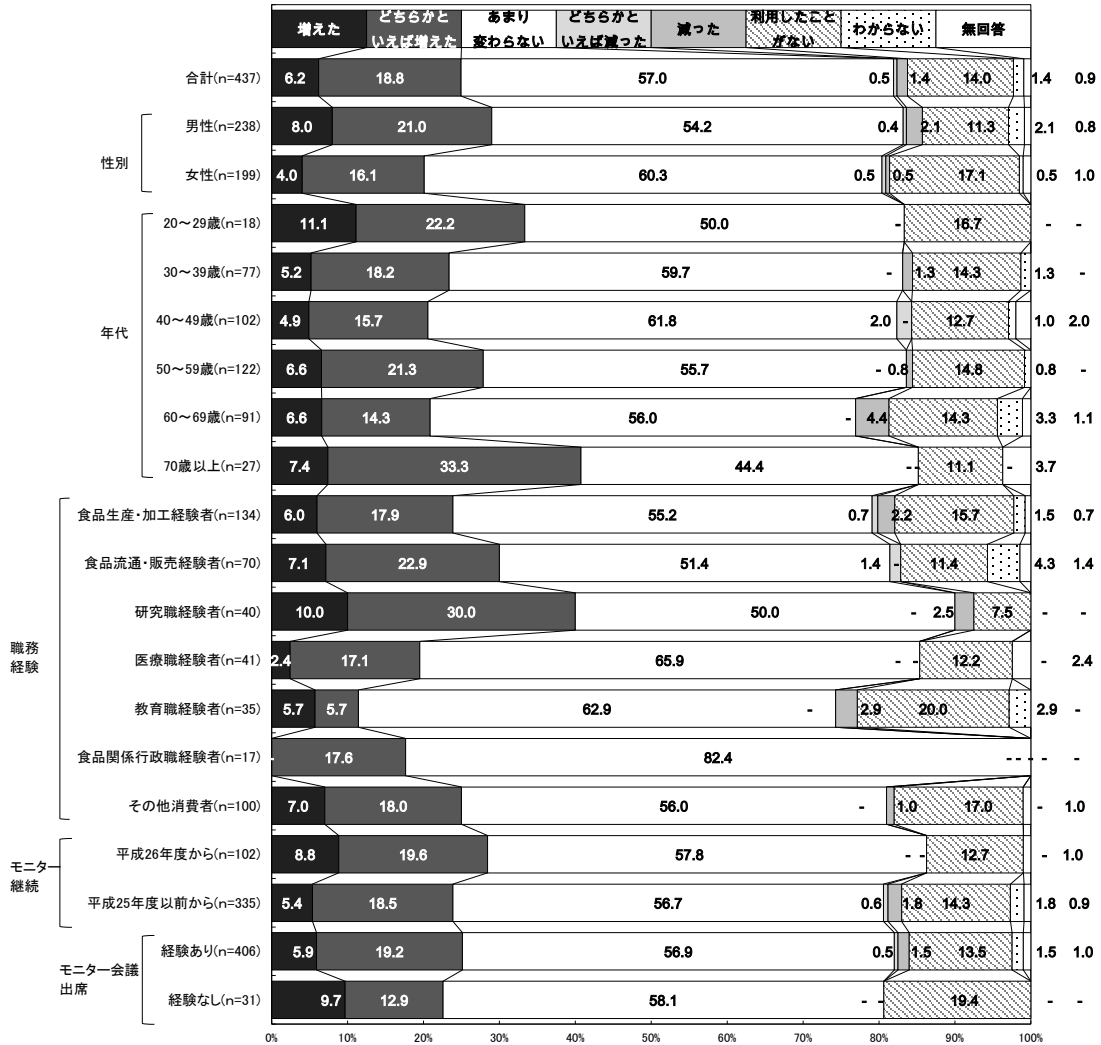


### 13. 大学・研究機関・研究所

■ 性別では男性、年代別では 20 代、70 歳以上、職務経験別では研究職経験者で大学・研究機関・研究所の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として大学・研究機関・研究所の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は女性(20.1%)よりも男性(29.0%)のほうが高い。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は 70 歳以上(40.7%)、20 代(33.3%)がサンプル数は少ないが高く、40 代(20.6%)、60 代(20.9%)で低い。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者(40.0%)で高く、教育職経験者(11.4%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成 26 年度新規のモニター(28.4%)のほうが 25 年以前から継続しているモニター(23.9%)より高い。
- モニター会議出席経験については、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は出席経験のある人(25.1%)のほうが出席経験のない人(22.6%)より若干高い。「増えた」に限定すると出席経験のない人(9.7%)のほうが出席経験のある人(5.9%)より高い。

図表 11-2.13 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<大学・研究機関・研究所・属性別>

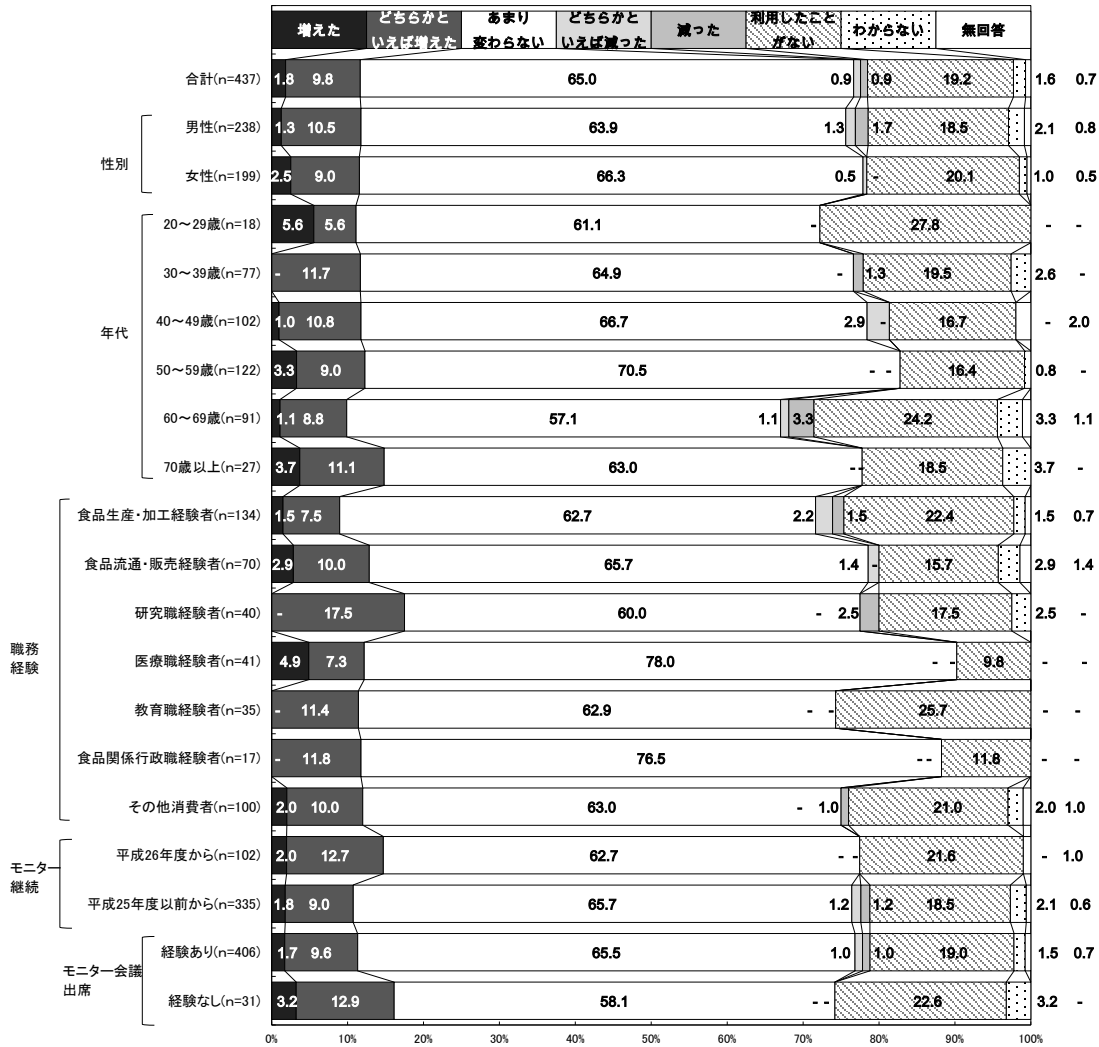


#### 14. 医療機関

■ 医療機関については、性別、年代別、職務経験別であまり差は見られない。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として医療機関の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別ではあまり差は見られない。
- 年代別ではあまり差は見られない。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者（17.5%）が若干高いものの、他の職務経験とはあまり大きな差は見られない。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成 26 年度新規のモニター（14.7%）のほうが平成 25 年度以前から継続しているモニター（9.8%）より利用回数が増えた割合が若干高い。
- モニター会議出席経験別については、出席経験のある人（11.3%）よりも出席経験のない人（16.1%）のほうが、利用回数が増えた割合が若干高い。

図表 11-2.14 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜医療機関・属性別＞

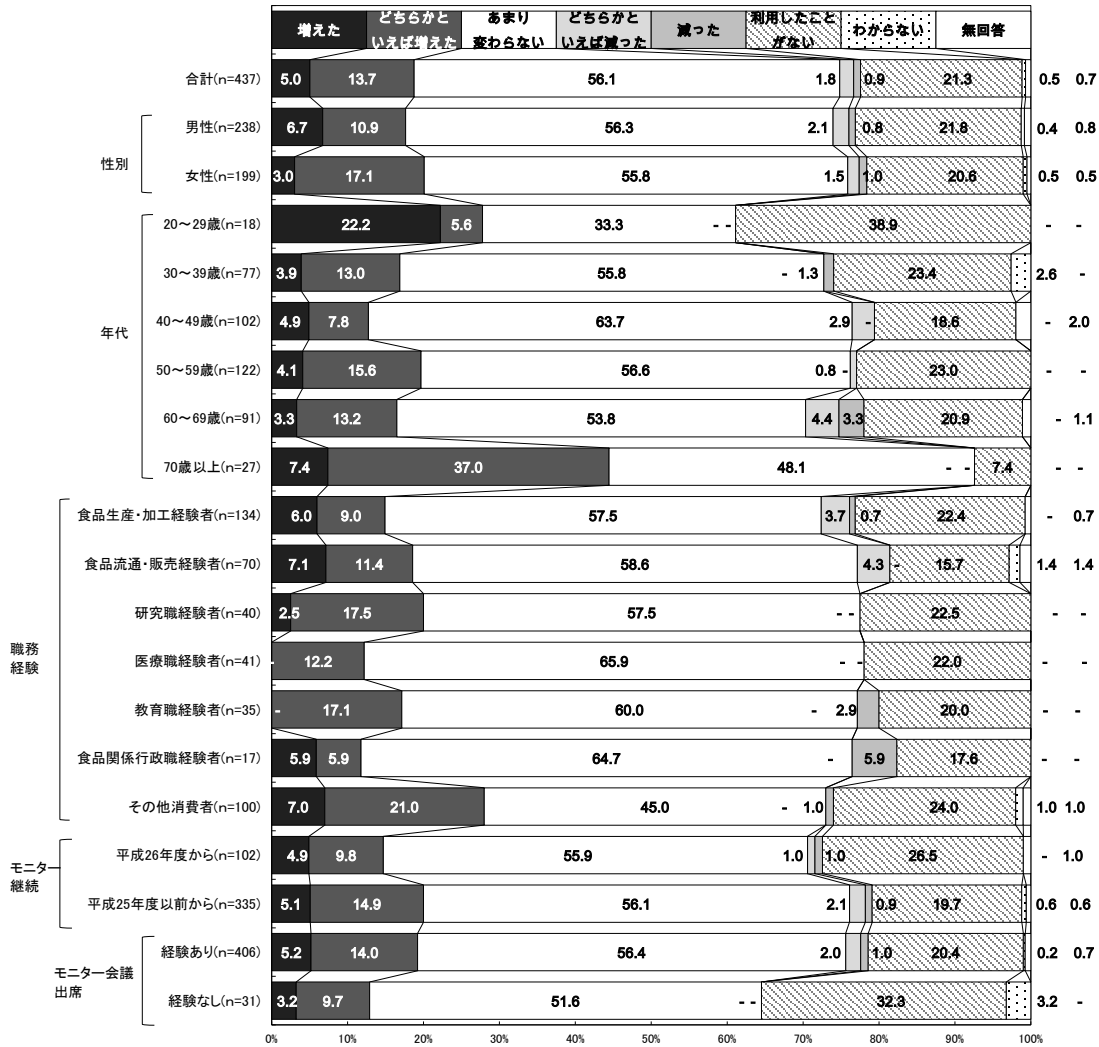


## 15. NPO・消費者団体

■ 年代別では20代、70歳以上、職務経験別ではその他消費者でNPO・消費者団体の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先としNPO・消費者団体の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では、あまり差は見られない。
- 年代別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計で利用回数が増えたのは、サンプル数は少ないが20代(27.8%)、70歳以上(44.4%)が高く、40代(12.7%)で低いという有意な差が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計はその他消費者(28.0%)が高く、医療職経験者(12.2%)、食品関係行政職経験者(11.8%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は、平成25年度以前から継続しているモニター(20.0%)のほうが平成26年度新規のモニター(14.7%)より高い。
- モニター会議出席経験別については、出席経験のある人(19.2%)のほうが出席経験のない人(12.9%)より利用回数が増えた割合が高い。

図表 11-2.15 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<NPO・消費者団体・属性別>



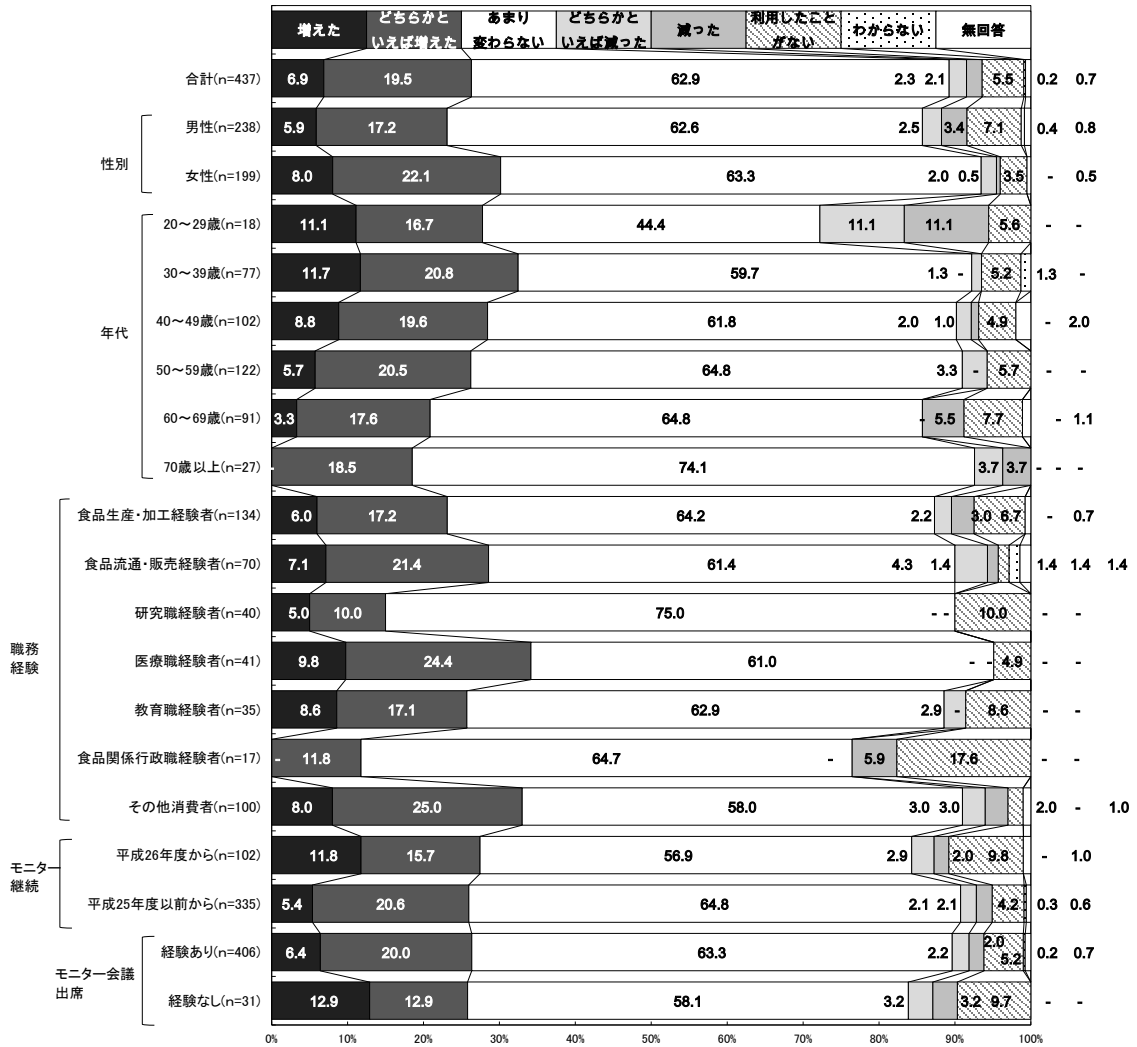


## 16. 家族・知人

■ 性別では女性、年代別では若年層、職務経験別では医療職経験者、その他消費者で家族・知人からの情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として家族・知人の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は男性(23.1%)よりも女性(30.1%)のほうが利用回数が増えた割合が高い。
- 年代別では、年代が若くなるほど利用回数が増えた割合が高くなる傾向が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は医療職経験者(34.2%)、その他消費者(33.0%)で利用回数が増えた割合が高く、研究職経験者(15.0%)、食品関係行政職経験者(11.8%)で低い。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。「増えた」に限定すると、平成 26 年度新規のモニター(11.8%)のほうが平成 25 年度以前から継続しているモニター(5.4%)より高い。
- モニター会議出席経験別については、あまり差は見られない。「増えた」に限定すると、出席経験のある人(6.4%)より出席経験のない人(12.9%)のほうが、利用回数が増えた割合が高い。

図表 11-2.16 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
<家族・知人・属性別>

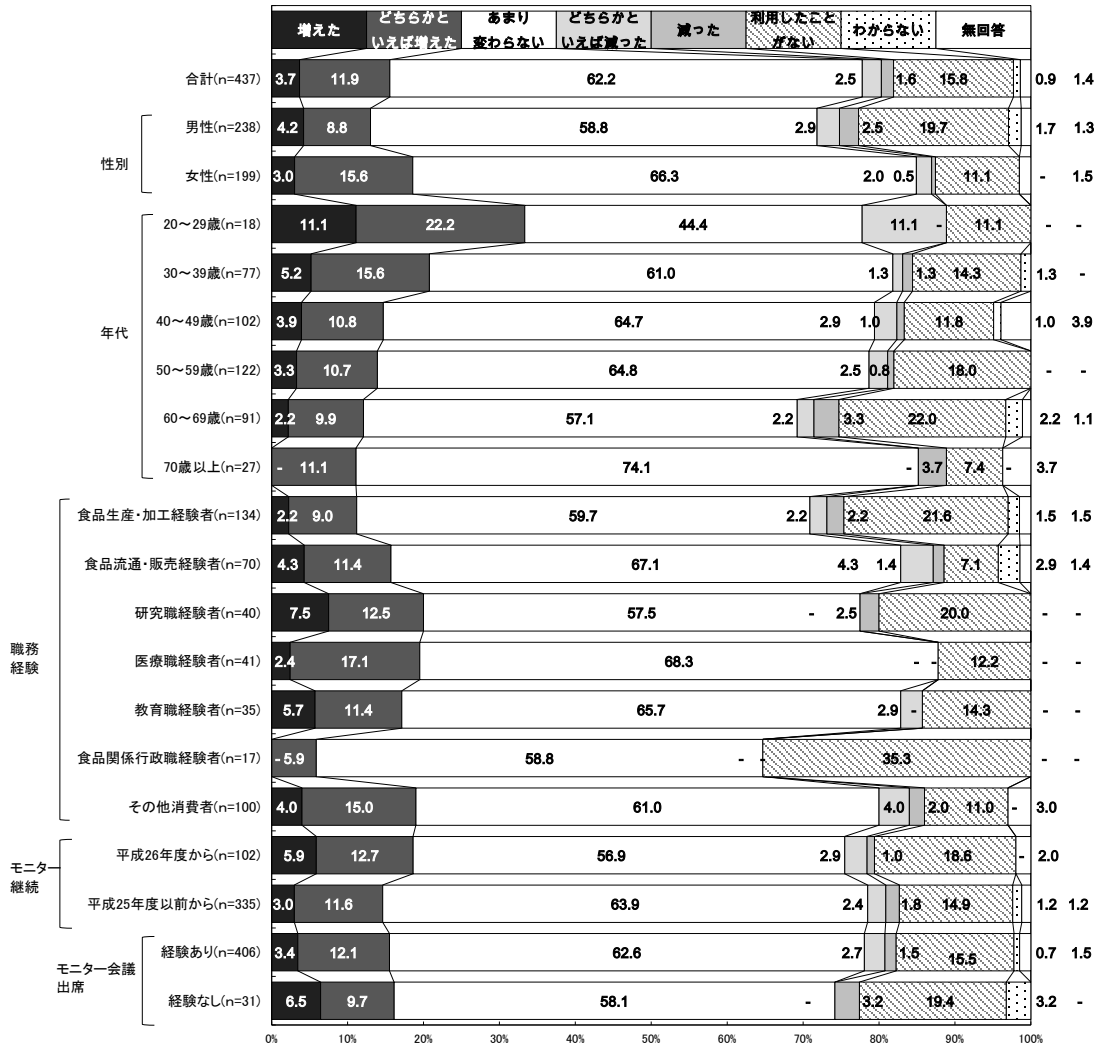


## 17. 地域・学校

■ 性別では女性、年代別では若年層、職務経験別では研究職経験者、医療職経験者で地域・学校の情報の利用回数が増えた割合が高い。

- 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先として地域・学校の利用回数の変化を属性別に比較したところ、性別では「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は男性(13.0%)よりも女性(18.6%)のほうが、利用回数が増えた割合が有意に高い。
- 年代別では、年代が若いほど利用回数が増えた割合が高くなる傾向が見られる。
- 職務経験別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は研究職経験者(20.0%)、医療職経験者(19.5%)で利用回数が増えた割合が高く、食品関係行政職経験者(5.9%)で低い。
- モニター継続別では、「増えた」と「どちらかといえば増えた」の合計は平成 26 年度新規のモニター(18.6%)のほうが平成 25 年度以前から継続しているモニター(14.6%)より利用回数が増えた割合が高い。
- モニター会議出席経験については、あまり差は見られない。

図表 11-2.17 食品安全モニターになってから利用回数が増えた  
食品に関する情報の入手先の属性別変化  
＜地域・学校・属性別＞



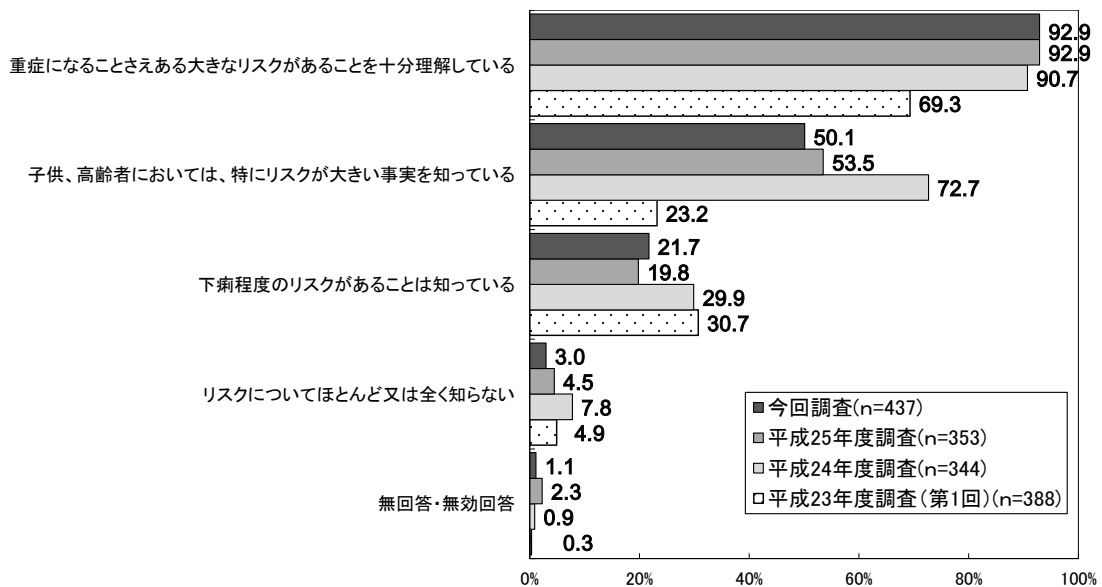
## 12. 肉等（臓器を含む）の生食に対するリスクの認識度（問 12）

### 12-1 肉等（臓器を含む）の生食に対するリスクの認識度の回答割合（複数回答）

- 肉等（臓器を含む。以下同じ）の生食に対するリスクの認識度は、「重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している」が前年度と変わらず第1位。
- 「子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている」は、前年度と変わらず50%程度に留まっている。

- 生で肉等を食べることについてのリスクの認識度を尋ねると、「重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している」が平成25年度と同じ92.9%であった。
- 「子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている」は平成24年度以降年々減少しており、今回調査では25年度より更に減少し、50.1%となった。

図表 12-1 肉等の生食に対するリスクの認識度（複数回答）



※合計の回答割合が多いものに並び替え。

## 12-2 肉等の生食に対するリスクの認識度の属性別回答割合（複数回答）

■ 性別、年代別、職務経験別であまり差は見られず、「重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している」が9割前後を占めた。

- 肉等の生食に対するリスクの認識度を属性別に比較したところ、性別ではあまり差は見られない。
- 年代別では、あまり差は見られないが、70代で「リスクについてほとんど又は全く知らない」（7.4%）がやや高い。
- 職務経験別では、教育職経験者は「重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している」が100%となっている。
- モニター継続別では、あまり差は見られない。
- モニター会議出席経験については、あまり差は見られない。

図表 12 肉等の生食に対するリスクの認識度（属性別・複数回答）

		重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している	子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている	下痢程度のリスクがあることは知っている	リスクについてほとんど又は全く知らない	無回答・無効回答
合計(n=437)		92.9	50.1	21.7	3.0	1.1
性別	男性(n=238)	94.1	48.7	21.4	4.2	0.0
	女性(n=199)	91.5	51.8	22.1	1.5	2.5
年代	20～29歳(n=18)	88.9	66.7	44.4	5.6	0.0
	30～39歳(n=77)	89.6	46.8	19.5	2.6	1.3
	40～49歳(n=102)	92.2	57.8	24.5	2.9	1.0
	50～59歳(n=122)	95.1	41.0	13.1	1.6	1.6
	60～69歳(n=91)	93.4	49.5	24.2	3.3	0.0
	70歳以上(n=27)	96.3	63.0	33.3	7.4	3.7
職務経験	食品生産・加工経験者(n=134)	96.3	47.0	17.9	3.7	0.0
	食品流通・販売経験者(n=70)	91.4	44.3	18.6	1.4	0.0
	研究職経験者(n=40)	92.5	60.0	22.5	0.0	2.5
	医療職経験者(n=41)	85.4	56.1	22.0	4.9	7.3
	教育職経験者(n=35)	100.0	48.6	28.6	2.9	0.0
	食品関係行政職経験者(n=17)	88.2	58.8	11.8	0.0	5.9
	その他消費者(n=100)	91.0	51.0	28.0	4.0	0.0
モニター継続	平成26年度から(n=102)	91.2	48.0	27.5	2.0	0.0
	平成25年度以前から(n=335)	93.4	50.7	20.0	3.3	1.5
モニター会議出席	経験あり(n=406)	93.1	50.5	21.2	3.0	1.2
	経験なし(n=31)	90.3	45.2	29.0	3.2	0.0

※網掛け：各属性別の第1位

※合計の回答割合が多いものに並び替え。

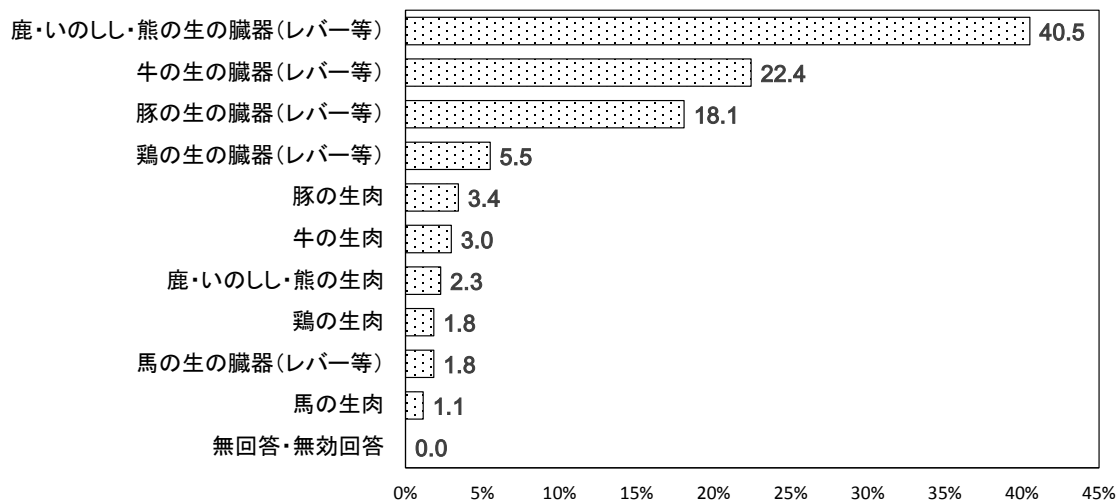
### 13. 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類（問 13）

#### 13-1 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類の回答割合（第 1 位）

■ 生食に対するリスクが高いと思う肉等の上位 3 位は、「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」「牛の生の臓器（レバー等）」「豚の生の臓器（レバー等）」。

- 生で食べることについて、リスクが高いと思う肉等の種類の順番を尋ねると、第 1 位との回答の割合は「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」が 40.5%で最も多く、次いで「牛の生の臓器（レバー等）」が 22.4%、「豚の生の臓器（レバー等）」が 18.1%と続いている。

図表 13-1 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類（第 1 位）



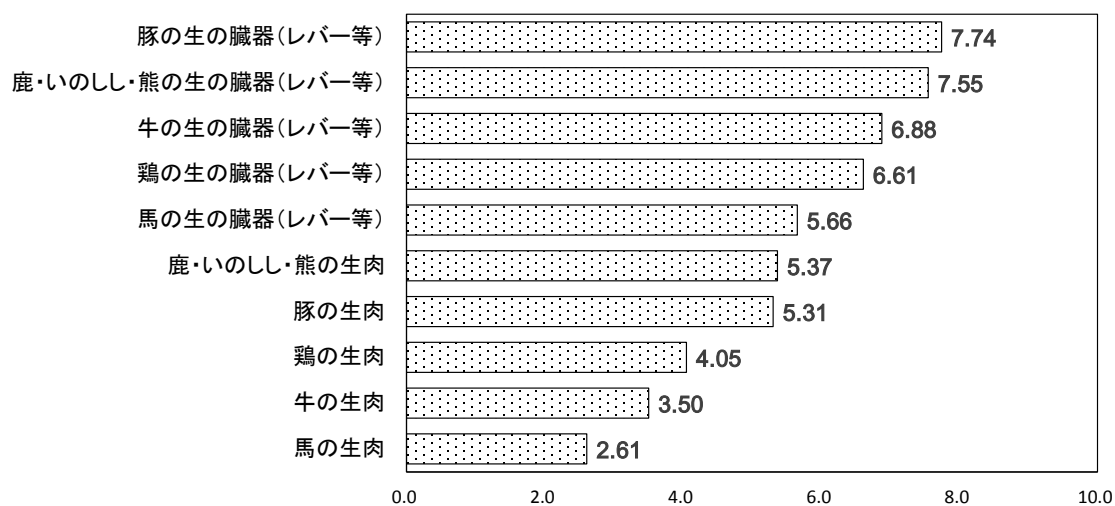
※1 位:10 点、2 位:9 点、3 位:8 点、4 位:7 点、5 位:6 点、6 位:5 点、7 位:4 点、8 位:3 点、9 位:2 点、10 位:1 点として集計。  
※回答割合が多いもの順に並び替え。

### 13-2 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類の平均スコア

■ 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類を平均スコアで比較すると、「豚の生の臓器（レバー等）」が第1位。

- 生で食べることにについてリスクが高いと思う肉等の種類の順番を平均スコアで比較すると、「豚の生の臓器（レバー等）」（7.74）が回答割合では第3位だったものが第1位と最も高く、次いで「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」（7.55）、「牛の生の臓器（レバー等）」（6.88）となっている。

図表 13-2①生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類（平均スコア）



※1位:10点、2位:9点、3位:8点、4位:7点、5位:6点、6位:5点、7位:4点、8位:3点、9位:2点、10位:1点として集計。  
 ※平均スコアが高いもの順に並び替え。



- 生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類の平均スコアの属性別では、「豚の生の臓器（レバー等）」「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」が上位2位の属性が多い。

- 平均スコアを属性別に比較したところ、性別では第1位、第2位は男女ともに「豚の生の臓器（レバー等）」、「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」であった。第3位は、男性が「牛の生の臓器（レバー等）」、女性は「鶏の生の臓器（レバー等）」と差が見られる。
  - ◆ 年代別では、第1位は20代から40代が「豚の生の臓器（レバー等）」、50代及び60代が「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」、70代が「牛の生の臓器（レバー等）」と分かれた。また、各年代とも、「豚の生の臓器（レバー等）」及び「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」が上位3位以内に含まれている。なお、肉に限ると、「豚の生の肉」と「鹿・いのしし・熊の生肉」がいずれの年代も同程度で高いが、60代・70代は、「鹿・いのしし・熊の生肉」と回答した者の割合が、わずかに上回っていた。
- 職務経験別では、食品関係行政職経験者、その他消費者以外は、上位2位は「豚の生の臓器（レバー等）」「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」で共通している。
- 食品関係行政職経験者の第1位は「牛の生の臓器（レバー等）」、第2位は「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」であった。「豚の生の臓器（レバー等）」は第4位で、他の職務経験区分に比べて低い。
- その他消費者の第1位は「豚の生の臓器（レバー等）」、第2位は「牛の生の臓器（レバー等）」であった。また、「鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）」は第4位で、他の職務経験区分と比べて低い。
- モニター継続別では、第1位はともに「豚の生の臓器（レバー等）」であったが、第2位については、平成26年度新規のモニターは「鶏の生の臓器（レバー等）」、平成25年度以前から継続しているモニターは「牛の生の臓器（レバー等）」であった。
- モニター会議出席経験については、あまり差は見られない。

図表 13-2②生食に対するリスクが高いと思う肉等の種類（平均スコア・属性別）

		牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)
合計(n=437)		3.50	6.88	5.31	7.74	4.05	6.61	2.61	5.66	5.37	7.55
性別	男性(n=238)	3.40	7.01	5.10	7.81	3.97	6.52	2.51	5.71	5.47	7.75
	女性(n=199)	3.63	6.72	5.56	7.66	4.15	6.72	2.73	5.59	5.24	7.32
年代	20～29歳(n=18)	3.33	6.39	5.78	8.17	5.41	7.88	1.82	4.50	5.47	7.00
	30～39歳(n=77)	3.49	6.60	5.59	7.97	4.05	6.94	2.45	5.30	5.22	7.57
	40～49歳(n=102)	3.33	6.47	5.60	7.77	4.24	6.63	2.76	5.60	5.47	7.49
	50～59歳(n=122)	3.21	6.62	5.08	7.58	3.87	6.41	3.03	6.23	5.55	7.71
	60～69歳(n=91)	3.79	7.65	4.79	7.68	3.79	6.37	2.31	5.64	5.41	7.78
	70歳以上(n=27)	4.67	8.11	5.89	7.67	4.15	6.52	2.23	5.19	4.38	6.65
職務経験	食品生産・加工経験者(n=134)	3.32	6.54	5.48	7.80	3.92	6.25	2.62	5.67	5.76	7.83
	食品流通・販売経験者(n=70)	3.26	6.93	4.99	7.58	4.13	6.97	3.07	5.81	5.20	7.36
	研究職経験者(n=40)	3.18	6.75	5.05	8.10	3.83	6.62	2.15	5.70	5.65	8.23
	医療職経験者(n=41)	2.63	6.37	4.66	7.73	3.70	6.60	2.77	6.17	6.18	8.44
	教育職経験者(n=35)	3.79	7.09	5.85	8.09	3.61	5.91	2.38	5.69	5.79	7.37
	食品関係行政職経験者(n=17)	4.25	8.41	4.06	7.00	4.35	7.06	1.88	4.75	5.35	7.71
	その他消費者(n=100)	4.19	7.23	5.71	7.65	4.51	7.02	2.60	5.42	4.33	6.70
モニター 継続	平成26年度から(n=102)	3.52	6.69	5.61	7.95	4.36	6.75	2.31	5.07	5.51	7.52
	平成25年度以前から(n=335)	3.50	6.93	5.21	7.68	3.96	6.57	2.70	5.83	5.33	7.56
モニター 会議出席	経験あり(n=406)	3.50	6.86	5.24	7.68	4.04	6.63	2.62	5.73	5.39	7.57
	経験なし(n=31)	3.58	7.06	6.19	8.58	4.19	6.40	2.41	4.70	5.10	7.32

※1位:10点、2位:9点、3位:8点、4位:7点、5位:6点、6位:5点、7位:4点、8位:3点、9位:2点、10位:1点として集計。

※網掛け:各属性の上位3位(濃いグレー:第1位、太枠付き薄いグレー:第2位、薄いグレー:第3位)

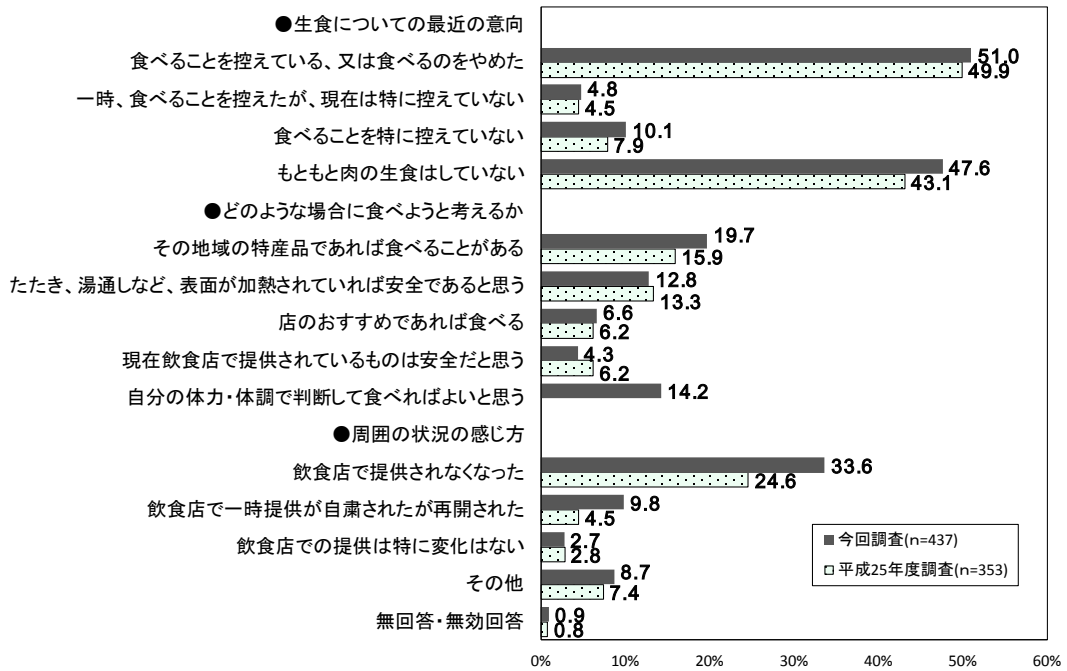
## 14. 肉等の生食についての状況や変化、意識（問 14）

### 14-1 肉等の生食についての状況や変化、意識の回答割合（複数回答）

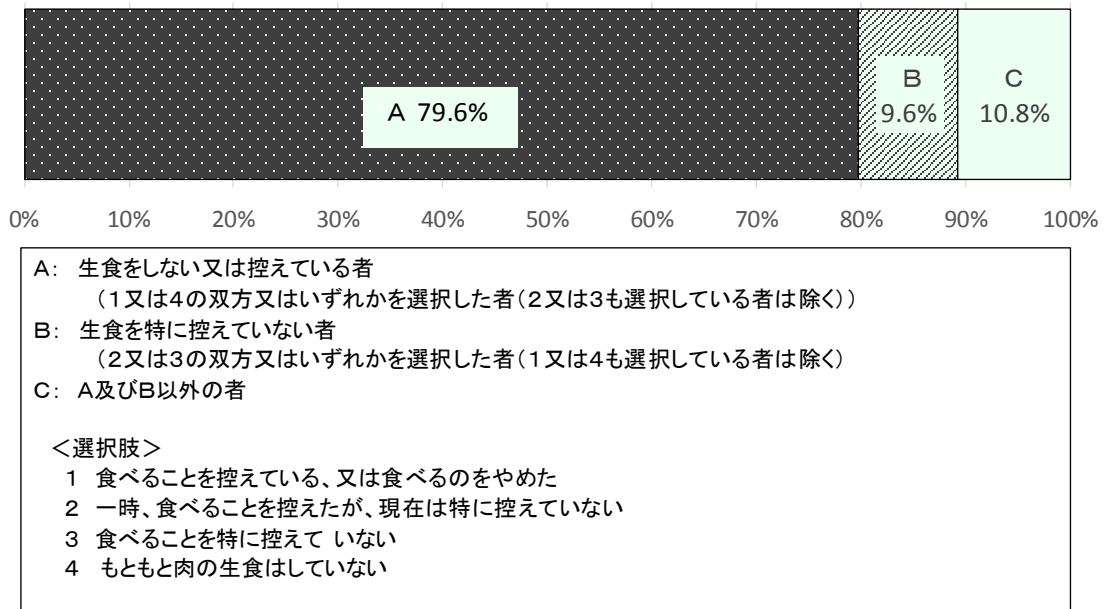
■ この一年間の肉等の生食についての状況や変化、意識について、「食べることを控えている、又は食べるのをやめた」「もともと肉の生食はしていない」との回答が多い。

- この一年間の肉等（臓器を含む）の生食についての状況や変化、意識について尋ね、選択肢を「生食についての最近の意向」「安全性に関する意識」「周囲の状況の感じ方」の3つに大別すると、生食についての最近の意向では、「食べることを控えている、又は食べるのをやめた」（51.0%）は平成 25 年度と同程度、「もともと肉の生食はしていない」（47.6%）はやや増加となり、この2つが特に多い。
- また、選択肢 1 から 4 について、重複回答を考慮し、「生食をしない又は控えている者」（「1 食べることを控えている、又は食べるのをやめた」と「4 もともと肉の生食はしていない」の双方又はいずれかを選択した者（2 又は 3 も選択している者は除く）と、「生食を特に控えていない者」（「2 一時、食べることを控えたが、現在は特に控えていない」と「3 食べることを特に控えていない」の双方又はいずれかを選択した者（1 又は 4 も選択している者は除く）に分けたところ、「生食をしない又は控えている者」は約 8 割（79.6%）、「生食を特に控えていない者」は約 1 割（9.6%）であった。
- 安全性に関する意識では、「その地域の特産品であれば食べることがある」が 19.7% で最も多く、平成 25 年度調査（15.9%）からやや増加した。次いで、今回調査で追加した「自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う」（14.2%）、「たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全であると思う」（12.8%）の割合がやや高い。
- 周囲の状況の感じ方では、「飲食店で提供されなくなった」（33.6%）が平成 25 年度調査（24.6%）から増加した一方で、「飲食店で一時提供が自粛されたが再開された」（9.8%）も平成 25 年度調査（4.5%）からやや増加となった。

図表 14-1 この一年の肉等の生食についての状況や変化、意識（複数回答）



図表 14-1(参考) 肉の生食についての最近の意向（重複選択を集計したもの）



**その他（肉等（臓器を含む）の生食についての状況や変化、意識）（回答者数 36 人）**

生食用に処理・加工が明確であれば食する見込み、リスクを十分に説明して、また提供する側も十分に気を付けての提供をすることを望む、お店の仕入れ状況等はよく調べる、知らない店では食べない、買わない。免許等のライセンス制の導入すべきなどの回答があった。

#### 14-2 肉等（臓器を含む）の生食についての属性別状況や変化、意識の回答割合（複数回答）

- 生食についての最近の動向は、年代別では 20 代、70 歳以上、職務経験別では研究職経験者、医療職経験者、教育職経験者を除いた属性で「食べるのを控えている、又は食べるのをやめた」が第 1 位。
- 安全性に関する意識では、年代別では 20 代、60 代、職務経験別ではその他消費者を除くすべての属性で「その地域の特産品であれば食べることがある」が第 1 位。
- 周囲の状況の感じ方では、すべての属性において「飲食店で提供されなくなった」が第 1 位。

- 調査時点前の一年間のモニター自身やその周囲の、肉等の生食についての状況や変化、意識のうち、生食についての最近の意向を見ると、性別で比較したところ、女性は「食べるのを控えている、又は食べるのをやめた」と「もともと肉の生食はしていない」が 50.3%で同率で第 1 位であった。男性は「食べるのを控えている、又は食べるのをやめた」と「もともと肉の生食はしていない」が 51.7%で第 1 位、「もともと肉の生食はしていない」は 45.4%で第 2 位で、性別では有意な差があった。
- 年代別では、20 代と 70 歳以上が、サンプル数は少ないが「もともと肉の生食はしていない」が第 1 位で、30 代から 60 代の第 1 位である「食べるのを控えている、又は食べるのをやめた」と「もともと肉の生食はしていない」であるのと差が見られる。
- 職務経験別では、「もともと肉の生食はしていない」が第 1 位であるのは教育職経験者(60.0%)、医療職経験者(58.5%)、研究職経験者(57.5%)であった。「食べるのを控えている、又は食べるのをやめた」が第 1 位であるのは食品関係行政職経験者(64.7%)、食品流通・販売経験者(58.8%)、食品生産・加工経験者(56.7%)、その他消費者(48.0%)であった。
- モニター継続別とモニター会議出席経験については、あまり差が見られない。
- 安全性に関する意識を見ると、性別で比較したところ、あまり差は見られない。
- 年代別では、「その地域の特産品であれば食べることがある」が 60 代を除き第 1 位、60 代の第 1 位は「たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全であると思う」で、30 代の 7.8%と差が見られた。20 代は、「自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う」と「その地域の特産品であれば食べることがある」が同率(22.2%)で第 1 位となっている。
- 職務経験別で、「たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全であると思う」が第 1 位だったのは食品流通・販売経験者(21.4%)のみで、他の職務経験区分では「その地域の特産品であれば食べることがある」であった。またその他消費者は「自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う」が同率(12.0%)の第 1 位であった。
- モニター継続別とモニター会議出席経験については、差は見られない。
- 周囲の状況の感じ方を見ると、属性別に比較したところ、性別、年代、職務経験別、モニター継続別、モニター会議出席経験別で大きな差は見られず、「飲食店で提供されなくなった」が最も多い。

図表 14-2 この一年の肉等の生食についての状況や変化、意識（属性別・回答割合）

	生食についての最近の意向					安全性に関する意識					周囲の状況の感じ方			その他	無回答
	食べることを控えている、又は食べるのをやめた	一時、食べることを控えたが、現在は特に控えていない	食べることを特に控えていない	もともと肉の生食はしていない	その地域の特産品であれば食べることがある	たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全だと思う	店のおすすめであれば食べる	現在飲食店で提供されているものは安全だと思う	自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う	飲食店で提供されなくなった	飲食店で一時提供が自粛されたが再開された	飲食店での提供は特に変化はない			
合計(n=437)	51.0	4.8	10.1	47.6	19.7	12.8	6.6	4.3	14.2	33.6	9.8	2.7	8.7	0.9	
性別	男性(n=238)	51.7	6.3	13.4	45.4	22.3	17.6	9.7	4.2	15.5	36.1	9.2	2.9	10.9	0.4
	女性(n=199)	50.3	3.0	6.0	50.3	16.6	7.0	3.0	4.5	12.6	30.7	10.6	2.5	6.0	1.5
年代	20～29歳(n=18)	38.9	0.0	16.7	50.0	22.2	16.7	5.6	5.6	22.2	38.9	27.8	11.1	0.0	0.0
	30～39歳(n=77)	54.5	7.8	10.4	41.6	16.9	7.8	5.2	2.6	11.7	40.3	13.0	0.0	5.2	1.3
	40～49歳(n=102)	47.1	2.9	9.8	42.2	21.6	13.7	4.9	2.9	18.6	31.4	11.8	4.9	10.8	1.0
	50～59歳(n=122)	46.7	4.1	12.3	41.8	21.3	11.5	7.4	5.7	13.9	31.1	9.0	0.8	9.8	1.6
	60～69歳(n=91)	62.6	4.4	6.6	54.9	12.1	15.4	6.6	5.5	7.7	33.0	3.3	2.2	9.9	0.0
	70歳以上(n=27)	44.4	11.1	7.4	85.2	37.0	18.5	14.8	3.7	22.2	33.3	7.4	7.4	7.4	0.0
職務経験	食品生産・加工経験者(n=134)	56.7	5.2	11.9	42.5	19.4	13.4	8.2	4.5	14.9	39.6	13.4	4.5	6.7	0.7
	食品流通・販売経験者(n=70)	58.6	1.4	14.3	37.1	18.6	21.4	10.0	2.9	18.6	34.3	5.7	0.0	14.3	0.0
	研究職経験者(n=40)	37.5	5.0	5.0	57.5	17.5	10.0	5.0	0.0	12.5	37.5	7.5	0.0	10.0	0.0
	医療職経験者(n=41)	43.9	12.2	9.8	58.5	36.6	17.1	9.8	9.8	19.5	22.0	9.8	7.3	7.3	2.4
	教育職経験者(n=35)	40.0	5.7	5.7	60.0	28.6	11.4	0.0	5.7	8.6	25.7	5.7	0.0	8.6	0.0
	食品関係行政職経験者(n=17)	64.7	0.0	0.0	58.8	17.6	11.8	5.9	5.9	5.9	23.5	0.0	0.0	5.9	0.0
モニター 継続	経験あり(n=406)	50.2	4.4	10.1	48.8	19.5	12.6	6.7	4.7	14.3	34.0	9.9	2.5	8.9	1.0
	経験なし(n=31)	61.3	9.7	9.7	32.3	22.6	16.1	6.5	0.0	12.9	29.0	9.7	6.5	6.5	0.0

※網掛け:各属性の第1位

○ 自由回答分類整理表

(1) 食品の安全性に係る危害要因等について

1. 食品の安全性の観点から感じている不安の程度（問2）、食品の安全性の観点から不安を感じている理由（放射性物質以外）（問3）、食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（放射性物質以外）（問4）の整理

（回答者数＝88人）

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由（その他）	不安を感じない理由	不安を感じない理由（その他）	職務経験	性別	年代
輸入食材、食品	①とても不安である	⑧その他	今回の中国鳥肉問題等、国際規格取得業者監査でも見抜くことが出来ない、見えない世界があり信頼性に欠ける。日本の食の豊かさ、国内自給率の低下により諸外国に頼らざる得ない現状から避けては通れないことではあるが。			食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
輸入食品	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				その他消費者	女性	60～69歳
輸入食品の安全性	①とても不安である	⑧その他	海外生産国の規制及びモラルが不十分			食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
輸入食品	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
輸入食品	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安				その他消費者	女性	40～49歳
輸入食品の異物混入事件	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品流通・販売経験者	男性	30～39歳
輸入品の安全性について						その他消費者	女性	70歳以上
海外よりの輸入商品	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				食品流通・販売経験者	男性	70歳以上



ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
中国からの食品全般	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	女性	40～49歳
中国食品	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
中国製食品全般	①とても不安である	⑧その他	中国という国自体が信用できない			その他消費者	男性	40～49歳
中国製造品	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
中国で生産されている加工食品	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				教育職経験者	女性	30～39歳
中国で製造されている食品のうち、劣悪な食材や有害物質が意図的に混入していると思われるもの	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				教育職経験者	男性	60～69歳
中国産原料	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安				食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
中国輸入食品	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
中国産食品	③あまり不安を感じない			③事業者の法令遵守や衛生管理が十分		食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
故意による異物、毒物などの混入	①とても不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
故意による危険物(毒物等)の混入	①とても不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品流通・販売経験者	女性	30～39歳
故意の異物混入	①とても不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
異物混入	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
異物混入	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	男性	60～69歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
異物混入(主に硬質異物)	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
食品中異物混入	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				教育職経験者	女性	50～59歳
フードテロ(食品工場における有害物の意図的な混入)	②ある程度不安である	⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				研究職経験者	男性	30～39歳
無差別に殺害を意図した毒物の混入(テロ的)	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
フードテロ		③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品関係行政職経験者	男性	60～69歳
鳥インフルエンザやエボラ出血熱などの食品への影響	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安				食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
鶏インフルエンザ	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
鳥インフルや口蹄疫	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
アレルギー物質	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				医療職経験者	女性	40～49歳
食物アレルギー事故	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	女性	40～49歳
いわゆる自然食品	②ある程度不安である	⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				その他消費者	男性	70歳以上
いわゆるローフード	①とても不安である	⑧その他	思い込みによる生食は食中毒のリスクが高い。			食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
汚染物質(微生物等)	①とても不安である	②行政による規制が不十分				研究職経験者	男性	40～49歳
オリーブオイルの有機認定制度の信ぴょう性に疑問がある。過去に残留農薬を検出した為	①とても不安である					研究職経験者	男性	60～69歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
温暖化による腐敗	②ある程度不安である	⑧その他	高温によって腐敗が進んだり食中毒菌の繁殖が活発になる。			研究職経験者	男性	60～69歳
家庭用殺虫剤	①とても不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品流通・販売経験者	男性	20～29歳
カビ毒	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
カビ毒	②ある程度不安である	⑧その他	温暖化による発生リスクの上昇			食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
寄生虫	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				研究職経験者	男性	50～59歳
キノコ、貝等自然毒	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
カロテノイド・ビタミンE等(過剰摂取)	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				研究職経験者	男性	40～49歳
カラメル色素(4-メチルイミダゾール)	②ある程度不安である	⑧その他	基本的な情報が不足していると思います。カラメル色素には4つのタイプがあると聞いています。使用実態やその使用量、4-メチルイミダゾールの含有量など使用実態、イミダゾールの含有量等を考慮した安全性の評価(特に発がん性)の情報が不足していると思います。			研究職経験者	男性	70歳以上
携帯、インターネット環境の為に電波による作物生育への影響、家畜への影響		⑧その他	問題が大きくなり国民感情に触れそうな情報を非公開にすること			食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
酵素栄養学的食品	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				その他消費者	男性	30～39歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
刺身など生の魚介類の寄生虫	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				教育職経験者	女性	60～69歳
自然毒	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				医療職経験者	女性	60～69歳
自然毒(山野草、キノコ、魚)	①とても不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
ジビエ	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品関係行政職経験者	女性	40～49歳
ジビエ食品	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				その他消費者	男性	60～69歳
野生肉(ジビエ)の肝炎ウイルス・寄生虫など	②ある程度不安である	⑧その他	生食ではもちろん食しないが、加工中の衛生管理が見えない			食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
食品組み合わせによる毒素	②ある程度不安である	⑦漠然とした不安				その他消費者	女性	40～49歳
食品テロ	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				医療職経験者	男性	50～59歳
飼料添加物	②ある程度不安である	⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
人口甘味料の体内影響	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				医療職経験者	女性	40～49歳
水道水	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	女性	40～49歳
大気浮遊の汚染物質	②ある程度不安である					食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
着色料	②ある程度不安である	②行政による規制が不十分				その他消費者	男性	50～59歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
トランス脂肪酸	③あまり不安を感じない			④行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分		教育職経験者	女性	60～69歳
トランス脂肪酸	②ある程度不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
トランス脂肪酸		④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				その他消費者	女性	50～59歳
ナノテクノロジー	②ある程度不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
発癌物質	①とても不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
ヒスタミン	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
ヒューマンエラーもしくは故意による食品への混入(「3」にしたものには特に不安に感じます)	①とても不安である	⑧その他	昨年末の工場での農薬混入事件や、最近の大企業が使用した鶏肉の不適切な扱いの報道を見て、大企業の情報収集能力をもってしても、あのようなことを検出できなかったことに不安を感じています。			教育職経験者	男性	40～49歳
福島原発事故から3年以上たち原発発電のない夏、汚染廃棄物の処理や事故原発の進まない工事、対応の見えない東電の対応など不安。	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				食品流通・販売経験者	男性	60～69歳
フラン	③あまり不安を感じない			③事業者の法令遵守や衛生管理が十分		食品生産・加工経験者	男性	60～69歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
ヘテロサイクリックアミン、自然毒、食品異物、食品テロ	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
放射線照射		⑧その他	食肉等への放射線照射			その他消費者	女性	70歳以上
飽和脂肪酸		②行政による規制が不十分				医療職経験者	男性	50～59歳
悪意による汚染	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	女性	40～49歳
玉ねぎのチアマトキムサン	①とても不安である	④行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
照射食品	④全く不安を感じない			①安全性についての科学的な根拠に納得		研究職経験者	男性	70歳以上
食品検査従事者の精度と倫理観	②ある程度不安である	⑧その他	「検査」は直接「利益」に繋がらないため、なおざりにされている場合が多いため			研究職経験者	男性	40～49歳
表示偽装	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
食品偽装	②ある程度不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				医療職経験者	女性	50～59歳
食品偽装	②ある程度不安である	⑥過去に問題になった事例があるために不安				その他消費者	男性	20～29歳
食品加工業者(作り手の意識)	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
中食産業	①とても不安である	①安全性についての科学的な根拠に疑問				教育職経験者	男性	60～69歳
食品安全に倫理観や規制を持ち合わせていない業者が製造した、輸入食品	②ある程度不安である	⑤事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分				医療職経験者	女性	40～49歳
消費期限切れ食材の混入	①とても不安である	③事業者の法令遵守や衛生管理が不十分				その他消費者	男性	50～59歳

ハザード	不安の程度	不安を感じる理由	不安を感じる理由(その他)	不安を感じない理由	不安を感じない理由(その他)	職務経験	性別	年代
賞味期限消費期限の有効性信憑性	②ある程度不安である					食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
賞味期限切れ食品	③あまり不安を感じない			⑦漠然とした安心		その他消費者	男性	50～59歳
国民の低栄養化	①とても不安である	⑦漠然とした不安				研究職経験者	男性	30～39歳
食料不足	②ある程度不安である					食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
食生活自体の乱れが体に及ぼす影響は大きいと思う	②ある程度不安である	⑧その他	国立がんセンターのがんになる確率グラフを見て、通常の食生活がいかに大事かをかんがえさせられたため			食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
食に対する過剰な報道のあり方	②ある程度不安である	⑧その他	正しい情報が発信されていないように思える			食品生産・加工経験者	男性	30～39歳

## 2. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由（放射性物質以外）（問3）

### A. 食品添加物

（回答者数=10人 うち「とても不安である」が1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	特に食材の品質を長期保持する為の添加物については、供給側に合わせた内容になっている部分が多く感じられる。	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	現在把握されていない、もしくは発症していない健康被害が今後発症する可能性を考えると、ある程度不安である	医療職経験者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	食品添加物の危険性を煽る書籍を目にするため	教育職経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	一部外国製品の法令逸脱使用等、多種多使用による、原料品質マスキングと味覚への影響	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信任・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	輸入品が不安	教育職経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	食の多様化に伴い、相互作用等により現在予想されていない作用が生じるのではないかと心配です	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入食品におけるトレーサビリティや信頼性	研究職経験者	男性	40～49歳

### B. 残留農薬

（回答者数=10人 うち「とても不安である」が1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	青果物の生産においては、見た目のきれいさを第一に求める志向は強く、生産者も生産性第一にならざるを得ない環境であると考えます。	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	モニタリング検査であるため	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	耐性菌、微生物農薬B.thuringiensisiの食品への残留(タンパク分解による食品の腐敗等)	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信任・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	輸入品が不安不安	教育職経験者	男性	60～69歳



問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	国内の事業者のモラルの低下を感じるため、国産の食品について最近不安を感じる。規制が緩いとは思っていない。	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入食品におけるトレーサビリティや信頼性	研究職経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	日本と海外では基準や考え方が異なるため、日本国内のみで自給自足することも不可能であるため。	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳

### C. 家畜用抗生物質

(回答者数=12人 うち「とても不安である」が2人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	畜肉に関しては、生体原料であることから、病気や死亡によるリスクは大きく、抗生物質の使用に関しては、まだまだ多いものと危惧しております。	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
①とても不安である	規制が薬剤耐性菌発生の抑制に有効であるという確証が見当たらない。	研究職経験者	男性	70歳以上
②ある程度不安である	中国輸入の肉、魚介	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	輸入畜産物の規制	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	モニタリング検査であるため	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	外国産品の使用実態と残留	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	家畜の抗生物質使用に関し、糞を堆肥にして農作物に利用することに抵抗のある消費者が一定数いるが、安全性の検証がなされているのか文献が見つけられていない	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	国内の事業者のモラルの低下を感じるため、国産の食品について最近不安を感じる。規制が緩いとは思っていない。	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入食品におけるトレーサビリティや信頼性	研究職経験者	男性	40～49歳

#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

(回答者数=7人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	容器包装の原料や製造工程に対する知識不足で、製造上生じたり残存しうる有害物質を十分理解できていないため不安	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	電子レンジ専用素材の開発、複合素材、可塑性などの適切な溶出試験方法の確立と評価	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	輸入加工食品の包装素材の安全に不安を持つ。	研究職経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	食の多様化に伴い、相互作用等により現在予想されていない作用が生じるのではないかと心配です	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	調理方法に伴うリスク増減に関する情報の少なさ	研究職経験者	男性	40～49歳

#### E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

(回答者数=11人 うち「とても不安である」が3人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	他国との規制値の差等	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
①とても不安である	中国など工業・商業の急速な発達による汚染、対策不備	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
①とても不安である	有害物質と指定されているから	その他消費者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	稲作農家であり、おいしい米ほどカドミウムが多く、国際規格を超えるものがある	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	行政によるモニタリングの結果など、マスコミなどで知る機会があまりない。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	他国に食品を由来する日本の食品事情において、輸入食品の安全に不安を持つ。	研究職経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	埋め立てなど自然との調和に変化が生じているので、蓄積する種や量、存在範囲や濃度に変化が生じているのではないかと、変化しているなら摂取量も増加しているのではないかと不安	その他消費者	女性	30～39歳

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	行政、事業者の継続的な法令順守等に疑問	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	輸入食品におけるトレーサビリティや信頼性	研究職経験者	男性	40～49歳

## F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

(回答者数=26人 うち「とても不安である」が7人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	エボラ熱、ノロウイルスのように自己防衛に限界がある	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
①とても不安である	飲食店・業者のモラル次第なところが不安	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
①とても不安である	自身が食品関連事業者で、他のハザードに比べて発生・被害が出る確率が高いため	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
①とても不安である	腸管出血性大腸菌など身近に存在する病原菌が多く、急激に増殖するので、外食など気をつけている。家庭でも注意をしている。ウイルスに関しては、有効な薬が少ないので、急激な感染蔓延が起こる可能性があつて、ニュースを気にしている。	研究職経験者	男性	60～69歳
①とても不安である	予防困難	その他消費者	女性	70歳以上
①とても不安である	森林伐採、開発による動物、昆虫移動、新薬調査などで未開地にいた細菌、ウイルスなどが外部へ	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
①とても不安である	微生物汚染の可能性として自身による注意が必要と考える食品。輸入食品への不安が大きい。	研究職経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	特にウイルスによる食中毒を防ぐ方を家庭で実施する事が、かなり困難だと感じているから。	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	現在の科学では把握できていないものが、今後出てくる可能性が否定できないから	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	未知の種による脅威	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	現在の科学的知見では、その存在が発生しないとわからないものや原因や対処・防止方法が明確でないものがあるため(例:クドア、米国のサイクロスボラ)	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	過去何度も食中毒に罹患している	食品流通・販売経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	新種の細菌、ウイルスの薬、ワクチンの開発が間に合っていない。	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	チルド食品等の開発による新たなハザードの出現	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	不注意などで混入する確率が高いこと、混入していた場合に被害が大きいことで、リスクとして大きなものを感じます。	教育職経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	未然防止が難しい為。すべての事業者において対策を徹底するのは困難。	食品流通・販売経験者	男性	30～39歳

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	完全な対策などない。	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
②ある程度不安である	自分の調理・保存方法が適正か時々不安になる	医療職経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	食品に携わる仕事柄、自分がノロウイルス等に感染した場合に感染を広げてしまう可能性があるから。	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信任・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	ノロウイルスでは、健康な保菌者を介した汚染の拡大があったが、このような汚染は効果的な防止策がないため、食品工場としては不安要素である。	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	実態がよく分からないから	教育職経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	国内の事業者のモラルの低下を感じるため、国産の食品について最近不安を感じる。規制が緩いとは思っていない。	その他消費者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	行政、事業者の継続的な安全、衛生が徹底できるか疑問	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	特に外食等、衛生管理の責任者の意識次第では、十分な衛生管理が行われていない可能性が考えられるため。	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	自身が食中毒(ノロ)の経験があるため	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

## G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

（回答者数＝4人　うち「とても不安である」が1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	BSEとヒトのクロイツフェルト・ヤコブ病の関連性がはっきりしない点と、BSEについて未だ説明されていないという点においてつかまた大きな問題になるのではないかと不安があります。	医療職経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信任・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	畜産農家の世代交代に伴い危険認識が低下していないか懸念される	研究職経験者	男性	40～49歳

## H. 遺伝子組換え

(回答者数=6人 うち「とても不安である」が2人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	不妊傾向が高まったり、耐性害虫、耐性雑草のために更に強力な農薬を使用している現状では安全とはいえない。	教育職経験者	女性	50～59歳
①とても不安である	情報の信ぴょう性	その他消費者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	生態系に対する影響、食品として食べた場合の影響が未知数。	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	自然界の生物に対する予測不能の影響がある。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳

## I. 体細胞クローン

(回答者数=3人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	動物食品は、健康な動物(遺伝子を含めて自然の競争・選択により供給された動物)由来のものであるべきだ	食品関係行政職経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	食品にとっては新しい分野であるため、安全性に関わる情報が少なく、規制の状況も良くわからないため。	医療職経験者	女性	40～49歳

## J. いわゆる健康食品

(回答者数=9人 うち「とても不安である」が1人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	定義が曖昧	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	安全性と効果の現われが分からない。効果が出れば患者数は減っているのでは?	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	食品でないものも健康食品として流通	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	食品の範疇の物質にも、ヒトへの作用が小さいが有意差の確実な反応を起こす物質が、いろいろあることが判ってきて、生物学としては大変おもしろい時代になってきていて、興味深く研究の進展を見ている。一方、「いわゆる健康食品」では、長期間の服用が商売上からも推奨されている。長く摂取することで害あるかと予想している。とはいえ、今までの日常生活においても、健康にマイナスの成分も摂取していると思う。食と健康の研究が進むことを楽しみにしている。	研究職経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	現在行政が規制緩和の方向にあるから	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
②ある程度不安である	一定の物質を大量に摂取することによる健康被害の危険性が周知されていない。	食品関係行政職経験者	女性	20～29歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	安全性等に関する意識が低い事業者が多い。玉石混交業界である。	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	規制が及ばず未知の危害が起こりえる可能性が考えられるため	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

## K. 肥料・飼料等

(回答者数=3人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
②ある程度不安である	有機肥料に不安が大きい。北海道では、牛が100万頭を越えて飼育されており、糞便も大量にでる。それを有機肥料として畑にまかれている。不十分な堆肥化のまま撒かれている畑も現実が多い。牛には特定の比率で腸管出血性大腸菌がいることは周知で有り、糞便散布は、大腸菌を生きたまま畑にまいていることになる。2年前の札幌での浅漬けによる食中毒事故は、白菜の大腸菌であり、大腸菌は十中八九有機肥料からの由来である。普通の土壌には、大腸菌はいません。	研究職経験者	男性	60～69歳
②ある程度不安である	輸入品の監視体制が見えにくく、検査頻度の評価が不十分では	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳

## L. アクリルアミド

(回答者数=8人 うち「とても不安である」が3人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
①とても不安である	あまりにありふれ他のハザードのように低減化できているか不明	研究職経験者	男性	30～39歳
①とても不安である	研究中の為、安全データなし	教育職経験者	女性	60～69歳
①とても不安である	アクリルアミド発生のメイラード反応、調理方法製造方法による過程の食品含有数値。発がん性。	その他消費者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	審議中だから	食品関係行政職経験者	女性	40～49歳
②ある程度不安である	防ぎようがない場合が多いように思う	医療職経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	発生メカニズムを知っている人間にとっては避けることができるハザードであるが、知らない、気にしていないヒトが多い	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
②ある程度不安である	選択肢4「行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」と選択肢5「事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分」に加え行政と事業者への不信感・不安感	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
②ある程度不安である	日々の調理の積み重ねによる過剰摂取を懸念するため	その他消費者	女性	40～49歳

## M. その他

(回答者数=12人 うち「とても不安である」が5人)

問2.N その他の回答内容	問2	回答	職務経験	性別	年代
輸入食材、食品	①とても不安である	今回の中国鳥肉問題等、国際規格取得業者監査でも見抜くことが出来ない、見えない世界があり信頼性に欠ける。日本の食の豊かさ、国内自給率の低下により諸外国に頼らざる得ない現状から避けては通れないことではあるが。	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
ヒューマンエラーもしくは故意による食品への混入(「3」にしたものには特に不安に感じます)	①とても不安である	昨年末の工場での農薬混入事件や、最近の大企業が使用した鶏肉の不適切な扱いの報道を見て、大企業の情報収集能力をもってしても、あのようなことを検出できなかったことに不安を感じています。	教育職経験者	男性	40～49歳
いわゆるローフード	①とても不安である	思い込みによる生食は食中毒のリスクが高い。	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳

問2.N その他の回答内容	問2	回答	職務経験	性別	年代
輸入食品の安全性	①とても不安である	海外生産国の規制及びモラルが不十分	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
中国製食品全般	①とても不安である	中国という国自体が信用できない	その他消費者	男性	40～49歳
温暖化による腐敗	②ある程度不安である	高温によって腐敗が進んだり食中毒菌の繁殖が活発になる。	研究職経験者	男性	60～69歳
野生肉(ジビエ)の肝炎ウイルス・寄生虫など	②ある程度不安である	生食ではもちろん食しないが、加工中の衛生管理が見えない	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
カビ毒	②ある程度不安である	温暖化による発生リスクの上昇	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
カラメル色素(4-メチルイミダゾール)	②ある程度不安である	基本的な情報が不足していると思います。 カラメル色素には4つのタイプがあると聞いています。 使用実態やその使用量、4-メチルイミダゾールの含有量など使用実態、イミダゾールの含有量等を考慮した安全性の評価(特に発がん性)の情報が不足していると思います。	研究職経験者	男性	70歳以上
食生活自体の乱れが体に及ぼす影響は大きいと思う	②ある程度不安である	国立がんセンターのがんになる確率グラフを見て、通常の食生活がいかに大事かを考えさせられたため	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
食に対する過剰な報道のあり方	②ある程度不安である	正しい情報が発信されていないように思える	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
食品検査従事者の精度と倫理観	②ある程度不安である	「検査」は直接「利益」に繋がらないため、なおざりにされている場合が多いため	研究職経験者	男性	40～49歳



### 3. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（放射性物質以外）（問4）

#### A. 食品添加物

（回答者数=2人 うち「全く不安を感じない」が1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	添加物の少ない食品を選んでいるから	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
④全く不安を感じない	タンパク接着など、従来になかった食感を作れる添加物によってできている食品には興味を持っている。	研究職経験者	男性	60～69歳

#### B. 残留農薬

（回答者数=1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
④全く不安を感じない	農薬の改良が進んで、現状では残量農薬濃度は全く心配にならない濃度と農水省からの報告を読むとわかる。よって、心配していない。一方、農薬の使用規制が、残留農薬濃度でなく、使用の作物や回数などで規制されているのは、科学的でない。そのため値段の高い農作物を購入させられていると感じている。	研究職経験者	男性	60～69歳

#### C. 家畜用抗生物質

（回答者数=4人 うち「全く不安を感じない」が2人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	なるべく食さないようにしている。	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
③あまり不安を感じない	国内で生産される食肉類については適正に使用され、残留していないと信じたいです。	医療職経験者	女性	30～39歳
④全く不安を感じない	抗生物質も農薬同様に食品には含まれていないことについて、厚労省の報告を見ているので安心している。	研究職経験者	男性	60～69歳
④全く不安を感じない	食品安全上混入しても危害とは捉えていない	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

#### D. 器具・容器包装からの溶出化学物質

(回答者数=3人 うち「全く不安を感じない」が1人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	一定の規制が設けられているので	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
③あまり不安を感じない	気にしたことがなかった	その他消費者	女性	30～39歳
④全く不安を感じない	容器からの溶出物質については、製造企業の意識が高く、予め予測される使用状態を想定しての試験を行っており、信頼できる。さらに、NITE(製品評価技術基盤機構)などが慎重に試験を積み重ねており、本件に関しては日本国内では心配することはないと考えている。	研究職経験者	男性	60～69歳

#### E. 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）

(回答者数=4人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	これら重金属については、過去の事故の検証が進んでおり、再び同様の事故が起こらないように注意が行き届いている。一方、自然界には存在する重金属なので、予想もしなかった混入の可能性がないわけではないので、油断は禁物と思っている。	研究職経験者	男性	60～69歳
③あまり不安を感じない	現在の日本では事例がないので	その他消費者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	同じものばかり食べなければ大丈夫だろうと思う	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
③あまり不安を感じない	近年、発生頻度がほとんど起きていないと考えられるため	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

#### F. 有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等

(回答者数=8人 うち「全く不安を感じない」が1人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	消費者自身の注意力によってコントロール可能な部分だから	研究職経験者	男性	50～59歳
③あまり不安を感じない	調理などで注意し、自己防衛	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
③あまり不安を感じない	予防方法を知識として持っているため。	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	自己管理	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
③あまり不安を感じない	自己で判断出来る	研究職経験者	男性	50～59歳

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	被害が小さい	その他消費者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	ほとんど自己防衛できる	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
④全く不安を感じない	消費者が気を付けるべきこと	その他消費者	女性	30～39歳

#### G. BSE（伝達性牛海綿状脳症）

（回答者数=7人 うち「全く不安を感じない」が1人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	牛肉は食べない	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	近年国内では全く発生がないため	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	牛は食べないようにしている。	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
③あまり不安を感じない	既にコントロールできた状態	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
③あまり不安を感じない	あまり牛を食べないから	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	輸入肉については不安があるが、極力食べないようにしている。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
④全く不安を感じない	BSEと特定の処理によって作られた肉骨粉との疫学的関係が明らかになって、正しく規制されて、BSEの発生はびたりと止まった。国内でのBSEのほとんどの頭数が北海道産であったが、北海道での原因ルーツは公にされないまま、一方で全頭検査でごまかす姿勢が続いていた。行政の姿勢には不満が多い。次のハザードが防げないのではないかと心配している。	研究職経験者	男性	60～69歳

#### H. 遺伝子組換え

（回答者数=6人 うち「全く不安を感じない」が3人）

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	動植物において、突然変異等の事例が今のところ報告が無いため。	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
③あまり不安を感じない	危険性についても安全性についても確証たるデータをあまり見かけないので…実施は探せば見つかるのかもしれませんが。	医療職経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	遺伝子組み換え自体に問題があるとは全く思えない	研究職経験者	男性	50～59歳
④全く不安を感じない	特定の遺伝子の導入を栽培種の植物に行うので、リスクが見えやすい。危険な遺伝子を入れれば危険になるが、有用遺伝子を入れ	研究職経験者	男性	60～69歳

	れば安全で有用な作物となる。大いに活用すべきである。北海道では、酪農現場で大量の輸入組換え作物を消費して、北海道のおいしい牛乳を生産している。一方で、道産組換え餌の生産を抑えようとする行政の姿勢は、食の安全への視点として危ないものを感じる。			
④全く不安を感じない	すでにチーズ生産に遺伝子組換えキモシンが使われていますし、多少の逸脱があっても、大きな被害にならないのではないかと考えています。	教育職経験者	男性	40～49歳
④全く不安を感じない	食品安全上危害とは捉えていない	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

## I. 体細胞クローン

(回答者数=7人 うち「全く不安を感じない」が5人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	日常であまり意識していないため	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	食の安全性を脅かすほど世に出回っていないように思うので。	医療職経験者	女性	30～39歳
④全く不安を感じない	問題ないと考えている。クローンを生で自分の細部に植え付けるわけではなく、調理して口から食べてしまうのだから、クローンによって毒素が大量に作られるような動物種だったら困るが、そんな食料は作らないので安心して食べられる。成長力が高く美味しいクローン牛なら早く食べたいと思っている。	研究職経験者	男性	60～69歳
④全く不安を感じない	多少の逸脱があっても、大きな被害にならないのではないかと考えています。	教育職経験者	男性	40～49歳
④全く不安を感じない	食べない	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
④全く不安を感じない	不安を感じる根拠がない	研究職経験者	男性	50～59歳
④全く不安を感じない	危害ではないので不安でない	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳

## J. いわゆる健康食品

(回答者数=16人 うち「全く不安を感じない」が1人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	摂取しないため	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	商品を購入しない	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
③あまり不安を感じない	使用するしないは個人の選択によって判断できるから	食品流通・販売経験者	男性	30～39歳
③あまり不安を感じない	国内製造のものであれば、安全性に関しては心配していない	その他消費者	男性	50～59歳

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	食べない	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
③あまり不安を感じない	購入しないから	食品関係行政職経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	自己管理	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
③あまり不安を感じない	メーカーの選択に注意すれば良い	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
③あまり不安を感じない	摂取しない	医療職経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	健康食品を摂取する事があまりないから	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	おそらく自分は、不安を感じるようなものは摂取しないから	食品流通・販売経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	利用していない	その他消費者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	過剰摂取をしなければ大事にはならないことが多いため。	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
③あまり不安を感じない	疑わしいものは購入しない	医療職経験者	女性	50～59歳
③あまり不安を感じない	自分が利用しないため	その他消費者	女性	40～49歳
④全く不安を感じない	自分は利用しない為。	その他消費者	女性	30～39歳

#### K. 肥料・飼料等

(回答者数=2人 うち「全く不安を感じない」が1人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	情報がなく、わからないから	その他消費者	女性	70歳以上
④全く不安を感じない	多少の逸脱があっても、大きな被害にならないのではないかと思います。	教育職経験者	男性	40～49歳

#### L. アクリルアミド

(回答者数=8人 うち「全く不安を感じない」が2人)

問2	回答	職務経験	性別	年代
③あまり不安を感じない	焦げを食べないようにしている	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
③あまり不安を感じない	これひとつを単体でとりあげても無意味であると感じているので	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
③あまり不安を感じない	情報が少なくわからない	その他消費者	女性	70歳以上
③あまり不安を感じない	あまり気にしていない	その他消費者	女性	30～39歳

③あまり不安を感じない	自己管理	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
③あまり不安を感じない	以前から存在したはずのハザードであり、仕方ない	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
④全く不安を感じない	行政指導が効果を上げていると思います。	研究職経験者	男性	70歳以上
④全く不安を感じない	食品関連事業者として低減に努めている事実を認識しているから	研究職経験者	男性	50～59歳

#### 4. 放射性物質について不安を感じる理由（問5）

##### 1. 1位

（回答者数＝6人）

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
震災から3年たった今でも次々に放射性物質の拡散の事実が出てくる為	関東	その他消費者	女性	40～49歳
放射能が減衰するまで果てしなく長期間かかるため	関東	研究職経験者	男性	60～69歳
私は原爆被爆者二世なので、人一倍放射能の怖さを知っています。身の回りにも被爆で長年苦しんだ方々がいる中、あまりにも放射線量の事を簡単に考え過ぎていると思います。チェルノブイリの事故の際にロシアが示した安全基準の放射線量の10倍にも当る放射線量を安全基準に国が定めた事に憤りを感じます。	近畿	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
健康に与える影響のデータが十分ではない	東京	食品流通・販売経験者	男性	60～69歳
規制値を超えるものが流通していると思う	東海	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
先の原発事故による環境（土壌等）のスポット的な高濃度汚染に不安が残る。また、事故処理が終息していないので、将来、新たな環境汚染の表面化が心配である。	甲信越	食品関係行政職経験者	男性	60～69歳

##### 2. 2位

（回答者数＝1人）

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
福島原発の収束の目途が立たず、放射性物質の海洋へのたれ流し、空気中への放出があり、特に魚、海藻への影響が続いている。	関東	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳

### 3. 3位

(回答者数=8人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
原発推進政府により、福島原発事故の教訓が活かされず国民健康をないがしろにされている	関東	食品流通・販売 経験者	女性	50～59歳
政府の情報コントロールを感じるため	関東	その他消費者	女性	40～49歳
時間経過とともに現状報告の機会が減り、今後は外部被爆より内部被爆からの影響が問題となってくるはずであるが、どのように追いかけていくのか、どのような結果になるのか不安である。また国として海外にもオープンにしているのか。日本だけの問題としてないか疑問が残る。	東京	医療職経験者	女性	30～39歳
自然放射線を考えれば放射線への危惧はないが、人類が新たに作り出したセシウムなど人工放射性物質への影響には未知のものがあるのではないかな？	東海	食品関係行政 職経験者	男性	60～69歳
今後長期的な影響が出ないか・追跡調査等が継続して実施されるか、不安	近畿	食品生産・加工 経験者	女性	30～39歳
東電の説明が二転三転し、震災後も放射性物質を放出しているとの報道があり、内部被爆の閾値がない事から今後の影響が懸念される	近畿	食品生産・加工 経験者	女性	30～39歳
長期的な科学的根拠がないため	九州	その他消費者	女性	30～39歳
目に見えない物質のため	中国・四国	食品生産・加工 経験者	男性	50～59歳

## (2) 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について

### 5. 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先 (問6)

#### 1. 1位

(回答者数=6人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
茨城県農林水産部販売流通課より定期的に検査結果がFAXされて放射性物質検査結果情報が入ってきている。	関東	その他消費者	女性	50～59歳
自社独自の分析結果	関東	食品流通・販売 経験者	男性	40～49歳
ラジオ	関東	食品生産・加工 経験者	男性	40～49歳
国際機関の情報	東京	研究職経験者	女性	40～49歳
学識経験者による講演	東京	食品流通・販売 経験者	男性	60～69歳
インターネットの検索エンジンサイトより気になるワードを入力し、官公庁や食品安全委員会のサイトの情報を入手している。あまり2ちゃんやSNSサイトは公的ではない人も書き込みしてるので信用していない。	近畿	医療職経験者	女性	30～39歳

## 2. 2位

(回答者数=2人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
専門家の講演	関東	その他消費者	女性	70歳以上
CODEX, IAEA	近畿	食品生産・加工 経験者	女性	40～49歳

## 3. 3位

(回答者数=3人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
関連学会や機関のホームページ	関東	研究職経験者	男性	70歳以上
中部原子力懇談会	東海	食品生産・加工 経験者	男性	70歳以上
ラジオ	近畿	医療職経験者	男性	50～59歳

## 4. 4位

(回答者数=5人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
専門家による講演会など	北海道	研究職経験者	男性	60～69歳
分析機関	東北	食品生産・加工経験 者	女性	50～59歳
国民生活センター	関東	その他消費者	男性	40～49歳
かかりつけ医	東京	教育職経験者	女性	50～59歳
広島県下の被爆に関する資料	近畿	食品流通・販売経験 者	男性	50～59歳

## 5. 5位

(回答者数=2人)

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
専門家に実際に問い合わせるケースが多い。	関東	その他消費者	男性	50～59歳
勤め先の生協で放射性物質の検査に携わっていて生の検査 データに触れる機会がある。	東京	食品流通・販売経験 者	男性	50～59歳



## 6. 食品に対する影響の情報収集の姿勢（問7）

（回答者数=3人）

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
情報は新聞、テレビで必要に応じて確認	東北	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
直後も現在も適当に収集している	関東	研究職経験者	男性	60～69歳
当地は福島から離れているため、あまり気にした事が無い。	九州	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳

## 7. 東日本大震災前後の飲食料品の購入等に係る意思決定の変化（問8）

（回答者数=9人）

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
直後には変化した。以前のレベルまでではないが、戻った感じがする。	北海道	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
自分が被災地の製造業であり、原料原産地に関心があることは当然だが、海外の食品については安全かどうか調べるようになった。	東北	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
積極的に被災地の食品を購入するようになった	関東	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
産地だけではなく、食料品の種類（木の実、野菜、根菜、キノコなど）を確認。安全性は、産地情報だけではない。また、安全な作物を避ける必要はない。	関東	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
直後はすべてハイリスクと思われる食品の購入を控えていたが、現在では残留放射線のないと確認された食品は、低頻度であるが購入することがある	東京	医療職経験者	女性	40～49歳
むしろ福島産の食品を積極的に選択している	東京	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
自分としては意思決定に変化は無いが、まだ若い人たちには安全な食品選択をするようにしてほしいと考えている。	近畿	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
震災以降で変化した、現在も一部は続いている	中国・四国	食品生産・加工経験者	女性	50～59歳
自分自身で安全であるという確信が持てれば購入する。	九州	教育職経験者	男性	60～69歳

## 8. 放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方（問9）

（回答者数＝14人）

回答	居住地 エリア	職務経験	性別	年代
一口に基準値以下といっても、検査の方法等で異なる点があったり、なるべく基準値以下になるような意図を感じるので、信用しきれない	関東	その他消費者	女性	40～49歳
食品による。ニンニクや果物等、被爆区域のみで栽培され生産されている野菜果物についてはセシウムのないことを確認して購入する	東京	医療職経験者	女性	40～49歳
健康に影響しないと理解しているが、積極的には購入していないのが現状。	東京	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
地域というよりは検出されているか(国より厳しい検出限界)どうかの事実に基づき選択している。子どもがいるので、結果的には検出されているものは極力避けている	東京	食品流通・販売経験者	女性	40～49歳
国産の食品は濃度の違いはあるが総て、福島原発事故により放射性物質に汚染されている。信頼できる情報をもとに放射性物質は避けている。尚、輸入食品は放射性物質以外のリスクが大きいのので出来るだけ食べないようにしている。	東京	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考えられるが、積極的に食べたり・購入したりすることはない。	近畿	研究職経験者	男性	30～39歳
放射性物質を気にしながらも安全なのか？疑問をもちながら購入したりもしている。	近畿	その他消費者	女性	40～49歳
食材宅配ネットスーパーで野菜等を購入。放射線物質検査を独自にしている。	近畿	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
子ども、乳幼児の身体に関しては「放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている」を選択。大人、自分は「現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している」を選択。	近畿	その他消費者	女性	50～59歳
少量では影響が大きくないのでは、と思いつつ閾値がないことからあまり購入しないようにしている。全く買わないわけではない。	近畿	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
そもそも基準値と安全性の関係の根拠に疑問を感じるので判断できない。していない。	近畿	その他消費者	男性	40～49歳
私自信は食べても良いが、子供には避けたいと考えている	東海	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
食品流通業界では今でも被災地域の農作物を買いたがらない傾向にある	九州	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
時折みかける販売者の自主的表示(「検査済み」等)の信頼性に疑問符	九州	研究職経験者	男性	40～49歳

### (3) 食品の安全性に係るモニターの意識・行動について

#### 9. 食品安全モニターになってからの食品に関する情報の入手先の変化（問 11）

（回答者数=10人）

回答	増えた or どちらか といえば 増えた	職務経験	性別	年代
学会の情報	①増えた	食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
様々な食品を、自ら購入して食べる事。	①増えた	その他消費者	男性	40～49歳
メールマガジン	①増えた	その他消費者	男性	50～59歳
食品関係の専門家、研修会	①増えた	食品生産・加工経験者	女性	30～39歳
お客さん	①増えた	食品流通・販売経験者	男性	20～29歳
電力会社による放射性物質等に関する学術講演会を積極的に聞きに行く	①増えた	食品生産・加工経験者	男性	70歳以上
一般消費者	①増えた	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
各種機関によるセミナー等への参加	①増えた	食品生産・加工経験者	男性	30～39歳
本務校の学生からの情報	①増えた	研究職経験者	男性	40～49歳
研修会・セミナー	②どちらかといえ ば増えた	その他消費者	男性	50～59歳

#### 10. 肉等の生食についての状況や変化、意識（問 14）

（回答者数=36人）

回答	職務経験	性別	年代
生食用に処理・加工が明確であれば食する見込み。	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
基本的には生食はしないが、猟師などに勧められ食すこともある	食品生産・加工経験者	女性	40～49歳
全てがダメだと、食べ物の食文化が衰退する気がします。リスクを十分に説明して、また提供する側も十分に気を付けて提供をすることを望みます。	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
店・商品の衛生状態、自分の体調を考慮して食べることもある。（ただし馬肉のみ）レバーは絶対に食べない	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
元々、馬刺しは食べるが他の生肉は食べない	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
日本の生食文化（魚の刺身やたまごかけご飯など）は、大切にしていきたいです。	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
信頼できる飲食店が提供するものを食べている	食品生産・加工経験者	男性	50～59歳
飲食店、生肉店の状況で判断する。	食品生産・加工経験者	男性	60～69歳
牛レバーは加熱用となっているが、薬味は生食用で提供されている。鳥のたたき、豚、鳥のレバーの提供もチラシ、雑記の広告欄（店紹介）に掲載されている。	食品生産・加工経験者	男性	40～49歳
関東地方では一時自粛されていたが、近頃、ゲリラ的に提供する飲食店がでてきているので心配している。九州地方などでは、あまり自粛もされなかったようである。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
安全基準が明確な物と不明確な物が混在している。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
馬肉以外の生食は以前からしていない	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳

回答	職務経験	性別	年代
免許等のライセンス制の導入すべき	食品流通・販売経験者	男性	70歳以上
生食の情報を周知した上において自己の責任において食す	食品流通・販売経験者	男性	60～69歳
もともと肉の生食は食中毒の危険性が高いと思っていたので摂食機会は非常に少なかった。	食品流通・販売経験者	男性	60～69歳
お店の仕入れ状況等はよく調べます。知らない店では食べない、買わない。	食品流通・販売経験者	男性	40～49歳
飲食店ではだいぶ見なくなったが、交差汚染についてはまだ十分に配慮されていないと感じる。根本的に、個人飲食店はリスクへの理解が足りない。	食品流通・販売経験者	女性	30～39歳
周囲の方へは以前より肉の生食は危険であることを説明している	食品流通・販売経験者	女性	50～59歳
20～30年前には存在していなかったリスクが出現したということをもっと強調する必要があると感じています。	食品流通・販売経験者	男性	50～59歳
好きなので食べたい。	食品流通・販売経験者	女性	30～39歳
そもそも昔から魚を除いて生肉は食べなかった。生水も飲まないようにしている。肉は加熱してクッキングした方が、美味しさが増す。人間は野生動物ではないので、クッキングした美味しさを楽しんだ方が良い、と考えてきた。生肉より手の込んだ料理の方が好きである。	研究職経験者	男性	60～69歳
畜肉の種類と、部位、調理法にもよるが、規格順守や出所などについて分かっているならば、ステーキなどはレアでも食べますが、最近では「レアハンバーグ」なるものが登場しているようで、価格的にも生肉の基準を通しては思えず食べません。また、野生動物で寄生虫リスクが高そうなものについては、火が良く通るものにしたいと思っています。	研究職経験者	男性	40～49歳
飲食店で提供してはいけないと理解しているので、呼称等を変えて提供するようになった	研究職経験者	男性	30～39歳
馬刺・鯨刺身は個人的嗜好から喫食。	研究職経験者	男性	40～49歳
馬肉でもO157による食中毒も最近報告がありましたし、生肉による食中毒はあとを絶たない状況です。大腸菌だけでなくカンピロバクターやその他寄生虫によるものもありますので、リスクを理解した上で個人の判断にて喫食してもらいたいと思います。できれば生食文化そのものを見直すべきではないかと思います。	医療職経験者	女性	30～39歳
レアの牛ステーキや馬刺しぐらいは食べますが、子供がいることもあって、完全な生食はあまり致しません。	教育職経験者	男性	40～49歳
家畜の種類によって異なる。鶏刺しは普通食べている。	教育職経験者	男性	60～69歳
肉の生食の設問には度々疑問を感じる。食中毒予防のための温度で中心まで過熱していない肉はハザードとして周知しなければならないのに、特定の肉や生でなければ大丈夫という誤解をかえって生じるのではないかと思います。	教育職経験者	女性	50～59歳
店の食べ方に関する説明がなくなった。	食品関係行政職経験者	男性	60～69歳
安全基準が厳しすぎる感が強い	その他消費者	男性	50～59歳
子供には食べさせない	その他消費者	女性	30～39歳
食べない方がいいと言っても今まで食べていて、どうもなかったからと食べる。	その他消費者	女性	40～49歳
店内で無責任意見や無知と見かける声を聞いたことがありますが、全店で徹底して取り締まるべきでしょう。	その他消費者	男性	60～69歳
家族友人知人に情報提供する。提供後、周りが肉の生食はしなくなった。	その他消費者	女性	50～59歳
馬に関しては安全管理が十分とのことなので以前と変わらず食べているが、それ以外は食べるのをやめた。	その他消費者	女性	40～49歳
季節など考えて食べている	その他消費者	女性	40～49歳

○ 統計表

問 1.A 環境問題に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	29.3	54.0	7.6	8.2	0.2	0.7	0.0

問 1.B 自然災害に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	36.8	49.9	8.5	4.8	0.0	0.0	0.0

問 1.C 食品安全に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	23.6	47.4	12.6	15.8	0.7	0.0	0.0

問 1.D 重症感染症(新型インフルエンザなど)に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	19.9	55.6	15.1	8.2	0.5	0.7	0.0

問 1.E 犯罪に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	15.1	46.5	25.6	11.7	0.5	0.7	0.0

問 1.F 戦争・テロに対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	16.0	40.3	26.3	13.5	2.5	1.4	0.0

問 1.G 交通事故に対する不安の程度

	全体	とても不安を感じる	ある程度不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よくわからない	無回答・無効回答
合計	437	11.7	50.6	23.6	11.9	0.9	1.1	0.2

問 2.A 食品添加物に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	10.1	40.3	36.8	12.8	0.0	0.0

問 2.B 農薬に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	10.1	48.7	32.0	8.9	0.2	0.0

問 2.C 家畜用抗生物質に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	10.1	45.3	30.7	8.5	5.5	0.0

問 2.D 器具・容器包装からの溶出化学物質に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	6.2	43.5	39.1	9.8	1.4	0.0

問 2.E 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	11.7	41.9	40.7	4.1	1.6	0.0

問 2.F 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	21.7	56.8	19.2	1.6	0.7	0.0

問 2.G BSE (牛海綿状脳症)に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	6.6	30.7	41.0	20.4	1.4	0.0

問 2.H 遺伝子組換え食品に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	9.4	34.1	35.2	19.5	1.8	0.0

問 2.I 体細胞クローン家畜由来食品に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	9.4	32.0	34.3	12.8	11.4	0.0

問 2.J いわゆる健康食品に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	14.4	49.7	28.4	6.4	1.1	0.0

問 2.K 肥料・飼料等に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	5.7	28.4	48.7	14.9	2.3	0.0

問 2.L 放射性物質を含む食品に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	22.4	41.6	27.2	7.3	1.4	0.0

問 2.M アクリルアミドを含む食品に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	6.9	30.4	36.4	8.2	17.6	0.5

問 2.N その他に対する不安の程度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	6.6	11.4	0.9	0.2	0.0	80.8

問 3.A 食品添加物に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	220	30.0	9.5	26.4	4.1	10.9	6.4	6.4	5.0	1.4

問 3.B 農業に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	257	17.5	9.3	32.7	5.4	11.3	13.2	5.4	4.3	0.8

問 3.C 家畜用抗生物質に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	242	19.4	9.1	28.1	9.5	11.2	5.0	11.6	5.0	1.2

問 3.D 器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	217	30.0	9.7	15.2	6.9	12.0	10.1	9.7	3.2	3.2

問 3.E 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	234	12.0	7.3	14.5	8.1	8.1	37.6	6.8	4.7	0.9

問 3.F 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	343	8.2	7.0	37.0	5.2	2.9	25.1	4.4	8.2	2.0

問 3.G BSE(牛海綿状脳症)に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	163	16.0	12.3	12.3	9.2	6.7	32.5	7.4	2.5	1.2

問 3.H 遺伝子組換え食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	190	45.3	13.2	7.9	7.9	5.8	3.7	11.1	3.2	2.1

問 3.I 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	181	47.0	9.4	7.2	8.3	2.8	1.7	18.8	1.7	3.3

問 3.J いわゆる健康食品に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	280	28.6	16.1	21.4	1.4	13.2	9.6	4.3	3.9	1.4

問 3.K 肥料・飼料等に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	149	19.5	8.7	30.9	7.4	14.1	4.0	10.7	2.0	2.7



問 3.M アクリルアミドに不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	163	22.7	9.8	6.7	13.5	9.8	8.6	21.5	5.5	1.8

問 3.N その他に不安を感じている理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に疑問	行政による規制が不十分	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分	過去に問題になった事例があるために不安	漠然とした不安	その他	無回答・無効回答
合計	79	8.9	10.1	22.8	10.1	5.1	15.2	7.6	15.2	5.1

問 4.A 食品添加物に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	217	59.4	20.3	3.7	4.1	0.5	1.8	3.7	0.9	5.5

問 4.B 農業に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	179	32.4	41.3	10.6	2.8	1.7	1.7	3.4	0.6	5.6

問 4.C 家畜用抗生物質に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	171	26.9	35.7	8.2	2.3	0.0	7.0	12.3	2.3	5.3

問 4.D 器具・容器包装からの溶出化学物質に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	214	24.8	27.6	13.1	5.1	0.9	5.1	14.0	1.4	7.9

問 4.E 汚染物質(カドミウム・メチル水銀等)に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	196	15.3	45.9	8.7	8.2	0.0	2.6	12.8	2.0	4.6

問 4.F 有害微生物(細菌・ウイルス)による食中毒等に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	91	14.3	20.9	27.5	8.8	1.1	3.3	8.8	8.8	6.6

問 4.G BSE(牛海綿状脳症)に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	268	25.7	41.0	4.9	9.7	0.7	3.4	5.6	2.6	6.3

問 4.H 遺伝子組換え食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	239	40.6	19.7	4.6	5.9	1.7	9.6	9.2	2.5	6.3

問 4.I 体細胞クローン家畜由来食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	206	22.3	20.9	2.4	1.9	0.5	15.5	23.8	3.4	9.2

問 4.J いわゆる健康食品に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	152	9.2	21.7	5.9	5.9	4.6	6.6	23.0	11.2	11.8

問 4.K 肥料・飼料等に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	278	16.9	31.7	10.8	2.9	1.1	8.3	19.8	0.7	7.9

問 4.M アクリルアミドに不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	195	28.7	11.8	5.6	11.3	0.5	9.2	23.1	4.1	5.6

問 4.N その他に不安を感じていない理由

	全体	安全性についての科学的な根拠に納得	行政による規制が十分	事業者の法令遵守や衛生管理が十分	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分	過去に問題になった事例がないので安心	漠然とした安心	その他	無回答・無効回答
合計	5	20.0	0.0	40.0	20.0	0.0	0.0	20.0	0.0	0.0

問 5.1 放射性物質について不安を感じている理由(第1位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	現行の規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	280	42.1	18.9	3.2	13.2	1.8	4.3	11.4	0.4	2.9	1.8

問 5.2 放射性物質について不安を感じている理由(第2位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	現行の規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	280	11.1	32.9	8.6	20.4	4.3	6.1	12.9	1.4	0.4	2.1

問 5.3 放射性物質について不安を感じている理由(第3位)

	全体	過去に経験したことがない事態のため	放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため	自分の被ばく量がどの程度か解らないため	安全性についての科学的根拠が納得できない	現行の規制値では納得できない	食品の検査体制に不安を感じる	政府の情報公開が不十分	周囲が心配しているので自分も心配になる	その他	無回答・無効回答
合計	280	9.3	19.3	12.1	15.7	2.9	14.3	14.3	5.7	2.5	3.9

問 6.1 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第1位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	437	28.6	27.0	1.6	4.8	5.5	12.1	2.5	6.2	1.6	1.1
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		1.6	0.2	2.5	0.2	1.8	0.5	0.2	1.4	0.5	

問 6.2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第2位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	437	16.9	28.4	4.3	5.0	6.2	11.2	2.5	5.9	6.2	2.7
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		1.8	1.1	3.0	0.5	1.1	1.6	0.0	0.5	0.9	

問 6.3 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第3位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	437	7.3	8.7	8.7	3.9	10.3	17.2	4.3	11.7	8.2	3.9
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		2.1	1.8	3.4	0.5	2.3	3.4	0.2	0.7	1.4	

問 6.4 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第4位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	437	6.4	7.6	5.9	5.5	6.6	11.9	7.1	11.0	8.2	5.0
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		5.7	2.1	5.7	0.9	2.3	3.4	0.9	1.1	2.5	

問 6.5 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先(第5位)

	全体	テレビ	新聞(インターネットのニュースサイトを含む)	一般の雑誌・書籍	専門書・学術書等	インターネット上のコミュニティサイト等(SNS・ブログなど)	食品安全委員会	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	保健所などの地方自治体
合計	437	5.3	6.2	8.7	3.9	4.8	9.8	7.3	6.9	4.8	7.3
		生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	スーパーなどの販売事業者	大学・研究機関・研究所	医療機関	NPO・消費者団体	家族・知人	地域・学校	その他	無回答・無効回答	
		6.2	4.1	6.4	0.9	3.4	6.6	2.3	0.7	4.3	

問 7 食品に対する影響の情報収集の姿勢

	全体	事故直後も現在も積極的にしている	事故直後は積極的にしたが、現在は積極的に収集していない	事故直後は積極的に収集していたが、現在は積極的にしていない	事故直後も現在も積極的に収集していない	その他	無回答・無効回答
合計	437	25.6	55.4	2.5	15.8	0.7	0.0

問 8 東日本大震災前後の飲食物品の購入等に係る意思決定の変化

	全体	東日本大震災の前後で変化はない	東日本大震災の直後は変化した、現在は以前と同じに戻った	東日本大震災以降で変化し、現在も続けている	その他	無回答・無効回答
合計	437	32.3	29.3	35.7	2.5	0.2

問 9 放射線物質の基準値を下回る食品についての感じ方

	全体	放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため、食べない・購入しないようにしている	現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している	放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない	そもそも放射性物質を含む食品について、気にしたことはない	その他	無回答・無効回答
合計	437	18.5	58.6	14.9	3.9	3.9	0.2

問 10.A 食品添加物についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	36.6	52.6	8.7	1.8	0.2	0.0

問 10.B 残留農薬についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	21.7	54.0	20.8	2.5	0.7	0.2

問 10.C 家畜用抗生物質についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	10.8	34.6	37.8	14.6	2.3	0.0

問 10.D 器具・容器包装からの溶出化学物質についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	11.0	41.2	33.9	12.4	1.6	0.0

問 10.E 汚染物質(カドミウム・メチル水銀、ヒ素等)についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	15.1	44.9	30.4	8.7	0.9	0.0

問 10.F 有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	34.8	48.1	13.0	3.2	0.9	0.0

問 10.G BSE(伝達性牛海綿状脳症)についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	26.3	52.6	15.6	4.6	0.9	0.0

問 10.H 遺伝子組換えについてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	22.2	46.7	24.3	6.2	0.7	0.0

問 10.I 体細胞クローンについてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	8.5	26.1	41.0	19.2	5.3	0.0

問 10.J いわゆる健康食品についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	22.9	42.6	26.5	5.9	2.1	0.0

問 10.K 肥料・飼料等についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	9.4	36.4	40.5	11.4	2.3	0.0

問 10.L 放射性物質についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	19.5	47.6	24.5	6.2	2.3	0.0

問 10.M アクリルアミドについてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	437	9.2	30.9	30.9	18.1	9.8	1.1

問 10.N その他についてのリスクの理解度

	全体	とても不安である	ある程度不安である	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	よく知らない	無回答・無効回答
合計	84	17.9	34.5	25.0	7.1	6.0	9.5

問 11.A モニターになってからのテレビの利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらかといえば増えた	あまり変わらない	どちらかといえば減った	減った	利用したことがない	わからない	無回答
合計	437	12.6	20.8	57.4	3.0	4.1	1.6	0.0	0.5

問 11.B モニターになってからの新聞(インターネットのニュースサイトを含む)の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらかといえば増えた	あまり変わらない	どちらかといえば減った	減った	利用したことがない	わからない	無回答
合計	437	24.5	30.9	42.1	1.1	0.2	0.9	0.0	0.2

問 11.C モニターになってからの一般の雑誌・書籍の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらかといえば増えた	あまり変わらない	どちらかといえば減った	減った	利用したことがない	わからない	無回答
合計	437	11.2	22.0	60.0	2.7	1.1	1.8	0.5	0.7

問 11.D モニターになってからの専門書・学術書等の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらかといえば増えた	あまり変わらない	どちらかといえば減った	減った	利用したことがない	わからない	無回答
合計	437	8.2	25.4	55.8	2.3	1.1	5.7	0.9	0.5

問 11.E モニターになってからのインターネット上のコミュニティサイト等(ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)、ブログなど)の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	16.0	22.2	43.7	3.9	1.1	12.4	0.2	0.5

問 11.F モニターになってからの食品安全委員会の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	49.0	33.6	16.2	0.2	0.0	0.5	0.2	0.2

問 11.G モニターになってからの消費者庁の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	22.7	30.9	38.4	0.7	0.0	6.4	0.5	0.5

問 11.H モニターになってからの厚生労働省の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	20.6	28.6	44.4	0.7	0.2	4.6	0.2	0.7

問 11.I モニターになってからの農林水産省の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	18.5	30.4	46.7	0.9	0.2	2.5	0.2	0.5

問 11.J モニターになってからの保健所などの地方自治体の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	10.5	21.7	55.6	2.5	0.9	7.8	0.5	0.5

問 11.K モニターになってからの生産者、食品メーカーなどの食品の生産者の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	8.2	24.5	57.0	2.7	0.5	6.2	0.5	0.5

問 11.L モニターになってからのスーパーなどの販売事業者の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	6.9	16.7	59.5	3.0	0.7	12.1	0.5	0.7



問 11.M モニターになってからの大学・研究機関・研究所の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	6.2	18.8	57.0	0.5	1.4	14.0	1.4	0.9

問 11.N モニターになってからの医療機関の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	1.8	9.8	65.0	0.9	0.9	19.2	1.6	0.7

問 11.O モニターになってからのNPO・消費者団体の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	5.0	13.7	56.1	1.8	0.9	21.3	0.5	0.7

問 11.P モニターになってからの家族・知人の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	6.9	19.5	62.9	2.3	2.1	5.5	0.2	0.7

問 11.Q モニターになってからの地域・学校の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	3.7	11.9	62.2	2.5	1.6	15.8	0.9	1.4

問 11.R モニターになってからのその他の利用頻度の変化

	全体	増えた	どちらか といえば 増えた	あまり変 わらない	どちらか といえば 減った	減った	利用した ことがな い	わからな い	無回答
合計	437	2.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	97.5

問 12 肉等の生食のリスクの認識

	全体	重症になるこ とさえある大き なリスクがあ ることを十分 理解している	下痢程度 のリスクがあ ることは知 っている	リスクについて ほとんど又は全 く知らない	子供、高齢者 においては、 特にリスクが 大きい事実を 知っている	無回答・無効 回答
合計	437	92.9	21.7	3.0	50.1	1.1

問 13.1 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(1位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	3.0	22.4	3.4	18.1	1.8	5.5	1.1	1.8	2.3	40.5	0.0

問 13.2 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(2位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	5.0	9.6	9.6	24.3	5.3	8.0	1.8	8.0	21.7	6.6	0.0

問 13.3 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(3位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	2.1	12.8	9.2	19.2	2.7	26.3	1.8	12.1	4.6	8.9	0.2

問 13.4 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(4位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	6.2	11.2	10.8	17.2	5.9	15.1	2.7	18.5	4.6	6.9	0.9

問 13.5 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(5位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	3.9	16.0	3.9	7.8	5.7	19.9	1.8	19.0	5.3	15.3	1.4

問 13.6 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(6位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	11.2	8.0	16.9	4.6	12.6	9.2	2.7	8.2	20.6	3.9	2.1

問 13.7 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(7位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	6.2	6.6	22.4	3.2	14.0	5.0	11.2	9.4	11.2	9.2	1.6

問 13.8 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(8位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	13.3	6.6	13.3	2.7	24.7	3.9	12.4	6.6	11.4	2.1	3.0

問 13.9 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(9位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	18.5	5.5	6.4	1.6	13.7	4.8	24.3	12.1	7.8	2.5	2.7

問 13.10 肉等の生食について、リスクが高いと思うもの(10位)

	全体	牛の生肉	牛の生の臓器(レバー等)	豚の生肉	豚の生の臓器(レバー等)	鶏の生肉	鶏の生の臓器(レバー等)	馬の生肉	馬の生の臓器(レバー等)	鹿・いのしし・熊の生肉	鹿・いのしし・熊の生の臓器(レバー等)	無回答
合計	437	29.1	0.9	2.5	0.5	11.0	0.7	37.5	2.5	8.2	3.0	4.1

問 14.年間での生食についての状況や変化

	全体	食べることを控えている、又は食べるのをやめた	一時、食べることを控えたが、現在は特に控えていない	食べることを特に控えていない	もともと肉の生食はしていない	その地域の特産品であれば食べることがある	店のおすすめであれば食べる	飲食店で提供されなくなった
合計	437	51.0	4.8	10.1	47.6	19.7	6.6	33.6
		飲食店で一時提供が自粛されたが再開された	飲食店での提供は特に変化はない	現在飲食店で提供されているものは安全だと思う	たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全であると思う	自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う	その他	無回答
		9.8	2.7	4.3	12.8	14.2	8.7	0.9

平成26年度第1回食品安全モニター課題報告「食品の安全性に関する意識等について」  
調査票

1 食品の安全性に係る危害要因等について

問1 A～Gに掲げる事項についてリスクの観点からあなたはどのように思いますか。それぞれの事項について、選択肢1～6の中から1つずつ選んでください。

【事項】	【選択肢】
A 環境問題	1 とても不安を感じる
B 自然災害	2 ある程度不安を感じる
C 食品安全	3 どちらともいえない
D 重症感染症（新型インフルエンザなど）	4 あまり不安を感じない
E 犯罪	5 全く不安を感じない
F 戦争・テロ	6 よくわからない
G 交通事故	

問2 A～Mに掲げるハザード等について、食品の安全性の観点からあなたはどのように思いますか。それぞれのハザード等について、選択肢1～5の中から1つずつ選んでください。また、A～Mのハザード以外に食品の安全性の観点で気になるものがあれば、「N その他」に具体的な例を記入し、それについても選択肢1～5の中から1つ選んでください。

【ハザード等】	【選択肢】
A 食品添加物	1 とても不安である
B 残留農薬	2 ある程度不安である
C 家畜用抗生物質	3 あまり不安を感じない
D 器具・容器包装からの溶出化学物質	4 全く不安を感じない
E 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）	5 よく知らない
F 有害微生物（細菌等）、ウイルスによる食中毒等	
G BSE（伝達性牛海綿状脳症）	
H 遺伝子組換え	
I 体細胞クローン	
J いわゆる健康食品※	
K 肥料・飼料等	
L 放射性物質	
M アクリルアミド	
N その他（具体的に記入してください）	

※ 「いわゆる健康食品」とは、健康増進法（平成14年法律第103号）に基づく特定保健用食品及び栄養機能食品以外のもので、健康の保持増進に資する食品として販売・利用されるものを広く指しています。（以下、問10においても同じとします。）

問3 問2のA～K及びM、Nに掲げるハザード等において、「1 とても不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ方にお聞きします。

それぞれのハザード等について、不安を感じる理由を選択肢1～8の中から1つずつ選んでください。

**【選択肢】**

- 1 安全性についての科学的な根拠に疑問
- 2 行政による規制が不十分
- 3 事業者の法令遵守や衛生管理が不十分
- 4 行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分
- 5 事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分
- 6 過去に問題になった事例があるために不安
- 7 漠然とした不安
- 8 その他（具体的に記入してください）

問4 問2のA～K及びM、Nに掲げるハザード等において、「3 あまり不安を感じない」又は「4 全く不安を感じない」を選んだ方にお聞きします。

それぞれのハザード等について、不安を感じない理由を選択肢1～8の中から1つずつ選んでください。

**【選択肢】**

- 1 安全性についての科学的な根拠に納得
- 2 行政による規制が十分
- 3 事業者の法令遵守や衛生管理が十分
- 4 行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分
- 5 事業者からの食品の安全性に関する情報提供が十分
- 6 過去に問題になった事例がないので安心
- 7 漠然とした安心
- 8 その他（具体的に記入してください）

問5 問2のL（放射性物質）で、「1 とても不安である」又は「2 ある程度不安である」を選んだ方にお聞きします。

不安を感じる理由を選択肢1～9の中から強く当てはまる順に3つ選んでください。

**【選択肢】**

- 1 過去に経験したことがない事態のため
- 2 放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため
- 3 自分の被ばく量がどの程度か解らないため
- 4 安全性についての科学的根拠が納得できない
- 5 現行の規制値では納得できない
- 6 食品の検査体制に不安を感じる
- 7 政府の情報公開が不十分
- 8 周囲が心配しているので自分も心配になる
- 9 その他（具体的に記入してください）

## 2 放射性物質を含む食品の健康に与える影響について

問6 放射性物質を含む食品の健康に与える影響に関する情報の入手先についてお伺いします。

選択肢1～18の中から利用頻度の高い順に5つ選んでください。

**【選択肢】**

- 1 テレビ
- 2 新聞（インターネットのニュースサイトを含む）
- 3 一般の雑誌・書籍
- 4 専門書・学術書等
- 5 インターネット上のコミュニティサイト等（ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）・ブログなど）
- 6 食品安全委員会
- 7 消費者庁
- 8 厚生労働省
- 9 農林水産省
- 10 保健所などの地方自治体
- 11 生産者、食品メーカーなどの食品の生産者
- 12 スーパーなどの販売事業者
- 13 大学・研究機関・研究所
- 14 医療機関
- 15 NPO・消費者団体
- 16 家族・知人
- 17 地域・学校
- 18 その他（具体的に記入してください）

問7 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故発生後、食品に対する影響について情報収集を行っていますか。あてはまるものを選択肢1～5の中から1つ選んでください。

【選択肢】

- 1 事故直後も現在も積極的にしている
- 2 事故直後は積極的に収集したが、現在は積極的に収集していない
- 3 事故直後は積極的には収集していなかったが、現在は積極的に収集している
- 4 事故直後も現在も積極的に収集していない
- 5 その他（具体的に記入してください。）

問8 東日本大震災の前後で、飲食料品（産地）の購入等に係る意思決定に変化はありましたか。当てはまるものを選択肢1～4の中から1つ選んでください。

【選択肢】

- 1 東日本大震災の前後で変化はない
- 2 東日本大震災の直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った
- 3 東日本大震災以降で変化し、現在も続いている
- 4 その他（具体的に記入してください。）

問9 あなたの放射性物質の基準値を下回る食品についての感じ方は、どれが近いですか。当てはまるものを選択肢1～5の中から1つ選んでください。

【選択肢】

- 1 放射性物質の基準値を下回るとしても、放射性物質を含むおそれのある食品は、健康のため食べない・購入しないようにしている
- 2 現在流通しているのは、都道府県の検査の結果、放射性物質の基準値を下回る食品であり、健康への影響はほとんどないと考え、問題なく食べている・購入している
- 3 放射性物質を含む食品については情報が不十分であり、判断できない
- 4 そもそも放射性物質を含む食品について、気にしたことはない
- 5 その他（具体的に記入してください）

### 3 食品の安全性に係るモニターの意識・行動について

問10 A～Mに掲げるハザード等のリスクの程度について、あなたはどの程度理解していると思いますか。それぞれのハザード等について、選択肢1～5の中から1つずつ選んでください。

なお、「N その他」は問2の「N その他」に記入された内容でお答え下さい。

#### 【ハザード等】

- A 食品添加物
- B 残留農薬
- C 家畜用抗生物質
- D 器具・容器包装からの溶出化学物質
- E 汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）
- F 有害微生物（細菌等）、ウイルスによる食中毒等
- G BSE（伝達性牛海綿状脳症）
- H 遺伝子組換え
- I 体細胞クローン
- J いわゆる健康食品※
- K 肥料・飼料等
- L 放射性物質
- M アクリルアミド
- N その他（問2の「N その他」に記入された内容）

#### 【選択肢】

- 1 理解していると思う
- 2 おおむね理解していると思う
- 3 あまり理解できていないと思う
- 4 理解できていないと思う
- 5 よく知らない



問 1 1 食品に関する情報の入手先の変化についてお伺いします。下記の選択肢 A～Q の情報について、モニターになってからあなたが利用する回数は増えましたか。選択肢 A～Q ごとに、当てはまるものを選択肢 1～7 の中から 1 つ選んでください。また、選択肢 A～Q 以外で「増えた」ものがありましたら、R に記載してください。

【情報の入手先】	【選択肢】
A テレビ	1 増えた
B 新聞（インターネットのニュースサイトを含む）	2 どちらかといえば増えた
C 一般の雑誌：書籍	3 あまり変わらない
D 専門書・学術書等	4 どちらかといえば減った
E インターネット上のコミュニティサイト等 （ソーシャル・ネットワーキング・サービス （SNS）、ブログなど）	5 減った
F 食品安全委員会	6 利用したことがない
G 消費者庁	7 わからない
H 厚生労働省	
I 農林水産省	
J 保健所などの地方自治体	
K 生産者、食品メーカーなどの食品の生産者	
L スーパーなどの販売事業者	
M 大学・研究機関・研究所	
N 医療機関	
O NPO・消費者団体	
P 家族・知人	
Q 地域・学校	
R その他増えたもの（具体的に記入してください）	

問12 肉（臓器を含む）を生で食べることのリスクについて知っていますか。選択肢1～4の中から当てはまるものを全て選んでください。

**【選択肢】**

- 1 重症になることさえある大きなリスクがあることを十分理解している
- 2 下痢程度のリスクがあることは知っている
- 3 リスクについてほとんど又は全く知らない
- 4 子供、高齢者においては、特にリスクが大きい事実を知っている

問13 肉（臓器を含む）を生で食べることについて、あなたがリスクが高いと思うのはどれですか。以下の1～10に、リスクが高いと思う順を記載して下さい。

**【肉等の種類】**

- 1 牛の生肉
- 2 牛の生の臓器（レバーの等）
- 3 豚の生肉
- 4 豚の生の臓器（レバー等）
- 5 鶏の生肉
- 6 鶏の生の臓器（レバー等）
- 7 馬の生肉
- 8 馬の生の臓器（レバー等）
- 9 鹿・いのしし・熊の生肉
- 10 鹿・いのしし・熊の生の臓器（レバー等）

問14 肉（臓器を含む）の生食についてお伺いします。この1年間の、あなたや、あなたの周りで肉の生食についての状況や変化、意識について、以下の選択肢1～13の中から、当てはまるものを全て選んでください。

【選択肢】

- 1 食べることを控えている、又は食べるのをやめた
- 2 一時、食べることを控えたが、現在は特に控えていない
- 3 食べることを特に控えていない
- 4 もともと肉の生食はしていない
- 5 その地域の特産品であれば食べることがある
- 6 店のおすすめであれば食べる
- 7 飲食店で提供されなくなった
- 8 飲食店で一時提供が自粛されたが再開された
- 9 飲食店での提供は特に変化はない
- 10 現在飲食店で提供されているものは安全だと思う
- 11 たたき、湯通しなど、表面が加熱されていれば安全であると思う
- 12 自分の体力・体調で判断して食べればよいと思う
- 13 その他（具体的に記入してください）